

新書太閤記

第二分冊

吉川英治

青空文庫

寧子ねねの胸むね

「こひ！」

浅野あさの又右衛門またえもんは、家に帰ると、すぐ大きな声で、妻の名をどなった。
於おこひは、あわただしく、出迎えて、

「お帰りなさいませ」

「酒の支度せい」

いきなりいつて——

「お客を拾うて来たぞ」

「それはそれは。どなた様でいらつしやいますか」

「娘の友達だ」

「ま……」

と、後からはいつて来た藤吉郎とうきちろうの姿を見て、

「木下様でございますか」

「こひ」

「はい……」

「武家の妻として、不埒ふらちであろうぞ。——今日までわしに黙っておるなぞ。木下殿と娘とは、夙とからお交際つきあいをして戴いておるそうではないか。存じておりながら、なぜわしに黙っていたか」

「お叱りうけまして、恐れ入りました」

「恐れ入るではすまない。とんだ親馬鹿を知られてしもうたわ」

「けれどお手紙などいただいても、寧子ねねは、私に隠していたことはございませぬ」

「当りまえじゃ」

「それに、寧子は、聡明そうめいでございます。決してまちがいはないと、母のわたくしが、信じておりますゆえ、世間の男たちから、ままつまらぬ文など送られても、左様なこと、いちいち貴方様までの、お耳みみを煩わづらわすまでもないことと存じまして」

「その通り、そちまでが、わが娘を買いかぶっている。——わからぬぞ、この頃の娘も、若い者も」

と、立ち塞ふさがれて、上がり口に立ち淀よどんでいる藤吉郎を振り顧かえって、

「はははは」

と、笑った。

藤吉郎は、ここでも、頭ばかり掻いていた。しかし、恋人の家へ、恋人の父に誘われて来たのは、何か大へんな恩遇おんぐうに恵まれたような気がして、動悸どうきを覚えた。

「さ。——お通り」

と、又右衛門は、先に立つて、客間へ彼を誘いざなった。

客間といつても、わずか十畳の一室が、この邸やしきの、最上の部屋だった。

弓之衆ゆみのしゅうばかりが住んでいるこのお長屋も、きょう彼が見て来た自分の屋敷と、似たり寄つたりの、小さな貧しい家だった。

もつとも、織田家の一藩のすべてが——老職から足軽まで、そう差別のない程度の、質素ではあったが、何しても、武具のほか、客間にもさして目につく家財もなかった。

「寧子ねねはどこへ行った。寧子のすがたが見えぬではないか」

「自分の部屋におりまする」

と、彼の妻は、客へ、白湯さゆなど汲んですすめながらいう。

「なぜお客へ、改めてごあいさつをしに来ぬか。わしがいれば、逃げまわっておる」

「そういうわけではございませぬが、外着をかえて、髪など梳すいているのでございませう」

「いらざるごと。はやく手伝わせて、酒の支度して来い。まずい手料理などに、お目にかけてみるがよい」

「いや、もう」

と、藤吉郎は、体を固くして、恐縮した。

城内の柴田、林などの、手強ていごい重臣たちからは、ひどく押し太い、厚顔な男と睨にらまれている彼も、ここでは甚だ羞はにかみ恥かみがちな、一箇の好青年でしかなかった。

寧ね子ねは、薄化粧して、やがて挨拶に出て来た。

「なんのおかまいも出来ませぬが、父は、この通りはなし好き、どうぞごゆるり遊ばして」それから、手料理の膳部ぜんぶと、銚子ちようしなど、楚々そそと、運んで来た。

「はあ。……はい」

藤吉郎は、又右衛門のはなしには、まるでうつつに答えながら、寧子の身みごなしや、寧子のうしろ姿に見とれていた。

……横顔もいい。

などと思つた。

何よりも気に入つたのは、少しも悪^{わる}びれたふうのない、木綿の生地^{きじ}みたいな、ありのま
まのところだつた。

いやに羞恥^{はにか}んだり、取り澄ましたり——ありがちな女性の媚態^{びたい}がない。

では、ふくよかな女らしさに欠けているかという、包まれている中に、薄月夜^{うすづきよ}の野
の花^{はな}みたいに香^{にお}うものがある。ほんのりと、楚々^{しよしよ}とある。

敏感な藤吉郎の眼や嗅^{きゆう}覚^{かく}がしきりとそれに触れるのであつた。彼は、恍惚^{こうこつ}たるお
客様であつた。

「どうじゃな、もうお一杯^{ひとつ}」

「はあ」

「酒はおすきといわれたが」

「さればで」

「どうしたもの。一向に、お過しにならぬではないか」

「だんだんと、頂戴^{まきえ}いたしますれば……」

と、席のすそに、蒔絵^{まきえ}の銚子^{ちようし}を前において、白々と、灯にまたたかせている寧子^{ねね}の顔

を、穴のあくほど見入っていた。

寧子の眼が、ふと自分のほうへ動くと、彼はあわてて、

「いや、だいたい今宵は」

などと、赤い顔を、撫でまわしたりした。

自分のほうが、寧子よりも、よほど取り澄ましているのを感じて、よけい顔が火照ほてったり、意気地なく思った。

また、心のうちで。

いずれ自分も、然るべき時機には、妻も持たねばならない。持つならば、かかる佳人かじんを持ちたいものだ。

この女性なら、きつと、どんな貧困にも耐えるだろう。艱苦かんくにも闘えるだろう。よい子どもも生むだろう。

現在の彼は、何よりも、家庭を持った後の、艱難かんなんと貧窮を考えるのだ。——由来、金銭には意をとめられない自分だし、将来はなおなお、山のような艱難が待っているような気をする自分だからである。

また。良人おっととしての、彼が女性にのぞむものは、もちろん淑徳や容姿もあるが、大要は、

——無智無学にひとしい、百姓をしている自分の慈母を、自分以上、大切に思ってくれる女性。

と、それから、

——陰にあつて、表に立つ良人の働きを、いつも機げんよく、励ましてくれる女性。

と、こう二つの望みのほかは、前にいった貧乏を共に楽しむくらいな気概のある女性——であつた。

(これなら! ……)と、頻りに、彼は思った。

もつとも、そう狙い出したのは、今夜に始まつたことではなく、とうから、

(浅野の娘は佳い)

という世間の評などよりも先に目をつけて、ひそかに、贈り物などもしてみたいのであるが、こう間近く、沁々しみしみと、その信念を強めたのは、今宵が初めてだったのである。

「寧子ねね」

「はい」

「ちよつと、木下殿に、おはなしがあるから、そちは失礼して、暫時ざんじ、退つてさがいやい」
又右衛門が、そういい出した。

さてはと、もう智む殿ごとのになつたつもりで、いろいろな空想にひたつていた彼は、急に、顔がまた、かあつと熱くなつた。

又右衛門は、すこし改まつて、

「……時に、木下殿」

「はあ」

「折入つての、打ちあけばなしじやが」

「はい」

「お氣がるで、また、裏表ない其許そこもとと見こんで、おはなしするのじやが」

「何でも、仰せられませ」

藤吉郎は、寧子ねねの父親が、こうして自分に親しみを示してくれることが、ひどく欣うれしかつた。胸のうちで、期待しているようなはなしでなくても、損得なしに、どんなことでも——と誠意を見せて、彼も膝を改めた。

「ほかでもないが、あれもすでに年頃なので」

「……いい、いかにも」

喉のどが、ひからびて、妙に声がつまつた。黙つて、うなずいていてもよいのに、何か、相

づちを打たなければすまない気がして、時々、いわずもがなのことをいった。

「で——実は、諸所からも、家がらに過ぎた縁談なども持ちこまれ、親としても、取捨しゅしゃに迷うておるわけでござるが」

「いや、大きに、左様でござりましょうとも」

「ところがな」

「はい。はい」

「親が、よかろうと見る者は、あれの氣にそまぬ節ふしもあつたりして」

「それは、分りますな。女の一生は、ただひとつ、幸も不幸も、のぼすその手にきまることですから」

「君公のお側にいつもいる——お小姓衆こしょうしゆうのひとりじやが——前田まえだ犬千代いぬちよという青年を、其許そこもとも、ご存じであろうが」

「は？ ……前田殿で」

と、藤吉郎は、目をしばたいた。又右衛門の云い出し方が、余りに、唐突だったからである。いや、又右衛門としては、充分、順序を追ってはなしているつもりなのだが、藤吉郎の期待とは、余りに話題が離れて来たのだった。

「——そうじゃ。あの前田犬千代どの、家がらもよい出だが、頻りと、人を介して、寧子^{ねね}を妻にと、求めて来られるのじゃ」

「……ははあ」

返辞というより、嘆息^{ためいき}に似た声を洩らした。忽然^{こつぜん}と、強敵のあらわれた感じである。何よりも先に、犬千代のすぐれた背丈^{せたけ}が、気もちの上に、のしかかって来た。また、秀麗^{しゅうれい}な眉目^{びもく}や、明晰^{めいせき}な言語^{げんご}や、お小姓組に育つて、行儀の上品なすがたが、その敵対感の中に、往来^{わらい}しだした。猿、猿、と人がよぶのを、自分でもやむを得ざることと、認めて来たほど、彼は自身の容貌^{ようぼう}には、元より自信がない。——だから彼にとつて、美男ということば程、きらいなものはなかった。前田犬千代は、その美男なのである。

「寧子^{ねね}どのを、おやりなされるつもりなのですか」

思わず、話の先を越して、こう訊いてしまつてから、彼も、ちよつと面目^{かえり}を顧みた。

「いや、何」

又右衛門は、そこでかぶりを振つて、胸をのぼすと、急に思いついたように、冷えた杯を唇へ当てて、

「親としては、あの温厚で沈着な犬千代どのなら、よい聳^{むしぎみ}君と、実はよろこんで——約

束までしてしもうたわけでござるが、なんとよ、近ごろの娘は、親の眼がねにも、そのことばかりはと、素直には、うなず頷かぬのじゃ」

「ほ！ では寧子どのには、その縁談を、嫌だと、仰っしゃるので？」

「嫌とも、親に対して、よういわぬが、よいとは決して申さぬのだ。……まあ、嫌なのだらうな」

「うむ。なるほど、なるほど」

「——とここで、困っているのは、その縁談の儀でな」

又右衛門の眉には、話しているうち、かなり心痛らしいものが見えて来た。

つまり問題は、武士の一言——ということなのである。

又右衛門は、平常から、前田犬千代には傾倒していた。将来ある青年と見ていた。その犬千代から、

(——寧子ねねどのを妻に)

と、求められたので、彼は一も二もなく、娘よりは自分が先に、よろこ歡んでしまったのである。

手がらでもしたような気で、

(——どうじゃな。またとない智むちだろうが)

と、寧子に告げると、彼女の顔いろは、案に相違して、少しも楽しまないふうだった。むしろ愁うれいの色すら濃い。血は同じでも、人生の伴はんりよ侶を選ぶについては、父娘おやこでも見解の相違のせひないことが、とたんにはつきり分った。

だが、ここにおいて。

又右衛門の立場はない。

親としても、武士としても、犬千代に対して、合わせる顔はない。

犬千代のほうでは、

(近いうちに、浅野殿の寧子ねねを妻めづらに娶むすう)

と、人にも語り、人も介して、何かと、具体的に進めてくる。約束の期も迫って来ている。

(——どうも、娘の母が、近頃すこし体がすぐれぬので)とか。

(——今年は、年まわりが悪いとか、女どもが申しおるので)とか、みな女どものせいにして、一時のがれをいって来たが、もうその口実こうじつも尽き果

てて、弱りぬいている次第だが——と、又右衛門は、苦衷くちゆうをもらして、

「……どうじゃな。其許そこもとは、奇才縦横とよく人がいうが、何とか、よい思案はあるまいか」

杯からの空をすすつて下へ置いた。

酔うにも酔えない顔なのである。

藤吉郎も、ここまでは、独り空想に楽しんでいたが、彼の憂いを聞いてみると、共に憂えずにいられなかつた。

(相手がわるい)

と彼は思った。何も、悪人というような意味ではないが、相手が前田犬千代とあつては、話は簡単にすもうとは考えられない。

犬千代は藤吉郎の嫌いな、美男ではあるが、いわゆる美男型の美男ではない。多分に、戦国の粗あらい土質から育つて出た豪毅な気性や、型にはまらない不屈と放ほうじゆう縦つらな面だましつらいを持つている。

まだ年少十四の時、初めて信長の軍に従ついて行つて、とにかく、侍さむらい首いくびの一つも提さげさて帰つて来たほどな男である。

また、先頃は。

信長の弟信行のぶゆきの臣が、叛乱を起した折も、信長の先手衆さきてしゅうに交じって行き、刃やいばも折れるような奮戦をした。また、宮中勘兵衛みやなかかんべえという者が、犬千代の右の眼へ、一矢射たところ、犬千代は、矢も抜かずに、騎うまから跳び降りて、勘兵衛を首にし、信長に、首を献じたという男でもある。

とにかく、勇猛な美男なのだ。しかも白皙はくせき端麗たんれいな面おもてに、一本の針を置いたように右の眼が細く一文字につぶれている。——どうも、信長でも、少々手に余したお小姓に思われた。

「さあ。あの犬千代では」

と、共に憂いを憂えてみたものの、さし当って、藤吉郎にも、よい考えもなかった。

「——いやなに、御心配なされますな。その儀、藤吉郎がひきうけました。何とかなりましょう」

彼は、そういつてしまった。その夜は城内へ帰って寝た。結局彼自身は、何も得るところはなかった。又右衛門の憂いを、半分背負って帰っただけであった。

——だが、考えようでは。

好きな女性の父親から、心の憂いを打ち明けられたということは、たとえそれが荷になる憂いでも、光栄に思う心理は青年にある。

父親の信頼——そのものよりも、それほどに、藤吉郎は、真実、寧子ねねが好きだった。

(これが、恋というものか)

自分でも、ふと心づいて、この頃のあやしき心を顧みてみたが、恋と眩つぶやくと、何かふと、嫌な気もした。彼は、人がよく口にする、恋ということばが、嫌いだった。

なぜならば、彼は年少から、およそ恋ということばには、深い諦めあきらを持っていた。

境遇も、容貌も、風采も、彼が持つて世と闘つて来たものは、世の美しい女性などから、あらゆる蔑さげすみと、嘲侮あざけりとを、浴びせられて来た。

年少、彼にも、花を悲しんだり、月を傷いたむ気もちは、多分にあつた。

多感な血へ、そうしてうけつつ忍んで来た堪忍は、軽薄な美人や貴公子たちの想像も及ばないほど深刻な、忘れ難いものだった。

それにしても、彼も人間である。人と生れ、その嘲蔑ちやうべつを、受けてのみいて、思い知らしてやることを、諦め切あきらつている者では決してない。

(いつかは)

と悪い、

(今に。今に)

と、密かには、独りで誓っているのである。

容貌のまずい醜男にも、世の美姫たちが、いかに媚び、いかにひざまずいて、愛を求め争うかを、示してやる。——と思つて、むしろそれは、自分を励ます鞭として、いつも心に帯びているのだ。

そういう気もちは、知らぬまに、彼にも彼の女性観や恋愛観を培つていた。恋という文字が、ぴったり来ないのも、それに起因してしよう。女性の美へ崇拜的にひざまずく男を彼は蔑視する。恋愛を人生の第一義的に夢想したり神秘視して、甘い涙に遊戯する男どもを、彼は軽侮して虫酔の走るような眼で見ると。そういう風に嫌いなのだつた。

(……だが、寧子になら、ゆるしてもいいな。おれが、恋をしたといつても——)

好悪は人間の勝手である。彼も自分のことになれば、そんなふうによ協した。寝つく前に、寧子の横顔を描きながら眠つた。

翌日も、彼は非番。城内に、勤めはなかつた。ほんとなら、きのう見ておいた桐畑の自分の屋敷を、さつそく手入れしたり、家具の備え付けをしたりするわけだったが、犬千代

と出会う折を窺うため、城内にぶらぶらしていた。

犬千代はいつも、信長の側に、行儀よく控えている。藤吉郎とは深く口をきいたこともない。いつも上段からじろつと、信長の臣下を見ている眼は、信長以上に、不遜であった。藤吉郎なども、時折、信長の前へ出て、何か献言でもしていると、側にいて聞いている犬千代が、にやりと、口端へ笑くぼを作る。

(猿がまた……)

と、いわないばかりに。何となく、人を見透しているような眼で。——藤吉郎には、小癩に思えて、余り交わりをしなかった。

「藤殿、御非番か」

中門の番士と、藤吉郎が今、立話していると、こう声をかけて、通り過ぎた者がある。何気なく、振り向くと、前田犬千代。——今も今、門番から、きょうは何処かへお使いに出て、御城内にはいない筈——と聞かされていた犬千代であった。

「やあ。……しばらく」

追いつがって、

「犬千代どの。ちよつと、折入って、お話し申したいことがあるが」

藤吉郎が云いかけた。

すると、犬千代は、例の眼まなざしで、そしてまた、藤吉郎よりも、ずっと優すぐれている上背うわ丈ぜいから見下して、

「公用か。私用か」

「折入つてというからには、私用でござるが」

「然らば、今はならぬ。君公のお使いを帯びての帰かえり途みち。私語しごは憚はばかる。後にいたせ」
膠にべもない。

つつつと、行つてしまった。

「嫌なやつだ。しかし案外、いいところもあるやつだ」

藤吉郎は、取り残されて、ぽかんとした顔したが、やがて、首を一つ振ると、自分も大股に立ち去つた。

城下へ出た。

桐畑きりぼたけのわが新居へ来てみたのだ。すると、門を洗っている者があるし、荷物を担かつぎ

込んでいる者もある。

「おや、門かどちが違ちがいしたか？」

見廻してみると、

「おいおい、木下」

と、台所の方から、男の声にする。

「おう、貴公か」

「貴公でもないものだ、何処へ行つておられたのだ。自分の持った新屋敷を、人に掃除させたり、家事万端までやらせておいて」

それは、藤吉郎が炭薪奉行を勤めていた頃のお蔵衆くらしゆうや、台所方の同僚たちだった。

「おやおや。いつの間にか、結構住めるようになってるじゃないか」

ひとの家みたいなことを云いながら、藤吉郎は、中へはいった。

どこからか酒が来ている。

新しい塗筆筒ぬりだんすもある。茶棚もすわっていた。

それは皆、日頃いつのまにか、彼を慕い、彼を徳としていた者が、彼の栄転を伝え聞いて、持ち込んで来た祝いわいであった。

そういう友達や彼の知己は、祝の品を持っては来たが、暢気のんきな主あるじが見えないので、勝手

に掃除をし始め、ついでにと、家具を据えたり、門まで洗ってしまったところだった。

「やあ、どうも、どうも」

藤吉郎は、頭を搔いて、早速、自分で出来ることを手伝った。

彼の出来ることというのは、精々、酒を銚子ちようしへ移して、膳へのせることぐらいなものだった。

「まあ、御主人は」

と、薪山たきぎやま以来、恩義に思っている商人たちは、肴さかなの仕度も、買物も、何もかも小まめに働いて尽してくれた。

台所をのぞいてみると、まるく肥えた下婢かひが、水仕事をしていた。

「さしずめ、手前どもの村から、連れて来た下女。ご不自由でしょうから、当座でも、お使いなすってみて下さい」

と、いう。

藤吉郎は、図にのつて、

「ついでに、中間ちゆうげんと、用人がわりの、老人一名やと雇いたいが、いいのがあったら、世話してくれ」

そんなことを云いながら、車座になって、新宅開きの宴が始まった。

(きようはここへ来てみて、いいことをした。もし主人のわしが見えなかったら)

と、藤吉郎も、密かに恐縮していた。自分は暢気とは思っていないが、どこかに多少は、そんな点もあるかなと思つた。

無礼講。

飲むとなれば、これはいうまでもない。ふだんが、礼儀がたいだけに、酒の折は、ひどく素裸すはだかな人間性を互いに見せ合う。

これは、この国だけの、地侍じざむらいの風儀ではない。公卿くげもそう。室町むろまちの公方くぼうの武家たちもそう。総じてその頃の酒席の風だった。

隠し芸が出たり、猿楽舞ざるがくまいのまねして、箸はしで器物を叩いたりしていた。

すると、近所に住んでいる同役の妻女が、門口へ歓びを述べに来て、帰って行った。

「おい木下殿。御当家の主人」

「なんだ」

「何だじゃない。貴公、近所の屋敷へは、ひと通り挨拶に廻つたのだろうな」

「いや、まだ……」

「何だ、まだか。——先様から挨拶に来るまで、舞ったり歌ったりしておるやつがあるか。さあ、羽織を着直して、一まわり先へすまして来るがよい。近所へ引越して来たこと、厩衆へ勤めることに相成りましたからよろしくと——そう二つの挨拶をかねて、一軒に一つずつお辞儀して廻るのだ」

四、五日すると、世話する者があつて、下婢と同じ村の者という男が、中間奉公を望んで来た。また、一人の若党も、べつな方から召し抱えた。

曲りなりにも、小屋敷一つ持ち、奉公人も抱えて、これで藤吉郎は小扶持にせよ、一戸の主とはなつた。

家を出る折は、下婢や若党に、

「行つていらつしやいまし」

と、送られて出る身となり、例の古着店で買った、青木綿に大きな桐の紋のついてゐるひらひらな陣羽織に、太刀を佩いて、

「行つて来るぞ——」

は、悪くない気持であつた。

この上に、あの寧子が、宿の妻となつていたら、申し分ないが——と思つたりしながら、

今朝も、清洲城きよすじょうの外濠そとほりを歩いて来た。

すると、彼方かなたからにやにや笑いながら来る者があつた。藤吉郎は濠ほりを覗きながら歩いていたので気づかなかつた。寧子のことを考えているかと思うと、彼の頭のうちには、戦時の攻城や籠城が考えられていた。

（——濠とは名ばかり、底は浅いし、十日も降らぬとすぐ底が見えてくる。戦時となれば、土俵つちだわらの千も投げこめば、攻め口ができてしまう。城内の飲み水も乏しい。このお城の欠点は、水利の悪いことだな。攻めるによく守るには足りない……）

などと独り呟つぶやいていると、近づいた背の高い男は、藤吉郎の肩を打って、

「猿殿。今、出仕か」

「……やあ」

藤吉郎は、相手の顔を見あげながら、咄嗟とつきに、先頃からの宿題について、一つの成案せいあんと確信を持った。

「これは、よいところで」

と、彼はいった。

偽らない言葉だつた。

なぜならそれは前田犬千代だったからである。あれ以来、話す折もなかったところを、折よく、城外で出会ったのは、この問題の幸先がよい。

彼が、それについて、云い出さないうちに、犬千代から口を切った。

「猿殿。いつぞや、何か折入って、わしへ話があるとか、御城内でいわれたが、きょうは公務の途中でないゆえ、聞いてもよいが」

「さ、そのことで」

と、藤吉郎は見まわして、濠端ほりばたの石の塵ちりを払い、

「立話もならぬ。まあおかけ下さい」

「一体、何事かな」

「寧子ねねどのの身についてで」

「寧子のことです？」

「されば」

「寧子とお身と、何の関かかわりがあるのか」

「仔細あって、かたい約束を取り交わしておるような間がらでして」

「……？」

真面目でいうのか、冗談でもいつているのかと、犬千代は、彼の顔を見澄ましていたが、余りにも、藤吉郎の大真面目な顔つきに、突如として笑い出した。

「ふーむ、そうか。寧子と約束を……。はははは、それは至極よからう」

犬千代は問題としなかった。恋敵とするには余りに相手が不足すぎる。うぬ惚れでなく、どう公平に較べても、自分を見代えて、この猿殿と約束を交わす物好き女性はあるまい。——町の雑魚女や足軽の娘程度なら知らぬことである。弓之衆の浅野又右衛門の家庭は、典型的な武家の家だし、あの息女には、ひと通りの教養もある。

「そこで……?」

と、犬千代は相手の言葉を、むしろ愛すべき稚氣——と恕しているような寛度で、後を促した。

率直に、彼は云い出した。けれどここ生涯の大事とばかり、懸命は顔にあらわれていた。

「犬千代どの」

「なにか」

「あなたは、寧子が好きですか」

「寧子?」

「浅野又右衛門どのお娘」

「ああ。あの女か^{ひと}」

「好きでしよう」

「好きであつたら、なんだと申すのか」

「ご注意申しあげたいので。——あなたは何もご存じなく、人を介して、彼女^{あれ}の父親へ婚約を申し込まれたらしいが」

「いけないか」

「いけませんな」

「なぜ」

「でも、寧子^{ねね}と私とは、実は、年久しく想い合っている仲ですから」

「……?」

犬千代はそういう藤吉郎の顔を穴のあくほど見つめていたが、突然、肩をゆすぶって笑った。

相手が、まるで自分を、相手に取らない容子^{ようす}を見ると、藤吉郎は、なおさら、真面目^{まじめ}づくって、

「いや、笑い事ではございますまい。寧子は、どんなことがあるうとも、私を裏切つて他の男へ縁づくような女ではございませぬし——」

「はははは。左様か」

「固い約束も交わしてあるので」

「それなら、それで宜しかろうが」

「ところが、宜しくない者が一名できてしまいました。寧子の父、浅野又右衛門です。あなたが、婚約の儀を、お取り消し下さらぬ限り、又右衛門どのは、板ばさみとなって、切腹せねばなりません」

「切腹？」

「寧子と私の親しい間がらを、又右衛門どには、少しもご存じなかったため、あなたのお申し出もういでに対し、娘を嫁やろうとつい仰うつしやつたものと見えますが——今も申した通りの次第で、寧子は断じてあなたの妻にはなりません」

「然らば、誰の妻に？」

と、相手がなじると、藤吉郎は、自分の顔を指でさして、

「かく申す私で」

と、いった。

犬千代は、再び笑ったが、前のような哄笑こうしょうではなかった。

「冗談も程にいたせ。猿殿、おぬしは鏡というものを見たことがあるか」

「――では、嘘じやと仰つしやるのでござるか」

「寧子ねねが、おぬしなどと、約束するわけではない」

「真実であつたら如何いかがなされますか」

「真まことであつたらめでたいわ」

「寧子と私が婚儀をいたしても、その折には、ご異存はございませぬな」

「猿殿」

「は」

「人が嗤わらうぞ」

「嗤わらわれても何でも、相思そうしのふたりが仲は、どうすることもできません」

「真面目か、いったい」

「かくの如くで」

「女子おなごというものはな、云い寄られた男が、ぞつとする程きらいでも、柳のように、程よ

う逸^そらしているものぞ。それをば後になつて、自分の愚かと思わず、騙^{だま}されたなどと恨まぬがよいぞ」

「とにかく、それでは、寧^ね子と私とが、婚儀を挙げる場合になつても、又右衛門どのへ、お恨みはありますまいな。——それもあなたの不明ということになりまするで」

「勝手にせい。——先頃からわしへ用事があるといつていたのはそのことか」

「いや、ありがたいお言葉。ただ今の約束、お忘れないように願いまする」

藤吉郎は、辞儀をしたが、頭を上げてみると、もう犬千代は、彼の前にはいなかった。幾日か後だつた。

藤吉郎は、弓^{ゆみの}之衆^{しゆう}の長屋に、浅野又右衛門を訪れて、

「先日の儀で」

と、きようは改まつた物云いで、申し入れていた。

「その後、犬千代どのに会つて、篤^{とく}とご苦^{くちゆう}衷^{しゆう}のところを、伝えておきました。犬千代どのにも、御息女が自分へ嫁^{とつ}ぐ意志もなし、また、私との間に、約束まであつたことなら、ぜひもないゆえ、諦^{あきら}めるほかはなからうとのことでした」

又右衛門は、彼のはなしが、ひどく独りのみ込みなので、解^げせぬ顔^{かお}して聞いていたが、

藤吉郎は、云い続けた。

「——とは申せ、犬千代どのにも、もとより末練は多分にござるので、これが、他の男へ縁づくことなら承知できぬが、貴公では仕方がない。貴公と寧子ねねとが、以前から約束があつて婚礼いたすものなら、残念だが諦めもし、いつそ男らしく大いに祝福もするが——万一、又右衛門どのが寧子を他の男へ嫁がすようなことであつたら——これは承知できん。断じて許されぬ。——とも申しております」

「あ。木下氏きのしたうじ。ちよつと待ってもらいたい。……何か、其許そこもとのはなしを聞いておると、寧子を其許にくれるのはよいが、他の男へ遣わすことは堪忍ならぬ——と犬千代どのがいつているようだが」

「左様でござる」

「解げせぬことを。——一体、誰がいつ其許へ寧子ねねを遣わすなどといったか」

「面目もございませぬ」

「何をとぼけ召さるか。そんな偽りを構えて、犬千代どのを騙だましてくれとは、この又右衛門も頼んだ覚えはおざらぬぞ」

「その通りです」

「然るに何で、でたらめなことを犬千代どのへ伝えたか。まして、寧子と約束があるなどとは、戯れも程こそあれ。もつてのほかだツ」

温厚な又右衛門も、やや気色ばんで、

「申す者が、お身のような男だから、聞く方も、冗談とは思うだろうが、かりそめにも嫁入り前のむすめ、迷惑至極じや。——困じ果てておる纏れ話を、お身は、よけいに纏れさせて、興がろうとでもいう肚か」

「滅相もない」

と、藤吉郎は首を垂れて、

「かかることのできたのも、私の過ちと、共に心痛しております」

「要らざること」

と、苦りきって、

「よけいな心痛は、もうして貰うまい。もすこし、常識のある男かと、打ち明けたのがわしの過りだ」

「………実に、どうも」

「さ、帰りなさい。何をもじもじしておられる。そういう放言をして歩くからには、以後

は断じて、宅へ出入りはお断りする」

「はい。もう祝言すると、披露に及ぶ日までは、慎んでいることにいたしまする」

「ば、ばかなッ」

と、又右衛門も、遂に、温和な面を破つて、呶鳴りつけた。

「いつになろうと、誰が、お身などへ寧子をくれるものか。たとえ、嫁けといつても、寧子が承知するものでもない」

「さ。そこのところですよ」

「何が、そこだ」

「恋ほどあやしきものはございませぬ。寧子どのは、私のほかに、良人は持たぬと、胸に秘めておいででしょう。失礼ながら、又右衛門殿には、自分が嫁にゆくような勘ちがいをしておられるのではございませぬか。——私が、妻にと望んでいるのは、寧子どのであって、あなたでございませぬが」

押し太い男もあればあるもの——と、又右衛門は呆れ顔に、黙ってしまった。
今に帰るだろう。

いくら厚顔な男でも、こういうまずい顔を示していれば——。

又右衛門は、そう考えて、いつまでも^{じゅうめん}渋面と無言を守っていた。けれど藤吉郎は、帰るふうもなく坐っていた。

それのみか、恬^{てん}として、

「藤吉郎、嘘を申すではありません。いちど寧子どのお胸を、あなた様から聞いて戴きたいものです」

と、いった。

忪^{こら}えに忪えていた又右衛門は、もう勘弁がならないといったように、後ろを向いて、

「こひ。こひ！」

妻を呼びたてた。

滅多に、大声など出さない良人が、さつきから激^{げき}している様子に、彼の妻は、襖^{ふすま}近くにいたらしかった。

そこを開けて、

「寧子と呼べツ。……呼んで来いッ」

「はい」

しかし、彼女は、心配そうに、良人の顔を仰いでばかりいて、起たなかった。

「なぜ呼ばん」

「でも……」

彼女が宥めかけると、又右衛門は妻の手をついている頭ごしに、

「寧子ッ。寧子ッ」

と、呼び立てた。

寧子は、何事かと驚いたらしく、そこへ来て、母の陰に手をついた。

「はいれ！」

又右衛門は、厳格にいつて、すぐ問い糺した。

「そなたは、これにおける木下殿と、まさか、親のゆるさぬ約束事など致しはすまいな」

「……………」

寧子には、唐突だったにちがいない。父の気色と、その前に、首を垂れている藤吉郎の姿とを、つぶらな眼で見くらべていた。

「どうなのだ寧子。家名にもかかわる。また、これから嫁ぐ身の潔白のためにもだ。はっきりとっておくのがよい。——よもや左様なことはあるまいな」

「……………」

寧子は、しばらく黙っていたが、やがて、つましい容子のうちにもきっぱりした言葉でいった。

「——ごぞいませぬ」

「ム。ないな！」

それみろ、といわぬばかりに——また、何処かでホツとした態で又右衛門は胸を伸ばした。

「……けれど、お父様」

「何か」

「ちようど、お母さまもいらつしやるところですから申しあげますが」

「ふム。いうてみい」

「寧子からも、お願いいたします。わたくしのようなふつつか者でも、木下様が妻に望み下さるならば、どうぞ、木下様へおつかわし下さいませ」

「な、なに？」

又右衛門は、舌ももつれるほどな狼狽につつまれた。

「これ、寧子」

「はい」

「そなた、正氣でいうのか」

「女子おなごの生涯の大事、かりそめには申されませぬ。自分の口から申すのは、いかにお父様にでも、母様にでも、恥かしゆうてなりませぬが、わたくしの大事は、御両親様にも大事と、面おもてを冒おかして申しあげました」

「ふ……ウむ」

呻うめいたきり又右衛門は、わが娘の姿に眼をすえていた。

——偉いッ。

藤吉郎は、心のうちで、寧子の立派な云い方を褒ほめていた。また、体じゆうがぞくぞくするような欣よろこびに襲よわれてもいた。——しかしそれ以上に、このさり気ない質しつ朴ぼくな武家娘が、どうして自分を見込んだかと——ふと恐ろしいような心地もしていた。

乱らん雲うん

たそがれ頃。

彼は、茫然と歩いていた。

弓之衆の浅野又右衛門の家から出て、桐畑のわが家のほうへ。

(——御両親様がおゆるしくださるならば、木下様へ嫁ぎとうございます)

寧子のいったことばが、その声が、姿が、彼の頭から消えなかった。

こう歩いていても、人ごこちのない程、彼は、正直な喜びに今つつまれている。けれど、寧子が余りにはつきりいったので、すこし不安な疑いも起った。

(ほんとに、彼女はおれが好きなのかなあ。それ程好きなら、前からもつと、おれに好意を見せていそうなものだが?)

以前から、手紙をやつたり、内緒で贈り物を届けたりしていたのに、それに対しては、まだ一度も——俗にいう色よい返辞などはくれたこともない寧子であった。

その反響がない点からも、彼は当然、寧子が自分へ、好意を持っていないものと思つていた。

犬千代へ向つて。また、父の又右衛門へ向つて。——あんなことを云い張つたのも、実は、藤吉郎の強引に過ぎなかつたのである。いちかばちか、とにかく自分の希望を主張して、寧子の心の如何を問わず、娶いうけてしまおう——妻にしなければおかない——と

いう彼らしい押しを試みてみたまでのことだった。

ところが。

(——木下様へなら)

と、寧子のことばだ。

しかも、父母の前で。

自分もいる前で。

何という勇氣だろうか。親の又右衛門の驚きよりも、実は、藤吉郎自身が、胆きもをぬかれ
たくらい、茫然、歎びと疑いのなかに包まれて、帰って来たのだった。

帰り際まで、親の又右衛門は、あの呆れ顔と、苦虫をかみつぶしたままで、

(では、木下殿へ嫁とつげ)

とは、許さなかった。

(ぜひもないことだ)

と、娘の云い条に、是認ぜにんも与えなかった。

むしろ嘆息ためいきの態ていで、

(——世のなかには物好きな者もあればあるものよ)

と、わが娘の心理に、当惑とあわれみと、それに、蔑みさえ持つて、黙りきっているままだった。

藤吉郎も居辛くなり、

(いずれ、後日改めて、お願いに出るといたして)

と、帰りかけると、又右衛門は口重げに、初めて、こういった。

(ムム……。ま……。考えておくとしよう。考えておく)

寧子へも、藤吉郎へも。

二人へ向つて、そういつた宣言であつた。多分に、不賛成である語気が、その中にこもつていたことはいうまでもない。

——考えておく。

しかしこの言葉は、藤吉郎にとれば、多分なる希望をかけて考えることもできる。少なくとも、今までは、寧子の胸がさつぱり明らかでなかつたが、寧子の胸さえすわつていれば、又右衛門の意志は、どうにも翻してみせる自信がある。

——考えておく。

は、断りではない。この先の宿題なのだ。藤吉郎は、もう寧子を妻にしたような気がし

ていた。

「お帰りなさいませ」

わが家へはいつて、座敷へ坐つても、まだ考えていた。——その宿題についての、自信やら、寧子の胸やら。また、娶めとるとしたら、時期の問題やらを。

「中村からお便りが来ております」

と、彼の召使は、彼が坐るとさつそく、一袋の黍きびの粉こと、一通のがみを前へ持つて来た。

手紙は、中村の母からで、ひと眼見ても、懐かしさに、すぐ知れた。

そもじ様、かわりのう、いつもながら御奉公とのこと、何よりも、まずはうれしゅうぞんじそろ。先ごろは、米まんじゅうたくさんに、また於おつみにも、衣しようなど、

まいどの贈りもの、礼のことばもおろか、ただ涙そろに候。

さてまた、

——と、母の文は、細々ところ書き出してあるのである。

実は先頃、彼から母へ、再三手紙を出してある。

その返辞であった。

藤吉郎からいつてやったことというのは、自身が小屋敷の一つも持つ身になったことを報じて、同時に、ぜひ母上にも、中村を引き払って、自分の家へ移ってもらいたいという希望であつた。

まだ三十貫の小身なので、と申しても、大した御孝養はできませんが、もう衣食の御不自由はおかけいたしません。

奉公人も、ふたり三人はいるので、永い間、土に荒れたお手で、再び、貧乏屋敷の水仕事をさせするようなこともないつもりです。

姉の於おつみにも、ふさわしい婿むこでもさがしてやりましょう。酒飲みの養父ちちにも、少しはうまい酒も飲ませて上げられるでしょう。私も近頃は、少しは飲いける口でもあり、一家そろつて、以前の貧苦を語り草に、晩の御膳でもいただいたら、どんなに愉ゆえつ悦えつかわかりません。

ぜひ、そういうことに、おきめ下さいまし。

——と、そんなふうには、先頃便りしておいたのであつた。

ところが、今来た母のてがみには、

清洲へ移れとの、お許もとのことば、なんぼう欣うれしくぞんぜられ候も、稗粟ひあわに困らぬほど

の、こん日の暮しも、お許もとのはたらき、また殿さまの御恩ぞかし。

せつかく、御奉公人の端にたたれ、お上さまの御用、ようやくおん大事の身となりつる折へ、わが身や夫や、たくさんの同胞はらからたち、お許もとの身にかかり候ては、朝夕は樂しかるびようと、何ぞにつけ、御奉公の足でまといにこそ候わめ。

さむらいの御奉公とは、あしたに死に、ゆうべに死し、まい日が覚悟のお勤めとこそ母もうけたまわれ、わたくしの樂しみ事など思うは、まだまだ早き慾とこそ、もったいのうぞんぜられ候。時折のお許が助けにて、母は、着るにもたべるにも、なんの不自由も今はなき身に候。ひやく姓の仕ごとも、子をそだつるお役も、母のあたりまえなるつとめにこそあれ。むかしおもえば今の身すら、神さま、仏さま、御領主さまの御恩、朝夕手をあわせ暮しおり候。

ゆめ、わが身のことなど、心にかけてたまわず、いよいよ御奉公大事に、おいそしみ給われ。母のよろこびも、それに過ぐるものはあらじ。そもじが、霜の夜の門べに云いのこしたるを、今もなお、母はわすれ侍はやくらず、折にふれ思いで居りそろ……

召使が、前にいるのも知らぬように、藤吉郎は母の文へ、ぼろぼろと涙をこぼして、二度も三度も読みかえしていた。

主人という者は、自分の召使っている奉公人へ、泣き顔などは見せないものである。また、人にも涙などは見せるものでないように、侍は躡けられている。

だが、藤吉郎はそうでない。

余り泣いているので、前にいた彼の召使のほうに、間が悪くなって、もじもじしていた。「ああ、過つていた。……ごもつともな仰せだ。やはりわしの母上はお偉いな。……そうだ。まだまだ、一身一家の小さい欲望を考える場合ではない」

母の手紙を巻きながら、彼は独り言に、大きく呟いた。

涙がとまらない。……

その眼を、子どものように、肱を曲げてこすりながら、

「そうだ！ ……。ここ少しのあいだは、戦争もなかったが、いつ御城下に、兵火が揚がぬとも限らぬ。中村におられた方が、母上や姉弟たちにも、無事でもあるなあ。……いやいや、そういう身勝手な考え方がそもそもいけないと仰っしゃるのだ。あくまで、御奉公第一に」

巻いた手紙を、額にあてて拝みながら、母がそこにいるように、

「——いや、おことば、よくわかりました。仰せのこと、きつと守ります。あの男なら、

お奉公も大丈夫と、殿も許し、人も許すほどになったら、改めて、藤吉郎がお迎えに参り
ますから、その時は、藤吉郎の住居へ、ぜひにもお移り下さるよう——」

黍粉きびこの袋も、次に押し戴いて、召使の若党へ手渡した。

「台所へ持つてゆけ」

「はい」

「何をわしの顔を見るか。泣くべき時に泣くの何のふしぎがある。……これは、母上が、
御自分の手で、夜業よなべに挽ひいて下された黍粉だ。勝手元おんなの下婢にあずけて、粗末にせぬよう、
団子だんごになとして、時折わしに喰わせてくれ。……幼い時からわしはそれが好きでなあ。母
上には、それを覚えておいでなさつたのだろう」

彼は、寧子ねねのことをすっかり忘れていた。独り喰う夜食の間にも、

「母上には、どんな物を召し上がっていらっしやるだろうか。わしから時折、かねをお送
りしても、相変らず、うまい物は子に喰わせ、良人には酒を買い、御自分は塩や粗菜ばか
り喰べておられるのではないか。母上には、長生きをして戴かぬと、大きな張合いがなく
なってしまうが……」

眠りについてから、また、

「そうだ。……母さえお迎え申さぬに、妻のことなど……ちと早いぞ。まだ早い」
 彼は、反省した。

しかし反省は、諦めではない。寧子を娶めとることは、もつと先のほうがよいと考えたまでのことである。

いつか眠っていた。

戛かつ。戛かつ。戛……

馬蹄の音が、すぐ戸外を駈おもてけて行つた。一、二騎すぎた後から、また二、三騎駈けつづいて行つた。

藤吉郎は、匆はね起きて、

「ごんぞ。ごんぞ」

と呶どな鳴つた。

ごんぞというのは、彼のただ一人の若党の権ごんぞう三のことである。木股村の出なので木股また権三と名乗れといっておきながら、藤吉郎が称よぶのは常にごんぞであつた。

「あッ、何ですか」

ごんぞは、いつも主人のすぐ隣に寝ていた。召使の者の部屋といつてもべつにないから

であつた。

「物見ものみして来いッ。——何やら火急らしい駒が、お城のほうへ駈けて行つた。時刻も時刻」

「はいッ」

「ごんぞは、寝衣ねまぎに太刀を持った身なりで、すぐ戸外そとへ出て行つた。

「ごんぞは、直ぐ戻つて来た。」

主人の藤吉郎が、雨戸を開けて、縁先から夜空を仰いでいたので、ごんぞは、庭へ廻つて両手をついた。

「見て参りました」

「何の早馬だ」

「美濃境みのぞかいから次々の急使と見えました。何事が起りましたやら——」

「美濃路から？」

と、彼はまた、夜更けの空へ眼をやつて、

「御被官ごひかんの使いか。または、美濃の斎藤家さいとうけの使いか」

「美濃衆の早馬も見え、御当家の被官衆ひかんしゅうの使いも行つたように思われます」

「そうか」

うなす
領くと、彼はすぐ、寝衣ねまきの帯を解いていた。

「ごんぞ。——具足櫃ぐそくびつを。具足櫃を」

「はッ」

ごんぞは、跳び上がって、主人の前へ、すぐそれを抱えて来た。

彼は間もなく、供も連れず、深夜の道を、お城の方へ駆けていた。

貧しい一領の具足をまとい、太刀を横たえ、革たびに草鞋わらじばきで、宙を飛んで行った。

美濃みの——

と、聞いただけで、

「さては」

と、彼には直ぐ思いあたることがあった。ここ数年来、危険な状態をもちつづけている美濃の斎藤家に、内乱が勃発したのではあるまいかということだった。

（——何日かは必ず）

と、藤吉郎は、むしろその遅いのを不審とするほど、やがて来るべきものを、信じていたのだった。

——それだ！

彼は疑わなかつた。

来て見ると果たして、清洲城の大手には、はや人馬の影がうごいていた。門を固めていた兵は、彼のすがたが、日頃の恰好とはちがうので、いきなり素槍すやりを向けて来て、

「誰だツ。待て。通ることはならん」

と、叱つたが、藤吉郎が大音を張つて、

「これは、お厩うまやしゆう衆の一人、木下藤吉郎にてござる。深夜、お城近くへ、頻々ひんぴんと馬蹄の音の相継いで行くのに眼ざめ、何事やらんと、役目から馳せつけて参つた者——」と、
いと、

「やあ、木下殿か」

「おはやいこと」

「ご大儀でござる」

兵は、槍囲いを解いて、彼の颯爽たる姿に、通路を与えた。

武者溜りむしやだまの前を通ると、赤い火がいぶつていた。その中で、寝起きの武者たちは、籠こ手の紐ひもをむすんだり、草鞋わらじの緒をかためたり、弓や鉄砲を調べたり——物々しい騒さわめきを
描いていた。

わき見もせず、彼はお厩うまやのほうへ急いで行った。——すると自分より一步先に、お厩の内から、主君信長の愛馬を曳き出してゆく者があつた。

厩番の侍たちは、その若武者に頤あごで使われて、ただ彼の命じるままに動いていた。見れば、お厩方の者とも見えないので、藤吉郎は追いつがって、

「やあ、そのお駒は、てまえにお渡し給わりたい。厩衆の木下藤吉郎でござる。主君のお馬の口取はこの方の役目でもござれば——」

と、いった。

若い武者は、振り向いた。

そしてニコと笑いながら、

「猿殿か。——おお、殿にはすでに、お表までお出ましになっておられる。はやく曳いて行かれい」

素直に、口輪を渡してくれた。

それは前田犬千代だつた。しかし犬千代も藤吉郎も、寧ね子ねの問題などは忘れ果てて、主君の愛馬を取りかこみながら、鏘そうそう々と、金属的なひびきを立てながら、大玄関のほうへ駈けて行った。

その夜、矢つぎ早に、清洲城へ届いた国境からの通^{つうちょう} 諜^しは、果たして、美濃の大乱を告げて来たものだった。

それよりも前の年に、稲葉山^{いなばやま}の斎藤義龍^{さいとうよしとつ}は養父^{ちち}の道三^{どうさん}山城守^{やましろのかみ}が、自分を廢^は嫡^{いちやく}して、二男の孫四郎^{まごしろう}か、三男の喜平次^{きへいじ}をもり立てようとしているのを察^{さつ}して、仮^け病^{びよう}を構^{かま}えて、そのふたりを呼びよせ、これを殺してしまった。

道三の怒りは、いうまでもない。

腐^すえたる国の自壞^{じくわい}が始まったのである。年を越えて、ことし弘治二年の四月、浅ましき父子の合戦は、岐阜^{ぎふ}の里、長良川^{ながらがわ}の畔^{ほとり}を、業火^{ごうか}の炎と、血みどろの巷^{ちまた}にして闘い合った。

国境に駐在している織田家の被官^{へい官}や、道三方^{みちさんぱう}の早馬^{はやうま}は、

(はや、山城入道^{やましろにりだう}様の軍は、合戦にお負けなされ、鷲山^{さざやま}の城へも、火がかけられました)と、急を告げ、

(一刻もはやく、舅^{しゅうと} 御様の軍勢へ、御加勢のお出ましあるように)と、催促して来た。

信長の妻は、道三の息女であるから、いうまでもなく道三山城守は、彼の舅^{しゅうと}たる人だった。

信長はすぐ、

「舅殿に御加勢を」

と、いつて、寝所から陣令を発し、城内の将兵が、物の具をいでたつ間に、彼はすでに、大玄関まで出ていた。

藤吉郎と犬千代が、駒の口輪に添って、彼の前に鞍をすすめると、信長はいつものように、それへ乗ると、すぐ、つき従う者を後に連れ、用意の遅れている者たちは置き残して、城外へ駆け出していた。

「舅御の仇ぞ。美濃へ斬り入りなば、余の者には眼もくれず、極悪無道の癩殿らいどの（義龍のこと）の首を眼がけよ。——ただ癩殿の首を眼がけよ。よいか者ども」

馬上から旗本たちへ、何度も振り向いては云った。

行く程に、人数がふえて、大軍になった。

信長のまわりには、二段三段と、大将をかこむ陣形ができて、やがて、国境の木曾川きそがわの東岸まで進んで来た。

その行軍中。

犬千代と藤吉郎とは、旗本のなかに交まじって、幾たびか、後になり先になった。

「猿ツ——」

と、呼び捨てに、犬千代は彼を顧みて、

「小がらに似あわず、思いのほか、足は達者だな」

「足ばかりか、戦いくさとなれば、おぬしなどに負けはせぬ」

藤吉郎も、氣負つていう。

「おぬし、何にでも、氣がつよいなあ。戦いくさばかりか、恋にかけても。——はははは。愛嬌があつていい」

「武士だ。負けるのは、何事にも嫌いでござる」

「然らば、稲葉山へ攻めかかったら、犬千代と、いづれが先に、城しろのり乗いたすか、競きそつてみるか。わしより先へ、城乗の名のりを揚げたら、寧ね子はくれてやつてもよい」

すると、藤吉郎は、行軍中なのに、立ちどまって、大口を開いて哄笑した。

「あははは。あははは」

「何を笑う。猿」

「犬千代。おぬしは、稲葉山へ攻めのぼるつもりかよ」

「もとよりのこと。人におくれはとらぬつもり」

「戦は、眼をあいて、なさるものぞよ。——どうしてこのまますぐ、殿が美濃へ斬り入ろう。美濃の御合戦は、まだ何年か後のことにちがいない。——まず今度は、木曾川までか」
藤吉郎は、予言した。

何をばかな——と、犬千代は耳にもかけなかったが、やがて、木曾川の岸まで来ると、信長は、

「やすめ」

と、陣へ令を下して、次の戦況が来るのを、そこで小半日も待っていた。

美濃の空は、どんより煙っていた。日が暮れると、乱雲は赤々と平原や山岳の上をながれて行くが、木曾川の西岸にある信長の軍は動かなかつた。

宵の頃だつた。

木曾川を泳ぎ渡つて来た男がある。捕えてみると、道三方の落武者だつた。信長の前に引つ立てられて来ると、落武者はこう告げた。

「山城守様には、鷲山のお城を出られて、長柄中瀬のほとりに義龍の軍を迎え、おとといからの激戦にござりましたが、遂に、義龍の部下、小牧道家のために、お首を掻かれ、義龍はそのお首を見ると、——乃翁よ、われを恨むな。これも、乃翁がみずから選

んだ運命なれば——と、お首を、長良川へ投げ棄てられました。あろうことか、あるまいことか、かりにも子たる義龍が、親と名のある入道様のお首を……」

語るにも、浅ましくて、身がふるえるように、武者はそういつて、道三山城守の最期を訴えた。

信長は、暗然と、彼のことばを聞いていたが、

「さては早、舅御しゅうごの入道様には、敢あえなき御最期をとげられてか。……尾州表びしゅうおもてへの注進の遅かりしたために、信長、ここまで馳せつけながら御最期の一戦に間にあわなかったのは何とも残念至極」

つぶやきながら、床几しょうぎを立ててしばらく、夜空の赤い乱雲を仰いでいた。落涙でも抑えているように、あたりの人々には思われた。

が——信長は、屹きつと、こんどは幕下の人々へ、誓うように、大きな声でいった。

「——遅かったッ。この上は今騒いでもぜひないことだ。ひとまず国元へ引き返して、他日誓って、癩殿らいどのの首を討ち取り、亡き入道どのの御無念をはらそうぞ」

すぐ陣を払って、引き揚げにかかるよう、具をふかせた。

犬千代は、意外に思った。

いや、彼ばかりでなく、戦いくさに老巧な重臣たちも、信長の命令に、一時は呆然とした。けれど、木曾川を退ひいて、尾張のほうへ、暗夜を何里となく歩いてくるまに、

(なるほど、美濃へ討ち入るには、今は時機でない。機会は、今が絶好のようだが、必勝を期して、大策を展のべるには——)

と、心ある将士には、自然、信長の肚が解けていた。

犬千代は、信長の深謀よりも、それを行きがけに疾とく予言していた藤吉郎という人間に、より以上、考えさせられていた。

「猿、猿と、人も小馬鹿にあしらい、自分もよいほどに視みていたが、あの男は……?」

と、彼は彼を見直して、自分の認識を糺ただしながら、黙々と、行軍のなかに、足を運んでいた。

藤吉郎も、側にいた。

夜の白む頃、お互いに、顔を見合った。けれど、彼は犬千代に対して、そのことについては何もいわなかった。

「犬千代。おぬしはどう思う。斎藤道三殿は主を殺し、子の義龍は親を殺した。放ほつておいても、人道のない美濃は亡ぶにきまつているが、それが何日いつ来るかだ? ——。こんど

は、義龍のぼんだが、その時期は？」
などと話しかけた。

犬千代はもう彼の前では、めつたなことはないような気負いを覚えていた。そして、この時から、いつのまにか、藤吉郎が自分を呼ぶのに、以前は犬千代殿といっていたのを呼び捨てにしていたが、それもつい、咎められなくなっていた。

明智落ち

北は恵那、西は飛騨や、美濃の山々に囲まれていた。

可児郷の明智城は、明智ノ庄の山間にあつた。前時代の旧式な型をもつた山城であつた。

土岐源氏以来の長い家系と、時流の外にあつて、山間の平和を保つてきたその城も、きのうから煙を吐いて、きよしの明け方からは、熾んに火の手をあげて、燃えていた。

外曲輪も、内砦とよぶ本丸の建物も、もう焼け落ちようとしていた。

寄手は、稲葉山の斎藤義龍の兵だつた。道三秀龍の居城鷺山を陥して、道三

の首を長良川へ斬つて捨てた余勢の軍が、ここへ殺到したものである。

明智光安みつやすにゆうどう入道は、元より道三秀龍に属していたので、乱が起ると共に、甥の十兵衛じゅうべ光秀えみつひでや、子の光春と共に、稲葉山の兵に当つて戦つたが、各所で敗れ、主の道三も討たれたので、故郷の明智ノ庄へ馳せ歸つて、この小城一つを死地として、おとといから寄手の猛襲に防ぎ戦つていたのだつた。

「裏切だツ——」

「裏切者があるツ」

炎の中に、味方のそんな声を聞きながら、光安入道も、

「今は……」

と、最後の運命を覚さとつた。

砦とりでの内を見まわすと、火の揚つてない所は、裏山の森林しかなかった。そこの穀倉と、「水の手」とよんでいる貯水池だけは、まだ焼けてなかつた。

「十兵衛はどこにおる。十兵衛をさがし求めて来い」

光安入道は、味方の死屍ししのあいだを駈けながら、なお、生き残つて防いでいる兵や将を見るたびにいった。

子の 弥平治光春 は？

とは一度も叫ばなかった。

「父上。父上」

と、その光春は父の身を案じながら、彼のすがたを、乱軍のなかに見出して、駈け寄つて来た。すると、光安入道は、その子へ対しても、すぐいった。

「十兵衛は……十兵衛はいかがいたしたか」

「乾口 の門で、敵と斬りむすんでおります。何といつても、お退きになりませぬ」

「しッ、死なすなッ……」

光安入道は、しやがれ声で、子を叱咤しながら、乾口の坂道を、駈けて行つた。

「あッ、父上ッ。——てまえが行きます。雑兵輩の中へ、御自身、お踏みこみなさい
いでも」

光春は、追いすがつて、強つて父を後方へ引つ返させた。そして、

「——お父上、お父上。裏山の穀倉か、水の手には、まだ焰はかかりません。あれに、
しばらく」

「はやく行けッ。——十兵衛を死なしては」

光安入道は、なお、そう云いながら、裏山の森林へよじ登って行った。

光春はわが子である。ここで死なしてもいいと彼は自身の身と共に覚悟していた。

けれど十兵衛光秀は、兄の子である。兄の下野守光綱が、自分に託して世を去った明智家の遺孤なのだ。——死なしては、亡き兄にすまない、と彼は、刻々に迫る城の運命と共に、それをのみさつきから胸に思いつめていたのだった。

「……おお」

光安は、うめいて、茫然と立っていた。

水の手の水番小屋をのぞいてみると、城内の女たちや幼い者たちが刺し交えて、嵐のあとの花野のように惨たらしくもみなけなげに、朱のなかに俯伏していた。

従兄弟の弥平治光春は、

「たのむ！ ……。十兵衛どの、頼むから、一先ずここは退いてくれ」

と、彼の籠手をつかみ、身をもって、彼の行くてに立ちふさがって、ここで稲葉山の寄手をうけて、斬り死しようと思を昂げて戦っていた十兵衛を、無理無体に、焦土から引きもどして来た。

「ばかなッ。ここを退いて、どうするかッ」

十兵衛は、絶叫し続けた。

平常の寡言^{むくち}で沈重な彼とは——まったく別人のように、知性をかなぐり捨てた修羅武者になっていた。

「水の手まで。……ともかく水の手まで」

宥^{なだ}めると、振り切つて、

「水の手へなど行つてどうするのかツ。もう敵は、^{そとぐるわ}外曲輪を破り、本丸の味方からも、裏切が出ている今——」

「父が。……父があれにて、待っています」

「叔父御が」

「お探して、連れて来いと、さつきからお身を案じながら」

「わしのことなど、なぜお案じなるのか、光秀一箇の生命などは、なにものでもない。たとえ敗るるまでも、稲葉山の逆兵どもを……」

十兵衛は、齒がみをして、動かないのであった。

彼は、自分の敗滅よりも、もっと大きなものに、怒っていた。

それは、^{じんりん}人倫の敵に対する、^{いきとお}人間の憤りだった。

十兵衛光秀は、文武の士をもつて自分でも任じていた。勿論、武道の上でも、人に後れおくはとるまいとして来たが、士のうちでは、誰よりも劣らないほど書を読んだ。

彼の思想も信念も、聖賢の道によつて養われて来た。今、自分の城を、火でつつんでい
る敵は、単に、自分の敵というばかりではなかった。

親と名のある道三殿を攻め滅ぼした癩らいど殿（義龍）の部下である。

人道の敵だ。

聖賢の道の敵である。

光秀の怒りはそのために、自分の一命も滅亡も考えなかった。正義に殉じて、大逆の狂
兵ばらを、ひとりでもよけいに斬りまくつて死のうとするばかりだった。

「犬死なされて、どうしますかッ。——雑兵などを相手に」

「犬死？ 弥平治ッ。何が犬死だ。もし、大逆の義龍が、このまま、やすやすと世に栄え
たら、それこそ、この世は闇だ、地獄だ。人間は餓鬼だ、鳥獣にも劣る」

「わかつていますッ。……それは分つていますが」

「一光秀が、いくら戦つても、大勢はもうどうする術すべもないし、敵手にお果てなされた山や
城ましろのかみ守のかみ様が、生きかえるわけもないが、ただ——こういう証あかしにはなるぞ。——餓鬼道の

ような美濃衆の内乱のうちにも、真まことの人間は、幾人かはいたということだ。そのため、わしは死ぬのだ。わしは死んで悔いない。正義がこれを知ってくれる。おぬしはそれを、犬死というか」

「分つていますッ。けれど……御最期のその前に、ともあれ一応、父の光安に会って下さい。それからでも、思いどおりの決戦はできましよう。死ぬなら、あなたばかりを死なせはしません」

「よしッ……」

と、呼吸いきも荒く、

「叔父御は、どこだ。どこにおられるのだ。死ぬ前に、一目会おうッ」

従兄弟いとこの駆ける後に続いて、彼も遂に、裏山の水の手へ、駆け上がって行った。

叔父の光安入道は、水番小屋の前に突つ立って、わが子と、甥おいの来るのを、待ちぬいていた。

「おッ。光春か。……十兵衛にも無事であつたか」

「残念ですッ」

二人の若者は、この辺りの森と水の静寂しじまへ避けて、お互い肉親同士の姿を見合うと、さ

すがに気崩れに襲われて、光安入道の足もとへよろめき仆れた。

「はや、迫りました。無念ながら、祖先以来のこの居城の運命も」

「ムム、迫った！ ……」

「……がしかし」

と、十兵衛光秀は、力をこめて云った。

遠い焰ほのおの音や、矢さけびの方へ、眈まなじりから眸ひとみをきつと向けながら云った。

「われわれ一族、主君山城守様に殉じゆんじて、ここに討死して果てましようとも、土岐源氏とぎのかた、数百年、われわれに至るまで、不義不道の賊子は一族から遂に出しませんでした。誇りですッ。武門として、これは、亡びた者ではありません。人道の命脈まっしを完まっしうし、栄光の裡うちに、武門の旗を焼くだけのことです」

「そうだッ」

光春もいった。光安入道もうなずいた。

「叔父上。欣びましよう。欣んでわれわれは、暴悪な狂兵と戦いつくして、最後の旗を焼きましよう。腕のかぎり、敵を斬つて、各 死地を選びましよう。……お別れです。今こんじ生ようのこと、お礼も何も、申している違いとまはございません。死出の山で——」

手をついていうと、十兵衛はもう再び、起ちかけていた。

「待て。十兵衛」

「……はッ」

「死のうとするか。飽くまでそちは此処ここで」

「もとよりのことです。何でお訊ね遊ばしますか」

「わしは……」

光安入道は、立ち昇る空の黒煙を見……また眼を落して、まだ二十五歳の弱冠おひの甥おひと、それよりも年下な、わが子の光春とをじつと見くらべた。

「……わしは、死なしたくないのだ。おぬしらは、若いッ。逃げろ！」

「えッ？」

「落ちて行けッ。——光春、十兵衛」

「な、なにを、仰っしやりますか——この期ごになつて」

「眼前の有様を見て、世の終りと見るのは誤りだぞ。若い生命いのちには、先の世がある。城一つ、落ちたとして焼けたとて、大きな時の移りから見れば——」

「解げせぬおことば。叔父上にはわれわれ二人へ、恥を知らぬ士さむらいになれと仰っしやりますか」

「いわるるもよい。おぬしら長い先の生命をもつて、やがて、土岐源氏の末に人在りと、いわるる程な者になって、家名をもり返して世に示すならば」

「そんなこと、考えられません。今は、暴逆の義龍の軍に対して、最後の最後まで、戦うことがあるのみです。……武門の正義が、われらの陣です。砦とりでです。ここを落ちて生を日蔭にぬすんでは、武士道はありません。正義は廃すたれまする」

「いや、そうでない」

「叔父上。あなたは、この期ごになって、さては怯おくれに襲おわれましたな」

「十兵衛。いうたな」

光安入道は、一言、激越げきえつに叱ると、子と甥おいが見ている前で、短刀で自分の喉を横に掻き切たつてたおれた。

その時、春雷の鳴ったような轟とどろが、大地を揺ゆりあげた。水の手の貯水池にはさざ波が立ち、空には黒煙がいちめんに濃みく漲なった。

「おう、火薬庫も」

十兵衛は駈けて、木の間から城のほうを偵察していた。その顔も、木々の幹も、不意に赤く照てり映はえた。城は一瞬に火の海と化し、この山の生木なまきまでバリバリと燃えて来たので

ある。

こんな僻地へきちの小城に似げなく、搦手曲輪からめてぐるわの一棟には、たくさんな火薬が貯えられてあった。

鉄砲という新武器に目をつけたのは、美濃では、誰よりも十兵衛が早かった。彼はそのため、九州や堺さかいへも何度か行つた。そして逸いぢはやく岐阜ぎふの里に鉄砲鍛冶かじを養成し、自分の居城には、ひそかに火薬も貯えたりしていた。

十兵衛の頭脳は、時代の先見に、明敏であつた。鉄砲の構造のように、科学的でもあつた。

だが、彼の緻密ちみつな推算すいさんでも、自分をうごかす運命の率は割り切れなかつた。

自分が研究し、自分が指導してつくらせた鉄砲で、彼は今、自分も家臣も攻め立てられているのだつた。

また、遠い将来に、この城から討つて出て、中原ちゅうげんに土岐源氏の旗をひるがえす考えで貯蔵しておいた火薬が、今は、祖先からの城を、一片の焦土に化して、悪鬼あくきのように、人の屍かばねも、山の木々も、焼き立てているのだつた。

「……………」

無念とも何とも云いようがなかった。十兵衛光秀は、木蔭からその焔を見下ろしているうちに、

「そうだ！ 叔父御のことばに従って、落ちのびよう。生き長らえよう。——生きておらねばこの無念を！……」

ふと、彼の考えは、一変していたのだった。

するとまた、彼^{かみた}方で、

「十兵衛どの！ 父が、父が……何やら申しています。苦しげな息の下で。——十兵衛どの！ 聞いてやって下さい。最期です。……もう、こときれかけています」

悲痛な声で、従兄弟^{いとこ}の光春が、呼び立てていた。

さつきから十兵衛は、その従兄弟の声にも、自害した叔父の光安入道の姿にも、振り向きもせず——自分は自分で、再び焔のなかへ駈け入って斬り死を！——と思いつめていたのであったが、

「おッ。叔父上」

駈けもどって、従兄弟と共に、俯伏^{うつぶ}している光安入道のからだを抱き起した。

「光春。……いるか」

入道の眸ひとみは、もう見えないらしかつた。

「おります。父上ッ。光春はお側に——」

「十兵衛は」

「叔父上。十兵衛も、これにおりまする」

「ふ……ふたりとも……討死は相ならぬぞ。わしを犬死さすな。御主君に殉じ、この城と運命を共にするのは、わしだけでいい。武門の名は立つ。……早う落ちて行け。わしに関かまわず、おぬしらは」

「……はい」

「十兵衛。……光春をたのむ。光春をたのむぞよ」

喉のどを掻き切つて、なお、手から離さずにいた短刀で、光安入道は、云い終るなり、鎧よろいの胴のすきまから脾腹ひばらへそれを突き立てて果てた。

「光春。お首を」

「あッ……」

光春は、暗然と、眼をくもらせたまま、為なす術すべを知らなかつた。

入道の屍かばねの背には、見ているまに、火や灰が降つて来た。十兵衛は、従いとこ兄弟の意気地な

い様子を齒がゆく思つたか、

「ごめん！」

入道の首を掻き落して自分の袖に抱え、

「光春ツ。早く来いッ」

と、先に立つて駈け出した。

昼はかくれ、夜になると、獣けもののように、ふたりは歩いた。

可児郷かにごうのうちは、領土内なので、地理もわかっているし、土民の家を叩いても、匿かくまつてくれたが、飛驒街道ひだかいどうまで来ると、もう敵の柵さくや、敵の影ばかり眼について、

「進退きわまつたか」

と何度も、観念しかけた。

飛驒川原で、落人狩おちゆうどがかりの敵に発見されて、追われた時は、

「もうだめだ！ ……。十兵衛どの、刺し交ちがえて死のう」

と、年下の光春は——まだ埋める場所もなく手に抱き歩いていた父の首級くびを——そこへおいて云った。

光秀は、首を振った。

「ばかなッ。……ここで刺し交えて死ぬくらいなら祖先の地で死ぬ。こうなつたからには、草の根を喰つても生きるのだ」

彼の置いた首級を、今度は、光秀がかかえて走つた。

まったく、道もない山を、一夜中西へ西へよじ歩いた。

暁方、一つの道へ出た。

美濃から越前へ出る大日越の嶮路であつた。

ここは旅人の往来も稀だし、斎藤一族の勢力にも遠かつた。小鳥を落して、羽をむしつて生肉を喰らい、山芹や芋の根も、生のまま噛んで歩いた。

こーん。こーん……。と、斧の木魂が檜林の奥から静かにひびいていた。光秀は、従兄弟の手に、旗でくるんだ叔父の首級をあずけて、

「ここで待つておれ」

と、何処へか立ち去つた。

しばらくすると、光秀は、手に一挺の鍬と、それから雑人の着る着物や山袴など、一抱えもかかえて、檜林の奥からもどつて来た。

「案のじよう、この先に、木挽どもの寝小屋があつたので、申しうけて来た」

彼は、光春の手へ、鍬を渡しながら云った。光春は、黙って、それを持つと、
「何処に……」

と、地相を選ぶように、辺りを見まわしていた。

「なるべく、小道からも、遠い所がよい」

光秀は、林の中へはいって、仄暗い木蔭の大地を指さした。光春は、鍬を振って、この土をほくほく掘った。

「もつと。……もつと」

光秀は、彼の掘る穴へ、そういった。光春は、首級のみ埋ける大きさに掘っていたが、光秀は、人間のはいるような穴になるまで、促していた。

やがて、光安入道の首級は、土中へ深く——そつと置かれた。光秀は、身にまどつてい
る具足をすつかり解いて、

「光春。おぬしのも、脱ぎすてて埋けてしまえ」

と、命じた。

太刀のみ残して、二人は鎧や持物のすべてを、光安入道の墳墓のうちへ共に埋けた。
そして、雑人の着物を着、山袴を穿いたが、余りに、立派な太刀が目立つので、鞆

は布で巻き、柄頭つかがしらの金具は取り捨て、野武士か何どのように、わざと無頼ぶらひな恰好に、それを腰へ横たえた。

「水はないか」

「水は流れておりますが、汲む器くうつわがございませぬ」

「いや、ある」

光秀は、林の外へ歩いて行つた。どこかで、戛んツ——と、青竹を伐り伏した響きがしたと思うと、間もなく、一節ひとふしの切竹を持つて帰つて来た。

切竹の節に、清水を掬すくい、光安入道の首級を埋けた大地へ手向たむけて、二人は、いつまでも合掌していた。

チチ、チ、

ピ、ピ、ピッ……

種々な小禽こどりの声ひのきが、檜ひのきの密林なに啼なきぬいていた。二人の頭脳は冷たく澄み、明智ノ庄あけちしやうを落ちて来てから初めて真まことの吾われにかえつていた。

「……………」

弥平治光春やへいじは、肱ひじで涙を拭ぬいていた。

父が死んだのは戦場であり、その首級は、二日二夜も抱き歩いていたのであるが、涙がこぼれて来たのは、その時が初めてであった。

「光春」

「はい」

「泣くな。おぬしが悲しむと、わしは居ても立つてもいられなくなる。——叔父御は、わしのために、御最期になられたといつてもよいのだから」

「そんなことはありません。武将として」

「……だが。……だが叔父御には、わしの父しもつけのかみみつな下野守光綱が臨終いまわの折に、幼いわしを、

どうぞ頼むぞと、叔父御へお託たくしになった——その責任感が、いっばいにあったのだ。お忘れになれなかったのだ」

「それは常に、父の光安も云い暮していたことでした」

「落城が迫ったほのお焰の中でも、そればかりを案じていてくださった。——そしてわし達を落して見事自刃されてしまった。……勿もつたい体ない」

光秀は、もいちど、大地に両手をつけて、大地を拝んだ。

「光春！……。ここで二人は誓おう！」

「はい」

「生き残された光秀の生命いのちは、自身のものであつて自身のものではない。わしに代つて死んだも同様な叔父御の生命もかかつている。また土岐源氏の御先祖方の遺命もかかつている。——この先、光秀はなおさら、徒らいたずらに無為な日を暮してはいられない」

「私とても、同じ心もちでござります」

「そうだろう。そうなくては相すまぬ。——きつと、大志を抱いて、お互いに、家名を興そうぞ。——なあ、光春ッ」

「やります！……。城地や家臣もみな失つて、裸の身一つになったのは、むしろ天の恩恵かもしれない。この二人をして、苦難の中に、研みがいてみろという神のお示しかも分りません」

「その心で、おぬしもやれよ。光秀もまた、もつともつと修行する。自分を文武の両道に徹しきるまで励んでみせよう」

「ああ、何か——」

光春は、胸を上げて、禽とりの啼き澄む梢を仰いだ。

「胸が、潤かつぜん然と、開けたここちがします。十兵衛どの。亡父ちちの靈へよい手向たむけをしました」

「うム。わすれまい。——お互いに！」

ふたりは誓った。

大日越だいにちごえの難所をこえ、ようやく他郷へはいった二人は、しばらく越前の穴馬あなまぎい在ひそに潜ひそんでいたが、美濃みのの乱も四隣の形勢も、ほぼ見通しがついたので、やがて越前の敦賀つるがへ出、舟で北郡の三国みくにの津つへ上陸あがった。

三国の津なごさきの長崎称念寺しょうねんじには、かねて知合しりあいの園阿上えんあじょう人にんがいた。その人を頼たのりて行いったのである。

それから幾年かの間。

寺の門前町に、一軒借りて、二人は寺小屋などしていた。けれど光秀が手習子てならいこに教えている時は、光春が旅に出、光春がいる時は、光秀が旅に出て留守だった。

旅は勿論、風雲の下の旅だった。自分を磨きながら、あわせて、諸国の軍備や文化を視察して歩く——それを、武者修行と、時の人々はいった。

風かぜの中なかの城しろ

信長は、戦わなかった。

機を見るに敏な彼が、なぜ木曾川まで進軍したのに、引き揚げてしまったか。

国境木曾川のすぐ向うには、内乱の火が幾日もいぶっていた。攻め入るには絶好な機会だった。山城守道三の密使が、好条件の誘いをも齎して来ていたのである。

が、彼は川を越えなかった。

「いつもの殿にも似げないこと」

と、家中からゆうの多くは不審がった。むしろ齒がゆく思った。

「ははあ、さては信広のぶひろ様の内応事件に、お懲りこなされているのだな」

と、いう者もあつた。

信広とは、信長の兄信広のことである。

先には、弟の信行のぶゆきが、林佐渡はやしきどや美作みまさかと謀叛むほんを計って、信長を困らせたが、その後

また、今度は兄の信広が、美濃の斎藤と内応して、清洲城を乗っ取ろうとした事件がある。

その時の、信広の計略では、

「信長めは、生来、軽拳けいきよな質たちだから、美濃勢が国境くにざかいを衝つけば、すぐ城からを空にして出

てゆくにちがいない。——その留守に事をなせば何の造作もない」

そういう見通しで、美濃と内通の計画をすすめていた。

そして昨年来、二、三度国境の方面で、無意味な敵の侵略行為が繰り返された。

けれど信長は、その手に乗らなかった。怪しいと感づいて、兄の信広を責め糺ただした。信広は、参つて、

「勘弁せい。もう致さん。これからお前の股肱ここうになつて働くから」

と誓つて、平謝ひらあやまりに弟へ謝つて、事件は落着したものだつた。

戦わずに木曾川から帰つた信長の心を、家臣は、それと結んで考えてみたりしたのである。

独り藤吉郎だけは、そんな噂に耳を藉かしたこともない。相変らず、大きな桐紋きりもんのついている木綿の陣羽織に、扇子づかいをして、この夏は、せつせと、城勤めに専念していた。たまたま、犬千代と顔をあわせることはあるが、

「やあ」

と、こちらからいうと、

「やあ」

と、向うからも応じるだけで、寧子ねねのねの字も、どっちからも口に出したことはなかつ

た。しかしこの二人は、恋愛戦や木曾川出陣などを重ねて来てから、暗黙のうちに、お互いの認識を次第に深めて来たようなのである。

同じ、やあ、というにも、以前よりは親密の度が濃くなっていた。

それと共に、

(あいつ、一すじ縄ではいかん男だぞ)

一方が思うと、一方も。

(下手には見下せぬやつだ。気軽なようで底が知れぬし、大雑把なようで、おおざつぱ 睥睨ひとみは

鋭くて細かい)

知り合うほど一面では、こういうふうには、警戒し合っているところもあった。

だが、この二人のみは、なぜ先頃、信長が戦わずに美濃境から帰って来てしまったか？

——などという愚かな暇つぶしの臆測おくそくばなしなどはしなかった。犬千代には分つてい

た。もとより藤吉郎の胸には、もつと早くから領うなずけていた。

信長は、戦わない！

そして以来ひたすら自重しているふうだった。

兵馬を練り、食糧を蓄え、この夏の暴風雨で、城壁の石垣や塀が大破すると、すぐ命じ

て、修繕にかからせた。

二十十日、二十日前後の暴風雨は、毎年のものであった。しかし、尾張を繞めぐつて、より以上不気味なそよ風は、べつに吹いていた。西は美濃みのから、南は三河の松まつ平ひらから。そして東は、駿河の今川義元あたりの動きから——諜報は明け暮れ清洲の孤立化を告げていた。この頃の暴風雨で、外曲輪そとぐるわの城壁が、百間以上も崩れ落ちた。

その工事で、大工、左官、土工、石工いしくなどが、大勢、城内へはいつていた。

唐橋からはしから材木や石を曳き込んだり、所々に工事材料を積んでおいたりするので、城内の通路も濠ほりばたも、混雑を極めていた。

「足の踏み場もない」

「早く出来上らぬと、そのうちまた、暴風雨あらしが来ると、今度は石垣が危ないぞ」
毎日、そこを通る者は、不便を啣かこつたが、工事縄張の立札には、

御修築しゅうちく地内

無断不可入いるべからず

奉行

山淵右近やまぶちうこん

と見え、工事奉行以下の部下は皆、準戦時体制の服装や職権の下に、物々しく働いているので、誰もそこを通るには、通さしてもらおうような気兼ねきがねをもって、いちいち挨拶して行った。

工事は、二十日近くにもなっているが、まだ少しも捗はかどっていないかった。不便は不便だが、誰も、そこでは声を放って苦情をいう者はないのである。

それに、城壁百間の改修は、大工事でもあるから、長くかかるのは、誰も当り前に思っていた。

「これ。今彼方むこうへ参ったのは、何役の誰だ」

工事を督とくしていた奉行の山淵右近が、下役の者へ訊ねていた。

下役は、振り返って、

「お厩うまやしゅう衆しゅうの木下藤吉郎殿かと思えますが」

と、奉行の指さす後ろ姿を見まもりながら答えた。

「何、木下？ ……。ああそうか、よく猿々と噂にいわれる男だの」
「そうです」

「少々、それがしに所存があるから、こんど通ったら呼び止めろ」

右近は、命じておいた。

何が奉行の癩かんに障さわったか、下役には分つていた。毎日、出仕のたびに、藤吉郎はここを通るが、いつも挨拶をしたことがないのである。それに材木など積んであると、踏み越えて通つたりする。勿論、通路に置かれてある場合などは仕方がないにしても、城普請しろづしんの御用材である以上、一応は普請方の者へ向つて、許しを乞うた上、踏むべきであつた。

「知らぬのだ、礼儀を」

と、下役たちは、後でいった。

「——何せい、御小人おこびとから士分に取り立てられ、ようやくこの頃、御城下に宅地をいただいて、ああやつて出仕する身分になつたばかりの男だ。無理もないで」

「いや、成上がり者の小威張りほど、眼ざわりなものはない。得て、思いあがつているやつだ。いちど鼻ばしらを折つてやるのも、当人の身のためだぞ」

右近の部下は、手ぐすねを引いて、待つていた。

夕方の退出時。やがて彼のすがたが見えた。

春も夏も秋もない、例の青木綿あおもめんの陣羽織である。厩衆うまやしゅうはほとんど外勤めなので、

それで役目も間にあうことは間にあうが、もう身なりなども、飾れば飾れない身ではない。

それなのに、相変らず藤吉郎は、自分の身なりなどに費う金は少しも持たないらしかった。

「来たぞ」

普請奉行の下役たちは、眼くばせしていた。

藤吉郎は、木綿陣羽織の——大きな桐紋を背中に見せて、悠々と、通りかかった。

「待て」

「木下氏。待て」

呼び止められて、

「わしか」

藤吉郎は、けろりと振り向いた。

「——いかにも」

「何か御用か」

「されば」

と、下役は、彼の足を止めておいて、奉行の床几へ、何か告げに行つた。

薄暮の工事場から、職方や人夫たちは、役人の点呼をうけて、そろそろ帰りかけていた。奉行の山淵右近は、左官棟梁や大工棟梁などを、自身の床几場へ集めて、あした

の作事について、何か評議中だったが、聞くと、

「猿か——」

と、床几から立つて、

「呼び止めたか。では、ここへ連れて来い。ここへ。——説論せつゆしておかぬと癖になる」と、いった。

藤吉郎はすぐ彼の前へ来た。

やあ——

ともいわなかった。

頭も下げなかった。

城内では、友人の間でも、如才じよさいないといわれている彼としては、珍しく不愛想で、胸を反そらしたまま、

(呼び止めて、何用か)

と、いった顔していた。

それが先ず、山淵右近を、いつそう怒らせた。

身分からいえば、彼と右近とでは、比較にならないほど、懸隔かけへだてがある。

右近は、清洲城のいちれん一聯である鳴海なるみの出城を預けられている山淵やまぶらさ左馬介すけよし義遠の子だ。織田諸将のうちでも、重臣の者の子である。——青木綿の陣羽織一着で、春も秋も越している彼とは、格がちがう。

ふそん
(不遜な奴だ)

と、右近の顔は、それからしてまず穏やかでなかった。

「——猿」

「……………」

「おい。猿ッ」

呼んだが、藤吉郎は、返辞をしなかった。

これも、彼としては、いつもと違っていた。藤吉郎のそう呼ばれることは、上は信長から下は友人達まで、口癖のようなもので、彼自身、少しも気になどしていないことだったが、きようは、常の調子でなかった。

「耳はないのか。猿」

「ばかッ」

「何」

「ひとを呼び止めておいて、たわ言も程にいたせ。猿とはなんだ」

「そちのことを、誰も皆、そう呼ぶゆえにわしも呼んだまでだ。わしは、鳴海城のほうに多くいるから、そちの姓名などよく知らん。それゆえ、人がよく呼ぶように呼んだのが、悪いか」

「悪いッ。——何と呼ぼうと宥ゆるしていい人間と、宥されぬ人間とがある」

「然らば、わしは宥されんというのか」

「そうだ」

「ひかえろ。許されんのは、そちの不遜だ。毎朝、出仕の折、何で普請ふしんの御用材を、踏みまたいで通るか。われわれに会釈せんか」

「それを咎とがめるのか」

「礼を弁わきまえんやつだ。侍になりたてのそちゆえ、いうて遣つかわすが、礼儀は武士の重んじるものだ。……それにだ！ よく貴様は、ここを通行の際、工事の体ていを、したり顔して眺めていたり、口のうちでぶつぶつ申したりしておる様子だが、すべて、城の工事と申すものは、戦場と同じ御規則の下にいたしておるのだぞ。不屈きな奴め。——以後再びそのようなことがあると、ただはおかぬから左様心得ろ！」

呶鳴りつけて――

「いや、草履ぞうり取などから、十分に成上がったりなどすると、すぐこうなるから始末がわるいよ。はははは」

と、右近は、周りにいる棟梁とうりようや下役たちを顧かえりみて、自分の大きなところも見せるつもりか、笑い捨てて、藤吉郎へ後ろを向けた。

大工棟梁や左官棟梁は、それで事はすんだものと思い、奉行の床しょうぎ几を囲んで、再び工事の絵図面などをひろげていた。

「……………」

だが、藤吉郎は、動かないのであった。右近の背を睨ねめつけたまま、去ろうともしないのだ。

奉行の下役達が、

「木下氏。もうよい」

「お叱りは、それだけだ。以後、気をつけさえすればいい」

「さ。帰れ」

宥なだめたり、連れ去ろうとしたが、藤吉郎は耳もかささない顔して、奉行の背中と、棟梁ど

もの評議とを、睨むように見ていた。

「……………」

そうしている間に、彼の若い気性と、その若い血のなかに持っている理性とが、頭のかなかで、彼の哄笑こうしょうを押しきれない泡つぶでも立てたように、突然、藤吉郎は、ばかばかしく大きな声で笑いだした。

評議中の棟梁や、下役人たちは、びっくりして凶面から顔を上げた。

床しょうぎ几よに倚っていた奉行の山淵やまぶち右近も、きつと、後ろを見て、

「何を笑う！」

と怒った。

藤吉郎は、なお笑って、

「おかしいから笑うのだ」

というと、

「無礼なことを——」

右近は、憤然と、床几を蹴って立ち上がった。

「とるに足らぬ軽輩と、わしが許しておけば、よい気になりおって、不！
不埒ふらちな奴だッ。

——作事場には、陣中同様な軍律があるのだぞ。うぬ、斬り捨ててくれるから、それへ直れ」

太刀へ手をかけた。

それでも、相手の顔いろも、棒をのんでいるような体も、びくとも動かないので、右近は、なお躍起に、

「捕えろッ。処置いたすから、逃がさぬように引つ捕えろ」と、どなった。

右近の家来は、すぐ藤吉郎のそばへ寄った。藤吉郎は、黙って、寄り付こうとする者たちを、嗅ぐように見廻した。——妙な男だとさつきからその心理を疑っていたので、何か不気味で、側へは寄つて、彼を囲む構えは作つたが、ひとりも手出しはしなかった。

「右近殿。おぬし、大言は上手だが、することは下手だのう」

「な、なんじやと」

「お城の工事は、軍律も同様な御制度ですという理^{わけ}は、何のためにある規則か。それも口では云いながら、分つておらんのじやないかな。——心ほそいお奉行よ。おかしくなつて笑つたが悪いか」

「聞捨てならぬ暴言。うぬ、奉行たるわしに向つて」

「聞けよ、まず!」

藤吉郎は、胸を張つて、あたりの顔を見まわしながら演舌した。

「今は、泰平の世か、乱世か。これの分らぬ奴は馬鹿である。しかも当、清洲のお城は、四隣みな敵のなかに在る。東に今川義元。武田信玄。北に朝倉義景、斎藤義龍、西に佐々木、浅井。南に三河の松平と——。山ひとえ、川一すじの隣はすべて敵ばかりだ」

氣をのまれた形である。彼の声が自信に充ち、また、一個人の感情をいつているのでないから、その大声に氣を奪われて、みな思わず聞いていた。

「——そういう状態の中にあつてだ。暴風雨がふけば、すぐ壊れるような土塀を、お城の鉄壁とも恃んで、御家中はみな、非常の心構えを弛めずに、四隣を睥睨しておるのだ。……然るに、こればしの工事に、二十日もかかつて、まだのめのめと、悠長な日を費やしておるとは、もつてのほかな怠慢。もしこの間隙に乗じて、一夜に襲せて来る敵があつたらどうするか」

雄弁は彼の特徴である。ただその持前を余り出しすぎると、饒舌家といわれたり、法螺ふきと思われたり、またか、と人に厭われたりするので、平常は慎んで、なるべく寡黙

を守っているのであつた。

けれどまた、いう時にはいわなければいけない、とも信じられるので、彼は今、その得意な舌の限り弁じ立てて、周りの者を、聴従させずに措かなかつた。

「およそ、お城普請には、三つの法がある。第一が秘速。秘密裡に迅速ということである。第二には堅粗、堅固にして粗なるもよしということである。裝飾や美観は泰平になつてからやれば宜しい。第三には、常備間防ということだ。——常備間防とは、御普請中だからといつて、工事混雑し、平常の備えが欠け、或いは、乱れたりしてはならんと誡めたものである。工事中、いちばん怖ろしいことは、その間隙の生じることだ。たとえ一間の土塀といえども、その間隙から、一国の壊えが来ないとは申されぬ」

雄弁は圧倒する。

奉行の山淵右近は、その間に、二、三度、何か発言しようとしたが、藤吉郎の演舌に抑えられて、ただ唇をふるわせたに過ぎなかつた。

左官、大工などの棟梁たちも、組下の者も、最初は啞然として、藤吉郎の声にのまっていたが、彼のいう道理が耳にはいると、暴言や暴力もさし挿めなかつた。

いったい誰が奉行なのか、分らなくなつてしまつた。藤吉郎は、周りの人間たちの頭に、

自分のいう意味が届いたと思うと、さらに、立てつづけて云った。

「——然るに、失礼ながら、山淵殿の御工事ぶりは、いったい何事であろうか。どこに迅速があるか、常時の備えがあるか。二十日近くもかかつて、まだ一間の塀すら立っていないではないか。土塀下の石崩れの修築が手間どるとお云いだろうが、そんなことで、城しろぶ普請しんは陣中の軍律も同様だなどと、広言を吐くのは、身の程を知らなすぎる。——この藤吉郎が敵国の間者なら、虚をついて、この口から討つて入るでござろう。左様なことが突発せぬから、悠々と、隠居の茶席普請のようなことをやっておられるが、危うい限りである。御城内へ出仕するわれわれにとつても、毎日、足もとが悪くて迷惑至極だ。その通行とがを咎めるよりも、よく御評議あつて、工事の進しん捗ちよくを早速になされよ。——よろしいか、お奉行のみでなく、組下の与力衆よりきしゆうも、また棟梁どもにおいても」

説諭せつゆである。

まるで一場の訓示だ。

云い終ると、彼は、

「いやどうも」

と、朗らかに笑った。

「——どうもつい、思う通りなことをいつてしまつて、失礼いたしました。これも朝夕、御奉公大事と思う、お互い様のことだな。……いや、お邪魔いたしました。いつのまにか、暗くなりましたぞ。もはやお引揚げであろう。お先に失礼いたします」

奉行以下一同が、あつけにとられてゐるまに、藤吉郎は、さつさと、城外へ歸つてしまつた。

翌日。

彼は厩衆の溜りにいた。

厩方に勤めてからは、そのほうでも、彼の精勤ぶりは、誰にも劣らなかつた。

(あんなに、馬の好きなやつはないな)

と、同僚からも呆れられる程、彼は自身の受け持っている厩廻りの仕事と、また、飼馬に手をつくして、馬と共に起臥してゐた。

「木下。お召しだぞ」

厩の前に、組頭が来て告げた。藤吉郎は、信長の愛馬山月の腹の下から、

「——誰がで？」

と、訊ねた。

山月の脚に、腫物はれものができたので藤吉郎は、馬盥ばだらひの湯で、馬の脛すねを洗ってやっていたのである。

「お召し——といえは、御主君にきまつておる。殿のお召しだ。はやく行け」
組頭は、そういつて、

「おい、誰か、木下に代つて、山月をお厩へ入れろ」
と、侍たちのいる溜たまりを振り返つて云つた。

「いえいえ。やつて行きます」

藤吉郎は、馬の腹の下から出なかつた。山月の脚を洗い終ると、薬を塗つて、布でしばつてやり、そして馬の首や毛なみを撫でながら、自分で厩のうちへくくりつけた。

「殿様には、どちらにおいでになりますか」

「お庭先だ。はやく行かぬとごきげんそこを損ねようぞ」

「はい」

彼は、溜たまりの内へはいつて、壁に懸けてある例の青木綿の一張羅いっちようらを引つかけた。

信長は、庭へ出ていた。

柴田権六しばたごんろくと、小姓の犬千代など、四、五名をつれていた。

お鷹たかしゆう衆しゆうの者が、何か、その足もとから、身を起して退さがつて行つた。

そこへ、入れ代りに、青木綿の陣羽織の彼が、駈け寄つた。——と、いっても、十間も遠く離れた所で止まつて、すぐ手をつかえていたのである。

「お。——猿か」

「はッ」

「寄れ」

信長は、後ろを見た。

すぐ、犬千代が、床しょうぎ几ぎを置く。

「もつと寄れ」

「はあッ」

「猿。ゆうべかな？ ……。そちは外曲輪そとぐるわの普請場ふしんばで、だいぶ大言を吐いたというではないか」

「は。もうお耳に」

信長は、苦笑した。その大言を吐いた人間らしくもなく、藤吉郎が、自分の前ではひどく恐縮して、顔を赤めているからだつた。

「以後、慎め」

信長は、きつく叱つて、

「今朝ほどから、山淵右近が、そちが無礼のかどを挙げて、やか厳ましゆう訴えて来おる。――したが、他の者のはなしでは、そちの大言にも、一理はあるらしいゆえ、なだ宥めつかわした」

「恐れ入ります」

「謝罪して来い」

「は？」

「普請場へ参つて、右近に謝つて来い」

「てまえがですか」

「当りまえなこと」

「おいつけなれば、謝つて参りますが、よろしいでしょうか」

「不服か」

「恐れながら、悪弊になるかと存じます。なぜならば、てまえの申し条は正しく、彼の仕方は、御奉公に忠実とは申されません。あの程度の御修築に、二十日近くもかかつて、な

おまだ——」

「猿、待て」

「は」

「わしにまで、そちは、大言を吐くか。そちの演舌は、他の者より聞いておる」

「当りまえなことを申したまでで——大言とは、いささかも思いませんが」

「然らば、そちはあの工事を、幾日で仕遂げてみせるか」

「左様で——」

と、彼もすこし慎重になつて考えていたが、即座に答えた。

「多少、手がついておりますから、後三日もあれば難なく竣しゅんこう工——と、存じますが」

「なに。三日」

信長は、声を放った。

柴田権六は、苦い顔して、真まにうけている主君をむしろ笑っていた。——ただ犬千代は疑わぬ眼で、藤吉郎の睫毛まつげのうごきまで、じつと見ていた。

みっかぶしん
三日普請

藤吉郎はその場で、主君から普請奉行の大役をいいつけられた。

山淵やまぶち右近に代つて、三日のうちに、城壁百間の修復をやってみるといわれたのである。

「かしこまりました」

彼は、おうけした。そしてすぐ退りさがそうにしたので、信長は、

「待て待て。汝、そのような安うけあいして、確かにやれるのか。よいのか」

念を押した。そういつた信長の気持には、この男に、つめ腹を切らすような失態をさせたくないとする——思いやりがあつたのである。藤吉郎は、坐り直して、

「必ず致しまする」

と、云いきつた。それでも、信長はまだ、

「猿。——禍わざわいは口からというぞよ。つまらぬ行きがかりの上なら、今のうちにそのような意地は捨てたがよい」

と、なお考慮の余地を与えて諭さとしたが、藤吉郎は、

「いずれ、三日後に、御検分を仰ぎ奉りまする」

とのみいつて、主君の前を退さがつてしまった。

すぐ彼は、うまやしゆう厩衆の溜たまへもどつて来て、

「組頭。てまえは、主命によりまして、三日ほど、そとぐるわ外曲輪の御普請ごふしんのほうへ、全力でかかることになりました。その間、どうかよろしく——」

と、挨拶して、その日は、やや早目に、わが屋敷へ帰つて来た。

「ごんぞ。ごんぞ」

主人の声に、若党の権三が、奥をのぞいてみると、藤吉郎は、衣服を脱いで、そう立派でもない肉体をまる裸に見せて、ちよこなんとあぐら胡坐をくんでいた。

「なんぞ御用にござりまするか」

「用だ！」

と、元氣よく、

「金はあるかな。手元に」

「お金で？」

「さればよ」

「さあ……」

「いつか少々、その方に家事の雑費としてあずけておいた金はどうか！」

「もう、疾とくにございませぬ」

「では、勝手元の金子きんすは」

「お台所のほうも、ずっと前から少しも御用意がございません。で、その由を、先々月か、お耳へ入れましたところ、そうか、よいようにしておけ、と仰おほっしゃるだけなので、ぜひなく、やりくり算段さんだんをしてお暮しを弁じておるような始末で——」

「ふう……む。では金子きんすはないのか」

「あるはずはございません」

「はてなあ？」

「いかがなされました」

「俄にわかに、人を招いて、振舞ふるまいいたしたいのだが」

「酒さかな、お肴さかなのことぐらいなら、走りまわって、ごんぞが、町人たちから借り立てて参りまするが」

「そのことよ」

膝を叩いて、

「ごんぞ、頼たのむぞ」

藤吉郎は、しづうちわ 浴団扇を取りよせて、体のまわりを大きく煽あおいだ。もう秋風も立ち、きりば 桐畑たけの桐の葉も夥おびただしく落ち出しているが、やぶ蚊はなかなか多いのだった。

「して、お客様は」

「御普請の棟梁とうりょうどもだ。やがて顔をそろえて参るだろう。おれの屋敷へ集まれと、お城で云い渡しておいたからな」

ごんぞを、使いに出して、藤吉郎が裏庭で、行水の湯を浴びていると、表口に誰か客の声かひがした。下婢かひが出て行った。

「どなた様でございますか」

客は、笠とを脱とつて、

「御城内の前田犬千代」

といった。

行水から上がって、縁側で浴衣ゆかたを着ていたこの小屋敷あるじの主は、そこから表をのぞいて、

「やあ。やあ。——誰かと思つたら犬千代か」

無造作に、どなった。

「上がられない。さあ、奥へござれい」

と、自分で敷物など直した。

犬千代は、坐りこんで、

「突然に出向いた」

「めずらしいお越し。——何ぞ急用でも」

「いや、わしの用事ではない。おぬしのことだ」

「ほ……?」

「ひと事のような顔されるが、それどころではおざるまい。大変な確約を結ばれて、犬千代ですら、陰ながら憂いにたえない。おぬしのことゆえ、充分、成算せいさんはあつてのことだろうと思うが」

「あ。工事のことでござるか」

「いうまでもない。よしもないことを云い出され、御主君におかれてさえ、人ひとり、要らざること、腹など切らせとうない——といったようなお顔いろであつた」

「三日と行ってしもうたのだな……」

「成算は、あるのか」

「ない」

「ない？」

「もとより、お城の工事など、てまえは皆目、素人しろうとでござれば」

「で、どうするおつもりか」

「ただ、普請ふしんに働くものは人間だから、その人間を、完全に使えば、人力の及ぶところまでは出来得ると信じておる」

「さ。……そこがだ」

犬千代は、声をひそめた。

妙な恋こいがたき 仇あいつである。

ひとりの寧子ねねを、二人で想い合つてから、いつかこの二人は、恋仇こいがたきという相対的な関係から、反対に、親密の度を加えていた。——といてべつだん、胸襟きょうきんをひらくとか、肝胆かんたん相照あいてらすとか、ことばや形の上で、手を握つたわけでも何でもなく、不和な仲に、彼を知り、此方こちらを知つて、自然、男と男との交際つきあいが始まつて来たのであつた。

わけて、きょうの犬千代の訪れなどは、真実、藤吉郎の沙汰を、心配して来たものらしく、その様子は、飾らない態度にも、ぞんざいな言葉のうちにも、汲み取れた。

「——そこがとは？」

「山淵右近やまぶちうこんの気もちになつて、きょうのことを、おぬし、考えてみたか」

「さだめし、無念がつて、この藤吉郎を、恨んでおることと、察しておる」

「——では、その山淵右近の、日常の行いや、また侍としての、彼の心事をも、観みておらるるか」

「おるつもりだが」

「そうか……」

犬千代は、ことばを切つて、

「おぬしが、そこさえ、看破しておれば、わしも安心だが」

「……」

じつと、藤吉郎は、彼のつぶやく顔を見ていた。

そして、何か領うなずいた。

「さすがは犬千代。貴公も、眼をつける所へ、よう眼をつけるのう」

「いや、眼の早いのは、おぬしに敵かたわぬ。——山淵右近へ、それと眼をつけたのも鋭いが

……」

「あいや、待った」

藤吉郎が、口を抑えるまねをすると、犬千代も快活に、

「あはははは。いわぬが花か。いうては味ない。いうては味ない」

と、手をたたいて笑い合つた。勿論、いえば、寧子ねねの名が出るところであつた。

使いに出た若党のござはやがて帰つて来た。その後から酒が届き、着さかななども届いた。

犬千代が帰りかけると、

「ちようど、酒が届いた。一献こん召してお帰りやれ」

藤吉郎はひきとめた。

「せっかくなれば」

と、犬千代も腰をすえ直して、遠慮なく馳走になつていた。しかし、この酒や着を設けて待つた当夜の客は、一人も見えなかつた。

「はて。誰も来んなあ。……ござ、どうしたものじやろう」

藤吉郎が、ござを顧みて、こう噂すると、犬千代が側からいつた。

「木下。おぬしは、御普請ごふしんに關係しておる棟梁とうりょうたちや、人夫の頭かしらどもを、今夜招いて

おつたのか」

「さればよ。何かの打ち合わせもせねばならず、また、三日の間に、工事を仕終すには、

大いに、士気も鼓舞せねばならぬから——」

「はははは。買いかぶったわえ。わしはおぬしを」

「なぜ。なんでそれがしを、買いかぶったといわるるか」

「人いちばい、眼はしのきく男ぞと尊敬していたに、さりとは、お先の見えぬ」

「ふーむ」

藤吉郎は、笑う犬千代を、まじまじ眺めて、

「……そうかなあ？」

と、あいまいに呟いた。

「考えても御覧じ——」

と、犬千代は、いつて聞かせるような口調である。

「相手は小人しょうじん。——小人の中でも小人型の山淵右近ではないか。おぬしのために、首

尾よう鼻をあかさされることを、祈っておるはずはない」

「勿論だが……」

「というて、彼が、指をくわえて見ておろうか。——わしはそう考えんなあ」

「なるほど」

「極力、おぬしが、不成功に終るよう、邪魔を策しているにちがいない。……さすれば今宵、ここへ来いといわれた棟梁どもでも、来ないと考えたほうが正しかろう。職人、棟梁の輩は、おぬしよりも、山淵右近のほうが、ずんと偉い人と思うているしな」

「いや、分った」

藤吉郎は、あつきり頭を下げた。そして一膝すすめると、

「——ならばいっそ、この酒は、飲めよと、二人へ授かったようなもの。神の御意にまかせて、飲もうではないか」

「飲むのはよいが、おぬしには、明日から三日のうちに誓約があるぞ。よいか」

「よいとも。よいとも。明日はあしたの風というもの」

「お覚悟あるなら、腰すえて飲もう」

多くは飲まないが、話が尽きないのである。犬千代は談論風発であったから、藤吉郎のほうがどうしても聞き手になった。藤吉郎はまた誰とはなす時でも、聞き上手であった。

藤吉郎は、一定の学問をしていない。武家の子弟のように、学問や教養だけで過せばよい日などは、過去に一日もなかったのである。それを不幸とは少しも考えなかったが、世に立つ短所であることはよく弁えていたので、自分より教養のあるものと思えば、その者

の知識を、座談のあいだにも、自分の物にしようとするやうと努めて心がけていた。——自然、人の
 はなしを忠実に聞き、また聞き上手な態度になるのだった。

「やあ、よい心地になった。木下、もう寝ろ、もう寝ろ。——明日は早かろう、しっかりと
 頼むぞ」

犬千代は、やがて自分から杯をひかえ、そういうとすぐ帰ってしまった。

犬千代が帰ると、藤吉郎はすぐ横になり、手枕で眠ってしまった。

下婢かひが来て、枕をあてがったのも、知らないふうであった。

彼は毎夜よく大たい睡すいした。眠りつけない夜などは知らなかった。母の夢も見なかった。

亡父ちちの夢も見なかった。眠ったが最後、天地も彼もけじめのない、一個の生態でしかなか
 った。

——だが。

起きると、途端に、彼は彼であった。

「ござい！ ござい！」

「はあッ。……もうお目ざめでございますか」

「馬を出せ」

「へ……？」

「馬を曳け」

「お馬を？」

「さればよ。今朝からは早出仕だ。いや、こん夜も明夜も帰宅すまい」

「生憎と、御当家にはまだ、馬も厩もございませぬが」

「わからぬ奴、近所から借りて来い。遊山に乗るのではない、御奉公のため要るのだ。遠慮なく申して曳いて来い」

「でも……夜明けとは申せ、まだ外は暗うございしますが」

「寝ていたら、門を叩け。わが事と思うからそちは尻ごみするのだろう。御奉公のためだ、差しつかえはない」

「ごんぞは、あたふたと、衣服を纏うと、戸外へ飛んで行った。」

何処からか一頭の駒を曳いて彼はもどつて来た。門に出て、待ちかねていた無造作な主人は、何処から借りて来たかなどとも訊きはしない。もうわが物のように、それへ乗って、夜明けの闇を駈けていた。

彼は、工事に携わっている主なる職方の棟梁の屋敷を、六、七軒駈けまわった。

大工や石工の棟梁とはいえ、みな扶持取りで、織田家の工匠部に属するものであるから、職方の支配役たる彼らの家は、みな贅沢な居宅を構え、婢妾を蓄えて、藤吉郎の今住んでゐる桐畑の中の小屋敷などは、比較にならないほど堂々としていた。

彼は、一軒一軒、門をたたいて、まだ眠つてゐる外から布令て歩いた。

「集まれツ。集まれツ。御工事にたずさわる輩、一名のこらず、今晩寅の下刻までに、御城内の普請場に勢ぞろいせよ。万一、時遅れたる者は、一切放逐するぞ。——すぐ職方へ申し触れて馳せつけよ。——君命であるツ。君命をもって申しつけたぞ」

次々に、こう伝えて、やがて彼の駒が、汗に濡れた毛並から白い湯気をたてながら、清洲城の濠際へ来た頃には、ちょうど東の空が明るくなりかけていた。

彼は、城門の外へ駒をつなぎ、一息つくつと、やがて唐橋の口に立ちふさがつていた。手に太刀を抜き放ち、くわツと射るような眼をして、立っていた。

暗いうちに起された職方の棟梁たちは、何事が起つたかと、各の下職を牽いて、次々にやつて来た。

藤吉郎は、それらの者へ、

「待て」

と、一応、唐橋の口で堰止めてから、名前、職場の位置、下職や人足の頭数など、いちいち点呼してから、

「通れ」

と、許し、そしてまた、

「静粛に、御普請場にて暫時待つておれ」

と、いい渡した。

彼の概算で、頭数は、ほとんど洩れなく集まった。職人どもは、仕事場に整列したが、不安と疑いに、ざわざわ囁き合っていた。

やがて藤吉郎は、一同の前に立った。唐橋の口で引っ提げていた太刀を、ここでも鞘さやに入れず、引っさげていた。

「騒さわめくなッ」

太刀を上げて、その切っ先で命じるようにいった。

「――列を正せ！」

号令である。

職人どもは、びくツとしたが、棟梁たちの顔には、せせら笑いが泛うかんだ。年齢からいつ

ても、世俗的に見ても、彼らの眼からは、

(なんだこの青二才が——)

としか思えない。

その藤吉郎が、頭から自分らへ、胸を張って臨むなど、片腹痛いと思うのである。それとなお、太刀を抜いて、高圧的に出るなど、生意気な仕ぐさだ——とも反感を催したふうだった。

「一同の者へ云い渡す……」

藤吉郎は、まるで無頓着かのように、大声で云った。

「今日より不肖木下藤吉郎、君命によつて、この御普請を承ることになった。きのうまでは山淵右近どの、奉行に就かれていたが、今日よりは木下藤吉郎が代つて奉行いたす。——ついては」

と、彼の顔は、職人どもの列を右端から左端までずっと見た。

「それがしは、つい先頃まで、御小人の末にあつた者で、君恩により台所御用役へ転じ、今では厩衆の一員ではあるものの、まだ御城内のお勤めだけに、充分には参らず、ましてや工事向きなことなど、一切弁えんが、ただ御奉公の真心だけは、人におくれは取らぬ

つもりだ。——こういう奉行、こういうそれがしじやによって、その方らのうちには、わしの下風については働けんと思える者があるやも知れぬ。工匠たくみには工匠の気質もあること嫌なら遠慮なく嫌といえ。即座に、解雇してつかわすであらう」

誰も黙っていた。

せせら笑いはつつんでいたものの棟梁たちも、口を閉じていた。

「——ないか、藤吉郎の奉行に不満の者はないか」

重ねて、糺ただすと、

「へーい」

一様に頭を下げた。

「然らば、直ちに、この方の指揮の下に仕事にかかれ。——その前にあらかじめ申しおくが、戦国多事の折、これぱしの改修に、二十日も費やしおることは断じて許されぬ。今日より三日のうち——三日目の夜明けまでには工事を終る予定である。その心得にて精出して致すよう、確乎しかと、申しつけたぞ」

棟梁たちは、顔見あわせて、薄笑いをうかべた。子飼からその道の飯をくって、生え際はぎわの禿はげ上がりかけている彼らとしては、当然、そういう嘲ちやうしやう笑しょうにくすぐられるのも、む

りはなかった。

藤吉郎は、それに気がついていないではないが、全く無視していた。

「棟梁ども。——石工、大工、左官の頭ども、これへ進め」

「へい」

返辞はしたが——また前へは出て来たが、彼らの顎や、鼻の穴や、眼ざしは皆、冷侮をただよわせて、上を向いていた。

藤吉郎は、いきなりその中の端にいた左官頭を、太刀のみねで、撲りつけた。

「無礼者ツ。腕拱みしたまま、奉行の前へ出るやつがあるかツ。退されツ！」

斬られたと思つたのであろう、その左官頭は、ぎやツと、大げさに叫んで倒れた。

他の者も、色青ざめて、思わず脚をふるわせた。

「仕事の持場と、坪割を申しわたす。それぞれの頭たる者は、慥と承つて、違背ならぬぞ」

続いて、彼は、厳格にいった。

もう誰も、迂かつな顔や、鼻の先で聞いているような態度は改めた。

心服はしていないまでも、静肅にはなった。肚では反抗しても、うわべは怖れた顔して

いた。

「御城壁百間を、五十に割付け、一組の持場を、二間当てとする。——組には、大工三名、左官二名、石工その他五名、合わせて十名をもつて組織する。職方の配置、頭数の振りあては、持場によつてちがうゆえ、それは各組の頭かしらと棟梁とうりょうの按配あんばいにまかせおく。——棟梁どもは、一人で約四組から五組の督励とくれいに当り、組の仕事を指揮し、職人たちに手すきなきよう、絶えず人数の配りに気をつけ——職方の余裕あるところの者は、すぐ手不足の部署に移し、寸分、息もつく間があつてはならぬ」

「へーい」

ともすれば、彼らは、不穏な色を示した。そういう講釈しゃくも癪しゃくだし、坪割つぼわりのいいつけにも不平なのである。

「あ。——云い忘れた」

藤吉郎は、語気を昂あげて、

「今申した、二間一組の十名の割当てのほか、一組に対し、人夫八名、職人二名ずつ——これは遊軍として、附けおくであろう。今日までの仕事ぶりを見るに、左官その他の職人どもは、ともすれば、足場を離れ、自分の仕事にあらぬ、材料の持ち運びやら、雑用な

どに日を暮しておるが、職人が職場に向うは、戦士が敵へ対した時と同じである。部署を離れてはならぬ。大工は大工の——左官は左官の——石工は石工の、道具を手から措おくな。戦場で、槍や太刀を、手より離すのと同じであるぞ」

それから、図面によつて、部署をきめ、人数を割り当てなどしてから、彼は、

「——かかれえッ！」

と、戦争を開始するような勢いでどなつた。

勿論。

彼の腹心ではないが、仕事の下役として、きのうまでの侍たちも、与力していた。

その一人に、拍子木ひょうしぎと、太鼓番をいいつけた。

藤吉郎が、かかれというと、太鼓番は、太鼓をたたいた。一鼓いっこ六足を踏んで、敵陣へ迫つてゆくように太鼓は鳴つた。

かち。かち。かち……

拍子木は、休息だつた。

「休め！」

と、彼は石の上に突つ立つて、号令していた。休まないでいる者がいると、休めッ、と

叱った。

俄然、仕事場の空気は、きのうまでの惰気だきを一掃して、戦場のような眼つきと、汗の殺気がみなぎった。

だが、藤吉郎は、黙って見ていながら、

(まだ、まだ、こんなことでは——)

と、決して満足な顔いろではなかった。

労働する者は長い労働の体験から教わっている狡ずるい体の使い方を知っている。よく働いているように見せかけながら、実は真実の汗はしぼっていないのだ。彼らの反抗は、服従していると見せて、その実、能率を上げないことで、いささか内心で慰めているのであった。

藤吉郎の過去は汗の中の生活だった。汗の真価を知っている。汗の美しさを知っている。労働は肉体のものだというのは嘘である。労働にも精神がこもっていなければ牛馬の汗と差別はない。——彼は、真実の汗と真実の労力が、どうしたら人間から発揮されるか、口を結んで考えていた。

喰うために彼らは働いている。或いは、親とか妻とか子とかを喰わせるために働いてい

る。いずれにしても、彼らの働く意思は、食のためとか、享きょうらうく樂のためとか、それ以上に出ていかなかった。

小さいのだ。卑屈なのだ。

もともと、その程度の望みしか持たない彼らなのである。

藤吉郎は、不愠ふびんを催した。

(かつては、自分もそうだった……)

と、思う。

小さい望みしかもたない人間に、大きな働きを求めても無理である。大きな精神を把持はじさせなければ、大きな労力の効果と能率はあがる筈がない。

半日経った。

普請場ふしんばの一角所に、黙然と、突つ立つたまま、半日はすぐ経った。

まる三日間のうちの半日は、六分の一の時間である。だが、全工事を見渡したところ、朝から少しも撓はかどった跡は見えなかった。丸太足場の上や下で、わあわあと、掛け声や様子ばかりは、懸命にやっているようだが、実際は、偽装に過ぎなかった。むしろ彼らは、肚の中で、藤吉郎の完全なる惨敗を、三日の後に予期しながら、その目企もくろみの下に巧妙な怠

け方をしているといつても過言でなかった。

「午ひるだ。——柝きを打て」

藤吉郎は、下役へ命じた。

拍子木が鳴つて廻る。工事場の物音や喧騒が、いちどに休む。藤吉郎は、職人たちが昼飯の弁当をひらき出したのを見ると、太刀を鞘さやにおさめて、何処かへ立ち去つた。

午ひる過ぎの半日も、工事場は、そんな空気で暮れかけた。

いや、午まえよりも、秩序がみだれ、惰だ氣きが漂ただよつて、山淵右近が奉行していた昨日と、変りがなかった。

それに職人や人足たちは、今夜からは不眠不休で、三日間は、城外へ出さないと云い渡されているので、よけいに労力を惜しんで、横着に立ち廻る算段ばかりしていた。

「仕事止めい。仕事止めーい。一同手を洗つて、広場へ集まれーッ」

まだ明るいうちだったが、突然、拍子木を打ちながら、下役の一人が触れ廻つた。

「何だろう？」

職人たちは怪しんだ。棟とうり梁りょうにきいてみても、棟梁にも分らなかつた。

ともかく一同は、材料置場になつていゝる広場へ行つてみた。するとそこには、野天では

あるが、酒や肴さかなが山とばかり支度してあつた。蕙むしろの上や、石や材木を席にして、一同を腰かけさせた。そして藤吉郎は、職人たちの真ん中に腰をかけ、杯を挙げながら、

「さて。何も無いが、これから三日間。——といつても、はや一日は過ぎたが、無理な仕事をしてもらわねばならんで、今こんせき夕だけは、一杯飲んで、存分、体を休めてくれい」

朝の彼とは、別人のように、まず自分から悠長に一杯飲んで、範を示した。

組々の者へ、酒の銚ちようし子や、肴さかななども配つて、

「さあ、心おきなく飲んでくれい。酒のきらいな者は、肴でも、甘い物でも」と、すすめた。

職人たちは、単純に感激した。しかし、奉行の藤吉郎のほうが、先にいい機嫌になつてしまふようなので、三日目の完成を、彼らが、かえつて心配しだした。

けれど藤吉郎は、誰よりも、上機嫌で、

「酒は、充分にあるぞ。しかもお上の酒かみだ。いくら飲んでもお酒倉にあるほどは飲みきれまいが。——飲んだら、踊るもよし、唄うもよし、寝るもよしじや。懸かかり太鼓の鳴るまでは」

といつた。

職人たちは、すぐ不平を宥められた。

「労役から解かれた上、思いがけない酒肴に出合い、奉行自身も寛いで、自分たちの仲間
にまじって、飲みもし、食いもし、話もするので、すっかり欣しくなってしまうた。」

「話せるな。この旦那は」

などと彼らも、少し酒がまわると、戯れたりした。

だがそれは、下職や人足たちのことで、頭立った棟梁たちは、依然藤吉郎を白眼視
していた。

(ふふん……。見え透いた小才を振りまわしやあがる)

むしろ、反感を募らせていた。こんな所で、酒が飲めるか——といった顔つきで、杯な
ど手にも触れないのである。

「どうだな、棟梁ども」

藤吉郎は、杯を持って、彼らのその白眼視の中へ、自分から起って腰をうつした。

「そち達は、いっこう飲まぬようではないか。棟梁は、一方の武将、責任を思うて、酒も
参らぬとみゆるが、まあまあ、案じるな。——出来るものは出来る。出来ぬものは出来ぬ。
まちごうて、三日のうちに出来なかつたら、わしが腹を切ればすむ……」

と、最も苦りきっている棟梁の一人へ、杯を取らせて、藤吉郎は自分で銚子から注いでやりながら、

「——まあ、心配といえばだなあ……この度の御普請の一事でもないし、もとより、この藤吉郎の一命などでもない。わしは、お前らの住んでおるこの国の運命が心配だ。何度もいうようだが、これしきの普請に、二十日もかかっているような状態では——そうした人心では——この国は亡びるな」

憂いをこめていった。

ふと。彼の声に、職人たちも、しんみりした。

藤吉郎は、嗟嘆するもののように、宵の星を仰いで、

「興る国——亡びる国——おまえらもずいぶん見て来ただろう。国の亡びた民の惨めさも知ってるだろう。——どうも是非のないものだ。われわれ侍の端くれも、重臣も、御主君はもとより、夢寐の間も、一尺の国土たりと、守り防ぎは忘れぬが……国の興亡は、実はお城にあるわけじゃないからな。——では、どこにあるかといえはお前らの中にあるのだ。領民が石垣だ、堀だ、濠だ。——おまえらはこのお城普請に働いて、他家の壁を塗っていると心得ておるか知らんが、そいつは大間違いだ。おまえら自身の守りを築いているのだ。

もし、このお城が、一朝にして、灰になつたらどうだ。お城だけが、そうなつてすむわけはないぞ。御城下は、兵火につつまれる。領内一円は、敵兵の蹂躪じゅうりんに委せてしまう。……阿鼻あびきょうかん叫喚きょうわんだ……。親にはぐれて泣く子、子をさがしてよろぼう老人としより。悲鳴をあげて逃げまどう若い娘。誰にも顧みられずに巷ちまたで焼け死ぬ病人。——ああ、国が亡んだらもう終りだ。おまえらにも、親もあろう子もあろう、妻もあろう病人もあろう。常日頃、よくよく心いたしておくがよいぞ」

「……………」

棟梁たちも、さすがに、冷笑をひそめて、真顔になつた。彼らには、財があり、眷族けんぞくがあり、今が幸福だけに、痛切にひびいた。

「——それを、今日、みな安泰にいられるのは、何の力か。もとより、主君の御威光はいうまでもないが、おまえたち領民が、お城を中心に、慥乎しつぷかと、国土を護つていてくれるからだ。——われわれ武士ばかりが、いくら戦つたところで、おまえたち領民の心が弛ゆるんでいたら……」

藤吉郎は、涙ぐむばかりにいった。策や上手じょうずでいうのでは決してない。心から、彼はそう憂い、そう信じているのであつた。

一瞬、彼の真実なことばに打たれた者達は、酒の酔いもどこへやら、声をのんで、藤吉郎の面を見まもり合っていた。

——と。

どこかで、涙をすすめるような嗚咽が聞えた。

見るとそれは、棟梁仲間のうちでも、最も古手で幅利きな——そしてきのうから変わった新奉行の藤吉郎に対しては、誰よりも露骨に、反抗を示していたあばた顔の大工の棟梁であった。

「ああ。……おれは、おれは」

と、その男は、人前もなく、じゃんか面に、ぼろぼろと涙をこぼし、その涙を、掌で逆さに撫でて嗚咽していたが、人々が驚いて、

(何事か?)

と、自分を振り向いたと意識すると、彼はにわかには、仲間の者を押しわけて、藤吉郎の前へすすみ、

「申し訳ございません。自分の馬鹿や浅慮がよく分りました。どうか手前を、見せしめのため、お縄にかけて、一刻もはやく、お国のため、工事をおいそぎ下さいまし。……ま

「まったく悪うございました。手前の考え違いでございました」

大地へ、顔をうつ伏せたままじゃんかの棟梁とうりょうは、身をふるわしているのだった。

「……………」

藤吉郎は、初めのうち、ちよつと呆あつけにとられた顔をしていたが、ははアと何かうなずくと、凶ぼしを指すようにいった。

「うム。……山淵右近やまぶちうこんに云いふくめられたな。そうであろうが」

「木下様には、それをご存じでございましたか」

「知らないでどうするものか。——山淵右近は、おぬしへも、他の者へも、わしの招きには行くなといったであろう」

「へい……………」

「そしてまた、出来得るかぎり、御工事の場所では怠け、わざと仕事を遅滞させ、藤吉郎の命に反そむけとிட்டただろう」

「は……………はい」

「それくらいなことは、あの男にはある筈わけがあるのだ。おぬしらも、ヘタをすれば、首の座に並ぶところじやったよ。……まあよい、大きなりをして泣くな。悪いと知って

白状したからには許してつかわす」

「まだ申し残していることがございます。山淵様がいうには、御工事を、なるべく下手にやつて、三日の先まで遅れさせたら、手前どもに、それぞれ莫大な金をやろうと——それは極く内密のことでございますが、そう仰っしゃいました。……けれど木下様のおはなしを聞いてみれば、そんな金に眼をくれたり、山淵様の口によつて、貴方様に楯突いたのは、まったく自分の身を亡ぼすように努めているようなものでございます。すつかり、眼がさめました。どうか、その謀叛組の先棒になつたわしを縛つて、御工事を、滞りなくおやり遂げくださいまし」

じゃんかは、さすがに、潔くいった。一人で罪を負おうとした。

藤吉郎は、にこと笑つた。この男が、この仲間では、いちばん力になることを、すぐ知つたのである。

強い抗敵ほど、一転すれば、真実の味方になる。

彼は、じゃんかの手を後ろへまわして縛る代りに、杯を持たせていった。

「罪は、おぬしらにはない。そう覺つたら、同時に、おぬしらは、善良な領民だ。さあ飲んでくれ。そして一休みしたら仕事にかかつてくれい」

じゃんかは、両手で杯を押しただくと、

「ありがとうございます」

心から頭を下げた。

しかし、酒は飲まなかった。

「おいッ、みんな！」

突然、じゃんかはそう呶鳴るようにいつて突ツ立つと、杯を高く挙げて、

「せつかくの思し召だ。これ一杯ずつ飲んだら、すぐ仕事にかかろうぜ。てめえ達も、聞いたろう。木下様のおことばを聞いちやあ、おれ達は、面目なくて、どうして天道様てんとうが、罰をあてなかつたか、ふしぎなくらいなものだ。今日まで、喰いつぶして来た米の手前にも、一世一代、働いてみる。ほんとの御奉公をやってみせる。——おらあそう肚をきめた。てめえ達は、どうする!!」

じゃんかのことばが終ると同時に、他の棟梁も職人たちも、一せいに立ち上がって、

「やろう」

「やりましょう」

異口同音に答えた。

藤吉郎も、飛び上がって、

「やってくれるか！」

「やりますとも」

「かたじけない」

彼も、杯を挙げ――

「では、この酒は、三日の後まで、預かっておくぞ。首尾よく御工事がすんだら、その時こそは、心ゆくまで飲むとして」

「わかりました」

「また、山淵右近が、おぬし達にくれるといった金は、何ほどか知らんが、それも竣しゅんこ

工うの後は、藤吉郎が身になう程の褒美はいたすぞ」

「そんな物は要りません」

じゃんかを始め、職人側の一同は、杯のものだけ一口干すと、

「それッ」

と、ちやうど戦場の武者が先陣を争うように、元の仕事場へ向って、われがちに駈け出した。

その氣勢を見送ると、藤吉郎は初めて心から眉をひらいて、

「出来たッ」

と、思わず大きな声で、独り言を洩らした。

けれど、この機を外さず彼もまた、一職人となつて、泥仕事の中に立ち交じり、これからまる三晩と二日のあいだの、死にもの狂いな工事の中に、指揮もしたり働きもする決心だった。

——で。職人たちが皆、駆け去つた後から、彼も彼方へ急ぎかけると、

「猿。猿」

呼ぶ者がある。

呼びながら、蹻音は、彼のそばへ直ぐ駆け寄つて来た。宵なので、近づいて来たので初めて分つた。これはいつになく落着かない容子ようすをした犬千代であった。

「や。犬千代か」

「おわかれだ」

「えッ？」

「遽にわかに、わしは他国へ走る事になつた」

「ほんとか」

「御殿で、人を斬った。そして御主君から叱られた。当分、牢人する」

「誰を斬ったのか」

「山淵右近をだ……。わしの気もちは、誰よりも、おぬしが知ってくれよう」

「あッ。逸まったことを」

「若気だ！……。斬った後ですぐそう思ったが、間にあわぬ。性分というものは、抑え

ていても、無意識に出てしまう。——いや愚痴はよそう。おさらば」

「もう行くのか」

「猿、……。寧子をたのむよ。やはりわしには縁がなかった。……。可愛がってやってくれよ」

×

×

×

その頃——

清洲の城下から鳴海街道のほうへ向って、一頭の悍馬が、闇を衝いて駈けていた。重傷を負ったまま、山淵右近は、その鞍の上にしがみついていた。

なるみへん
鳴海変

鳴海^{なるみ}まで、八、九里はあろう。右近を乗せた駒はよく駈けた。

夜なので、人目もなかつたが、昼だったら、駒の駈けた後に、滴^{てきてき}々と血のこぼれを往来の人は見たであろう。

右近の傷口は、かなり深傷^{ふかで}であつた。ただ致命を外^それてはいた。しかし彼は、
「鳴海城までは——」

と、駒の脚と、わが生命の終りと、どつちが早いかを、夢中に怖れ通しながら、鬣^{たてがみ}にしがみついていた。

清洲の城内で、前田犬千代にふいに斬りつけられた時、犬千代が、

——奸賊^{かんぞく}ツ！

と、嗚鳴^{なな}って自分へ飛びかかつて来たように覚えている。その奸賊といわれた刹那の声が、彼の頭のしんに、釘を打ちこまれたように消えなかつた。

ともすれば霞^{かす}みかける意識と、駈ける駒の背の風の中で、
(さては発覚したか?)

と、惑^{まじ}い、

(どうして犬千代が知つたらうか?)
などと思つた。

同時に、これは鳴海城の一大事でもあり、父や一族の浮沈にもかかわることと思われるので、彼の胸さわぎはよけいに昂まり、その狼狽からこぼれる出血の量もひどくなつた。鳴海城は、清洲を繞る衛星の一つであつた。織田家の出城なのである。彼の父、山淵左馬介義遠は、信長の被官の一人で、その城を預かつてゐる者だつた。

左馬介は、織田諸将の中では、旧臣のほうであつた。

けれど彼は余りに、世の中の眼先にばかり敏感で、大きな将来を見る眼がなかつた。

先君の信秀が死んで、信長が、十六、七歳の頃の——最も世間で信長の評判の悪かつた時分——また、信長の逆境であつた時代——これはいかんと早くも見限りをつけて、羽振りのよい今川義元のほうへ密かに媚態を送つて、軍事的な盟約をむすんでおいた。

——鳴海衆変心。

と、聞えたので、信長は、二度も攻めた。鳴海は落ちなかつた。

落ちないはずである。大国今川家がうしろで援護してゐるのであつた。軍器、兵力、経済、いうまでもない。

攻めれば攻めるほど、信長の力は消耗される。自己の手足のために、自己の全体を衰弱させてしまう。

信長は、非を悟つて、抛ほつておいたのである。数年間というもの、鼻の先に、この叛はんぞ賊くを生かしておいたのである。

で——今川家は、かえつて、山淵左馬介やまぶちさまのすけを疑惑しだした。鳴海は、相互から疑いの眼で見られていた。

大国から疑いの眼で視みられることは、それ自体、滅亡の予告である。左馬介はどう思つたか、清洲の信長の許もとへ行つて、多年の不心得を詫わび、復帰を願ねがつた。

(——それみい。元木にまさるうら木なし。わかつたらよい。忠勤をはげめ)

信長は一言でゆるした。

それ以来、山淵父子の奉公ぶりには、感心してよいことこそ多かつたが、疑わしい行動は見えなかつた。

が——この見えないものを、見ていた者が二人あつた。

いつも信長の側に坐つている小姓の前田犬千代と、いつも信長の側にはいないが、城内の何処かにいる藤吉郎とであつた。

右近も、日頃から、その二人には何となく懸念を抱いていたが、折も折、普請奉行の役を藤吉郎に奪われた翌日、犬千代に斬りつけられたので、

(ばれたか)

と、事の発覚を早合点し、身の深傷ふかでにも顛倒てんとうして、城内から逃げ出して来たのであつた。

鳴海城の城門が見えた時、夜は明けていた。

右近は、それと共に、

「着いた」

と思いつながら、馬の背に俯うつつ伏ぶしたまま、意識を失っていた。

気がついた時は、城門の番卒たちに囲まれて、手当を受けている身だった。右近が息をふきかえして起つと、

「お気づきなされた」

「おお、この分なら——」

と、皆は愁眉しゅうびをひらいた。

すぐ城内の奥へ告げられていたとみえ、左馬介の近侍たちが、二、三名、

「若殿はどこにおられる」

「どんな御様子？」

眼いろを変えて駈けて来た。

家臣らの驚きはいうまでもない。いや、より驚愕したのは彼の父左馬介であった。番卒たちに足もとを援けられながら、やがて本丸の庭まで歩いて来た右近を見ると、

「深傷か。浅傷か」

と、さすがに親心の声を制しきれず、庭に飛び降りて来た。

「父上」

と、父の姿を見ると、右近もそれへ坐つてしまった。そして、無念ですつといたまま、また昏睡しかけた。

「はやく、奥へ奥へ」

と、いいつけながら、左馬介も一緒に室内へかくれた。その面には、取り返しのかかぬものを悔んでいる色がいつぱいに漲っていた。

元々、右近を清洲城へ出仕させておいたことは、たえず心配なことではあった。——なぜならば、左馬介はまだ本心から織田家へ復帰もしていなければ、服従する心もないから

であつた。

その右近が、折よく、城壁の普請奉行を命じられたので、左馬介は、年来窺つていた時機到来とばかり、早速、駿府の今川家へ向つて先頃から密使を送つて、

(織田家を討つて、尾張一円を御司権の下へ収めるのは今こそでござる。奇兵五千ほどをもつて、東部の国境から一途に清洲へお攻めあらば、自分は鳴海大高の兵を挙げて熱田口から攻め入りましょう。——同時に愚息右近は、清洲の城内にあつて、内部から攪乱し、火の手をあげて、寄手に便宜を与えることに相成つておりますれば——)

という意味をもつて、今川義元の勇断を促したのである。

だが今川家では、彼の催促にもかかわらず、遽かにごごかなかつた。山淵父子は何といつても織田家の古参である。策であるやも測り難い——と、多分に疑惑していたからであつた。

第一の密使も、第二の使いも、梨のつぶてなので、左馬介は、おとといも、追っかけに三度目の使いを駿府へやつて、

(今を措いては)

と、急を促していた折も折なのである。

右近が斬られて唯ひとり逃げ帰つて来た。私闘で斬られたのではないという。こちらの陰謀はすべて清洲へ知れたらしいのだ。山淵左馬介は狼狽した。すぐ一族をあつめて評議にかかった。評議は短時間で一決した。

「かくなる以上は、駿河の御協力があるとないにかわらなず、軍備をかためて、織田の来襲に備えるしか方法はあるまい。——そのうちに、鳴海の変が伝わって、今川家が起てば、初志のとおり一挙に織田を揉み潰すことは、そう至難ではない」と、いうにあつた。

信長は、きのうから無口であつた。

その気持を察して近侍は、誰も犬千代のうわさをしなかつた。

しかし、それも信長には物足らないらしく、

「陣中の同士討ちと、城内の刃傷沙汰は、理由にかかわらず、厳罰のこと、固い掟とさだめてある。——あれも惜しい男ではあるが、由来、短慮が困りものじゃ。家中を斬ることこれで二度目だ。これ以上の寛大は、法のゆるさぬところ。また、彼のためにもならん…

…」

独り呟つぶやいたりした。また、夜になると、

「犬千代め。追放されて、何処へ身を寄せたか。牢人ろうにんも身のくすりじや。……これからちと世の苦勞をすることであろう」

などと、宿直とのいの老臣へ向つて洩らしていた。一方。

藤吉郎がひきうけている城壁の普請ふしんの方は、その晩が三日目だった。夜明けまでに竣工していなければ、信長はどう惜しんでも、また一名の惜しい家来につめ腹を切らせなければならなかった。

（あれも困り者ではある。よしないことを人前で云い張つて——）

信長は、密ひそかに、臍ほぞを嚙かんでいたのである。犬千代とか藤吉郎とかいう家来は、身分こそ軽いが、そしてまだ年こそ若いのが、父信秀の代から仕えている重臣連のうちにも、少ない人材であることを彼はよく知っていた。——いやこの小さい織田の一家中ではなく、広い世間を見まわしてもざらにはない男どもであると、彼は自分の家臣を自惚うぬぼれていたくらいなのである。

「……大きな損失だ」

無口にもならないではいられなかったのだ。しかし、それ程な嘆息ためいきは、老臣にも若い

近侍にも聞かせなかつた。

その夜は、早めに、彼は紙帳しちようの裡うらへはいった。そして枕につきかけると、
「殿ツ」

寢所口に重臣の影がうづくまつていう。

「変事でござりまする。鳴海の山淵父子が、叛旗はんきをひるがえし、物々しい防備と——熱田口からの早馬にござりまする」

「鳴海が……？」

信長は、紙帳を出て、白絹の寝衣ねまきすがたのまま、次つぎの間まへ移つて坐つた。

「玄蕃げんぱか」

「はッ」

「はいれ」

廻廊をまわつて、佐久間玄蕃さくまげんぱは次の間の、すそへ来て平伏した。

信長は、団扇うちわをつかつていた。もう夜は新秋の冷氣さえ感じるのであつたが、木立のふかい城内には、まだやぶ蚊が多いのであつた。

「……めずらしくない！」

信長は嘔んで吐き出すように、やがていった。

「山淵父子の謀叛むほんなら、癒なほりかけた腫物はれものが、また少し膿うみ出したまでのことじゃ。自然にふつきれるまで抛ほうつておけ」

「御出馬は……?」

「無用じゃ」

「御軍勢も」

「膏藥こうやくにも及ぶまい。……はははは。防備はしても清洲へ襲よせて来るほどの勇氣もないであろう。右近のことから、左馬介があわてたまでのことよ。しばし足掻あがきを遠見しているがよい」

間もなく、再び信長は寝たが、朝の眼ざめは、常よりも早かった。

或いは、よく眠らずに、夜明けを待っていた程であったかもしれない。彼にとっては、鳴海の異変よりも、一藤吉郎の生命のほうが遥かに心配であったかも知らなかった。起き出るとすぐ、近侍を従えて、信長は自身、工事場へ検分にやって来た。

朝の太陽が昇りかけていた。ゆうべまで、戦場のようだったそこには、材木も石も土も、木の屑一つ散らかつていなかった。大地は箒ほうき目きめさえ立ってきれいに掃いてあった。工事

場はもう今朝の夜明けと同時に、工事場ではなくなっていた。

信長は、案外だった。

滅多に意外を感じない——また少しぐらい感じても顔色に見せない彼も、三日の短時日に全工事を仕上げ、しかもその後、自分の検分を予想してか、残りの材木や石や塵芥ごみなど、すべて城外へ運び出させてしまい、きれいに掃き清めてまである行き届いた手際に、

「おお」

と、思わず機嫌のよい——そして、その上機嫌からこぼれる愕おどろきをも顔に現わして、

「やったのう。——これ見い、猿めが、やりおったことを！」

と、扨こじゅう従の者を振り向いて、あたかも自分の功名のようにいった。

そしてすぐ。

「彼は、どこに居るのか。余りにも今朝は、誰もここに見えぬではないか。藤吉郎を呼んで来い」

と、命じた。

近侍は、立ちかけたが、

「あれへ、木下殿が参るようにござります」

と、指さした。

大手の唐橋からはしはそこから眼の下に見えた。藤吉郎の姿は駈足で、その唐橋を渡ってくるのだった。

明け方、大手先まで運び出した足場丸太だの、残りの材木だの石だの、また工具や莖むしろのような物は、一先ず山のように濠端ほりばたに積んであった。三日三晩、一睡もせず働き通した職人や人足たちは、掃き寄せられた芋虫いもむしのように、前後不覚にそこらに眠っていた。棟梁むらどもまでが、共に必死に働いたとみえ、縄なわ帯おびやら縄なわ襷たすきをかけ、泥まみれの手足を大地へ抛ほうり出して、工事がすむと同時に、そこで寝ていた。

信長は、その光景を遠くから目撃した。同時に彼は、藤吉郎という男の才分に、今まであることを知らなかった点を新たに発見していた。

(猿めは、よく人を使う)

と、密かに驚嘆したのであった。そして、

(心なき日傭ひやといどもをさえ、死ぬほど懸命に働かせ得る器量があるところを見れば、訓練ある兵どもつわものを使わせたなら、一かどの采配は取れるだろう。戦へ遣いくさって、百人や二百人は預けても、まず間違いはないな)

と、観たのである。

呉子の兵書にある一章を、信長はふと思い出していた。それは、

オヨソ戦ニ勝ツハ

ソノ極理

兵ヲシテ欣ヨロコンデ

死ナシムルニ有アリ

と、いう語だった。

信長は胸の中でくり返してみたが、自分にはまだそれだけの器量があるかないか疑わしかった。——それは、戦略や戦術や権力ではないからである。

「お早いお眼ざめでござりまするな。御城壁、かように致し置きました」

——いう者があるので、信長が足下を見ると、藤吉郎がもうそこへ来て、両手をつかえていた。

「……猿か」

信長は、ふき出した。

藤吉郎の顔を見た途端にである——。なにしろ彼も三日三晩寝ないので、生なまがわ乾きの荒

壁みたいな顔をしていたのである。眼は真つ赤だし、胸も袴も泥まみれだった。つい笑ったが、信長はすまない気持がして、すぐ真面目になつていった。

「よく致した。——さぞ眠たかろう。存分に一日、眠るがよい」
「ありがとうございます」

藤吉郎は名譽に感じた。

この、国家一日も安息はできない時代に、

(存分に一日眠れ)

と、信長から労いたわられたことは、最大なお賞ほめであると欣うれしく思われたので、寝不足まぶたの瞼まぶたに、思わず涙が沁みたのであった。

が、彼は、そんな満足を感じながらも、少しもじもじして、

「ええ……その……少々お願いがござりまするが」

と、云い難にくそうに頬を撫なでた。

「何じゃ？」

「——御褒美です」

藤吉郎はいった。

はつきりした言葉なので、近侍たちは驚いた。信長の折角な機嫌が変りはしまいか——と、藤吉郎のためにむしろ惜しんでいた。

「何が欲しい？」

「かねが戴きとうございます」

「たくさんか」

「わずかでございます」

「そちの身に要いることか」

「いや」——と、藤吉郎は、城外の濠ぼばたを指さして、

「御工事は、てまえが致したのではございませぬ。あれに、疲れ果てて、眠り休れておる職人どもへ、頒わけてつかわす程、なにがしか欲しいのでござります」

「そうか。金奉行へいうて、何ほどでも受けとれ。——だが、そちへも何か歛あびをつかわそう。そちの禄ろくは今何ほどか」

「三十貫にござります」

「それしきであったかの」

「勿体ない仰せです」

「加増してくる。禄百貫に取り立て、槍組へ移して、足軽三十名を預ける」

「……………」

藤吉郎は、黙って大地へ辞儀ばかりしていた。

炭薪奉行だの土木奉行だのは、役目だけからいえば、格の高い譜代の士が勤める地位のものであるが、彼の血は多分に若いのだ。やはり戦の前線に立つ弓之衆とか、鉄砲組とか、現役に加わりたことは、年来の望みであつたのである。

足軽三十名を預かるのは、部将の中では最下級の小隊頭であつた。けれど、厩にいるより台所に勤めるより、遥かに彼は欣しかった。

その欣しさに、つい前後の弁えなく、藤吉郎は、お礼を述べた口で、うっかりいつてしまった。

「この度の御普請中にも、また、常々にも、てまえ密かに思っている儀にござりますが、当清洲のお城は、どう見ても、水利がよろしゅうございませぬ。籠城となれば、飲料水に乏しく、濠水はややもすれば干上がりませぬ。事ある場合は、討つて出るしかないお城でございます。——けれど野戦に勝目のない大軍の来襲をうけた場合は」

信長は、そら耳を装って、横を向いてしまった。——が、藤吉郎は、云い出したことを、

中途で止めるわけにもゆかないので、

「……手前が常に愚考しますには、清洲よりは小牧山のほうが、水利の便も攻防の利も、遙かに勝っているかと存じます。清洲から小牧へと、お移り遊ばすよう、切におすすめ申し上げまする」

と、献策けんさくした。

すると、信長は、

「猿、ひかえろ。図に乗って、よけいな差し出口。——はやく去いんで寝ておれ」

睨ねめつけて叱なった。

「……はッ」

藤吉郎は首をすくめた。——教えられた、と彼は思った。失敗は順調の時にしやすい。

叱言こごとは先が機嫌がよい時にうっかり喰う。

(……至らぬぞ、至らぬぞ。あのくらの働きで有頂天になり、その図にのって、一本たしな窘ぢまめられるなどは……われながら未熟至極)

その日の午過ひるぎぎ——

職人その他一同へ、褒美の分配をすませた後、彼は寝もせず、独り首をふりながら、城

下の町を歩いていた。——久しく会わない寧子のすがたを胸に描きながら。

(この頃は、どうしているか)

と、寧子を想うそばから、その寧子の恋を、自分へ譲つて、国外へ立ち退いた純情一徹な友の身の上をも、彼はしきりと案じていた。

友とは、いうまでもない、犬千代のことである。織田家に仕えて以来彼が心の友とゆるしているのは、前田犬千代一人しかなかった。

(寧子の家へは立ち寄つたろう。牢人して国外へ去れば、いつ再会の日があるやら知れぬ。——立ち寄つて一言ぐらひは、何か告げて行つたに違いない)

そう考えられたのである。

実をいえば、彼は今、恋よりも食物よりも、眠くて堪らなかつた。三日三晩というものほとんど寝ていないのである。——が、犬千代の友誼と義気と忠節を思えば、安閑と眠りを貪つてはいられなかつた。

(惜しい男だのに……)

男は男を知る。なぜ信長に、犬千代の真価が分つていないのか。山淵右近の逆意は、尠なくも、犬千代と自分には、とうから知れていたことである。信長がそれを覺つていない

というのが、彼には解せなかつた。右近を斬つた犬千代をなぜ罰したか、不満に覺えた。
（いや、御折檻ごせつかんかも知れぬ。お心を割れば、追放なされたのは、かえつて大きな御主君の愛かも知れない。——あの君には、うっかりしたことを、小利口顔していうと頭からこつんと一つ頂戴する。ほかの家来たちもいる所で、清洲城の水利の不便を説き、小牧へ御移転のことなど献策したのは、われながらまずかつた）

そんなことを考えながら彼は町を歩いていた。元氣は変らないが、時々、地面が動くよ
うな気がする。睡眠不足な眼に秋の陽がひどく眩まばゆい。

「……やツ」

浅野又右衛門の住居すまいが彼方に見えると、彼は眠氣もさめたように遠方から笑いかけて足を早めた。そして、

「寧子ねねどの。寧子ねねどの」

と、大声で呼んだ。

この界隈かいわいは弓之衆の住宅地で、目立つた腕木門うできもんや宏壮なやしきはないが、それぞれ小ぢんまりした柴垣の小屋敷や、前庭を抱いた侍の家が閑静に並んでいるのである。ふつうでも大声な性たちが、久しく会わない恋人の姿を思いがけなく、その家の門前に見かけたの

で、偽らない感情そのまま、手を振って急ぎ出したので、近所の屋敷一帯は、何事かと思つた程だった。

——あら？

と、驚いたように、寧子ねねの白い顔は、振り向いた。

恋は密かに——また誰でも、忍びやかにするものである。

近所の窓が明いたり、奥の父や母にまで聞えるような大声を出されては、処女おとめごころは、本意なくとも、居いた堪たまれるわけはなかった。

寧子はさつきから門の前に立つて、ぼんやり秋の空を見ていたが、藤吉郎の声を聞くと、顔を紅あからめて、門の内へあわてて隠れかけた。

すると藤吉郎は、また、

「やあ、寧子どの。わしだ。藤吉郎ですッ」

なお大きな声を揚げて、彼女のそばまで駈け寄つた。

「ごぶさた致した。公務多端で……どうも」

寧子は、門の中へ、半分かくれかけたが、もう彼が挨拶しているので、余儀なく、

「いつも、お健やかで、何よりでございます」

しとやかに頭を下げた。

「父上には、ご在宅か」

彼が訊くと、寧子^{ねね}は、

「いいえ。留守でございます」

といつて、はいれとはすすめずに、かえつてそつと、門の外へ少し出て来た。

「又右衛門殿が、お留守では……」

と、藤吉郎はすぐ彼女の迷惑を察して、

「外で、失礼しましょう」

と、自分からいった。

寧子も、それが望みらしく、黙つてうなずいた。

「きよう参つたのは、他^{ほか}ではないのですが、今朝、犬千代が立ち寄りませんでしたか」

「いいえ」

寧子は、顔を振つたが、ほの紅^{あか}く面^{おもて}に血がうごいた。

「来たでしょう」

「お見えにはなりません」

「……はてなあ」

赤蜻蛉あかとんぼを見送りながら、藤吉郎はちよつと考えこんでいた。

「御当家へも、姿を見せませんでしたか？」

かさねて訊ねながら、寧子ねねの顔を見ると、寧子は、涙をためて、俯向うつむいていた。

「——御勘気ごかんきをうけて、犬千代は立ち退のきましたぞ。お聞き及びか」

「……はい」

「お父上から聞かれたか」

「いいえ」

「では、誰に？ ……。いや、お隠しなさることはない。わしと彼とは刎頸ふんけいの友、何を聞かして下すつても、差しつかえはないのです。……来たのでしよう、ここへ」

「いえ。たった今、知ったばかりでございます。——お手紙で」

「手紙で？」

「はい」

「使いでもよこしてか」

「いいえ。今し方、わたくしの部屋の庭先へ、誰か礫つぶてを投げた者があるので、ふと下りて

みると、結び文に小石をつつんだのが落ちていました。……見ると、犬千代様の「云いかけて、声はおろおろ双ふたつの袂たもとにつつまれてしまった。しのび泣きして、背を向けているのである。

聡明なる才女——とのみ思っていたが、やはり処女おとめは処女であった。藤吉郎は、今まで見て来た彼女から、また一倍の美しさと、好める点を見出した。

「その手紙、見せてくれぬか。——それとも、人には見せられぬ手紙か」

いうと、寧子は、袂で顔をおおったまま、黙もくつて襟えりの間からそれを出して、素直に彼の手へ渡した。

藤吉郎はいそいで披ひらいた。

まぎれもない犬千代の筆である。文意は簡単であった。けれど、万言をつくしてある以上、藤吉郎には読めるのであった。

わたくし事にはあらで、やむにやまれぬ儀ぎよの候ころで、さるものを斬り捨て、きょうをかぎり御恩土ごおんどを立ち退のき候なり。ひとたびは、身をもいのちをも、恋にはと思いさだめこそすれ、今はぜひなし、この身にまさる木下蔭かげこそ、そもじの末もよからめといさぎよう、男と男、云いかたため、頼みまいらせて旅立ちもうし候

又右衛門どのへも、この文おしめし、くれぐれお心おさだめあれかし、又の会う日もありやなしや。ひと筆とりいそぎ候ままにあらあらかしく

ねねどのへ

所々、文字は涙にぬれていた。——寧子の涙か、犬千代の涙か。——いや藤吉郎もそれを見ながらぼろぼろ泣いていたのであった。

今か。今か。

鳴海なるみは、戦いくさ備そなえして、清洲きよすのうごきを見ていたが、年は暮れても、信長の攻めて来る気けはいはなかつた。

「はてな？」

疑心暗鬼は、城将の山淵父子を悩ませた。

彼らの悩みは、もう一つあった。信長に離叛りはんして、しかもその上、駿府の今川家からは（果たして、彼の内応は、根も葉もない偽りだった）

と、邪視されたことである。その後いかに釈明しても、不信が取り戻せなくなったことである。

当然、鳴海の城は、孤立になつてしまつた。

——折も折、

(笠寺かさでらの城主戸部新左とべしんざが、信長に内通して、近く背後から撃つてくる)と、いう噂が伝わつた。

笠寺城かさでらしじょうは、尾張の押えとして在る、今川の出城でしろの一つだ。

今川の命令としても、信長に内通したにしても、あり得ることだつた。

噂は、日が経つほど、濃くなつた。山淵父子を繞めぐる一族や家臣のあいだには、動揺の色がようやく見られて来た。

「不意を撃つて、笠寺を乗つ取れ。多寡たかの知れた出城一つ」

殼からに籠こもつて、大事をとつていた山淵父子も、遂に、機先を制したつもりで、真夜半まよなかから軍をうごかし、笠寺へ朝討ちをかけた。

ところが。

笠寺の方にも、先頃から同じような流言が行われ、同じような動揺があつて、戦備おさおさ怠りなく、手具脛てぐすねひいていた頃だつた。

木戸へ火を放つ。町屋を焼き立てる。

火と火である。

疑心暗鬼と、疑心暗鬼との兵であつた。当然、血みどろな激戦となつた。

笠寺は崩れた。城将の戸部新左衛門とべしんざえもんは、駿府の援兵を待ちきれずに、居城を焦土にして、火の中に奮戦して死んだ。

「勝つた」

「凱歌がいかをあげろ」

焦土の城へ、なだれ込んだ鳴海勢は、負傷、戦死おびただ、夥おびただしかつたので、半数以下になつていたが、それでも余勢を駆つて、まだ煙のいぶつてゐる焼け跡の城地にのぼり、太刀、槍、鉄砲など一斉に振つて、

——わあッ。

——わああッ。

高らかに勝鬨かちしぎを合わせた。

そこへ鳴海から、惨めな騎馬武者や徒士の兵が、三々五々、逃げくずれて来た。

「何事か」

驚いて、山淵左馬介が訊くと、

「さて、信長めの兵は速い。どう知ったのか、手薄の留守城へ、一千余りの兵がふいに殺到して、遮二無二攻めたてられましたので無念ながら！」

と、喘ぎ喘ぎの報告だった。

しかも、城地を占領されたのみではなく、まだ体の恢復しきれていない子息の山淵右近は、雑兵に捕えられて、首を刎ねられたともいうのである。

たった今、凱歌をあげていたばかりの山淵左馬介は、暗然と、自失してしまった。自身の攻め取った笠寺の城地は、焼け跡の灰と、領民のいない城下でしかなかった。

「天命ッ」

と、叫びながら、彼はそこで自刃したということである。しかし、天命とわめいたのはおかしい。彼の末路は、彼自身の作った人命である。

信長は、一日で、鳴海と笠寺とを平定した。

清洲の城壁の御普請をやって間もなく、何処へ行ったか、久しく姿を見せなかった藤吉郎も、鳴海、笠寺の二城が尾張のものになると、いつの間にか、帰っていた。

「貴公じゃないのか。両方へ流言を放って、反間をやりに行ったのは」

問うものがあっても、彼は、

「おら知らん」

けろりと、首を横に、振るだけであつた。

大きな月

戦いくさが日常にちじょうだつた。日常にちじょうの生活いっくさが戦いくさだつた。

毎年まいねん。どんな年ねんでも。

お濠ほりの柳やなぎや梅うめに、鶯うぐいすが啼ないでいる日ひでも、国くに境ぎかいのどこかかしらには戦いくさがあつたのである。

青田あおでんをふく風かぜの中に、平和へいな田植歌でんげのながれている日ひでも、国主くにぬしの兵へいは四隣しりんの敵てきを防まぎつつ、日に幾いくばく十人じゅうにんとなく戦死いくさじしていたのである。

——が、清洲せいしゅうの城下じょうげは、一見いちけんどこに戦争せんじょうがあるかのように見えた。

百姓ひやくしやうも町人ちやうしやうも工匠こうしやうも、流浪りうりやうの心配しんぱいなく自分の職業しごくに精出せいだしていた。軍費ぐんばいといえは挙こぞつて税ぜいを出した。国主くにぬしからいわれない先に、彼らかれらは、日常にちじょうの物を節せうして、お要いり用ようの時に備くわえていた。税ぜいを税ぜいとは思おもわなかつた。自分おれたちの安住あんじ楽業らくぎやうのためとして、一度いちどの酒さけを我慢ごまんす

れば、一尺の国境を守る矢弾やだまになることを、教えられずとも知っていた。

弘治三年こうじから永祿元年えいろく、二年——と領内の治績はそういうふうになくなって来た。事実は、城内の藩庫はんこも、軍費に追われて枯渴こかつし、家中の侍たちの生活も、信長自身の朝夕しろうの代も、切詰めぬいてもまだ窮乏を告げて、

(このままでは、戦いに勝つても、遂には御財政のほうで……)

と、勘定方や、金奉行の者たちが、ひそひそと額ひたいを寄せ合つて、憂えている状態であったが、信長は、

「祭は、まだかの。——この月は城下の日吉祭ひよしまつりであろうが」

などといっていた。

「前の月には、西美濃の津島祭つしままつりで堀田道空ほつたどうくうが館たちまで、祭見に参つて、儂みも忍びすがたで、踊りぬいたが、踊りはよいもの、日吉祭が待ち遠いのう」

いつも鹿爪らしい顔している柴田修理しばたしゆり(権六勝家)にもいうし、生真面目きまじめな森三左衛門もりさんざえもんや加藤図書かとうずしよなどの顔見た折もいった。

しかし、この人々には、余りに財政や国境の苦戦が分りすぎているので、その憂国心の余りに、

(――さればで)

とか。

(――御意で)

とか、極めてお座なりの、それも苦々しい返辞しか出なかった。

ただ、池田勝三郎信輝いけだかつさぶろうのぶてるだけは、信長の言葉の下に、

「いや、踊りは自分も好きでござる。踊りは人間を天真爛漫てんしんらんまんにさせるもので、自分なども、時折は、やしきで独り踊りませんがな」

と、いった。

先頃、幾月か前線へ出て、きのう戦場から帰つて来た藤吉郎も、末座のほうに居合わせていたが、勝三郎信輝のほうを見て、にやりと笑った。

信長も、にこと頷うなずいた。

何でこう三名が、各微笑したのか、それ以外の者にはわからなかった。

日吉祭の日が来た。

それはちように農家や町中の盆の行事にもかかるので、城下の者は、一年の楽しみとしいた。

(祭りのあいだは、微罪の者があつても、徒らいたずに縛しばるな。喧嘩なだがあつたら宥なだめてやれ。盗人を追うよりも、盗み心を起さぬよう、和氣わいきを尊たつとんで窮民には施しをせい。——祭日中無む礼講れいこうの札を建てよ。日頃、油を節約して、暗くらいに馴なれているゆえ、辻々に万燈まんとうを建てよ。踊りの群れに行き合うたら、そち達から馬を避け、踊り楽しむ領民どもに、怪我けがをさすな)

信長は、奉行を呼んで、そう云い渡した。

「畏まりました」

奉行は、退さがった。

すぐ、配下を集めて、信長の命令を伝え、

「どうも、祭のお好きな殿ではある」

と、苦笑した。

ふれがき
布令書を見合つて、配下の役人たちは眉をひそめた。

「これでは、領民どもの遊惰ゆうだを、御奨励になるようになりはしますまいか。——いかに、年に一度の祭とはいえ」

この戦時下——と、誰もがすぐに感じることを、誰もが苦々しい顔つきなのだ。

遠く国境にあつて、戦っている将兵に対してもである。いや、他人事ひとごとではない。自分らの息子、甥おい、兄弟たちもみな征いつて居るのだ。

「本来なら祭など、むしろ御停止ごちようじが当然なのに」と、いう論さえ出る。

誰もうなずいた。

内政上ばかりでなく、他国への聞えもある。今の織田家は、他国という他国は皆、敵国であるのだ。姻いんせき戚せき関係はあつても、斎藤家などは、最も危険な敵だし——駿河、三河、伊勢、甲州、頼む味方など一国もない。

洩れまいと隠しても、尾張織田家の財力の貧困は、先君信秀の代から天下に隠れなきものだ。

その有名な貧国でありながら、先代の信秀は、その頃、風雨もお凌しのぎ難く荒れ果てた皇居の御修理料にと、四千貫文を献上したりしている。

それも。功成り名を遂げた信秀ならともかく、朝廷から御嘉賞ごかしやうの勅使が、那古屋なごやへ下つてみると、信秀はその頃ちようど美濃攻めの激戦に大敗して、わずか数騎と、身をもつて遁のがれ帰つて来たというような——惨憺たる悲境の際だったのである。

で、勅使は、折の悪いのを察して、

(ご混雑のご様子なれば)

と、対面を略して都へ帰ろうとしたところ、信秀は、

(繪旨りんじに畏れ多し)

と、常のとおり礼を正して迎えた上、草莽そうもうの臣下の微志に対して、叡慮えいりよのほど勿体ないと、感泣した。そして席を移すと、その夜、使者のため、連歌れんがの会を催して、しめやかに一夜を犒ねぎらった——という風な人であった。

そうした父の血液は、信長に濃く伝わっているにちがいない。いや、成人と共にだんだん似てくるとは、老臣たちもよくいうところである。——財政の困難など、常に、物とも思っていないらしいところなど殊にである。

ようやく、徳になずいて、領民はよく働き、よく税を納める。だがそういう領民よりも、すこし大所おおどころの、ずるい富豪などから、お取り立てになつては——、と金奉行が献策した時も信長は、

「ム。釜の底は、追々」

と、いったのみだった。

釜の底よりちよつと肚の底のほうが分らない殿である——と、金奉行もその折いったことだった。

その分らない肚の底に、きようは城下奉行がぶつかつて、

「これは一応、柴田修理殿か、森三左殿へ、そつとお計り申してみよう。苦諫を怖れるは忠臣の道でない。御政道に悪いことは、悪いと申しあげた方が、御奉公の誠意だからな」

配下の者が、すべて好ましくない顔いろなので、奉行も急に考えが變つた。

もりさんぜえもんよしなり

森三左衛門可成は、山城守道三の息女が信長へ嫁した折、内室付として、斎藤家から来た臣で、織田家に仕えてから後も、度々、軍功のあつた重臣のひとりである。

で、勿論、奥向もいい。信長のあの性格へ、そう開き直りもせず、やんわりと諫めるには、彼に限る——

「だが、居るか居ないか？」

と、役人のひとりが、表方へ問い合わせてみると、折ふしちようど登城していて、北の丸へ伺い、何か御内室へお眼通り中だとある。

で——退出を待ち構えているとやがて森可成は、まだ、六、七歳にしかならない髪うないの童の手をひきながら、拝領のお菓子よしなりを片手に持つて、退つて来た。

城下奉行と、添そえやく役らは、呼びとめて、一室に迎え、

「実は」

と、憂いをこめて、祭まつりづれ布令の件を相談してみた。

「ごもつともな意見」

可成も、同意を洩らした。

先頃、津島祭の折も、信長が微しのび行で、踊りに出かけたということ、堀田道空から後で聞き、

(滅相もないお振舞)

と、胆きもを冷ひやしたことであったし——その後も祭々と日吉祭を待ちわびている口くちぶり吻も、よく信長から出るの、同憂の君側は、わざとその度に苦にがりきつているところなのである。御内室にも、信長の軽率な行状ぶりを、それとなく案じておられた。——実は、日吉祭のわずか三日の問題だが、味方の城下では、祭や踊りに浮かれていますと聞いたら、戦線の将兵はどう思おう。敵国からも末期症状と見られるだろう。何よりはまた、民心をつけ上

がらせ、平常の御国策も自然に行われなくなろう。
「由々しい問題じゃ。——よろしい。三左がお諫いさめ申しあげてみよう」

「なにぶん」

奉行や添役は、頭を下げた。

可成は、側にいる愛くるしい少年の童髪を撫でて、

「父は、殿様へお眼通りしてすぐ戻つて来る。大人しゆうしていやい」

美童は、素直に頷いた。

男かしら？ ……と、見惚れていた奉行は、愛想に、

「ようお聞きわけじやの。お名は？」

と、訊ねた。

美童は、彫つて丹を点じたような唇元で、

「蘭丸」

と、答えた。そして出て行く父の後ろ姿を、綺麗な眸で見送っていた。

奈良人形のように、両手を膝に重ねたまま、蘭丸は、かなり長い時間、動きもせず待つ

ていた。

やがて、可成は退つて来た。

どうか？ ——と案じていた人々が、すぐ君前の首尾を訊ねると、可成は先に首を振つ

て見せた。

「お聞き入れはない——。御諫言ごかんげんに出たわしが、かえつて御意見を賜つて退つて来た」

「御不興でしたか」

「されば。——お前方の憂いは自国の民を知らぬものだと先ず仰つしやられた。祭日まつりびの取締りを寛大にしたら、遊惰の風に狎なれようなどという心配は、他国の民なら知らぬこと、信長の領民にはないとお怒りなされた」

「……………」

「今川領などの民は、上を見ならう下で、一年をだらだら暮しておるゆえ、年幾日かを、御奉公日とか、御加勢日とか称とえる例もあるそうだが、信長の持つ領民は、一年三百六十五日が、御奉公日であり、御加勢日であるのだ。たまたまの祭日や盆正月のみが、彼らの慰樂で、平常は日々自肅、日々奉公、弛ゆるみもない民だ。——また信長も、今川風の政治は民にいたしておらぬ！ ……と、きつい御気色みげしきで仰せられた」

祭の夜が来た。

信長の令もあつて、祭は例年以上、賑わっているらしい。清洲の城から万燈まんどうの灯の海を眺めても分るのであつた。

「勝三郎、勝三郎」

広庭の暗がりに佇たたずんでいた信長が、後ろへ呼ぶと、池田勝三郎信輝が、

「はッ。——何ぞ？」

と、側へ寄つた。

信長は、笑えみを含んで、

「忍ぼうか」

と、囁ささやいた。

「お供いたしましょう」

「小姓ども」

信長は、太刀を取つて、腰に佩はきながら、

「知れるまでは、老臣どもへも、黙つておれよ」

勝三郎ひとり連れて、庭の木立から中門のほうへ立ち去つた。

すると、木蔭から、

「殿。抜け駆けはなりません。手前もお供を仕りましょう」

と、いう者があつた。

「誰だ？」

「藤吉郎です」

「お、猿か。来い」

三名して、中門を走り出してから——信長はまた足をとめた。

「勝三郎。奥へ戻って、能衣裳のういしやうと仮面めんとをそつと盗んで来い」

「は」

「三名分ぞ」

「心得ました」

佇たたずんでいると、勝三郎は、間もなく一抱え抱えて来た。

城外へ出てから、濠端ほりばたで扮装にかかった。信長は天人仮面てんにんめんをかぶって、被衣かすきをかぶつ

た。

「猿。そちは素面すめんでよい。それをかぶれ」

「これは何です」

「法師烏帽子ほうしえぼし」

「法衣ころもも着ますかな」

「似合うた。——これは叡えいざん山の山法師にて候、というて歩け」

「畏まって候」

「出来た出来た。勝三郎は太郎冠者たろうかじやよな」

「さん候」

「では、参ろうか」

「清洲祭きよすまつりへ」——と歩み出しながら、主従、手拍子を交わしつつ低唱に、

「踊らばや……」

「謡うたわばや」

「月も出しお……」

「傾くまでは」

「束つかの間まながら……」

「武夫もののぶの、つゆの命も」

「つゆの命を、千々年ちちとせと……」

「名を惜しみ、世を惜しみ」

「戦わば……」

「おくれはせじ」

「守りなば……」

「ゆずりはせじ」

「三年、十年……」

「おろか、百年も」

「戦は常世、常世は戦……」

「たゆみはあらじ」

「さらば、一夜は……」

「踊らばや」

「国守の地鎮めに……」

「足踏みならし」

「国軍、弥征く禱に……」

「諸声諸声、弥挙げて」

「鎧う籠手ども……」

「草刈る手ども」

「ひとつ環なりに……」

「月と共に」

「天地の幸、唱えや」

「花とちる身も」

信長がそこで、調子高く、

「死のうは——定……」

と、つけると、勝三郎も藤吉郎も、笑い出して、

「いけません。殿のお口癖が出ました」

と、止めてしまった。そしていつか三名は、祭の巷に立ち交じっていた。

城下の市坊は、碁盤目になっていた。須賀口から五条川の通りはわけて賑わって、幾組

も踊りの輪が踊りながら歩いていった。

花笠をかぶった娘も、尖り笠の若者も、夜露頭巾の武家も、素のままな老人も、童も、

百姓町人も、僧侶も、ひとつ輪になり、ひとつ手振りを揃えて、唄っていた。

思い出すとは

忘るるか

思い出さずよ

忘れねば

藻町もまちの辻の空地の向うから、大きな月がさしのぼっていた。そこには一番多くの人が群れていた。誰が音頭を取るのか、音頭取りの声も自慢そうであった。

思えど

思わぬ振りをして

しやつとして

おりやるこそ

底は深けれ

踊り唄う人々は、すべてを措おいて踊っていた。不平もなかった。生活苦もなかった。血なまぐさい乱世も忘れ、重税や困苦のつかれも忘れ、精いっぱい、愉樂の声をはり上げた。日頃は拘束されている手を脚を、思うさま伸ばして踊った。

かつらぎ山に

咲く花の候よ

あれをよと

よそこに思うた

旅駒たびこまの背に

大きな月は、真上になつた。踊りの輪は、影法師と二重ふたえになつた。そこへまた、須賀口すがぐちの踊手たちが来て一緒になつた。両方の音頭取りが、美音を競つてもごもに澄んだ声を
はりあげた。

えくぼの中へ

身を投げばやと

思えども

せんなや喃のう

鎧よろいの捨てどころなき

「——あつ、この山伏め」

突然、誰かどなつた。

「間まわしもの 諜だつ」

「敵国のやつツ」

「逃のががすな」

踊りは崩れた。

群集の輪の一角で、不意に刃の光を見たからだつた。

だが、その山伏は、群集が発見するよりも早く、何者かに、後ろからその刃の手をつかまえて、大地へ投げつけられていた。

勢いよく叩きつけられた山伏の手から、物騒な直刃の戒刀が、群集の足下へ斜いに飛んだ。

「隠密ッ」

「捕えろ」

常に、敵国のさぐりに対して、領民はよく訓練されていたので、驚きはしなかったが、逃げまわる山伏を追い争つたために、一時は旋風のようにになった。

「——鎮まれ、鎮まれ。曲者はこれへ捕えた。立ち騒ぐでない」

踊りの中へ交じつて、庶民と一緒に踊っていた信長と池田勝三郎と藤吉郎と、三名の姿がそこにあつた。

騒ぎを制しながら、あたりの人影を遠ざけていたのは、藤吉郎であり、組み敷いた山伏の体へ、馬のりに跨がって、締めつけているのは、勝三郎信輝であつた。

「おのれ、誰に頼まれて、われわれの御主人を暗討ちしようとした。申せ。実を吐かさねば縊め殺すぞ」

勝三郎信輝は、後の池田勝入である。強力者だし、戦場往来の若者なので、もとより仮借がない。組み敷かれた山伏は、彼の拳を一つ喰らうと、

「ゆるせ。ゆるしてくれ」

と、忽ち悲鳴を揚げた。

「人違いじゃ。人違いして斬りつけたのでござる。——まったく、夜目の眼違い。手前の意趣ある者と、余りようお姿が似て在すので」

「嘘を申せ。踊りの輪へ紛れ入って、一太刀にと斬りつけたからには、われわれの御主人を、確かに、なにがし様と知って致したことに相違ない」

「いや、まったく。生来が眇目の質。御無礼の罪は、どのようにもお詫びいたしますゆえ、一命だけは」

「ぬけぬけと、やかましい。こう圧え付けるこの方に対しても、そちの手脚のものがきには、どこか侍の手心がある。——こやつ！ この面構えを見てもそうじゃ。敵国の諜者にちがいない。何処から来た」

「め、滅相もない」

「いわぬかッ」

「くッ……か……」

「いえッ」

「く、くるしい」

「——美濃か。甲府か。三河か。伊勢か。いずれの隠密だ。口を割らねば、割るようにして訊くぞ」

信長は、踊りの仮装のまま、そこから少し離れて佇たたずんでいた。藤吉郎に制されて遠く退いた領民たちは、まさかその人が信長とは思わなかったが、よしあるお方の微しのび行とは察している様子だった。

「猿……」

小声で、信長は、磨さしまねいていた。はつと、寄って行くと、着ている被衣かすきを彼の顔へよせて、何やら囁ささやいていた。

藤吉郎は、黙礼して、

「では」

と、直ぐ、勝三郎の側へ足を移して来た。

勝三郎は、太刀の緒おを解いて、山伏を後ろ手に縛くし上げようとしていたが、そこへ藤吉郎が来て、

「待て、於勝殿おかつ。殿のおことばじや」

と、いうことには。——折角、こよいは年に一度の祭、和楽わがを謳歌おうかしているところ。微罪しがは咎めるな、罪人は作るな、祭中は無礼講という高札もある。

恐らく、人違いと、その者のいうのは、ほんとであろう。放ゆるしてやれ——というお慈悲である。放しておやりなされ。

と、藤吉郎も云い添えた。

「アア。ありがとう存じまする」

生命いのちびろいした山伏は、勝三郎の手から解かれると、雀躍こおどりしないばかりだった。

彼方つむにいる信長の影へ向つて、大地から辞儀一つすると、真っ青になった顔を、月に俯う向けたまま、直ぐ駈け去ろうとしかけた。

——と、信長は、

「待て。優婆塞うばそくどの」

軽く呼びとめた。

そしていうには、

「一命を助けてとらせた礼を残して行きやれ。儂たちも、節に合わせて踊ろう程に、そちの故郷の鄙ぶり一節唄うておみせやれ。盆唄でも、麦搗唄でも」

聞くと山伏は、ほつとした顔いろで、おやすいことと、手拍子打って、月を仰ぎながら鄙唄一つ謡った。

——それをきつかけに、踊りの輪はまた、旋りだした。だが信長主従は、もう輪の中心にいなかった。

「猿」

と微行の帰り途、信長は訊いた。

「そちは、諸国を流浪したことがあるそうじゃが、山伏の謡うた盆唄は、何処の唄と、聞いたか」

「駿河と聞きました」

藤吉郎が、言下にいうと、信長はにことうなずいた。

わか
いえやす
若き家康

駿河衆は、この地を駿府すんぶとは称よばない。府中ふちゅうと称よんでいる。

海道一の府をもつて任じているからであつた。上は義元から今川の一族門葉をはじめ、町人に至るまでが、

(ここは大国の都府)

という自尊を持つていた。

お城もお城といわず、お館やかた或いはただ館たちという。すべてが公卿風くげふうであり、下しもは京好みだつた。

尾州きよすの清洲なごや、那古屋あたりとは、街の色や往来の風俗からしてまるで違つていた。道行く者の足の早さ、眼のつかいよう、言語の調子からして違うのである。府中は、おつとりしていた、衣服の華美の程度で階級が知れた、扇で唇くちをかくして気取つて歩いた。音おんぎよ曲くが旺さかんだつた。連歌師れんがしがたくさんいた。——どの顔もどの顔も、わが世の春を謳歌おうかした藤原氏ひとこらの一頃ひところのように、長閑のどけく見えた。

晴れば、富士山が見え、霞かすめば、清見寺の松原越しに、波静かな海が見えた。

自然に恵まれていた。

兵馬は強大だった。

三河の松平氏も、ここの属国ぞつこくに等しかった。

「松平家の血をうけ継いだわしの身はここに。——亡びかけた城をどうにか支えてくれて
いる臣下は岡崎に。……国はあれど主従は別に」

元康もとやすは、心のうちで、じつと、自分でつぶやきを噛みしめていた。

この気持——口に出さないこの思いは——明けても暮れても胸を往来していた。

「不愜ふびんな家臣ども……」と。

時にはまた、身を顧みて、

「よく生きて在あった」

と、思う。

徳川蔵人元康——いうまでもなく後の徳川家康——は今年十八歳だった。

もう子どもがある。

義元よしのぶの一族、関口親永ちかながの娘を、義元の計らいで娶めとったのである。それが十五歳であつた。元服も同時にした。

子は、この春生れたので、まだ半年ほどにしかならない。

彼が机をおいている居室にまで、時折、泣く児の声が聞えて来た。産後の肥立ちひだの悪い妻はまだ産室にいた。妻は児を産室から離さなかった。嬰兒あかごの声は耳につきやすい、まして十八歳で父となった彼には、初めて聞く骨肉の声でもあった。

けれど元康もとやすは、めつたに奥へは立たなかった。よく人のいう子の可愛さというような気持は、分らなかつた。自分の心のうちを探してみても、どうもそういう愛情は、今のところ、乏しいというよりも見当らなかつた。こうした自分が父であることは、子や妻へすまない気がした。

「……不愍ふびんな者ども」

と、思うたびに、惻々そくそくと胸のつまる心地がするのは、むしろ骨肉でなくて、岡崎の城に、年来、貧窮と屈辱に耐えている家臣たちの身であつた。

強しいて、子を思えば、

「あれも今に、わしのような困苦と、辛い人の世の旅をしだすのか」

と、傷いたましい考えの方が先立ってしまうのであつた。

竹千代たけちよとよばれた幼少に父とわかれ、六歳で敵国の質子ちしとなつてから、今日までの流転

の艱難を振り返ると——生れ出たわが子へも、人生の悲雨^{さんぷう}惨風を、思い遣らずにいられなかつた。

——だが今は。

表面、人目には、彼の家庭も、府中に榮える今川衆の一家として、同様な身分と幸福らしい館^{たちづく}作りには囲まれていた。

「はて。何の物音？」

元康は、ふと、室を出て、縁に立った。

誰か、築土^{ついで}に絡^{から}んでいる昼顔の蔓^{つる}を、外から曳いたものであろう。

薦^{つた}、昼顔の蔓は、築土から庭木へまで伸びている。切れた蔓の反動で、梢が微かにゆれていた。

「誰だ？」

元康は、縁に立ったまま、もいちど云つてみた。

悪戯^{わるさ}なら、逃げもするだろう。だが、跣音もしなかつた。

草履^{ぞうり}をはいて、彼は築土の裏口をあけて出た。——と、そこに、待ち設けていたように、笈^{おい}と杖を置いて、一人の男が手をつかえていた。

「甚七か」

「お久しゅうござります」

四年前。元康が、義元のゆるしをようやく得て、先祖の墓参にと、岡崎へ帰った時、その途中から姿を見せなくなつたきりの家来——鶺鴒殿甚七なのだ。

笈や杖や、変りはてた甚七の姿を見て、

「山伏となつてか」

と、元康の眼は、宥いたわるようであつた。

「はい、諸国を歩くには、かような身なりが、至極便宜でござりますゆえ」

「いつ戻つたか。——府中へは」

「たつた今でござります。御門からと存じましたが、また直ぐ、他国へ立つ体、お身内たりとも、知れぬに越したことはないと存じまして」

「……はや、四年になるのう」

「はい」

「諸国から、その都度、細こま々とそちの見聞は書面で受け取っておるが、美濃路みのじへはいつてからは便りがないので——実は案じていた折じや」

「美濃の内乱に出会いましたので、関所固めや、駄伝の調べがひところ頃やかましくて」

「あの折、美濃に居合わせておったか。よい時に美濃にいたの」

「そのまま、一年の余、稲葉山の城下にひそ潜んで、成行きを見ておりましたが、御承知のように、道三山城は相果て、義龍が美濃一円を治めて、一先ひとまず落着いた様子に、京へ上り、

越前へ出、北国路を一巡して、先頃、尾州まで立ち戻って参りました」

「清洲へ足を入れたか」

「審つぶさに……」

「聞きたい。さし当って、美濃の将来は、府中におつても、見とおしがつく。——が、容易に推測おしはかれぬのが、織田の現状じゃ」

「書面にも致して、夜中にもそツと、お届けいたしましょうか」

「いや、書中では」

元康もとやすは、築土ついでの裏口を振り向いたが、また何か、思い直しているふうであつた。

甚七は、彼の眼であり、また、天下を知る耳であつた。

六歳の頃から、織田家へ、また今川家へと、彼の少年時代は、流浪と、敵国の中に送り、その体は、人質ひとじちとして、自由を許されずに過ぎて来た。今日もまだ、その束縛は解かれ

ていない。

眼も、耳も、知性も、人質はふさがれていた。彼自身が努めなければ、誰も、叱りも励ましもしなかった。

——が、結果は反対に、彼が人いちばい旺さかんな志慾の持主となったのは、幼少時から、余りにもその育ち盛りの眼や耳や行動や知性を、他から抑制され過ぎたためでもあった。

四年も前に、家人の鵜殿けじん甚七うどのじんしちを、追放のていにして、諸国へ放ち、居ながら諸州の動静を知ろうとしたなど——その大きな他日の慾望の芽を、もうそろそろ現わしていた一例ともいえよう。

「さての。……ここでは人眼につくし、邸では家人どもが不審いぶかろうし……。そうだ、甚七、あれへ参ろう」

元康は、指さして、先へ大股に歩きだした。

彼の今住んでいる質子邸ちしやしきは、府中のお館やかたを繞めぐる大路小路のうちでも、最も静かな少将しょう之宮町のみやまちの一角にあつた。

そのの築土裏つじから少し行くと、安倍河原あべがわらへ出る。

元康がまだ家来の背に負われて歩いた竹千代の幼少から、外へ遊びにといえば、この河

原へ来たものであった。悠久と流れている水のすがたにも変りはないし、眺めもいつも同じ河原だったが、元康には、何かと思ひ出が深かった。

「甚七。その小舟を解け」

元康は、指さして、汀なぎさからすぐそれへ乗った。

釣舟か、築舟やなぶねであろう。甚七が棹さおで突くと、笹の葉のように、小舟は瀬から流れへ出た。

「この辺でよい」

主従は、小舟の中で、初めて人眼から解かれたこちで、語らい合つた。

元康は、甚七が多年、諸国を經巡へめぐつて得た知識を、わずか一舟いっしゅうの席で半刻の間に得てしまった。

そして甚七が習得して来たものよりは、遙か、大きなものを、胸きょう奥おうへ収蔵した。

「そうか。……ここ数年、織田家が信秀の代とちごうて、余り他国へ侵攻して出ぬのは、専ら、内治を整えておつたためだの」

「二心ある者は、系類であると、譜代ふだいの臣であるとを問わず、思いきつて、討つ者は討ち、追う者は追ひ、ほとんど清洲から清掃されたようであります」

「その信長を、一頃ひところは、稀なわがままものよ、阿呆あほうの殿よと、今川家などにおいても、よう笑いばなしに取沙汰があつたが」

「もつてのほかです。阿呆どころではありませぬ」

「ふむ。——わしも油断のならぬ噂とは思うていたが、いまなお、それが先に頭にあるので、お館やかたなどでも、織田といえ、おかしそうに、敵ではないときめておいでになる」

「数年前とは、尾張衆の士気がまるで違つております」

「よい家来には」

「平手ひらてなかつかさ中務ちゆうむは相果てましたが、柴田修理権六、林佐渡通勝はやしざとみちかつ、池田勝三郎信輝、佐久間大学、森可成よしなりなど、なお人物は尠なしとしません。わけて近頃しんきん、出色しよくの男に、木下藤吉郎ともうす者……至つて小身者の由ですが、何かにつけ、城下の領民たちの口端くちばによう名の出る男などおりまする」

「領民は。——信長への、領民の気もちは」

「恐いのはそれです。何国いすこの大將でも、治民には心を傾けておりますゆえ、領民が国主に服従し、国主あがを崇めておることは一様でありますなれど……尾張ではそこがちと違つよう
に感じられました」

「どう違う」

鵜殿甚七は、ちよつと、考えていたが、端的にそれを、云い現わせないように、

「かくべつ、どうと申して、変つた治策も見えませんが、とにかく領民が、信長を中心に、明日を憂いておりません。あの君在ればと安心して居る様が見えます。尾張の弱小ことも、国主の貧乏な点も、よく弁えていながらです。他の大国の領民のように、戦乱や明日の生活に脅えておらぬのが、不思議に見えるくらいです」

「……ム、ム。なぜかな」

「信長自身が、そうした気性だからでしょう。曇らば曇れ、照る日もある。今はこうだが、未来はこうぞと、指さす的へ、人心を集めております。というて、陰気にいじけている領民ではありません。例えば、祭の行事などにいたしても……」

と、云いかけて、何思い出したか、甚七は語らぬうちに、苦笑しだした。

「その祭については、実は、失敗ばかりがありますので——」

と、甚七は、清洲城下の祭の夜、巷の中にゆくりなく信長主従の微行を見かけ、むらむらと奇功に駆られたまま、信長を刺そうとして、かえって捕えられて、憂き目に会つたことを、

「……どうもこれは、余り自慢にもならぬことですが」

と、話し終つて、頭を搔いた。

元康は、笑いもせず、

「そちらしくもないことをする」

と、軽率けいそつを誠まじめた。

「以後は」

と、甚七は、頭を下げながら、余事までしゃべりすぎたことを後悔した。

そして、ひそかに胸のうちで、ことし二十六歳の信長と、十八歳になる元康とを、較くらべる気もなく思い較べていた。

はるかに、元康のほうが、信長よりは大人おとなの感じだった。稚気ちぎというようなのは、元康には少しも見えなかった。

信長も幼少から、荊棘けいしの中に育つて来た。元康も苦勞の中に人となった。けれど、六歳から他人手ひとでに渡されて——それも敵国へ質子ちしとして——人の世の冷たさ、酷むじさを、骨の中まで味わつて来た元康の苦勞と信長のそれとは、到底、較くらべものにはならなかった。

六歳で、国を離れ、織田家の擒人とりことなつて、八歳再び駿河の質子となり、ようやく十五

歳になつて、今川義元からも人あつかいをうけ、彼が、

(祖先の墳墓をも払い、亡父の法事もしたければ——)

という願いが許されて、何年ぶりかで岡崎へ帰国した時に、こういう語り草さえ残つて
いる。

彼が、祖先の地、岡崎へ歸つてみると、自分の城の本丸には、今川家の山田新右衛門やまだしんえもんな
どという被官ひかんが、城代として居すわつて居るのだつた。

ほとんど、今川家の隸属れいぞくとして、辛くも息をつないでいる三河譜代の家臣たちも、何
年ぶりかで帰国する若殿を迎え、うれしさやら口惜しさやらで、

(いかにとはいえ、本丸に今川家の家臣を置いて)

と、何とか退のいてもらう交渉をしようとしたところ、それを聞いた竹千代は、

(いや、わしは年若じやが、城代は御老人。諸事古老のおさしずもうけねばならぬ。本丸

はそのままにおくように——)

といつて、滞留中、二の丸にいて、父の法事などもいとな営いとなんですましたという。

このことは、義元も後で聞いて、

(年に似げなく、分別の篤あついことである)

と、すこし不愍ふびんそうにつぶやいたそうである。

だが、やはりその時のことで、も一つ、これは義元も知らないことがあった。

竹千代の父広忠ひろただの代から仕えている者で、鳥居伊賀守忠吉とりいがかみただよしという老人がいた。年ももう八十を越えた三河武士であったが、竹千代が岡崎逗留とうりゆう留中の一夜あるよ、そつと、梓あずさの腰を運んで目通りを乞い、そして幼君へ向つて沁々しみじみというには。

(爺じいの身も、ここ十年の余、今川家の一役人に異ならず、賦税ふせいの取り立てを役目として、牛馬のような勤めをいたしておりますが、年来、忍び忍び心がけて、お庫くらの内には、爺ごひかんが御被官ごひかんの眼をぬすんで蓄えておいた粮ろうまい米や金銭がござりますぞ。いつこのお城に孤立してお籠こもりなされようとも、弾たまぐすり薬やじりや鏖あも戦うほどは匿かくしてもありませんぞ……ゆめ、お心こころぼそく思おぼし召めされな。大志をお失いなされますなよ)

竹千代は、それを聞いて、爺じいよ、とばかり忠吉の手を取つて泣き、忠吉もしばし泣き暮れたということであつた。

我慢。

三河武士の背ぼねは、我慢の鍛錬たんれんで組み上がっていた。君臣ともに、生涯を辛抱から出発していた。

三河武士の辛抱強い実証は、元康の初陣の折にもあらわれていた。去年。

元康は十七歳で、初めて陣頭に立った。

毎々、三河を脅やかしている鈴木日向守ひゅうがのかみの寺部てらべの城を攻めた時である。

勿論、今川義元のゆるしを得た上のことであるが、その時は、義元から暇をもらって、彼が三州へ帰国していた折なので、全軍の組織も、将兵の質も、すべて純粋な三河勢をもって戦つたのであった。

元康は、譜代の古老や家の子郎党をひきいて、初めて敵地へ進撃したのであるが、敵の寺部の城下まで攻め入ると、

(この度は、城下を焼き払って、ひとまず退軍し、また機おりをみて、軍いくさをすすめるであろう)と、所々へ放火したのみで、にわか三河へ退いてしまった。

初陣とあれば、誰しも、華々しい功名を心がけて、世上の聞えにも銜気げんきを抱くのが青年の常なのに——何となされたことかと、後に訊ねる者があつた。すると元康は、

(寺部は敵の幹である。多くの枝葉を持つておる。その本城まで難なく攻め入れられたのは、敵に思慮があつたからである。よい気になつて長陣していたら、敵は、退口のきぐちを断つて、

所々の味方とつなぎを取り、われらを重圍に墮してから、本相をあらわして戦い出したにちがいない。武器も兵糧も人数も微弱な三河勢では、長陣しては利なしと考えたので、今度は、城下へ放火して引き揚げたまでのことである)

と、説明した。

さかいうたのすけ 酒井雅樂助、いしかわあき 石川安芸などの三河の古老どもも、それを聞いて、

(たのもしき おんかた 御方よ。行く末いかなる大将におなり遊ばすやらん)

と、いつて、先々の奉公をたのしみに思うと共に、各、老いの身をも養い、留守居の岡崎も大事に守つて、ひたすら時節の来るのを、待ちぬいているのであった。

——だが、時節といつても、そうした譜代衆の多くは老年なので、元康ほどな辛抱はしきれなくなつたか、元康が寺部攻めの初陣後、今川家へ向つて、改めて、

(主人元康儀も、はや御一人前とお成り遊ばしましたからには、何とぞ旧約の如く、岡崎の御被官方ごひかんを引き揚げられて、城及び旧領など、元康君へお返し給わりますよう。然る上に、われわれ三河武士どもも、永く今川家を盟主と仰ぎ、一層の御加勢を励みたいと存じますれば——)

という意味の、嘆願書をさし出した。

もつとも、嘆願は、今までにも、何度となく、機会を窺^{うかが}っては、三河から今川家へ迫っていたことであるが、今度も、今川義元は、

(まず、もう一兩年は)

と、外^そらして、肯^きいてくれるふうもなかった。

元康が成人したら、必ず城地を返すと、元康を質^ち子として今川家へよこした時の固い条約だったのである。

義元はもとより、返還する気はなかったろう。十数年の間に、何か三河側に落度があったら取り上げて、完全に収めてしまう肚^{はら}だったかと思われる。けれど長い年月、とうとうその口実となるような落度は、三河の臣にも、元康にもなかった。三河の隠忍、自重、我慢の強さには、義元もほとほと感じ入るばかりだった。

で、義元としても、当初の条約のてまえ、そうそう無法はいえなくなっていたので、今年、嘆願に出向いて来た三河の古老たちへは、こういつて、安心させて帰した。

(明年はいよいよ義元も、年来の宿志を展^のべて、中^{ちゅうげん}原へ旗をすすめ、海道の軍勢をあげて上洛いたすつもりである。その節にはいずれ、尾張をも踏みつぶして押し通ることとなろうゆえ、三河の国境、地域など、義元が親しく正して縄取りして進ぜる。せめて明年

の義元が上洛の折まで待つがよい)

三河の古老たちは、義元のこのことばを手形として、帰国したのであった。

これは、嘘ではあるまい。

義元上洛の計画は、今ではかくれもないことで、ただ時期の問題であった。

強大な国富と軍備をもつて、それを秘密裡に目標としていた期間はすぎて、

(大挙はいつだ?)

だけが残っている。

今川家でそれを余りに堂々と広言しているの、かえって今川家が、は覇を誇示する表情ではないかとみ観ている向きもあるくらいである。

ただここで、新たに知れた一事は、三河の古老どもへ対して、義元が、

(明年には)

と、時期を確言したことだった。義元の胸にはすでに、決行の時期が熟して来たものとみ視られ、三河衆にとっては国への一つの土産になった。

——さて。

前にもどって。

安倍川の中ほどに、鵜殿甚七と元康とを乗せて、密談に時を移していた小舟は、やがて話もすんだとみえ、棹さおさして岸へ帰つて来た。

「では、ここで」

と甚七はすぐに、笈おいを負い、杖を持ち直して、別れを述べた上、

「おことばの由、逐ちくいち一、鳥居様、酒井様などへ、お伝えいたしておきます。——その他の儀はべつに？」

と、元康の顔を仰いだ。

元康は、岸へ立つと、すぐ人眼を惧おそれるもののように、

「舟のうちで、申した以外に、言ことづて伝はない。はよう行け」
顎あごで促うながしてから、ふと、

「国もとの年よりもへは、元康は丈夫でおる、風邪かぜひとつひかぬと、伝えてくれよ」
と、いつて、ひとり邸のほうへ、帰つて行つた。

さつきから築土ついでの外たはずに佇たたずんで、遠方おちこち近方を見ていた侍女こしもとは、河原から帰つて来た元康のすがたを見ると、

「奥方様が、何やらお待ちかねでございます。お探し申して来やいと、幾度も、きつう

お焦れ遊ばして」

と、元康へは、云い難にくそうな顔をしながらも、当惑たごそうに告げた。

「あ。そうか」

元康はうなずいて、

「今すぐ参ると、そち達で、宥なだめておいておくりやれ」

と、自分の部屋へはいった。

座につくと、そこには家臣の榊原平七忠正さかきばらへいしちただまさが来て、待っていた。

「河原へでも、お散歩ひろいでございましたか」

「ム。徒然つれづれにな。——なんじや、何か用か」

「お使いでございました」

「誰方どなたから」

平七は、答えずに、黙って書面をそれへさし出した。雪斎和尚せつさいおしょうからである。

元康は、封を切る前に、押しいただいた。太原雪斎和尚たいげんは、今川家にすれば、黒衣の

軍師であり、元康にとつては、幼少から薰陶くんとうをうけた学問兵法の師であった。

簡略な文面であった。

こよい、お館やかたをかこみ、例のごとく談議つかまつ仕れば、乾門いぬいもんよりおいでを待つ——というのであった。

文面はそれだけだが、「例のごとく」とあるのは、容易でない隠し語であった。義元上洛の首脳部会議を意味するのである。

「使いは」

「立ち帰りました」

「そうか」

「また、夜陰の御伺候でござりますか」

「ムム。夕刻から」

と、元康は何か案じ込む。

榊原さかきばら平七は、それが数度にわたる重大な軍議ということ、かねて洩れ聞いているので、

「お館様やかた、御上洛の大布令おおぶれが発せられますのも、はや間近のよう存ぜられますが」と、元康の顔を窺うかがった。

「む、む……」

と、それにも元康は、余り気乗りのない返辞だった。

従来、今川家が認識するところの尾張の国力や、また、信長の評価と、きよううどのじんし鵜殿甚七が報じて来たところのそれとは、非常な相違がある。

駿遠すんえんさん三の大軍を動員して、義元が大挙、西上するに当って、当然、捨身の抵抗を予想されるのは、尾張であった。

軍議の席でも、中には、

「何の、海道四万の大軍と、お館やかたの武威をもつて進めば、旗鼓きこの前に血ぬらずして、信長は降くだつて参りましょう」

などと皮相な見解をのべる者もあつたが、義元も雪斎和尚以下の主将も、それ程には見くびつていないまでも、元康が考えているほどには、決して、尾張というものを重大視していなかつた。

前にも、それについては、元康も意見を吐いたことはあるが、一笑に附されてしまった。何かにつけ、質子ちしの身であり、若年だし、帷幕いぼくの錚々そうそうたる武将たちの間では、元康の存在など、余りに小さかつた。

(——でも、押しても、いうたものか、いわぬものか)

元康は、雪斎の書状を前に、考えていた。——すると、北きたの方かたに側近く仕えている老女がまた見えて、奥方が何か最前からひどく御機嫌がわるいので、ちよつとお顔を見せて上げて下さるように——と、当惑顔にいつて元康の訪れを促うながすのであった。

彼の夫人は、自分だけのことしか常に考えていない女性らしかった。

国事とか、良人おっとの立場とかには、まったく無関心であった。ただ自分の起居している奥と、良人の愛情の注意にしか、頭のつかえない人であった。

老女も、それをよく酌くんでいるので、元康が、

「今参る」

と、答えたまま、なお、家臣と話し込んでいるのを見ると、重ねてはいえぬように、ただもじもじしていた。

するとまた、追いかけて、奥の侍女こしもとが、老女へ囁ささやきに來た。老女は仕方なげに、

「あの……恐れいりますが、奥方さまが、頻りと、おむずかりなされていらっしやるそうでございますから」

おそれおそれ、元康のうしろから、二度までも急を告げた。

元康は、奥の召使たちが、こんな場合には、誰よりも困ることを知っていたし、彼自身、

至つて気の練れている性たちなので、

「ほ。……そうか」

と、平七の顔を見て、

「では、支度を整えて、時刻が来たら、奥へ告げてくれるように」

と、座を起つた。

奥仕えの女たちは、救われたように、先へ小走りに去つた。奥と表との住居すまいは、夫人が彼の顔をしばしば見たがるのも無理でない程、遠く隔離されていた。

幾曲りもある中廊下や橋廊下を越えて、ようやく奥の錠じょうぐち口へはいるのだった。そこは円い築山に北を囲まれて、秋草のゆたかな平庭を広々と南に抱いているので、表の者や、外部の人々は、夫人をさして、築山つきやま様とよんでいた。

築山様は、元康が十五歳の時、今川一族の関口家から嫁いだのであるが、輿入こしいれの折は、義元の養女という資格であつたから、貧しい三河者の質子ちしである聶殿むこどのとは、その支度の善美や、盛装の眩まばゆさは較くらべものにならなかつた。

三河者。

といえ、今川家では、侮蔑がべつの的まとであつたから、彼女の氣位きぐわいは、築山の一廓かくに住んで

からも、三河者の家来をいやしみ、良人にはわがままと盲愛でのみ接していた。

それに年も、元康よりは上であつた。狭い夫婦生活の範囲だけで見る時、年上の築山様には、元康がただ柔順で、今川家に寄つてのみ生存していられる男としか見えなかつた。殊に、この三月の産後から、彼女のわがままや良人への無理は、前よりも募つていた。

——元康は彼女によつても、毎日、忍耐を教えられた。

「おう……。きようは、起きておられたな。すこしは気分も快うおなりか」

元康は、夫人の姿を見ると、そういつて、南の障子を手ずから開きかけた。坪の秋草の美しさと、秋の空でも覗かせたら、病妻の心も晴れるであろうと思つたのである。

築山様は病室を出て、寒々しい広間の中程にきちんと冷たい顔して坐つていたが、眉を聳めて、

「開けないでおいて下さい」

といつた。

彼女は決して美人ではないが、さすがに深窓で愛しまれた肌目ではあつた。それに初産の後のせいかわ透き徹るような白い顔と指の先をしている。その手をひどく几帳面に膝へかさねて、

「殿。お坐りなさいませ。……すこしお訊きしたいことがあるのでございますから」
心には濃厚なる愛情を湛えながら、面には灰のような冷たい眼と唇をもつていった。

若い良人の通有性といったようなものは、元康には微塵も見られなかった。夫人に対して気の練れている扱いは、老成人のようだった。或いは、彼には彼の女性観があつて、最も心の裡に置かるべき者を、心の外に置いて視ているのかも知れなかった。

「なんじやの」

夫人にいわれた通り、彼は夫人の前に坐つた。

築山様は、良人が素直であればある程、何か、理由なく焦々として、

「すこし、伺いたいことがあります。あなた様は今し方、どこへお出ましになりましたか。家臣も召されずただお一人で……」

眼に涙をためていう言葉であつた。産後の痩せのまだ回復していない容顔に、危険な感情の血がまざまざ逆上つているのである。

元康は、その容態も性質も知っているので、子をあやすように微笑んでいった。

「おう、今し方のことか。……書見していたが疲れたので、河原までぶらりと独り出てみたのじや。お許も、稀れに侍女どもを連れて、ちとそこらを徒歩うてみたがよい。……秋

草のさかり、昼の月にすだく虫の音、安倍川は今がよい季節」

築山様は皆まで聞いていないのである。白々しいと、良人を責めるように凝視して、いよいよ常のわがままぶりもなく冷然と畏まって、

「おかしゆうございますこと。虫の音を聞いたり、秋草を見たりして、そぞろ歩きをなされに出たあなた様が、どうして河中へ、小舟など出して、永いこと人眼を避けてお在で遊ばしたのでしよう」

「ほほ。知つていやつたか」

「わたくしは、こうして奥に籠つておりましても、あなた様のしていらつしやるくらいなことは、何でも存じ上げております」

「そうか」

元康は、苦笑したが、鵜殿甚七と会つていたことは、夫人にも明らさまにいえなかつた。なぜならば、この夫人は松平元康という者に嫁いで来ても、決して元康の妻となり切つているとは、彼に信じられなかつたからである。

里親の家来筋や親戚が訪れてくれば、何でもそれに話してしまうし、義元の奥向きの誰彼へも、始終、文使いなど遣り取り取りしているのである。

元康にとつては、質子目付の眼よりも、この夫人の悪気のない無分別のほうが、遙かに、警戒を要したのである。

「いや、何気なにげのう河原の小舟に乗りとうなつて、独りで水馴みなれぎ棹おを持ってみたが、舟と水とは相性のものと思うていたが、さて流れに出てみると、なかなかままに動かぬものじやな。はははは、子どものような、他愛もないこと。……どこでお許もとはそれを見ておられたか」

「嘘ばかり仰つしやいませ。あなた様お一人ではなかつたではございませんか」

「されば、わしの姿を見て、後から表の小者が追うて来たが」

「いえいえ、小者風情と、人目を避けて、舟の中で密談を遊ばすわけはございませぬ」

「誰じやいつたい。左様なつまらぬ告げ口をする者は」

「奥にも、わたくしの身を思うてくれる、忠義者もおります。——あなた様には近頃おなじよそこに女子おなじをかくしてお在いで遊ばすのでございましょう。さもなければ、この身をお厭いといなされて、三河へ逃げてお帰りになろうと企たくんでるのでございましょう。岡崎には、わたくしの他ほかにも、夫人おくとお呼びなされている者があるのだという噂も聞いて知っております。……なぜそれをお隠いなさいますか。今川家へのお氣遣いで、わたくしを厭いや々いやながら妻

としてお在でなさるのでございましょうが」

彼女の病氣と邪推のさせるすすり泣きの声が、ようやく外にまで洩れて来た頃、彼方の錠じょうぐち口の端に、榊原平七さかきばらへいしちの姿が見えて、そこから告げた。

「お馬の御用意ができました。——殿、殿、はやお時刻にござりますが」

「お出ましとな！」

元康の答えぬうちに、築山様はそばから口を容ゆるれて、

「近頃は、夜中によろお留守がかさみますが、今頃からいったい、何処へお出いででござりますか」

「御館へじゃ」

元康は、取り合わずに、すぐ起ちかけたが、築山様は、それだけの説明では気がすまないのである。

お館へ伺候するのに、何で夕刻からでなければならぬのか。また、いつぞやのように夜半よなかまでかかるのか。家臣は誰をつれて行くのか。——際限もなく訊なき話るのであった。

錠じょうぐち口にひかえて、元康の立坐を待っている榊原平七は、家来の身でも、余りなど、焦じりじり々思っていたが、元康は根氣よく、彼女の不審の解けるまで、宥なだめたり説いたりして、

やがてようやく、

「では、行って来るぞ」

と、奥を出た。

築山様は、元康が、またからだか冷えると悪いと、止めるのもきかず、錠口まで送って出て、

「おはやくお戻り遊ばせ」

と、いった。

彼女の愛と貞節の最大な現われ方は、元康が外出する折にいうその言葉だった。

表の大玄関まで通る間、元康は家臣のどの顔を見ても、黙々と口もきかなかつた。——
 が、もう星の白い夕風の中へ、駒の鬣たてがみをそよがせて騎のり出すと、彼の気持は一掃され、彼にも青年らしい澆はつらつ刺とした血液のながれている証拠が、その眉にも、言葉にも見えた。

「平七」

「はッ」

「ちと、遅うなつたな」

「いえ何、はつきりと、時刻のお示しはなかつた御書面、多少は遅刻になりましたとも」

「そうでない。雪齋せつさいぜんじ禪師のような御老体でも、いつもお時刻は誤った例ためがないぞ。われら若年の身が、ましてや質子ちしの分で、重臣方や老師などのお揃いしてある席へ遅参申しては心ぐるしい。急いそごうぞ」と、やや駒を早め出した。

口取の郎党に小者三名。それと榊原平七だけが供だった。

平七は、駒の足と、歩調を合わせて駈けて行くうちに、何とはなく眼がしらに熱いものが滲にじみわいてならなかった。

——可憐いしりしいお心根。

と、そう思うのであった。

築山夫人に対しての堪かん忍にんも、お館（義元をいう）に向つての素直な御忠節も、今の境遇にあるうちは——と、ひそかに、忍耐の歯をかんでおられるのだ。自分ら臣下としては、一日もはやく、この君の枷かせを解き、質子ちしという隷属れいぞく的な存在から、小さくとも、三河一城の独立した主君に御復帰せしめなければならぬ。

それを、一日過しでいることは、一日の不忠である。平七は、そう思って、

（今に。今に！）

と、唇くちをかみつつ、そして自分の誓いに、また、瞼まぶたを熱くしながら駈けていた。

二条の濠ほりが見えた。一ノ橋を越えると、もう町屋も平屋敷も、一軒もなかった。きれいな小松原の間に、折々、白壁や宏壮な門の見えるのは皆、今川一族のなにがしの支度邸したくやしきか役所であつた。

「おお。三河殿ではないか。——元康殿、元康殿」

城地を繞るめぐ広い小松原は、戦時には武者揃いの広場となり、平時は縦横の道筋がそのまま馬場に用いられていた。手をあげて今、小松の陰かげの横道から彼を呼んだのは、臨濟寺りんざいじの雪齋せつさい和尚おしょうであつた。

太原雪齋たいげんせつさいは、

「お出向いせうきか」

云いながら歩み寄つて来た。

元康は、あわてて馬を降り、いんぎんに礼をして、

「禅師にも、こよいは御苦勞ごくろうに存じます」

「会かい状じょう、いつも急いそで、其許そこもとなどこそ、大儀だいぎでおぎる」

「なんの」

雪齋は、供ひとり連れてはいない。巨おおきな体につりあう足を、うす汚わらい藁草履ぞうりにのせ

て歩いているのだった。

元康も、共に歩み出したが、師礼を執とつて、肩は並べないように、また、ここまで騎のつて来た駒も、榊原平七に口輪を取らせて、騎のろうとはしなかった。

「ことしもまた、秋とはなつたなあ」

師の呟きを、耳にしながら、元康はことばに現わせない感謝を、ふとその人へ抱いた。幼少から他国の質子ちしとして在る身を、ひともわれも、不遇とはいうが、深く思えば、この太原雪斎の薫陶くんとうを得られただけでも、不幸はかえって大幸であつたかもしれない。

良師は得難しという。もし三河で無事にいたら、雪斎に師事する機縁には恵まれなかつたであろう。同時に、自分の身に持つた今の学問も軍学もあるまい。

いや智的な修業よりも、雪斎から絶えず与えられた精神的なものこそは尊い。それは禅だ。元康が雪斎から得た何よりも大きなものであつた。

禅家である雪斎が、どうして今川家の館やかたに自由に出入りし、また軍師として帷幕いばくにあるかを、深く知らぬ他国では怪しんで、ために雪斎を軍僧とよんだり、俗禅ぞくぜんといつたりする者もあつたが、血をただすと、雪斎は今川一族の庵原左衛門尉いはらさえものじょうの子で、義元とは血縁のあいだであつた。

しかも義元は、駿遠三だけの義元であつたが、太原雪斎の道風は宇内に振り、天下の太原雪斎であつた。

義元を人としたのも雪斎の訓育であつた。小田原の北条氏康と戦つて、今川方に敗戦の兆が見えるや否、不利とならぬ間に和議の盟約をむすんで、駿府を救つたのもこの僧であつた。

また、北境の強国、武田信玄の女を、北条氏政へ嫁がせて、義元の女を、信玄の子義信に娶わせて——三国盟約を結ばせたなどの政治的手腕にも、巨腕を見せて来た僧である。

だから彼の姿は、決して一杖破笠の孤高を行く清僧ではない。純粹なる禪家ではない。政僧であり、軍僧であり、また怪僧といえはいえる存在だつた。——だが偉きな人物は、どう呼んでも、依然、偉きな存在であることに少しの変わりもなかつた。

（——洞窟にかくれたり、行雲流水に身一つを飄々と送っていたり、そんなのばかりが、高僧ではない。僧もその折々の時勢によつて使命がちがう。今のような世の中に、おのれ独り高く取り澄し、身一つの仏果のみ考えて、世俗を厭うかのように、山野の無事を愉んでおるなどという生き方こそ、憎い野狐禪ではある。俗の中には、俗の眼でもわかる偽者しかおらぬが、君子聖人のうちには、らつきょうのように幾皮もかぶつておるのが

多いでなあ)

滅多にいわないが、そんなことを臨濟寺の縁でもらしたことなども、元康の耳にのこっていた。

「おお、はや参つた」

その雪齋の踏み渡つて行くのは、乾門いぬいもんの唐橋からはしであつた。元康は一足おくれて榊原平七に何か云いおき、また、乗馬も小者の手にあずけて、老師の後から城内へ姿をかくした。

鉄漿將軍おはぐろしやうぐん

ここが城壁の内とは思われなかつた。それほど華麗な館やかたであつた。足利將軍の奢侈しゃしと室町御所の規模をそのまま移したかのようである。

愛宕あたご、清水をすぐ下に望む大廂おおびさしの彼方かなたに、夕富士の暮れる頃になると、百間廊下の龕がんには見わたす限りの燈あかしが連なり、御所の上じやうろう、藤まごかと紛う風俗の美女たちが、琴を抱いて通り、銚子ちやうしをささげて通つてゆく。

「誰じや、庭面にわもで——」

義元は、微醉びすいの面おもてに、銀杏扇いちようおうぎをかぎして云った。

虹のような朱あけの欄らんを架けた中庭の反橋そりばしを越えて来たのである。扈從こじゆうの家臣や小姓たちさえ、眩まぼゆいばかりな衣裳や腰の物を着けていた。

「見て参りましょう」

小姓のひとり、橋廊下をもどつてすぐ庭へ駈け下りた。——誰か、夕闇の広庭で、悲鳴をあげた者があつたのだ。義元の耳には女の声と聞えたので、不審に思つて足を止めたのである。

「どうしたのやら小姓めは……音沙汰もない。伊予いよ、そちも見て来い」

「は」

河合伊予かわいも、庭へ下りて彼方へ見に走った。庭といつても、夕富士の裾野すそのへ続いているかのように広がった。

橋廊下と廻廊の角の柱にもたれかかつて、義元は、扇で手拍子てびようしをとりながら京謡きょううたを低声こゝえに口誦くちずさんでいた。女かと疑われるほど、色白に見えるのは、薄化粧をしているからであろう。脂肪しぼうに富んだ皮膚は生地きじから色白な質だった。ことし四十一の男ざかりでは

あり、世の中のおもしろい、そして得意の絶頂にある義元だった。

髪は公卿風の総髪に結い、齒には鉄漿を黒々と染め、鼻下に髭を蓄えている。二年ほど前から肥り気味になって、胴の長い脚の短い生れつきの体が、よけい畸形に見えて来ているが、黄金の太刀や、高貴な織物の小袖袴は、お館の尊厳をつつんで褻先も余さなかつた。

ばたばたと、誰かやがて駈けて来た。——義元は、口誦みを止めて、

「伊予か」

と、いった。

人影は、立ったまま、

「いえ。氏真です」

「なんじや、和子か」

嫡子の氏真を呼ぶにも、義元は和子とよんだ。この父の子らしい苦労知らずの青年だった。

「はや黄昏れておるのに、庭面へなど出て何をしておった」

「千鶴めを、折檻しておりました。手討にしてくれんものと、刀を抜きましたら、逃げ

まわって」

「千鶴……千鶴とはたれじや」

「氏真うじまねが、愛鳥の世話を申しつけておる、召使の女です」

「侍女こしもとか」

「はい」

「なんの落度で、女子など、手ずから成敗しやる？」

「憎いやつです。都の中納言家から、この氏真へと、遙けく贈り下された名禽めいぎんを、疎漏そろうにも、餌をやるとて、鳥籠から取り逃がしてしまうたものではございませぬか」

氏真は小禽こせりが好きだった。名鳥を求めて彼に贈れば、他愛なく欣よろこぶことを知っているの
で、都の公卿くけからも、贅美ぜいびな鳥籠と名禽は、居ながらに、屋形のうちの彼の住居すまいの坪には
集まった。

一羽の小禽こせりのため、ひとりの人間を手討にするという。むきになって怒っている。まるで
国家の大事のように、氏真はそれを父へも当然にいうのである。

「……何かと思えば」

子にあまい義元も、氏真の愚かな怒りに、暗然とつぶやいた。

臣下の前もある。

いかに自分の嫡男ちやくなんであろうと、こういう暗愚を見せられたら、家臣たちもおのずと氏真を軽んじるであろう。

義元は、そう考えると、大きな愛を示したつもりで、

「たわけ殿よ！」

と、烈しく叱った。

「氏真、そちは幾歳いくつになる。はや元服もとくにすんだ身ぞ。しかもこの今川家を継ぐ嫡男の身にてありながら、小禽ことりばかり飼い遊んでいて何とする！ ちと、禪でもいたすか、軍書でも読め！」

めつたに子を叱らない父からいわれたので、氏真も顔いろを失って沈黙した。けれど、平常その父をさえ甘く見ているし、父の行状にも、もう批判の眼の出来ている年頃の氏真なので、かえって、反抗の唇くちをむすんで、膨ふくれかえっていた。

義元もまた、そこに弱点を感じるのだった。暗愚なほど子は可愛いのである。自身の行状も決して子により教育を示していないことも知っていた。

「もうよい。以後は慎め。……よいか氏真」

「はい」

「何を不満な顔しておる」

「何も不満には存じません」

「然らば、立ち去れ。小禽など飼っている時世ではない」

「……で。では」

「何じやと」

「京の唄姫と酒などのんで、昼から舞うたり鼓を打ったりしておる時世だと、仰つしやいますのか」

「だまれ、小賢しゆう」

「でも、父君には」

「おのれッ」

義元は、持っていた扇子せんすを、氏真の顔へ投げつけて、

「父をあげつらうよりも、そちはそちの分を守れ。兵法軍学ちみんげに心を寄せるでなし、治民ちみんげ経世いせいについて学問をするでなし、左様なことでは、義元の跡はつげぬぞ。父は、若年わかしゅまで、禅寺にはいつて、つぶさに苦行も舐なめ、数度の合戦も践ふみ、たとえ今はかくあろうと

も、なおなお、大志を抱いて中原を望んでおる。そちのような、小胆、小志の者が、どうして義元の子にできたか。義元の今に何の不足もなければ、ただそちにのみは、憂いを覚える……」

いつのまにか義元の扈從たちも皆、大廊下に指をついてうずくまり、義元のことばに胸をうたれて、等しく暗然とさし俯向っていた。

「……………」

さすがの氏真も、頭を垂れて、足下に落ちている父の扇を見つめていた。

そこへ、表の侍が、

「禅師様にも、松平元康どのにも、またその他の方々も、はや橘の坪におそろいで、お館のお出ましをお待ちかねでございますが」

と、告げて来た。

橘の坪というのは、柑橘の樹の多い南勾配にある別殿で、こよい義元はそこに、臨

濟寺の禅師を始め、腹心の者を、表向き夜の茶に招くということで、呼んでいたのである。「お、そうか。……皆そろうてか。儂が主人役、遅れてはなるまい」

父と子との、心を嘯むような沈黙の今を——救われたように、義元は云って大廊下を彼

方へ歩み去つた。

元より茶事ちやじというのは表向きだけに過ぎない。義元の同朋どうぼう、伊丹権阿弥いたみごんあみという者が、中門まで手燈てあかりを持って出迎えに出ている様など、夜の茶会にふさわしく、灯影ほかげのゆらぎ、虫の音など、風流の気につつまれて見えたが、義元が通つて、そこが閉まると、一組七名ずつの素槍すやりを引つさげた兵が、絶え間なく、附近を巡つて、水も洩らさぬ警戒をしていた。

「お館様」

「——お出ましです」

橘の坪の静かな屋の内に、権阿弥ごんあみと他一名の同朋の声が、そう警蹕けいひつするように奥へ伝えた。

床の低い二十畳ほどの寺院風の一室に、仄ほのかな明りがゆらいでいた。

座には——

臨濟寺の雪斎和尚をはじめ、老臣の庵原将監いはらしやうげん、朝比奈主計あさひなかずえなどの顔。

右側には、一族の斎藤掃部助さいとうかもんのすけ、牟礼主水正むれもんのしょうなどの姿の見える端に、松平元康も坐つていた。

「……………」

黙然と、左右の流れは、正座に向つて少し頭を下げていた。衣ずれの音も耳立つその静かなあいだに、義元は着席していた。

小姓も近侍一名も、ここへは従えていない。

同朋衆二名だけが、遠く二間か三間へだてて、控えているきりらしいのである。

「遅参申した」

帷幕の人々の礼に対して、義元のあいさつだった。

そしてまた、雪斎へは、特に、

「長老にも、御老体を枉^まげて」

と、労^{いたわ}つた。

近頃は、師の姿を見るたびに、体のことについて労^{いたわ}つたり訊ねたりするのが、義元の癖になつていた。事実、この五、六年来、雪斎は病みがちで、老いが著^いしく見えていた。

義元は、弱冠の頃から、この人に薫陶^{くんとう}され、この人に鞭打^{べんだ}され、またこの人に護られ、励まされ、すべて雪斎の経世と策謀と雄略によつて、今日の大を築いて来たことを知つていた。

だから雪斎の老いは、自分の老いのように感じられてならなかった。けれどそれも初め

のうちだけで、雪齋に頼らなくても、ここ数年、今川家の勢力はびくともしないばかりか、いよいよ昇天の勢いで隆昌の一方にあることを見ると、いつのまにか、弱冠からの成功もすべて、自分の器量のように思いなされて、

(もはや義元も大人おとなに成り申したれば、治国の政まつりについても、軍議の方策についても、構えてお案じ下さるまい。長老には、余生を充分に楽しまれて、専ら道風の御宣布に心をおそそぎあるがよい)

などと閑話の折など口に洩らして、かえって近頃は、雪齋の介入を、敬遠するような風も見えないではなかった。

しかし、雪齋から見ると、

(困ったもの)

と、幼児を見るような憂いが、今になつても、去らないのであった。

ちようど、義元の眼から子の氏真うじざねを見るように——雪齋から義元をながめると、

(危かなうい哉)

と、思わずにいられないのであつたらしい。義元が、近頃は、自分の多病に事よせて、自分を煙かたく思っていると分つていながら、彼は努めて、政治向きにも軍議にも、老骨を

運んで来た。

わけて、この春頃から、もう十度にもわたる橘たちばなの坪の会議には、病中でも、欠席したことがなかった。

ここの座で、

(やるか？ 未だか？)

の二つに一つが決定されることこそ、今川家の浮沈に関する重大事であるからだった。

虫しぐれにつつまれて、いと密ひそやかな裡うちに、天下一変の大評議は、行われていた。

外の虫の音が、ぱたとやむ時は、警戒の素槍をさげた士の組が、橘の坪の垣外を、ひたひたと通って行く時だった。

「主計かづえ。この前の評議の折、申しつけておいた調べ、整うたか」

義元の言に、

「ギツと」

朝比奈主計あそひなかずえは、携えて来た書類を展ひろげて、評議に先立って、一応の説明を加えた。

それは、織田家の領地と、藩財の調査や、またそれから算出した兵力、武器などの詳細な書きものであった。

「小藩とは申しながら、近年になりまして、いちじる著しく、織田家の財政も立ち直つて来たかに見うけられますが……」

主計は云いながら、数字の表を義元に示し、

「尾張一国とは申しますが、尾張の東部南部の——ひがしかすがい東春日井や知多郷のうちには、御当家で切り取つた岩倉城のごときもござりまするし、また、織田に属しておるとはいえ、二心を抱いておる者もあるやに存ぜられますので、先ず、今の情勢では、織田の領りょう邑ゆうはおよそ尾張一国の半分以下——五分の二と見れば大差ないかと思ひまする」

「ムムなるほど。聞き及ぶ通りの小藩だのう。——して兵数はどれほど出し得るか」

「尾州五分の二領と見れば、その領地りょうちだか額は、約十六、七万石に当りましようか。一万石について、養兵力をおよそ二百五十人と積ると、織田全体を挙げて、四千内外。——守兵をのぞけば、三千内外の兵しか動かすことはできませんまい」

「は、は、は、は……」

突然、義元は笑つた。

笑う時は、少し身を斜めにして、美しく染めた唇くちの鉄漿おはぐろへ、銀杏形いちようがたの扇子せんすを当てて笑うのが、彼のいつもする癖だつた。

「三、四千とな。……ようまあ、それで一國を支えておるものじやのう。儂みが上洛の途に當つて、心すべき敵は織田であると、長老も仰せらるるし、そちどもも織田織田としきりに申すゆえ、主計に仔細を書きあげさせてみたわけじやが……たんだ三、四千の兵が、義元の軍勢の前に何するものじや。鎧がいしゆう袖しよくの一触、蹴しよくちらして押し通るに何の造作があるう」

雪齋は沈黙していた。

むれもんとのしよう

牟礼主水正、庵原いはら将監しょうげん、齋藤掃部助さいとうかもんのすけなども、ひとしく口を緘かんしていた。

義元のうごかない決意を知っているからである。

既に——

この計画は数年来のものであり、今川家の軍備も内政も、あらゆる施設の方向は、義元の上洛と天下制覇の目標にあったのである。——機、今や熟し、義元の胸にも、その鬱うつほ勃つは、待つまでもなく、迫りきっているのだった。

それを、この春から、いざ決行となりながら、評議をかさね、今もって実現に至らないでいるのは、この中枢部の内にも、まだ時機であるまいという——尚早論者があるからであつた。

それは、雪齋和尚であつた。

雪齋は尚早論というよりは、もつと消極的に、義元に内治の献策のみすすめた。旗を中原にすすめて、天下統一の大業を義元がなし果そうとする大志に対しては、悪いとはいわないが、決して、賛同を表さなかつた。

そういう態度を持っている雪齋和尚の気もちの中には、苦しいものがあつた。なぜならば、義元に向つて弱冠から、

「今川家は当代の名族で在おわするぞ。足利將軍の統、もしお世継よつぎのなき時は、三河の吉良きら氏が継ぎ、吉良氏に人のなき時は、御当家今川家から立つことになつておる。すべからく貴方も大志を抱いて、天下の主たるほどの器量を今から養つておかねばならぬ」

と、そういうような訓育をした者は、実に、雪齋自身であつたのである。

一城の主たるよりは、一国の君となれ、一国の君たるよりは、十州の太守たいしゆとなれ、十州の太守たるよりは、天下の支配者となれ。

誰も訓おしえることである。当時の武人教育はそうであり、当時の武家の子弟は皆、風雲の世にそれを望んだ。

雪齋もまた、義元を教育するに、それを眼目とした。そして彼が義元の帷幕いばくに参じてか

ら、今川家の国勢は急激に膨脹した。覇業の階梯を徐々に踏んで来たのである。

——が、雪齋は近年に至つて、自分の教育と輔佐の任に大きな矛盾を感じだした。それは義元がいよいよ自信をもつて計画を進めつつある天下統一の覇業に、何となく不安を覚え出したことであつた。

(器でない。いかんせんお館はその器ではなかつた)

義元の行状だの、わけて近年、著しく思い上がつて来たふうのある彼をながめて、雪齋の考えは、急角度に、保守的になつた。

(今が絶頂だ。彼の君の御器量いっぱいなどころだ。思い止まらせねばならない)

そこに雪齋の苦しみが生じ出したのである。今を自分の世盛りと自負慢心している義元が、遽かに、中原進出の大挙を思いとまるはずはなかつた。雪齋の諫言は、雪齋の老衰のせいであると嗤つて取りあわない。もう天下は半ば、わが掌にあるものとしていのである。

(誰が、させたか)

義元の慢心を責めるまえに、雪齋は自分を責めた。器でない者に、器以上の大望を抱かせたものは、誰でもない、自分ではなかつたかと。

(もはやお止めすべきであるまい)

雪齋はもう諫言しなかつた。その代りに、評議のたびに、大事に大事を取るべく主張した。

(駿遠三の大軍と義元の威勢をもつて、京都まで上るに、何ほどのことがあるう)

と、口ぐせにいう義元をたしなめては、沿道の諸州の実態を探らせ、能うかぎりは戦わずに、未然の外交策と利をもつて、無血の上洛を計つたりした。

けれど、京都までの沿道で、強国美濃より近江より何処よりも、すぐ避け得られない門出の一戦は、まず織田という敵だつた。

この敵は、小粒だつた。しかし外交でいけず、利で行かず、戦つて実にくるさい敵なのだ。それもきょうやきのうの敵ではなく、遡れば四十余年も前から、一城を奪られれば一塁を取りかえし、一町を焼かれれば十村を焼きかえし、実に、信長の父の代、義元の祖父の代から、両藩の国境には、両家の白骨を埋め合つて来た宿怨のあいだなのである。

織田では、疾く、

(今川上洛)

という風評に、四十余年の臥薪嘗胆の酬わるる時節は来れりと、一大決戦を覚悟し

ているとのことだし、義元はまた義元で、

(手頃な、上洛陣の血祭り)

と、対織田策を練っている今であった。

——いやもう今宵を最後とする軍議なのであった。

雪斎和尚や元康らが、お館を退つて帰途についたのは、もう府中の町には、灯一つ見えぬ深夜だった。

「御運を天に禱るほかない。年老ると、禅骨も愚にかえる。寒いもう」

寒いとも思えぬ夜なのに、銀河の空を仰いで、雪斎はつぶやいた。後で思えば、その頃から彼の老病はかなり篤かつたのであろう。その夜を最後に、雪斎はふたたび土を踏まなかつた。臨濟寺中秋寂寥、ひとりの高僧はひそと死んだ。

望蜀
ぼうしよく

冬が近づいた。

まだ臨濟寺の菊は晩節のにおい高く咲いていたが、府中の城下から仰ぐと、眉に迫るほ

ど間近な富嶽ふかくは、真つ白な雪になっていた。

「降りろッ」

門前町の辻まで、向う見ずに飛ばして来た一騎の悍馬かんばは、四つ辻の角を固めていた土さむらいの長槍で、いきなり脚を払われて、竿立ちさわだになつて暴れまわつた。

「——あッ」

落馬はしなかつたが、鞍上の武士は、抛ほうり出されたように降りて、

「何を召さる」

辻を見まわして、そこらたむろに屯たむろしている今川家の士さむらいたちへ喰つてかかつた。

「止めたのだ。——断りなくどこへ参る」

警固の者は、当然のように云い払う。

「臨濟寺へ！」

一方も、昂然こうぜんと、云い返したが、辻固めの士たちは、

「ならぬ」

と、一蹴した。

「なぜ、ならぬのか」

「臨濟寺には、今日、お館様をはじめ、重臣方が、雪齋和尚の忌日きにちとて、御参詣遊ばされておる。——家中一統の参拝はもうすんで、皆帰られたが、まだお館様と主なる方々には、御休息中でいらせられる。それゆえ、御帰館までは、この先、往来止めと立札の建つておるのが見えんか」

「見えたればこそ、急ぎ通るのだ。仔細しさいも糺たださず、騎馬の脚なぐを撲るとは無礼であろう」

「何、見えたればこそ……だと、高札は、法令であるぞ」

「わかつておる」

「申したな。縛からめ捕とれこの者をツ」

「待てツ」

「後で申せ」

「いや、おん身らの落度になつては気の毒だから先にいうて聞かすのだ。この方ほうのふところには、大高城の守将鵜殿長照様より、お館様への火急な軍状を所持しておるのだぞ」

「や。急使か」

「軍状を所持する場合は、貴人に出会つても、下馬に及ばず、大手唐橋の門内まで、乗りつけも御免に相成つておる」

「勿論」

「故に、臨濟寺の門前まで、騎馬のまま駈けようとしたが、なぜ悪い」

「軍状を持った急使とわかれば止めはせん。無断、駈け通るゆえ」

「断っている間などはない」

「では、お通りなさい」

「ただは通らん、謝れ」

「咎めるのも役目だ。謝るほどなら君命を待つて腹を切る。謝らん」

「その挨拶あいさつ気に入った。よし然らば、預けておくぞ」

云い捨てると、急使の武士は、駒の背へとび移つて、臨濟寺の門へと駈けつけて行つた。

禅刹ぜんさつは森しんとしていた。

わけてこの秋、雪斎長老の亡き後は、山門も堂宇も、森も、よけい寂じやくまく 寞まくの感が深か

つた。もずの啼く音も、何となく淋しく、肌さむい初冬だった。

けれど、きよの雪斎四十九日の忌きに焼香した今川家の将士の中には、どことなく平和を欠いた騒さわめめきが漲みなぎっていた。辻固めの土にまで、殺気に近い緊張が流れていた。——戦いくさ

がある。長老の死は、お館の上洛の機を早め、隣国の敵は、氣勢を得て、虚を衝こうとす

るにちがいない。

(——だからいずれにしても、合戦は間近くなった)

今川家の人々は、そういう覚悟の中に、刻々と、国境の変を、この二、三日、耳にしていたところなのである。

誰と誰と誰とは残るようという指名で、その日、法会ほうえのすんだ後も、臨濟寺の奥書院には、義元を中心に、今川家の幕將二十名ほどが密ひそやかに、何事か評議していた。

巨星雪齋が逝ゆいてから、義元の帷幕いはくには、義元の見解を制する者はいなくなった。いつも黙つて末席にいる松平元康もとやすは、時勢観でも、今日の方策でも、亡師の雪齋と最も近い意見を抱いていたが、彼は外藩の質子ちしの身だし、余りに若年でもあるし、いうても取り上げられないことは知れすぎているので、一見、意見も何も無いように、沈黙をまもり通していた。

「大高表おおだかおもてから、ただ今、お飛脚でございます。……はいッ、早馬の御急使が、これなる御書状を、お館様へ即刻お取次あるように申されまして」
廊下仕切しきりの杉戸の外でする声であった。

その取次の僧に対して、何かいつているのは、出入りを見張っていた側衆の人々である

う。

森閑しんかんとした禅房の奥なので、芭蕉ばしやうにかくれている中庭の向うの広書院まで、この声はよく届いて来るのだった。

「何、大高表から飛脚と……」

評議の座は、みな口を噤つぶんで、ひとしく聞き耳をたてた。——折も折、心もとないと思つたらしく、義元は、

「元康。立ってみい」

と、頤あごを末席に向けた。

「……はッ」

静かに、席のすそから、元康は廊下へ出て行った。

たとえ何者でも、どんな用事を帯びた者でも、評議中は、杉戸から一步もはいつてはならぬと厳命してあるので、元康がそこへゆくまで、取次の僧も見張番の近衆たちも、杉戸の外でまだ応答を繰り返しているだけだった。

「なにか」

元康の顔を見ると、

「はい、実はただ今、これなる御書面を携たずさえた急使が、大高表から夜を日についで馳せつけたとの由で……」

近衆も、僧も、両手をつかえながら、飛脚状をさし出した。

軍状である。味方の大高城から、何か火急な飛脚といえ、容易ならぬこととは直ぐ知れている。

「使者は」

「御本堂に控えております」

「すぐ、お館様へ、御披露申しあげておると伝えて、しばらく休息させておかるがよろう」

元康は、それを持って、評議の席へもどつて来た。

何事の急報か？

と、案じるもののように、席の諸将も、義元自身も、その間、無言のまま、元康の取次を待ちぬいていた面持おももちだった。

「御前まで」

と、元康は、書状を、朝比奈主計あさひなかずえの前へおいて退さがった。

主計の手から義元の前へ、それは披露された。義元は、すぐ封を切つて、一見していたが、

「……猪口才ちよこざいな」

黒々と鉄漿かねを染めた歯が下唇を噛んでいた。すぐ側に居流れている牟礼主水正むれもんのしょうや庵いはら原将監しょうげんのほうへ、書状は無造作に投げられていた。

義元の眸は、じつと、欄間を仰ぎ——順々に書面を一読して廻している幕将たちも、次々に、異様なかがやきを眼に湛たえたまま、しばし、沈黙を守り合っていた。

大高城は、尾張本国と知多半島との咽喉にあつた。

ちようど、胴と脚の附け根のような地形に、今川家の勢力は犬牙けんがのように深く蝕くい入つて、沓掛くつかけ、大高の二城をつなぎ、織田領の脚部をそこで切断した形になっていた。

前に。

織田方では、大高城の前衛、鳴海なるみを奪回していた。その後、織田方では、なお手をゆるめず、沓掛と大高の二城の間に、急ごしらえの砦とりでを設け、大高城の孤立化を計っていたが、義元上洛のうわさがようやく具体的に進行して来たとなると、昨今急激に、大高城を包围してしまい、孤城の運命は完全に迫っている——という書状の内容なのである。

勿論、書面は、大高城の守將鵜殿長照うどのながてるの直筆で、まちがないものだった。

——援軍を頼む！

と、いうことは一言も書いてはなかった。けれど、以上の急迫を告げているほかに、孤立の城内には、兵糧ひょうろうも乏しく、松杉の木の皮を餅にして喰べ、合戦の日だけは、米の汁しるを兵に飲ませているなどという窮状の一端したたなどが認めてあつた。

「……………」

順々に、書面のまわし読みがすむ間、沈黙を守りあっていた人々は、その間に、籠城者の悲惨な忍耐を、各胸にえがいていた。

急使もたらの齎したその書面は、やがて席を一巡して、松平元康の所へ来て終つた。元康も一読をすまして、朝比奈主計かすえの手から義元の前へ返した。

「どうしたものか」

義元には、さし当って、よい対策もなかった。

いや義元のみでなく、今川家の参謀といわれる庵原将監いはらしやうげんにも、名将の聞え高い牟むれも礼主水正んどの水ようにも、すぐそれに答えられる考えもない容子ようすなのである。

「……………」

元康もだまつて控えていた。とつこうつ日頃の智慮ちりよをしぼっている面持おももちは誰にもあるが、依然、声もない刻々が重くるしくつづいていた。

わけて義元の眉には、身近い苦痛が刻まれていた。織田の抑えおさとして、大高城に入れてあるその主将鵜殿長照は、義元の妹智むちにあたる者なのである。私心の上からも見殺しにできないし、また、小藩の織田風情ふうせいに、大事な要地と妹智の生命を略取されたと聞えては、上洛の大挙をひかえている威風いふうのてまえとしても、四隣よりんに対しておもしろくない。

「なんぞ、策はないか。……よい思案は。……抛ほうつておいたら大高表の者ども、みすみす餓死うえしぬであらうが」

重ねて、義元がいった。しかし義元のいつていることは、当然なことと困惑を、繰り返しているに過ぎないのである。

元々、大高城の地理的な位置が無理な所にあつた。侵略した敵地に深く、そこだけが突き出していた。で一朝、孤立したとなると、離れ島も同様な地点に置かれた。

その上にも。

ここ半年ほどの間に、織田家では計画的に、鷺津わしづ、丸根まるねの砦とりでをはじめ、丹下、中島、善照寺などの各部落や高地に、碁石しを布くように砦を構築し、今日の行動を起すまえに、大

高を地理的に遮断しているのである。

援軍をやる——といっても容易ではなく、大高へ兵糧を入れる——としてもなおさら難事であった。

すると、一人、

「僭越ですが、私をおつかわし下されば、来年の御上洛まで、持ち支えるよう、大高表の儀、仕すまして参りますが」

と、云い出た者がある。

誰かと、末席のほうを見ると、質子ちしの松平まつだいらもとやす元康なのであった。

松平元康という者は、若いのに似あわず引つ込み思案な男である。境遇は人を作るとい
うから、自然そうなったものだろうが、武断な勇将うっわの器ではない——

常に、彼を見ている今川家の幕将たちは、そういう定評を是認していた。

その元康が、今、

「私が行きましょう」

至難中の至難と目もくされている大高城の救援に、進んで志願したので、

「え……?」

疑わぬばかりの眼が、いわゆる引つ込み思案な、彼の姿にあつまつた。

義元も意外な面^{おもて}で、

「元康。参るといふのか」

「はい」

「大高表へ兵糧を入れる工夫があると申すか」

「いささか……」

「ふむ。そちな……」

義元は、考えていたが、独りで大きく頷^{うなず}いた。

元康の人間をわりあい知っていたのは、この中ではやはり義元であった。故雪斎和尚が常に彼へ云っていたからである。

（あの小冠^{こかんじゃ}者を、いつまで籠の鳥の質^{ちし}子^しと思うていると間違いますぞ。今川家の廂^{ひさし}に巢喰^{すく}うて満足しておる燕雀^{えんじゃく}ではおざらぬ。大鵬^{たいほう}の雛^{ひな}は、雛のうちから、大鵬になる心得をもて扱^あつておかぬと、飼^かい馴^なれぬものでおぎる）

そう聞いても義元は、年久しく信じきれなかつたが、加冠^{かかん}して以来、めつきり大人^{おとな}に見られて来た元康の言行や、初陣ぶりなどを見るごとに、雪斎の言葉が思いあたるのであつ

た。

「よかろう。然らば、大高救援の儀、きつと、つつがなく致すであらうな」

「身命を賭して、必ず御安心の相成るように仕ります。——多年御養育うけました御恩返しの一端にも」

と、元康はいった。

彼の身を、質子として、今川家に軟擒なんきんしておくことは、政略であつて、慈悲ではない。三河併呑へいどんの策謀ではあるが、同情や善意ではない。

——にも関わらず、元康は、それを養育を享けた恩とっているのだ。きょうばかりでなく、常に元康は、義元に対して、恩義を感じている容子ようすを何かにつけて表わした。

義元は、自分の肚の底に思い較べて、ふと、不愍ふびんを覚えた。——これほどまでに、この一質子ちしは、自分を頼り自分の与えている生に恩を感じているのかと思つて。

で、何気なくいった。

「大高の城は、敵地の中だ。まちごうたら全滅、決死の覚悟をもたねば参れぬぞ。——懸命にしてのけよ。もし見事、大高一城の者の生命を救い得た時は、その褒美として、多年、三河におるお許もとの老臣どもが宿望としておる——当主元康の本国帰城をゆるしてつかわす

であろうぞ」

「ありがとうございます」

「七歳の折から質子^{ちし}として他国に在る其許^{そこもと}、お許^{もと}も帰^{かへ}りたかろうでの」

「さほども思^{おも}ひませぬ」

「お許^{もと}はさほどに思^{おも}わずとも、三河の老臣^{らうしん}どもは、やはり主は主として身近に置きたいは山々じやろ。むりもない多年の願^{ねが}い、この度は、大高城において、見事手^{けんじて}がらを立てられよ。それをもつて——歸^{かへ}してとらせる」

「はい」

元康は、謹^{こん}んで命^{いのち}をうけた。そしてまた、義元^{よしのぶ}の誓^{ちか}いにも心^{こころ}から礼^{れい}をのべ、退^{さが}りかけた。幕將^{まくしょう}たちは、多分^{たぶん}な不安^{ふあん}でさつきから眺^{なが}めていたが、既^{すで}に事^{こと}が決^きまったので、このうえ充分^{じゅうぶん}に用^{もち}意^いして行^いかれよと、大高^{おほたか}附近^{きんじゆ}の地理^{ちり}、織田^{おだ}軍^{ぐん}の兵質^{へいしつ}、合戦^{くわせん}の心得^{こころえ}、小荷駄^{こにだ}のことなど、何^{なに}くれとなく、先輩^{せんぱい}として事細^{ことこま}かに教^{おし}え合^あった。

「はい。……はい」

元康は、心得^{こころえ}ぬいでいることでも、素直^{すぢ}に、神妙^{しんめう}に、いちいち手^てをつかえて聞^きいていた。

兵糧陣
ひようろうじん

例によつて、信長は、

——狩かりに参る。

という触れ出しで、供まわりも極めて小人数だし、支度も軽装のまま、早朝、清洲きよすから野外へ駈けたのであつた。

だが、いつもの狩場近くの山野へ出ても、鷹を放つ容ようす子もなく、弓弦ゆづるを掛けるふうもない。

「鳴海なるみじゃ。鳴海へ」

後方から駈けつづいてゆく者たちは、信長のそういう声を聞いたが、何で遽にわかに鳴海城へ行くのか、信長の気もちは察しられなかつた。

鳴海城で、休息、兼ねて昼の弁当を無造作に喰べ終ると、間もなくまた、

「丹下たんげの砦とりでへ向え」

と、令を下し、鳴海から国境の砦とりで々々へ接続している軍用路を、駒足のかぎり駈け出した。

徒士かちや小者は、勿論、落伍してしまった。騎馬の家臣ばかりが信長の前後を約二十騎ほど包みながら、一陣の旋風つむじが移つて行くように、丹下村へはいった。

「や。何か」

砦とりでの物見は、手をかざしていた。この附近一帯は、今川領と織田領とが、丘一つ河一つ隔たてて対峙たいじしている最前線なのである。秋が来ても春が来ても、ここには無事という日はないのである。

「殿！」

楼台の階段から、真下の仮屋へ、物見の兵は、呶鳴なつた。

ここは戦いくさのない日も、戦時であつた。砦の守将水野みずの帯刀は、仮屋むしやの武者溜だまりの一隅に、床しょうぎ几ぎを置いて、陣刀を立てたまま何か黙想もくそうしていたが、

「おう。何か」

右側の幕を揚げて、望楼のほうを見上げた。

「三郎助。何事だ」

「異な砂けむりが見えました」

「いずれの方から」

「鳴海街道にあたる西の方より」

「では、味方であろうが」

「……それにしても？」

不審るひまに、帶刀はそこを起つて、もう望楼へ上つていた。

物見は、そこを一步も動かないのが、役目の原則なので、守将にも上から言葉をかけたが、帶刀が登つて来ると、跪いて、片手をつかえた。

「……才。なるほど」

うすい黄塵が、見るまに、此方へ近づいて来た。森にかくれ、また畑の彼方に見え、丹下の部落の端れまでかかつて来ると、

「あッ。信長様だ」

帶刀は、仰天しながら、望楼から駈け下りた。

そして、砦の柵外まで、出迎えに出ると間もなく、一騎、先に飛んで来た。

丹下村の端れに屯している守備隊の一将だった。

「ただ今、お先触れもなく、清洲城より信長様が、御巡視になって参られます。お報らせ
まで」

あわただしく告げて、伝令はすぐ鞭むちを返して去った。

それと、ほとんど入れちがいに、砦の山すそには、汗と埃ほこりにまみれた二十騎の主従が、馬を降りて、何やら高声に話していた。帯刀は、柵門の内へ、

「整列ツ」

と、どなり捨てて、倉皇そうこうと山下まで、駆けて行つた。

その帯刀と、ぶつかりそうに、駒を捨てた信長は、徒歩かちで、すこし汗で上気した顔に、微笑を持ちながら登つて来た。

余りにも不意である。

この最前線へ、しかも軽装で、予告もなく何で遽にわかに信長が見えたのか——水野帯刀は
 尠ちなからず狼狽した。

ともあれ——

砦の中へ、信長を招じ、守将水野帯刀以下、山口海老丞えびのじょう、柘植玄蕃つげげんばなどの部将も列して、

「いつもながら、御健勝おわに在して——」

と、挨拶を施した。

が——信長の耳には、取つてつけたような通例の機嫌伺いなどは、聞えもしない顔なのである。

床しょうぎ几を、展望のよい、頓合な所に置かせて、そこから味方の善照寺の砦、中島の砦、鷺津、丸根の塁るいなどを、地形的に頻りと按あんじ顔に、

「とんと頑強に見ゆるが、大高城の近況はどうじゃの」

「……はッ」

水野、山口、柘植つげの諸将は、さてはやはりそれがお気懸りで——と、信長の性急な日頃の気もちと思ひ合わせ、何かしら、鎧よろいの下に、汗をおぼえた。

「されば、敵の城内にはもう疾とくに、糧食たくわの蓄えも尽きたはずではござるが、さすがに、衰えた氣勢は見せず、かえつて、たまたま小人数の奇兵をもつて、鷺津、丸根とりでの砦などへ、夜中、逆襲さかよせを仕掛けたりなどして参りまする」

「水の手は断たつたか」

「水は、城内に、よい井戸があるので、外部の水の手を遮断しても、遽にわかに効はございませぬ。——それに冬ともなれば、雪解ゆきげも蓄えられますゆえ」

「長びくのう」

「……………」

帯刀たてわきは、責められたように、無言で頭かぶを下くだげた。

大高一城を、この附近四ツ五ツの砦とりでで包囲し、完全に糧食の運輸まで遮断しながら、容易に、敵を屈服せしめないでいるのが——無能な長陣のように、自責しているところなので——信長のつぶやきが直ぐ胸にこたえたのである。

「所詮しよせん、この分では、年内の落城は覚おぼつか束たないかと存ぜられます。……で、われわれのみではなく、鷺津砦いとおうみのかみの飯尾近江守いどのにも、善照寺の佐久間左京さくまさきようどの、丸根の佐久間大だ学いがくどの達も、一挙に、大高へ攻めかかって、踏み潰つぶすに何ほどのことがあるうぞと、度々、清洲表へ意見をさしあげて、御裁決を仰いでおりますが、いつも、わが主君きみのおゆるしがないために」

云い訳には似てるが——と、思いながらも帯刀たてわきがいうと、

「いやいや」

信長は皆まで聞かぬうち、各砦とりでの将士しやうしのあせり気味を察して、

「無理いたすな。長陣になるとて斟酌しんしやくには及ばぬ」

と、いった。

怖ろしく短気に見える信長の一面に、こういう気長な寛度かんどがあるのが、帯刀たてわきには、ふしぎにさえ思われた。

「帯刀」

「はッ」

「佐久間大学、左京、飯尾近江などにも会うたら、そう伝えい。——大高城は、駿河の府中城ではないほどに、余り過ぎた武者ぶるいは、ここでは無用ぞと。よいか」

「はッ」

「そち達——いや砦とりでの一兵たりとも、信長にとつては、大事な生命いのちぞ。あだにな捨てそ。

近く、駿河の田舎公方いなかくぼうが、駿遠三の大軍を誇つて、上洛の企であることも聞き及んでおろうが」

「かくれない儀——疾とく承知しております」

「むぎと、尾張の国土を、踏み通らせてなろうか。海道の弓ゆみとり取は、義元のほか一名もなしと天下に囓わらわることとは、信長の生あるうちは忍べぬことぞ。……何の大高ごごとき小城一つ」

信長は、遠くを見て、語尾を唇に噛んだ。

仮に。

今川の上洛軍が、西上を決行する場合、どのくらいな兵力をもつて来るか、信長は、もうあらかじめ、概算をつけていた。

彼の領有面積や、常備の兵数から、その留守居を引いても、おそらく二万から二万五千は欠けまいと思われた。

そこで、自身は？

と、胸のうちで比較してみると、全領土を挙げても、四千内外——そのうち四隣の国境や、留守組をひくと、千五百から二千の兵しか動かせないことが分っていた。

(数ではない！)

信長は、信念している。

しかし、戦いはまた、絶対とっていい程、寡は衆に勝てないものでもある。

今川西上の場合、一たまりもあるまいと、四辺の国は、織田を視ている。——崩れたと見たら、一片の肉に餓狼の寄るように、分け前を争う敵が、今川と呼応してなだれこむにきまっていた。

「死にがいも、生れがいもある時の潮が眼に見えて来た。お汝らも、生命を惜しめ。なら

ば散り甲斐のある場所で枕をならべよう」

繰り返すように信長はいつたが、ふと、詠嘆えいたんを口吻こうふんから切り捨てて、

「昨夜おそく、清洲にはいつた諜報によれば、三河の松平元康は、大高の孤城へ兵糧ひょうりょうを送り入れよとの命をうけて、駿府表より立ったとある。——あの三河の冠者は、まだ乳ちくさい頃より、織田家にも質子ちしとしており、その後、今川家にも長年養われて、他人中ひとなかの憂き艱難には鍛練された人間、若年あなどというても侮れぬぞ。心しておれ。——断じて、大高の兵糧口を固めておろうぞ」

と、いつた。

帯たてわき刀も、柘植玄蕃つげんばも、

(何の抜かりが)

といわぬばかり、ただ、黙礼をもつて旨かしこを畏まった。

信長は、それをいうために来たのであろうか。直ぐ床しょうぎ几を立て、砦とりでうち内の士気を一巡見てまわると、ふたたび近侍二十騎と、次の砦へ駆けて行った。

その夜は、善照寺の砦に泊った。次の日は、鷲津、丸根の二カ所を視察し、同じように、将士を激励してまわった。

わずか、二、三日でも、彼が清洲の本城を離れていることは、かなりな冒険であった。正面の敵の来襲は、今、海道の方面にあるものの、伊勢路、美濃路、甲州方面の国境たりとも、決して、安心ではないのである。

「よし」

鞭むちを返すと、信長は、四日目にはすでに、清洲にいた。清洲から四方を觀みていた。

その一行が、帰城したのを見届けると、尾張平野の稲田を、一羽の離れ雁かりのように、東へ東へ急いで行く男があった。

旅の葉売りのような姿をしていたが、三河領へはいると、どこの柵さくでも、宿場でも、彼の顔は、土分の者なら知っていた。

言葉もかけずに、目礼だけすると、往来の厳しい宿場の木戸でも、黙って通り抜けることが出来た。

鵜殿うどのじんしち甚七なのである。

かつては、山伏で往来していたが、近頃は葉売りとなって出沒していた。いうまでもなく、三河方の諜報役が、彼の任務だった。

甚七の足が、岡崎まで走らないうちに、彼は、或る一宿場に溢あふれている千駄に近い小荷

駄隊と、約二千ばかりの軍勢に行き会った。

「甚七。どこへ参る」

小荷駄隊のあいだから、彼の姿を見かけて、こう呼びとめた者があつた。振り返つてみると、石川いしかわ与七郎よしちろう数正かずまさであつた。

「やあ、数正か」

甚七は、足をもどした。

石川与七郎数正は、何十頭かの小荷駄隊の一小隊の指揮官として働いているらしく、博はく労くろうのように馬臭うまぐさくなって、人馬のあいだに何かどなっていたが、直ぐやって来て、

「久しぶりよなあ、甚七」

「ムム。……誰ともだ」

「おもしろかろう」

「何が」

「おぬしの役目よ」

「ばかな」

鵜殿甚七は、しんから腹が立つように、

「咎とがもないのに、御勘当の態ていになつて、何年も故郷こくにの土をふまず、大小差す身が、山伏になつたり、これこの通り、葉売りのまねしたり……何がおもしろい」

「しかし、諸国の情勢を視み、危険を冒おかして、敵地と自国を、出没して歩くなど、われわれにはない役得やくとくだ。馬の飼料かいばを徴発したり、馬のあいだに寝たり、小荷駄隊も、華やかでないなあ」

「おたがいに、陰かげで働く者があるから、華々しい太刀武者や鉄砲武者に、よい合戦をさせることが出来るというもの。——先ずわれわれは、味方のそれをながめて溜飲りゅういんを下げるのだなあ」

「時に。織田の領内では、はや固めておろうな。大府おおぶ、横根よこねのあたりは、どんな様子か。清洲から人数を増して来たようかな」

「左様なことは、ここではいえん。——おいッ、気をつけろ、荷駄馬が一頭、手綱を解いて往来そへ外れたぞ」

甚七は、先を急いでいく。

歩いてても歩いてても、両側の並木から民家の廂ひさしまで、馬馬馬馬で埋まつていた。

宿端しゆくはすれや問屋場の附近は、なおさらであつた。ここでは穀類や乾菜かんさいや、塩、味噌、

粉、干魚、鰹かつおぶし節などの俵と籠かごと袋で幾つも山ができていた。

近郷から運輸してくるのは皆、農夫や人夫であったが、荷駄に積みこんでいるのはみな兵であった。具足や鎧よろいや、顔までも、白い米の粉にまみれている隊將の姿などもあった。わき眼もふらぬ將士が、そうしてがやがや労働している中で、馬は悠々ゆうゆうと、あちこちで尿いばりをしていた。

御陣所

と、曲り道の畦あぜに、木札が立ててあった。畦のつき当りに丘の寺が見えた。甚七が、不用意に、すぐ曲りかけると、

「ならん！」

稲むらの蔭から番兵の槍が二本も出て来た。——が、甚七の顔を見ると、

「あ。どうも」

槍を引いて、目礼した。甚七は畦あぜをかなり早い脚で渡った。

寺は、本陣となっていた。小さな禪刹ぜんさつである。ここには、乾物や馬の尿いばりのにおいもしなかつた。許されて山門しへいをはいると直ぐ、松平元康のすがたが本堂に見えた。

本堂の四屏しへいを取り外はずして、元康は、床几しょうぎに倚より、家臣の群れに取りまかれていた。

図面が一枚、大きく、拵げられてある。評議中とみえて、主なる三河衆の顔はたいがいその周りに見うけられた。

まわ
さかいよしろうまさちか

酒井与四郎正親。同、小五郎。

まつだいらさまのすけちかとし

松平左馬助親俊。

とりいさいごろう

鳥居才五郎。

ないとうまごじゆうろう

内藤孫十郎。

こつりきしんくろう

高力新九郎。

その他、天野、大久保、土屋、赤根などの人々、多くは若武者だった。鳥居忠吉のような老臣の白髮鬢は、一名も見えなかった。

しらがびん

「甚七殿が立ち帰りました」

武者のひとり伝えると、主従一かたまりの顔が、絵図面の上から斉しく振り向いた。

「甚七か。待ちかねていた」

これへ——と、元康の軍扇は彼をさしまねいた。

ぐんせん

主将の元康を中心に、酒井、松平、高力、大久保、天野などの譜代は、こもごもに、甚七に質問を發した。

以下——甚七の探つてきた敵状の答えと、誰彼の質問を一束に記録してみれば。

問「陣地視察中ノ信長ハ、猶^{ナオ}、前線ニ止マレルヤ否ヤ」

答「清洲へ帰城セリ」

問「出陣ノ様子ハ」

答「見受ケラレズ」

問「人数加勢ノ形勢ハ如何ニ」

答「ナシ」

問「兵糧入レノ松平軍ガ、近ヅキツツアルヲ、敵ハナオ知ラザルナランカ」

答「然ラズ」

問「而^{シカ}モ、加勢モナク、信長ノ出動モナキハ」

答「彼等ニ、御味方遮断ノ自信アルト見ユルナリ」

問「最モ、手強^{テゴウ}キ敵墨ハ」

答「鷺津^{ワシツ}、丸根ノ二墨ト見ラレテ候」

問「味方、前進猪^{チヨトツ}突シテ、勝利ノ分アリヤ無シヤ」

答「断ジテコレ無シ」

——と、いったような応答が、かなり細微さいびにわたって交わされた。

何事にも、大事に大事をとつて、石橋を叩いて渡る主義の元康は、甚七のほかにも、石川左門しかわさもん、杉浦勝次郎すぎうらかつじろう、同八郎五郎など、側物見そばものみ六名を、ゆうべから今朝にかけて放つておいた。

その物見組の者が、次々に、ここへ歸つて来た。

そして幾分かの観察の差はあるが、大部分は、同様な報告をもたらしした。

ただ、甚七を加えて、七名の物見が、完全に意見の相違を呈したのは、

(前進して、松平軍に勝味があるか、否か)

という問題であつた。

七人のうち、六名までが、

(勝味なし)

と、味方の前進を危ぶんだ。

それは、地形から見ても、人数から見ても、あらゆる角度から見ても、大高城へ近づくま
 際には、味方の全滅を覚悟しなければならぬ条件のみが備わっていた。いわゆる兵法で
 いう死地であつた。

もつとも、そのために、大高が孤立し、幾度の援軍も、兵糧搬入も失敗して、元康が選ばれて来たわけであるから、今さら、ここで二の足を踏む理由はないわけだった。要は、

(その死地を如何にして破るべきか。死地を生地にするか)
にあった。

「八郎五郎」

「はッ」

杉浦八郎五郎という物見は、元康からふいに呼ばれて、大きな眼を上げた。

「そち一名だの。このまま、前進して味方に利ありという意見を述べたのは」

「左様でございます」

「何をもって、そう信じたか」

「ふかい理由もございませぬが。鷲津、丸根をはじめ、善照寺、中島、その他数カ所の敵の砦は、それを聯絡すれば、大きな敵ではありませんが、一箇一箇に見れば、元来、一箇一箇のものではございません」

云い方がおかしいので、誰か苦笑をもらしたが、元康は、厳肅になって聞いていた。

「うむ。一箇一箇。それにちがいない。——して？」

杉浦八郎五郎は、よく舌のまわらないような物云いする男だった。

物見役には、動作も鈍くて、すべてがのろい男だったが、元康は、側物見そばとして、大勢の隼はやぶさの中には、きつと一羽、この鈍どんな鴉からすを交まぜて使った。

「はい。……ですからその、敵のたくさんな砦を、一箇一箇に、力を分けさすように、御合戦を計れば、大丈夫、お味方に勝目があると存じましたので」

やつと、思うことを、そんなふうにいって、八郎五郎は、額ひたいの汗をふいた。

彼の言葉は、十の考えを、二分しかいってなかった。

元康はそれを、自分の器量いに容れて、すぐ何十倍にもして聞いた。

刮かつぜん然と、彼の前には、活路がひらけて来た。——死地を生地にするの道がついた。

「もうよい。休息せい。——一同も軍議をやめ、兵糧なとつかえ」

元康は、本堂を出て、廻廊を行きつ戻りつ、足馴らししているように、巡めぐっていた。

「首尾よう仕遂しとげたい」

元康は、合戦の勝敗以上、こんどは功を願った。初陣の時以上、今度は、頻りと、功に逸はやった。

府中ふちゆうを立つ時、義元は約した。

（今度の事のみは、首尾よう仕果されよ。それを称うとうて、三河へ帰国の宿望、かなえて取らずであらう程に——）

元康も、早く三河に住みたいのだった。譜代の古老や、自分を待つ臣下たちと、共に暮す日が待ち遠しいのである。

「新九郎、新九郎」

廻廊から、突然、元康は高く呼んだ。自然、声音こわねが張っていた。

何事かと、高力新九郎は駈けて来た。どさと、草摺くさずりの響きをさせて、板床へ、ひざまずいた。

「貝を吹け」

元康の眼は、夕焼の雲を山門の梢こすえごしに見ていた。

群鴉ぐんあが、黒く飛んでいた。

「はッ。では」

「出軍の——用意を」

「は」

朱房しゆぶさの吹螺すいらを高く手にもち、高力新九郎は、息いっばい、吹き鳴らした。

準備。——準備。

貝は、寺内の隅々から、畦あぜを隔てた宿場にまで流れて行つた。

黙然と、元康主従は、そのまま立っていた。夕焼雲の黒ずんでゆくのを見ながら、時を測はかっているのだつた。

——やがて。

二番貝が鳴ると、出動！そこはかどなく夕闇に揺るぎ出した。あらゆる準備も心支度もすでに出来ているので、本陣五百余の兵馬が山門を出て行くにも、いと静かに、そして僅かな間に過ぎなかつた。

元康は、身近の十騎ばかりと、駒を宿場の街道まですすめた。

黒い陣列は、街道を埋めていた。兵員よりも、荷駄馬の数のほうが多いぐらに見えた。三番貝は、もう戦気をふくんで、戛かつかつ々々、千余頭の馬と二千の兵の足なみの流れるあい

だに鳴りながら行つた。

今村、半田、今岡、横根の宿場宿場を、宵の闇から、真夜半まよなかに見つつ前進して行つた。

大高城は、もう程近い山地にあつた。大高までの距離はわずか三十町程しかない。

ここまでひと息に押し来て以上は。——目ざす城はあれぞ、わき見すな、いかなる邪魔も踏みこえよ！　と、軍馬の前進へ拍車をかけて、号令するのが、兵法の常道であった。どう考えたのか、それを、元康は反対に、大高近し！　——と、思われると、

「止めよ」

と、駒を抑え、前後の旗本たちを顧みて、

「ひと汗、拭おうぞ」

と、いった。

「伝えますか」

石川数正かずまさが、元康の意を疑つて、念を押すと、

「伝えよ、全軍へ」

元康は、ためらいなくいう。

止め。

止め。

長蛇の列へ、合図は次々に、伝令されて行つた。大高の城が近づくと同時に、敵の丸根、鷲津とりでの砦も間近なので、二千の兵と、千余の荷駄は、火気を戒めいまし、声もひそめ、極力、密ひそ

かに進んで来たのであった。

だが――

ここまで気負い抜いて来た将兵たちは、止れ、の命令に、かえって気を挫くじかれたように、「や。どうしたのか」

と、がっかりした。

将兵たちの頭に直ぐ思い出されたのは、元康の初陣ぶりを見て以来、定評に考えられている、御主君の石橋を叩いて渡る堅実主義が――またここでも大事をとって踏み止まったものだろうということだった。

慎重主義、堅実戦法もよいが、およそ兵を動かすには戦いの機微いきびというものがある。機は寸間に過ぎるものだし、機を逸したら、すでに戦の勝目いくさはまったくつかみ難いといつてもいい。

「なぜここで」

と、それを考える将兵は、動かぬ前方の本部をながめて、もどかしく思った。

「このまま遮さえぎる敵へぶつかって行き、大高へ荷駄隊を押し通してしまえばよいに、時移している間に、鷲津、丸根の敵方は、いよいよ備え立てして、必死に喰止めるにちがいない

が」

誰の憂いもそこにあつた。

兵力から見ても、地形から見ても、いづれは無謀な血路を通つて、しかも、迅速の機をつかまない以上——到底、千余駄に積んだ脚の重い小荷駄軍を、大高の城門へ無事に入れることは、知れ過ぎていゝほど、至難な業であつた。

出るのか。

退くのか。

このまま、夜を明かすのか。

司令部の意志がはつきり分らないうちは、止まつていても、將兵たちの心は少しも休んではいかなかった。

むしろ徒らな武者ぶるいに、

「ちえツ」

と、地だんだを踏む兵もあり、星にいななく悍馬もある。

が、その焦躁は、そう長い時間ではなかつた。前方の伝令は、密やかにまた、電瞬の迅速で、合図を伝えて来た。

すすめ。真一文字に！

と、いう令である。

部隊部隊で、采を振る風が鳴った。真つ黒な長い人馬が、奔流のように動きだした。しかし、目ざす地点は、大高の城ではなかった。ここよりは二里も奥の、国境の先の敵地、寺部の城へ奇襲せよ、という意外な命令なのであった。

「寺部へ、寺部へ！」

口々に云つて励まし合つたが、大将元康のいる部隊のほかは、誰にも、何でそんな敵の奥地へ深く襲せて行くのか——まったくその夜の闇のように、元康の意中がわからなかった。

夕立のように、馬も人も、足なみが迅くなった。

二千の将兵の具足が、足音と共に、ぎっぎっぎつと鳴った。

千余駄の馬の口輪や金具が、馬のいななきと一緒に、鏘々とひびいた。

それが黒々と縦隊になって、街道を押しに行くのである。行くほどに間もなく、左手の山に、味方の孤城、大高の白壁が見え、柵門が望まれた。

「オオ、火を振っている！ 狭間から松明を振っている！」

「味方だ」

「餓死がしに頻している城の者だ」

駈けつけつつ、それを山に認めた松平勢は、誰も彼も、眼がしらが熱くなるのを覚えた。ここに味方の——千余頭の小荷駄を積んだ兵糧は来たのだ。

そして、二千の兵も加勢に。

もう半年以上も、あの孤塁に抛よつて、四面を敵の砦とりでにつつまれて、木の皮を喰っている城方の人々は、この夕べ、

(援軍、近し！)

と、知って、どんなに歓喜したことか。暮るる空も待ち遠く、城の狭間から首をのばしていたことか。

誰にも分る。お互いは侍だ。しかもその孤塁のうちには、友もいる、骨肉もいる。

おおーい。

と、呼べば答えもしそうな距離なのであった。だが、援軍松平勢の縦隊は、少しも足なみを緩ゆるめなかった。

いや、部将も大将元康も、

「急げッ」

と、駒首を駆り立て、旗さし物も馬印も、低く伏せて、

「わき見すな！ 真つ直ぐに。——さえぎる敵は薙なぎ捨てに、突き伏せたら、踏みこえて通れ」

ここは西へ真つ直ぐに、もう四、五里とはない、熱田あつた街道だ。道は知れているが、進めば進むほど、何で、救援に來た目的の孤城大高を、横に見すてて駆け過ぎてしまうのか、生命は馬前に捨てるものとして來た兵たちも、大将元康の本意を知るに苦しむのだった。だ、だ、だッ——と、前列がふいに割れた。

「すわ」

と、槍の手は槍を、鉄砲組は鉄砲を、また、手綱を、太刀のつかを、ひしと握りしめたが、

「わき見すな！」

「衝つけ、衝ついて通れッ」

号令は、呶どごう号となった。

まつ黒な人影が、まんじ卍まんじになった。隊の後方の者は、通ろうとしたが、通れないのである。

もう合戦は、始まつていたのだ。

西側の雑木林から、秩序のない弾音たまおとが、ぱちぱちと聞える。赤い螢ほたるのように見えるのは、敵の散兵が、火縄を持って駆けまわる火であろう。

「撃てッ」

組頭くみがしらの声に、松平方の鉄砲もみな折敷おりしいた。

撃つてくる。

撃ち返す。弾木魂たまごだまに、一瞬いっとぎ、耳がガンとすると、もう兵の胆気たんきはすわっていた。

——しかし、気がついてみると、その隊だけ、本隊から置き捨てられていた。

聯絡に、戻つて来た一騎が、

「なぜ撃つ！ わき見すなという令が聞えなかつたか、はよう来いッ。進むのだッ」

呶鳴られて、

「まだ進むのか？」

と、隊伍を乱したまま追つて、辛からくも本隊に合することができた。敵は、鷲津、丸根の砦とりでを出て、絶えず突風のように奇襲をしかけてくる。それと戦い戦い駆け通るのだった。

——そしてすでに、大高の城は、一里余も後に見られ、兵は、国境ふかく、敵地を踏んで

いた。

それと共に、気づいてみると、千余の小荷駄と、元康の旗本隊約五百が、いつのまにか落伍していた。

「どうしたのか」

全軍の四分の一にあたる人数だし、大将のいる主隊を見失ったので、松平勢はやや動揺しかけたが、そのうちに、

「寺部を奪れッ」

と、いう号令であった。

卒は元より、小隊の組頭ぐらいなどころでは、いつも戦は行き当りばツたりだった。大局のことは何も分らないのである。ただ采のうごくまま、号令によって血をかぶり、号令によって突きすすむ。——もしくは退く——それだけの進退しかなかった。

敵の寺部城は、眼の前に在る。けれどこんな敵地の深くへはいつて、しかも目的の大高の救援をよそに、何のため無謀な攻撃にかかるのか。

惑いはするが、惑っている間などはない。味方の先鋒はもう木戸へかかり、燃え草を積み、火を放ち、所々の民家をも焼き立てているのだ。

火光のなかに、血戦は始まった。寺部の兵が城内から斬って出て来たのである。これは織田のうちでも精鋭な佐久間大学の麾下きかのものだ。ここの砦とりでにいる織田軍の兵は、日頃の退屈を憎んで闘志に満ち満ちていたところでもある。松平勢はかなりの脚速きやくそくで長途を殺到したばかりなので、

「ござんなれ」

と、ばかり出て来た城兵の戦闘力には、一たまりもなく押し返された。

「三河武士の名折れぞ」

と、乱軍のなかで、人間の声とも思えない声がわめく。

三河武士の名折れぞ。これは三河武士の口癖くちべしだった。いや戦国武士のひとしくいった口癖でもある。

戦いくさに敗れるということ以上、敵に唾つばられることはもっと辛い恥だった。無二無三な苦戦だった。わずかに諸方へ放った火によつて、猛烈な城兵の突撃を幾分かくいとめてはいたが、そのうちに、

「鷲津の兵が背後から来る」

「丸根の敵も」

と、いやがうえにも、松平勢は重圍のなかに、乱れ立った。

当然だ！

誰も思つた。

大高城の抑えとして、大高と対峙している敵の幾つかの砦を、まるで無視して、奥地へ進んで来たのである。

その上に、寺部へ火を放けたので、鷲津、丸根の敵は、

「さては、小人数の寺部を目がけて、松平勢は奇襲しかけると見えた」

と、思い、敢えてやり過しておいて、戦い酣と見るや、退路を断つて、包圍をちぢめて来たものにちがいない。

「来たかッ。——鷲津、丸根の砦の兵が。——慥かにそれか」

石川数正、酒井与四郎、松平左馬助などの部将たちが、口々にあたりの兵にたずねた。駈け交い駈け交いながら、物見や足軽頭などが、声を囁らして告げた。

「かなりの大軍です。鷲津、丸根の兵のみか、善照寺、中島などの砦の兵も、挙げてこちらへ襲せて来たようでごさる」

聞くと。

石川、酒井などの部将たちは、初めて、合戦の目的を達したように、

「しめたッ」

「全軍、急速に退け」

と、槍を高く振って、炎々と焼けている部落の真ん中を駈け通って、敵の弾音も、また、嗤う声も背にして、潮のように退いて行った。

大高城から二十町ほど距った街道の横に、密生した松山が幾つかある。

その松山の頂に、物見していた部将が、訝のような声を出して、山蔭の闇を見下ろしながら、いちいち報告していた。

——寺部の附近で、火の手があがりましたぞ。

火炎は七カ所程に。

ややしばらく、間を措いてから。

「驚津の敵が、寺部のほうへと、駈けつけて行きまする！ 二百！ 三百余り！ ——総勢で、四、五百の兵とみえまする」

山蔭の闇からは、何の答えもない。墨壺のような暗さである。

物見の声が、また響いた。

「おお！ 丸根の砦の人数も。——鷺津、丸根のふたとりで二一砦、今は、兵を挙げて、寺部の大事と、駈け行きました」

そのことばが終ると同時に、山間に点々と燃えいぶりだした松明たいまつが、二十、三十、五十と増して、そこらの山肌を赤く染めだした。

「それッ」

兵機をつかんだ一軍団が、真つ黒にそこから駈け出した。それは、寺部へ寺部へとまっ轟しぐらに前進するうちに、味方さえ知れぬほど迅速に、熱田街道から横道へ外それて、そこに潜ひそんでいた松平元康の旗きか下約四百の兵と、千余頭の背へ兵糧を積んでいる小荷駄隊の馬の列であつた。

元康の計つた兵機は、思うつばに、大高城への道を開いたのである。

たとえ忠烈な二千の三河武士を血草のなかに捨てる気でも、敵の鷺津と丸根の要砦ようざいが、大高への道を抑えている以上、脚の重い輜重馬しちゅうばを千余駄も曳いて通ることは、絶対でできない業わざであつた。

その出来得ない難役へ、今川義元は、質子ちしを向けたが、元康はその難命よろこを欣よろこんでうけて、しかも見事に為果しはたした。

無数の松明が照らす道を、千駄の輜重馬は勇みに勇んで大高城へと通った。餓死にせまっていた城門の中へ、その烈々たる火の明りと、千駄の馬の蹄の音がながれ込んだ時、城内の将兵は、思わず歓呼をあげた。そして自分らのあげる声かぎりの歓呼に、涙をながしていない者は一兵もなかった。

天機と人

この冬中、国境の小ぜりあいはやや小康を得たかに見えたが、それはかえって大きな動きを取る時の力の準備期であった。

翌、永祿の三年。

肥沃な海道の麦は青々とのびてきた。花がちつて、新樹の若葉のにおいが蒸れ立って来た初夏である。義元は、上洛軍の出勤を、府中から発令した。

大国今川の大規模な軍備とその旺んな行装は、宇内の眼をみはらせた。また、その宣言は、弱小国の胆をすくませるものだった。

——わが軍の行くをさえぎる者は伐たん。

——わが軍の行くを迎えて礼する者は麾下きかに加えて遇ぐうせん。
と、いうのである。簡単に明確な宣言だ。

しかし、一面から見れば、いかに義元以下の今川家の宗族たちが、天下を人もなげに観みているかがわかる。

陣日誌によれば。

出兵の令は、五月一日に発しられ、今川与党の各領内の諸城へも各部門の将士へも、同時に、出陣令が下った。

端午たんごをすまして、五月の十二日に、義元の本陣は、嫡ちやく子の氏真うじまねを留守居として府中に残し、沿道の領民が歓呼して見送る中を、歩武堂々ほぶどうどう、天日の光を奪うばかりな華麗豪壮な武者、馬印、大旆たいはい、旗さし物、武器、馬具など絢爛けんらんな絵巻をくりひろげて、上洛の途にのぼった。

兵員の実数は、約二万五、六千人と見られたが、称して、四万の大軍とわざと触れて行つた。

それより二日前。

前衛軍の先鋒は、十五日に池鯉鮒ちりふの宿にはいり、十七日には、鳴海方面に近づいて、織

田領の諸村へ、放火していた。

天候は、毎日、暑いくらいな晴天つづきで、麦畑の畝も豆の花のさいている土も白っぽく乾いていた。

その青空へ。

あちこちの部落の焼ける黒けむりがのぼっていた。けれど、織田領のほうからは、鉄砲の音一つして来なかった。百姓たちは、あらかじめ、織田家のほうから避難を命じられていたと見えて、どの家にも、家財一つなかった。

「この分では、清洲も空城あきしろとなっておろう」

今川家の将士らは、むしろ垣たんたん々とした道の無聊ぶりように、武装の気け懶だるさを思うくらいだった。

大将義元は、十六日、岡崎にはいったので、刈屋かりや地方その他には、守備隊と監視兵の配備を厳しくした。

岡崎の城には、松平元康をはじめ、元康の手飼の三河武士たちは、ほとんどいかなかった。——義元の本陣が通過するにあたって、必ず猛襲して来るであろうと見られている敵の丸根とりでの砦うを伐つべしと——疾とく前方へ出陣していたからである。

去年。

元康が、大高への兵糧入れに働いた折、義元は、その門出に、

(首尾よう仕果したら、この度こそは三河への帰国の宿望、かなえて得さすであろう)

と、彼へ約したが、その後、義元はそのことを忘れてもしたような顔して、今日にいたるまで何の沙汰もなかったのである。

腹にすえかねた三河武士の硬骨な一部には、

(この機会に)

と、義元の上洛をしておに、画策かくさくする動きもないではなかったが、元康はゆるさなかった。そして、唯々いらいとして命を奉じ、ふたたび前線へ出て、丸根砦まるねとりでの手強い敵を攻撃していた。

静かであった。清洲きよすの城は、今夜もひそまり返った天地の中に、いつもの通り、無事な灯ともが点っていた。城下の領民は、

——ああ灯ともが点っている。

と、特にそれを見まもるのだった。

けれどそれは、今にも襲わんとする暴風雨の前の灯に見えた。そよとも動かないお城の樹々は、むしろ無気味な颯風たふふうの中心にかかった時の「死風」の静寂しじまを思わせた。

城内からはまだ、何の布令ふれも領民には出ていない。避難せよとも、抗戦の準備をせよ、ともいわれてない代りに、

(安堵あんどせよ)

という布告もなかった。

商家はいつも通り店をひらいていた。職人は常の如く仕事していた。百姓も耕作していた。

けれど、街道の旅人の往還は、数日前からびたと止まってしまった。

それだけに、町はさびしい。何となく落着かないものが漂ただよっていた。

「西上して来る今川の大军は、四万という大军じゃそうな」

「どう防ぐおつもりやら。……織田様では」

「どうにも、こうにも、防ぎようはあるまい。何というても、今川勢に較べたら、十分の一ほどの御人数にも足らぬからの」

町では、不安な顔と顔とが、顔を合わせれば噂であった。

その中を。

きようは、佐々内蔵助成政さつさくらのすけなりまさが、春日井郡かすがいごおりの居城から、小人数で清洲の本城へ駆けつけてゆき、きのうは、愛知郡あいちごおり上社かみやしろの柴田権六が登城し、おとといは西春日井にしかすがいの下方しもかたぎこんのしょうげん左近将監にわごおり、丹羽郡の織田与市、海東郡津島の服部小平太はつとりこへいた、羽栗郡栗田の久保彦兵衛ほひこべえ、熱田神宮の千秋加賀守ちあきかがのかみと——次々におびただしい織田方の将星が、通るのを見た。

退城して、領地の郡へ、引返してゆく将もあるが、少くも、何分の一かは、先頃から本城にふみ止まっている様子であった。

(今が境目——)

と、漠然とではあるが、領主の浮沈を案じている領民は、そうした将星の頻繁ひんぱんな往来を克明に記憶していて、

(今川家へ降伏なさるか、お家を賭して戦うか、御評議が長びいているのであろう)と、察していた。

民衆のそういう感覚は、眼に見ない政廟せいびょうのことではあるが、たいがい当らずといえども遠くないところを覚さとっていた。事実、その紛議ふんぎは、幾日も城内で繰り返されていた。

いつの場合でも、硬軟ふたつの意見は対立するもので、「万全」と「お家大事」を口にす
る者は、この際、一応でも、今川家の軍門に降くだることを、上策として主張していた。

けれどそれは、長い紛議ぶんぎにはならなかつた。信長の肚はらが先に決まっていたからである。

老臣や一族をあつめて評議をひらいたのは、その肚はらがま構えを知らすためであつて、穩健な
保身の方法や、旧態以下の領土の保持策を訊くためではなかつた。

信長の肚を知ると、「心得て候う」と、ばかり勇躍して、持場持場へ歸つた将星も多か
つた。

信長も、また、

「ここに用はない」

と、努めて彼らを即刻陣地へ追い返した。

従つて、清洲は、平常と変らないほど、静かでもあつたし、特に人数もふえていなかっ
た。しかし、さすがに信長は、ゆうべも夜半に、何度となく起きて、軍飛脚いくさびきやくの齎もたらして
来た報告を披ひらいたし、今夜も、極めて粗略な夕食をすますと直ぐ、大広間の陣務の席へ着
いていた。

そこには、数日来、彼の前を去らずに詰めきつてゐる諸將が、さすがに、沈痛な眉をな

らべ、織田家興つて以来の国難を、各がその面上にも湛たえていた。

寝不足でありながら皆、青白く冴えきつた面おもてをしていた。

森可成よしなり、柴田権六、加藤図書ずしよ、池田勝三郎信輝——その他の帷幕いばく。

席をすこし下つて。

服部玄蕃はっとりげんば、渡辺大蔵わたなべだいぞう、太田左近おおたさこん、早川大膳はやかわだいぜんなどの諸士——物頭格ものがしらかくの人々。

次の間、その次の間にも、勿論家中の重なる者が詰め合っていた。

藤吉郎の如きは、ここから遙か、幾部屋の端にいるのか知れなかった。

なべて息づまるような沈黙しんもくが、おとといも昨夜ゆうべも今夜も占めていた。

不吉なので、この場合、曖おくびにも口になど出せないことだが、心ひそかに、

(通夜のような——)

と、その夜の白い燭しよくと並居る人々とを見まわした者もあつたらう。

その中で、時折、

——は、は、は、は、は、は、は、は……

と聞えるのは、独り信長の笑う声であつた。

どういふことについて語っているのか、末の者にはよく分らないのであるが、頻りと、

信長の哄笑するのが、二の間三の間までも、時々聞えて来た。

——かと思うと。

ばたばたばたと、お表から取次役の者が、いつにない早足で、大廊下を駈けてくる。それツと、待ちかまえていた信長の侍側が、戦況の報告を聞き、或いは、前線から来た軍状を取り次ぎ、信長の前に披露する。

「あ。……これは」

代読して、信長へいう前に、柴田権六すらも、顔のいろを変えていた。

「殿」

「何か」

「ただ今、丸根の佐久間盛重の砦から、今暁より四度目の早打が到着いたしました」

「あ。左様か」

信長は、左の脇息を、膝のまえへ置き直して、

「——して？」

「駿河の大軍は、碧海郡の宇頭、今村を経て、夕刻早くも、沓掛に押し迫って来る様子とござりますが」

「そうか」

信長は、いったきりであった。眼は広間の大欄間へ行っている。それは虚ともいえる眼だつた。

(——さすがに、当惑しておいでとみえる)

人々は、いかに日頃の彼の剛愎ごうぶくに信賴してみても、そう思わずにはいられなかつた。

沓掛くつかけ、丸根といえ、もう織田家の領土だつた。その一線に散在している数カ所の要

砦うさいが突破されたら、尾州平野は一瀉千里いつしやせんりに清洲の城下まで、ほとんど何の支えもない

といつていい。

「いかがなされますか」

堪たまりかねたように、柴田修理権六はいつた。

「今川勢は、四万の大軍と聞えます。お味方は、四千に足らぬ小勢。わけて、丸根の砦には、佐久間盛重の手飼が、たかだか七百ともおりませぬ。——今川の先鋒、松平元康の一手のみでも、二千五百とあれば、怒濤のまえの一舟」

「権六、権六」

「夜明けまで、丸根、鷲津が、防ぎ得ましようや否やも……」

「権六ツ。聞えぬか」

「はッ」

「何をいうぞ独り語を。——知れたこと、繰り返しても、益はない」

「でも」

云いかけるところへまた、廊下走り忙しい取次の躑音あしおとだった。

脇部屋わきべの口元で、直ぐその取次が、

「中島砦とりでの梶川かじかわ一秀かずひでどの、ならびに、善照寺砦さくまのぶとぎの佐久間信辰さくまのぶとぎどのらも、唯今、相前後

して、伝令のお使者、早馬でお着。——御報告の急状二通、お手許まで御披露を仰ぎます
る」

と、声も物々しい。

玉砕を覚悟している前線からの報告は、皆、悲壯を極めたものだったが、今届いた中島、善照寺の二陣地から来た飛状にも、

（おそらくこれが、御本城への、最後の通牒つうちょうと相成るでしょう）

と、してあった。

防禦線の味方から本城への遺書にもひとしいその書状にはまた、敵の大軍の配置と明日

の彼の攻勢とが予測してあつた。

「もういちど、敵の配置の所だけを読みあげてみい」

信長は、脇息きょうそくを抱いたまま、代読の柴田権六へいつた。

権六は、書状のうちの、箇条書かじようがきになつている部分だけを、信長に限らず、居並ぶ一統の者へも聞かせるように再読した。

一……丸根砦とりでへの寄手

約二千五百余

主隊長松平元康

二……鷺津砦への寄手

約二千余

主隊長朝比奈主計あきひなかずえ

三……側面援隊三千

主隊長三浦備後守

四……清洲方面前進主力

大略六千余人

葛山くすやまのぶさだ信貞、その他各隊

五……駿河勢本軍

兵数約五千余

柴田権六は、それに云い足して、註釈を加えた。以上の数字に見えるほかに、敵の潜在的な小部隊が何ほどあるか、その点は不明である。

また、先年来、頑強にもちこたえて来た今川方の大高城が、この際、俄然重要な存在となつて来た。何しろ大高は、御領土内へ蚕さんしよく蝕して来た飛び地にあるので、その地の利がものいとなると、味方の防禦線は、絶えず背後や側面を脅おびやかされなわけにはゆかない。

「……………」

「……………」

信長をはじめすべての者は、権六勝家のことばが聞えている間も、彼が黙って書状を巻いて信長の前へ納めて後も、深沈しんちんとただ白燭しよくを見まもっていた。

飽くまで戦う！

という方針は決しているのだ。もう評議の余地はないのである。だが、こう手をつかね

てなすこともなくいることが一同は苦痛だった。

鷲津、丸根、善照寺などといつても、それは遠い国境ではない。馬腹へ一鞭いちべんすればすぐ届くところなのだ。四万と聞える今川勢の潮のような大軍が、もう眼に見えるここちがする。耳に聞えるここちがする。

「雄々しい、御決心もさることながら、玉砕をとるのみが、武門とも思われませぬ。もう一応、御分別あつてはいかがにござりましょうや。——たとえこの佐渡が、身に卑怯ひきようもの者の誹そしりをうけましようとも、お家維持のためには、なお、御熟考の余地があるものと……押して申し上ぐる次第にござりますが」

沈みきつた座の一方から、憂いに溢あふれた老人の声がした。この中では最古参の林佐渡であつた。先に、信長を諫いさめて自刃した平手ひらてなかつかさ中務と共に、先代信秀から信長を頼むと遺言された三老臣のうちで、今生き残っている者はもはや佐渡一人であつた。

佐渡のことばは、居ならぶ人々の同感と同情をあつめた。人々はひそかに、信長がこの古老の最後の忠言をうけ容ゆるれてくれるようにと祈つた。

「……はや、何刻なんときじや」

信長は、まるでべつなことを呟つぶやいて、それにうろたえる人々の眸ひとみを見まわした。

「子の下刻げこくにござります」

誰か、答えた。

次の間のほうの声であつた。

それでまた、言葉はとぎれ、夜も更ふけたという気持と共に、一同の姿も沈みかけたが、

「あいや殿。殿。もう一応の御考慮ありますよう。御評議遊たばしますよう。強たつて、佐渡よりお願い申しあげまする」

彼は遂に、自分の席をすこし動いて、白髪頭しろがたまを、信長のほうへすりつけて云つた。

「夜も明けなば早や、お味方の兵も皆とりも、今川勢の前に、一たまりもなく潰ついえて、取り返ししのつかぬ大敗となりましょう。——そうなつての上の和議と、一瞬前に結ぶ和議とでは」

信長は、ちらと見て、

「佐渡か」

「はッ」

「老年の身で長座は大儀であろう。もはやここには、談議することは何もない。夜も更ふけた。退さがつて休め」

「……余りなおことば」

佐渡は、ぼろぼろと落涙した。お家も末と思われたからである。と同時に、役にも立たぬ老人とされたことも口惜しかった。

「それまでの御決心とあれば、佐渡ももはや御戦意に対し、とやこう申しあぐることはいたしませぬ」

「するな！」

「はいッ。……しかし、御軍議はなされませ。一昨夜も、昨夜、またきようも宵から、ただこう大勢が、手をつかねて刻々迫る敵の大軍の報告ばかり聞いていて何といたしましよ。——出でて戦うならば戦うように。また、籠城遊ばして敵を城下に引き寄せて悩ましてくれんなさるなればそのように」

「そうだ」

「それには、加藤殿や柴田殿が最前披瀝ひれきされた御意見に、この老人も同意にござります。殿には、城を出て決戦すると、動かぬ御意のように存じますが」

「左様」

「四万の敵の大軍に対し、お味方にはその十分の一にも当らぬ小勢。平野に出て戦うことは、千に一つの利もござりませぬ」

「籠城に利があるか」

「まだまだ、城壁にたて籠つてのことならば、そこに何らかの策も講じられましょう」

「策とは」

「たとえ、半月一と月の間でも、今川勢を^{させ}支え止めて、その間に、美濃へ、或いは甲府へ、密使をつかわして、好条件の下に援軍を頼むなり、また戦法としても、寄手をなやます工夫となれば、御座辺にも、智謀の士は^{すくな}尠しとさせぬ」

信長は、天井へ響くような^{こうしよう}哄笑して、

「はははは。それは佐渡、常時の戦法というものじゃ。織田家にとって、今は、常時か非常な場合か」

「お答えまでもございませぬ」

「十日二十日、わずかな命数を延ばしたところで、持てぬ城は持てぬ。……だが誰がいうた。運命の方向は、人間の眼に、もう最後と見える窮極から転機するものだ……」

「……………」

「^{あん}按じるに信長には、今が逆境の谷底と見えた。おもしろや逆境。しかも相手は大きい。この^{おおなみ}大濤こそ、運命が信長に与えてくれた生涯の天機やも知れぬ。など^{いたず}徒らに、小城の

殻からにたて籠こもつて、穢きたなき長らえを縛しいろうや。人間、死のうは一定じようじゃ。そち達の生命も、この度は信長に捧げよ。共に蒼天の下に出て、広々と、振舞つて死のうぞ」

云い断きつて、信長は、すぐその語気から一転して、

「ちと、誰も彼も、寝不足の面持おももちよの」

微苦笑をもらし——

「佐渡もやすめ。その他の者も、はや眠りについたがよい。まさか、眠れもせぬ程な、小心者はこの中にはおるまい」

と、いった。

そういわれては、寝ないわけにゆかなかつた。実際、一昨夜から十分に寝ていた者は、この中では誰もなかつた。信長だけは例外に夜も寝、昼寝も搦とっていたが、それも寝所に入らず、仮寝の態ていだつた。

「では。明日は明日」

佐渡は、諦あきらめを呟つぶやくように、主君へも一同へも会えしやく釈して、先に退さがつた。

「御免を蒙こうむりまする」

次に。

また次に。

齒の抜けるように、席にいた者は順々に退座した。

やがて信長は、その広い席に、ただ独りになった。やっと、気が軽々となったような面持でもある。

振り向くと、彼のうしろには、二人の幼い少年が凭もたれ合つて居眠りしていた。小姓の者である。その一人は、佐脇さわき藤八郎とうはちろうといい、ことし十四の少年で、信長の勘氣にふれて先年放逐ほうちゆくされた、前田犬千代の実弟だった。

「於藤おとう。……これ、於藤」

呼びさますと、

「はいッ」

藤八郎は、真つ直ぐになつて、口のはたを手の甲で拭ふいた。

「よう寝るやつ」

「御勘弁くださいまし」

「いやいや、叱るのではない。むしろ賞ほめてつかわしたいほどじゃ。ははは、信長もちと眠る——。何ぞ、枕になるものを貸せ」

「このまま」

「そうだ。夜も明けやすうなつたし、うたたね 転寝には、よい季節よ。……おう、彼方の千鳥棚にある手筈てぼこをかせ。枕に……」

云いながら、信長は、身を曲げて、おとう 於藤がそれを持つて来るまでひじ 脇で頭を支えながら、浮舟のようにからだ 軀をうか 泛していた。

ふぼこ 文筈の蓋には、まきえ 室町蒔絵の松竹梅の図が盛つてあつた。信長は、頭を当てがいながら、

「よい夢枕……」

独りでニコと笑いながら眼をふさいだが、やがて、小姓の於藤が、数多くの燭を一つずつはしから消してゆくうちに、信長の微笑も、雪の解けるように薄らいで、いつのまにやら深々と、いびき 鼾声の中の寝顔となつていた。

「殿さまには、ぎよしん 御寝なされました……お静かに」

於藤は、侍たちの詰部屋へ、そつと、告げに行つた。

「そうか」

と、そこにいる人々も、重苦しい——しかし悲壮な眼いろをもつて、うなず 頷いた。もう絶対なものが、誰の胸にも覚悟されていた。

絶対とは、勿論、死以外の何ものでもない。城内は、その夜、死を直前に見つめながら刻々夜半を過していた。

「——死ぬはいいが、いつたいどう死ぬのだ？」

不安といえ、それだけだが、まだ誰の胸にも、決まっていなかった。従つて肚のすわり切つていない者もあつた。

「お風邪かぜめしますな」

誰かそつと来て、信長のうえへ、小搔卷こかいまきを掛けて行つた。さいと呼ぶ侍女こしもとであつた。それから——およそ一刻とき（二時間）ほども眠つたろうか。残燭の灯皿に、油も尽きて、じじじと泣くような音をたてた。

信長は、むくと、頭をもたげ、突然、呼ばわつた。

「さいよ！　さいよ！　……。誰ぞおらぬかッ」

出陣しゅつじん

音もなく杉戸が開いた。

侍女のさいは、そこから手をつかえて、信長のほうを見、静かに後ろを閉めてまた、間近まで来て両手をつかえた。

「お目ざめにござりまするか」

「ウむ。さいか。……刻限は今、何刻頃？」

「丑の刻を、すこし下がった頃かと覚えまする」

「よい機」

「なんと御意なされましたか」

「いや、儂の物の具を直ぐこれへ」

「お鎧を」

「誰ぞに申しつけ、馬にも鞍の用意させよ。そなたは、その間、湯漬をととのえてこれへ持て」

「畏まりました」

さいは心の利く女であったので、信長の身近な用事は、平常もさいが心をくばっていた。さいは、信長の心をよく知っていた。さてはと思つたのみで、仰々しく立ち騒ぎもしなかつた。脇部屋に手枕のまま寝ていた小姓の佐脇藤八郎をゆり起して、宿直の者へ馬

の用意を伝え、自分はその間に早くも湯漬の膳部を、信長の前へ運んで来る。

信長は、箸を取って、

「明ければ、今日は五月の十九日であったな」

「左様でござりまする」

「十九日の朝飯は、信長が天下第一に早く喰べたであろうな。美味い。もう一碗」

「たくさんにお代え遊ばしませ」

「膳に添えた三三さんぼう宝の上にあるは何じや」

「昆布こんぶ。勝栗。……ほんの形ばかりに」

「おう。よう気がついた」

信長は、快く湯漬を喰べ終つてから、その勝栗を二つ三つ掌てに移して、ぼりぼり喰べ、

「馳走であった。……さい。あの小鼓こつづみをこれへよこせ」

鳴海なるみがた濁たとよぶ信長が秘蔵の小鼓であった。さいの手からそれを取ると、信長はそれを

肩に当てて、二つ三つ手馴しに打って見て、

「鳴るわ。四更のせいとか、常よりもいちだんと冴えて鳴る。……さい、儂みが一さし舞おう

程に、そなた、敦盛あつもりの一節をそれにて調べよ」

「はい」

素直に、さいは小鼓を、信長の手から押し戴いて、調べはじめた。

しなやかな白い掌てから、鼓の音は清洲城の広い間ごとへ、醒めよ醒めよとばかり高鳴つた。

「……人間五十年、化転けてんのうちをくらぶれば」

信長は立つた。

立つて、水の如く、静かな歩を運びながら、自身、小鼓の調べにあわせて朗吟した。

「……化転けてんのうちを較ぶれば、夢まぼろしの如くなり、ひとたび、生しょうをうけて、滅めつせぬもののあるべきか」

いつになく、彼の声は、朗々と高かった。今をこの世の声のかぎり——と、謡うたうように。

「滅せぬもののあるべきか。是これを菩提ぼだいの種と思いさだめざらんは、口惜しかりき次第ぞと、急ぎ、都に上りつつ、敦盛卿の御首みしるしを見れば——」

誰か。

ばたばたと、廊下を走って来た者がある。宿直とくのいの内にあつた侍であろう。具足の音をさせて、板敷へひざまずき、

「御乗馬の用意、整いました。何時いつなど、お召しを」
と、いった。

舞の手と足を、とんと同時に止めながら、信長は、声のほうへ振り向いた。

「岩室長門いわむろながとではないか」

「はッ。長門でござります」

物頭の岩室長門は、すでに具足を着、太刀を佩はき、直ぐにも、信長の馬前に立たつて、轡くつわを持つよう、身支度をして来た。

——が、見れば、信長自身はまだ鎧よろいも着けず、侍女のさいに鼓を持たせて舞っている様子に、

(おや?)

と、云いたげな、不審の眼を、そこへみはった。

たった今、お表のほうへ、

(御出馬の用意を!)

と伝えて来たのは、取次が小姓の佐脇藤八郎だったし、皆寝不足で疲れているし、神経ばかり尖とがっている際なので、何かの間違いではなかったのか? ——と、咄とっさ嗟に長門は、

自分の早支度と、信長の悠長なすがたとに、戸まどいを覚えた程だった。

いつもは、

(馬ツ)

と、信長がいったら、もう近習の支度が間にあわない間に、飛び出している信長なので、長門はなおさら、意外に思ったのであった。

「はいれ」

信長は、舞の手を、休めはしたが、舞のすがたは崩さずに云った。

「——長門。そちは果報者かほうものじゃ。信長がこの世の名残と舞う舞を、そちのみが見得るぞ。それにて見物候え」

(さてはやはり)

長門は、主君の心を悟ると、自分の抱いた疑いを恥じながら、広間の端へにじり入って、
 「御譜代ごふだい、家の子も数ある中に、長門一名のみが、殿の御一世の舞を拝見いたすなどは、御家臣の端と生れて、身にあまる果報。願わくば、長門にも、この世の名残うたに、謡うたわせていただきとう存じまする」

「うむ。そちが謡うか。——よかろう。さい、初めから」

「……………」

さいは黙つて、鼓と一緒にすこし頭を下げた。長門は、信長が舞うといえ、いつもの敦盛と心得ているので、

人間五十年

化転けてんのうちを較くらぶれば

夢まぼろしの如くなり

ひと度しやう、生しやうをうけて滅めつせぬもののあるべきか

謡うたっている間に、長門は、信長の幼少の時のお姿から、自分が側近く仕えて来た長年のことなどが、胸のうちに、長い絵巻を繰るように思い出されて来た。

舞う人、謡う人の心と一つになって、鼓を打っていたさい女のしよ白い面おもてにも、涙のすじが燭に光つて見えた。しかし、さい女の鼓の音は常よりも冴えて、何か烈しくさえあつた。

——花たもとの袂たもとを墨ぞめぞめの十市といちの里は墨衣

今着てみるぞ由もなき

信長は、扇を投げて、

「死のうは一定!」

云いながら、手ばやく、鎧を着け、具足をまとい、

「さい。信長が討死と聞えたなれば、すぐこの城に火を放^かけよ。見穢^{みぎた}のう焼け残すなよ」

「畏まりました」

さい女は、鼓^{つづみ}を置いて、両手をついたまま、面^{おもて}を上げなかつた。

「長門。——貝ツ」

「はツ」

長門^{ながと}は、先へ、大廊下を駈け出して行つた。

信長は、可憐^{いじら}しい女童^{めわらべ}どもの住む奥へ向い、また、この城にある祖先の霊^{むか}へ対い、心

の底から、

「さらば」

と、いつて直ぐ、冑^{かぶと}の緒をしめながら表方へ走つた。ぽう——と、まだ暗い 暁^{ぎょうてん} 天に、

出陣の貝は鳴り出していた。

暁の闇は濃い。

雲きの断れ間に、小糠星こぬかぼしの光が、まだ鮮やかであつた。

「御出陣じゃぞ」

「えッ？」

「殿の御出陣とある」

「真まことか？」

触れまわる表方の小者。

驚いて駈け出合う侍たち。

それも多くは、台所方の者とか納戸なんどの役人とか、戦場の役には立たぬ留守居の老武士が多かつた。

挙こぞつて、大手の土坡とぼくち口まで見送りに駈け出して来たのである。それは清洲城内の男の全部といつてよい頭数であつたが、わずか四、五十人足らずであつた。

いかに、城内も信長の身辺も、この際は手薄てうすだつたかが知れよう。

信長がこの日の馬は、月輪つきのはとよぶ南部牧まきの駿馬しゆんめだつた。若葉の風暗く、手燭の明りが明滅する大玄関の前から、信長は、螺鈿鞍らでんくらをおいた駒の背にとび乗り、八文字に開かれて中門から大手の土坡口へ、鏘そうそう々と、鎧よろいの草摺くさずりや太刀の響きをさせて駈け出し

て来た。

「おお」

「殿さま」

見送りにかたまっていた留守居の老若ろうにやくは、われを忘れて、土下座から声をあげた。信長も、

「さらばぞ」

と、右へ云い、また、

「さらば——」

と、左へ云つて、暗に、今こんじょう生の別れを、多年召し使つて来た老人どもへ云つた。城を失い、主を失つた老人や、女童めわらべたちの身の末が、いかに惨めみじなものであるかを、信長は知っていた。——思わず、眼がうるんで来るのであつた。

熱い眼がしらを、じつと、ふさいだ一瞬に、駿馬しゅんめ月輪つきわは、もう城外へ駈けていた。疾風のように、暁闇を駈けていた。

「殿ッ」

「殿！」

「しばらく」

遅れじと、彼の後から駈け続いて来る人々といえは、物頭の岩室長門をはじめ、山口飛騨守、長谷川橋介、それに小姓の加藤弥三郎、最年少者の佐脇藤八郎。

あわせて、主従わずか六騎。

ともすれば、信長の駒脚に、捨てられもせんと、近習の面々は、のめり蹠めくばかり駈けた。

信長は、後も見ない。

敵は、東に。

味方も前線にあり。

すでにその死処へ行きつく頃には、陽も高かろう。この国に生れてこの国の土に帰す、実に何でもないことである。永劫えいこくの時の流れから今日という一瞬を見れば。

信長は、駈けつつ思う。

「あいや！」

「わが君ッ」

突と、町の辻から、叫ぶ者がある。

「おう、森の人数か」

「さん候う」

「柴田権六にてあるか」

「御意！」

「早かったぞ」

賞^ほめて、鑑^{あぶみだち}立に伸び上がりながら信長、

「して、人数は」

「森^{もりよしなり}可成の手に百二十騎、柴田権六が手に八十騎、あわせて二百余。お供仕ろうずと、

控えておりました」

森可成の一手、弓之衆の中に、浅野又右衛門の顔が見え、また、足軽三十人の頭^{かしら}として、

木下藤吉郎の顔も、まごまごして交^まじっていた。

雑兵に少し毛の生えたぐらいな藤吉郎の存在ではあつたが、

(いるな。猿も)

ちらと、信長の眼に入った。

彼のその眼は、暁闇の中に気負い立つ二百余の兵を馬上から一眼に見、

(我にこの部下あり！)

と、^{かがや}耀きを加えていた。

敵四万の怒濤へ当るに、数としては、元より一片の小舟、一握りの砂にも足らない兵ではあるが、

(義元にこの部下ありや！)

彼は敢えて問いたい。

将として、人として、ひそかな誇りすら覚えるのだ。

敗るるも自分の兵は、あだには負けない。何ものかを久遠くおんの地上に描きのこして最期の枕を並べるであろうと思う。

「夜明けは近う覚ゆるぞ。——さらば行けッ、続けッ」

信長は、指さした。

そして真つ先に、彼の駒が、熱田街道を東へ駆け出すと、両側の民家の軒ばまで、低く立ちこめている朝霧をうごかして、二百余の兵は、雲の如く、

「わあアッ」

と、声をあげてつづいた。

隊伍も陣列もない。

ほとんど、われがちなのだ。

およそ一国一城の大将の出陣とあれば、民家は一齐に業を休めて軒ばを浄め、かりその忌み事にも気をつかつてその門出を見送り、兵は旗幟馬印を護つて陣列を作り、将は威武を飾つて、一鼓六足、国力のある限りな豪壮の美を押し国境へ出て行くのが常であつたが——信長は、恬として、そういう方式や虚飾にかまっていなかつた。

隊伍すらも充分に整えない早駈けなのである。しかも、死ぬ戦いときまっている。来る者は来い——として彼は先頭を切つて駈けていた。

しかし、落伍する者はひとりもなかつた。むしろ、進んで行く程、人数が殖えていった。召集が急なので、支度に間に合わなかつた者が、飛び入りに横丁から加わったり、追いついて来て、参加するからである。

その鬨の声と聲音に、明け方の眠りをさまされて、
「何か？」

と、路ばたの百姓家や商工の民家では戸を開けた。

そして、寝ぼけ眼で、

「おう、戦だツ」

とは叫んだが、まだ暗い朝霧の中を、眼をさえぎって駆け通った先頭の人が、領主の織かざさのすけ田上総介信長であつたとは、後でこそ思い当つたが、誰もその時それとは見なかつた。

ながと「長門、長門」

信長は、鞍から振り向いたが、岩室長門は、騎馬でなかつたので、小半町も遅れている人数の中にいるらしい。

馬首を揃えて、続いて来るのは、柴田権六、森よしなり可成。——それに熱田の町の入口から人数へ加わつた加藤かずしよ図書などであつた。

「権六ツ」

呼び直して、

「宮の大鳥居が早や見ゆる。熱田神宮の大前にて兵を停とめい。信長も参拝して参ろうぞ」
いう間に、大鳥居の下へかかった。信長がひらりと飛び降りると、約二十名ほどの部下と共に、熱田の宮の祠しかん官でもあり、また神領の代官でもあるちあきかがのかみすえただ千秋加賀守季忠が待つていて、

「お早いお着ちやく」

と、すぐ駈け寄って、信長の駒を預った。

「お、季忠か」

「はッ」

「迎え大儀である。祈願な捧げ申したい」

「御案内仕ります」

季忠は、信長の先に立った。

杉木立の参道は、霧しずくに濡れていた。季忠は、御手洗の泉屋に立って、

「お嗽ぎを」

と、うなが促す。

信長は、檜柄杓ひのきびしやくを把とつて、手を浄きよめ、口をすすいだ。

そして、滾々こんこんとあふれる神泉をもう一柄杓ひとびしやく掬すくって、それはぐツと飲みほした。

「見よ！ 吉兆ぞ」

信長は仰いでいった。後ろに続く旗本や大勢の兵へも聞えるようにいって、天そらを指さした。

夜はようやく明けていた。老杉の梢こずえあかねは茜いろの朝陽に染められ、暁あけがらす鳥の群れが高く

啼いている。

「神鴉しんあだ！」

「神鴉だ」

信長に和して、周まわりの侍たちも仰向いた。

その間に。

千秋季忠すえただは、鎧よろいのまま拝殿に上がって、信長に菅菰すがむしろを与え、その前へ、神酒みきの三宝を捧げて来て、土器かわらけを取らせた。

そして、瓶子へいしを持って、信長へ神酒を注つごうとすると、

「季忠、待て」

と、遮さえぎつた者がある。

見ると、柴田権六であった。

権六がいうには、

「千秋殿には、当熱田神宮の祠官職たるお役目上、神前のおつとめは当然なことながら、いかに御出陣の火急な際とはいえ、鎧具足のまま神酒みきを執とつて、拝殿かすずに侍まじりて作法やある。自身、具足を脱いで、衣冠を着ける違いとまなくば、他に神官も居られように、なぜそれらの者

にさせないか」

咎めると、千秋季忠は、にこと笑つて、

「今のおことばは柴田殿か。御注意はかたじけない。——しかし、鎧具足は神衣でござるぞ。わが神々も遠つ御世には、甲冑を召されて聖業の途に立たせられ給うた。不肖季忠も、きよう御合戦のおん供に従うからには、大御祖たちが具足し給うた御心をもつて心を鎧い、私慾私心の功名のためには戦わぬ所存でござる。——武人の甲冑は、故に、神官の衣冠にもひとしい清浄と私は信じますが」

権六は、黙つた。

そして階下を繞つて土下座する二百余騎の将兵の中に、彼も坐つた。

信長は、土器を干す。

拍手を高く打つて、願文を読んだ。

肅として、将兵はみな、低く頭を下げ、各の心の鏡に、神を映し取つて、祈念の眼をふさいでいた。

その時、唐突に、神殿の奥で、甲冑の触れ合う響きがして、二度まで拝殿の梁が揺れた。信長は、物の怪にでも憑かれたように、屹と眼をつりあげて、

「おお、あれ聞け。信長の祈願をよみし給うて、きよ用の合戦に、神々はわが軍の上に御加勢ありと覚ゆるぞ。——私心我慾、小功の争いなど、穢きたないき戦いくさすな。勝たば、天あまが下したのため、捨身しやしん奉公、負くるも、天が下、恥なき武もの士の死に方せよや」

廻廊に出て、こう呼ばわるように演舌すると、士卒も大地から生はえ立って、わあと、信長より先へ、参道を争って駈け出した。

信長が熱田の宮を出た時には、所々から馳せ集まった兵数が、いつの間にか、千に近くなっていた。

信長は、熱田神宮の春しゅん敲こう門もんから南門を出て、再び、馬に乗った。

その日の乗馬月つぎのわ輪わは、栗毛の牝馬めうまであったという。後に、信長は愛馬二匹の画を描かせて屏風びやうぶに作らせたが、その中にはこの一頭も描かれていた。

熱田の宮を出ると、それまで、疾風の如くであった信長の態度は、どこか緩かん々かんたる余裕を示し、駒の背へ、横乗りよこ乗りに身をのせ掛けて、鞍まへわの前輪まへわと後輪あごへ両手をかけながら揺られて行った。

もう夜が明けてきたし、雪崩なだれ打って先駈けを争って行く兵馬の登音に、熱田の住民たちは、女子供まで、軒下や辻々へかたまつて、見物していた。

そして信長の姿を、信長と知ると皆、

「あれが今、軍しに行くお人か」

と、呆れ顔した。

「心もとなや」

「勝ち給うことは、万に一つも、おざるまいげな」

などと囁いた。

清洲から熱田まで、鞍に踏みまたがったまま、一気に駈けて来たので、信長は鞍疲れを癒しているのだった。で、鞍の後輪へやや凭れぎみに横乗りして、

——死のうは——定

忍び草には何としようぞ

——定語りをこす夜の

小謡など口誦さんでいた。

「や、や」

「あの黒煙は」

町端れの辻まで来ると、兵馬は急に立ち淀んだ。

道を海辺にとつて、浅瀬を渡渉し、山崎、戸部の方面へ出て行くか、陸地を迂回して知多の上野街道から井戸田、古鳴海へさして行くか、行軍の疑問が起つたのと——同時にはるか、鷲津、丸根の方角と思しき彼方に、二カ所の黒煙が立ちのぼっているを見出したからであつた。

信長の眼も、それを見た。

さすがに、悵然と、悲壮ないろを眉にたたえて、

「鷲津、丸根も今、陥ちたとみゆる……」

大息したが、直ぐ、

「海沿い道は、渉れまいぞ。今朝は折ふし満潮の時刻。詮なし詮なし。山の手を駈けこえて、丹下の砦まで急ごうぞ」

と、旗本を顧みて云つた。それと共に、彼は馬から降りて、加藤図書を名ざし、

「熱田の町人頭がおろう。これへ呼べ」

と、いつた。

辻の人ごみへ向つて、呶鳴るのが聞えた。町人頭はありや、町人頭出でよと、兵たちも叫んで廻つた。

恐るおそる、二人の町人が、信長の前へすぐ引き出された。信長は、それに向つて云つた。

「そちども、信長を見るは、毎度で珍しゆうもあるまいが、今日は、駿河公方が鉄漿染めた珍しい首をやがて見せて進ずるぞ。さるほど、一代未聞のこと、信長が領下に生れた冥加ぞ。曠の合戦、高きへ上つて見物ないたせ。それもただではおもしろくない、町頭より熱田中へ触れなまわして、五月の菖蒲幟、七夕の門竹、その他、何にてもよい、敵の遠目に旗差物と見ゆるように仕構えて、木々の梢も、丘の上も、紅白その他の布をもつて翩翩と空を埋めよ」

「はい」

「心得たるか」

「ささやかな御奉公。致しまするでござります」

「よしッ」

半里ほど軍馬を進めてふり向くと、熱田の町には、無数の旗や幟がひるがえっていた。

——それは清洲の大軍が、熱田まで出動して、兵馬を休めてでもいるように見えた。

ひどい暑さだ。

陽が高くなると、ここ十日以上も雨のなかった大地は、ぼくぼくと馬の蹄ひづめに掘られて、その白い埃ほこりが皆、全軍の兵へかぶって行った。

後に古老の語り草にもいわれたが、この日、十九日の暑気というものは、まだ夏浅い五月ではあつたが、十数年来なかつたほどな暑気だったという。

山崎を越え、井戸田村の野道までかかると、

「やッ、敵ッ！」

「物見かつ」

と、突然、陣列が騒いだ。

昼顔の花が白つぼく見える野藪のやぶの蔭から、ふいに一人の破具やれぐそく足の男が飛び出したのである。男は、包囲されると直ぐ、槍を高く、直線にさし上げて、抵抗しない意志を示し、

「これは、甲州の名ある侍が成れ果てし浪人者あやまで候。——織田殿に御意得とうて、わざと御馬前に参じまいった。敵方の者と過り下されな」

大音でいった。

信長は、旗本や兵の頭越しに、

「誰にてあるか」

「おお」

と、遠く見つけると、浪人は槍投げ伏せて、大地へひざまずいた。

「武田殿が御内にて、原美濃守が三男、仔細な候て、鳴海の東落合に、年ごろ佗住居な仕る桑原甚内ともうす者でござる」

「ほ、原殿が子か」

信長は、小首をかしげた。

「して、これへの用事は」

「されば、父美濃守に申しつけられ、自分幼年中は、駿河の臨濟寺にあずけられ、喝食の修業いたしておりましたれば、治部大輔義元殿がお顔はよう見覚えております。今日の御決戦、いずれは乱軍、左候えば、それがし御陣借な申して、必ず、駿河の大輔殿が帷幕に迫り、鉄漿首を打ち取つて御覧に入れ奉らんの所存。——願わくば、この槍一筋、あわれお拾い下されませぬか」

「拾おう！」

信長は、野人のように、無造作な大声でいつて、

「甚内とやら、甲州武士の見とおしでは、きょうの合戦、信長勝つと見るか、義元優れり

と見るか」

「お答えにも及び申さぬこと。御勝利、疑いもござりませぬ」

「理由は」

「駿河公方の年来の驕慢きょうまん」
するがくほう

「それだけか」

「四万とは号するものの、敵の布陣の拙せつ」

「ウム」

「また、義元殿が本陣は、昨夜、沓掛くつかけを出て、今朝からの暑気に、人馬の疲労はもとより、情気を生じおるべしと存ぜられます。——何となれば、清洲の御人数は余りにも小、彼の驕慢は、すでに、戦わずして勝ったかの如く思いなしておるやと思われますれば」

信長は、心のうちで、

(この男、使える)

と、思つたらしく、鞍つぼを叩いて、

「いみじくも申した。信長の見るところと合致する。即座に、旗本へ加わり候え」

「はッ、かたじけの忝う存じます」

甚内は、人数のうちへ、飛び込んだ。道はやや低く、だんだん畑を駒の頭かしらぎ下がりに駈けなだれた。

一条の河があつた。

水は浅く、踏み渡るのも惜しいほど澄んでいた。信長は、顧みて、

「この河の名は？」

訊たずねると、汗と埃を寄せ合つて犇ひしめきつづく旗本の中から、毛利小平太が、

「扇川おうぎがわにて候」

と、答えた。

信長は知っていたが、わざと答えさせたのである。さつと軍扇ぐんせんをひらいて、後方へ振つて見せた。

「末広川か。さい先よし。かなめも間近ぞ。涉わたれ涉れ」

死地へ向つて、急いでいるとは知りながら、何か、華々しくさえあつて、後ろ髪を引かれるような暗い心地は少しもないのである。

ふしぎなのは、信長という大将のそうした魅力であつた。彼に従ついて行く千余の人間は、ひとりも生きて帰ろうとはしていないのに、なぜか、絶望的ではなかつた。

絶対の死と。

絶対の生と。

それは二つで一つだった。信長は、誰もが最も迷いやすいその二つの手綱たづなを一つ手につかんで先へ駆けていた。兵の眼から信長の姿を見ると、それは勇敢な死の先駆者にも見え、また大きな生と希望の先達せんだつとも仰がれた。いずれにしても、この人の後に従ついて行くか
らには、どういう結果になっても、不平はないという固いものが一軍を貫つらぬいていた。

死のう。死のう。死のう！

藤吉郎すらも、それしか、頭の中になかった。

駆けまいとしても、前も後もみな駆けて行くので、怒濤につつまれたように、足も地に止めている間はなかった。また、かりそめにも彼は、部下三十人の足軽ひきを率ひきいている小隊長なので、いくら苦しくなっても、弱音はふけなかった。

死のうぞ。死のうぞ。

平常、細々こまごまと女房子の口を糊のりするに足りるほどな小扶持こぶちをうけている部下の足軽までが、皆、はッはッあえと喘ぐ肚はらの底で、無言にそういつている血の声こゑが、藤吉郎の肚にまで響いてくる。

こんなにも人間が皆、よろこ歡んで生命いのちを捨てに行こうということが、いったい人間の世にあり得ることか。——あり得ないはずのことが、ここでは事実行われているではないか。

ふと、藤吉郎は、

(しまった！)

と思った。

おれは飛んでもない大将に仕えてしまった、と気がついたのである。自分の眼で「この君なれば」と、見込んで奉公したその眼に狂いはなかったが、何ぞ計らん、それはかくも兵たる自分らをして、歡び勇んで死地に飛び込ませる人であった。

(俺にはまだ、世の中に、やりたい事がたくさんある。中村には、おふくろも残っている！)

正直、藤吉郎は、そんなこともちらちら考えた。しかし、それは一瞬の頭のなかの明滅である。一千の兵馬の足音と、炎天に焼けきつたよろいぐそく鎧具足の音は、ぎッ、ぎッ、ぎッ——と、鳴り揃って、それが皆、

死ねや。死ねや。

と、聞えるのだった。

陽に燃え、汗にぬれ、埃をかぶった藤吉郎の顔は——いや全軍の将兵の顔は皆、やつがしらみたいになつていた。どんな必死の場合でも、頭のすみに、何か余裕といったような、暢気を残している質の藤吉郎も、きようばかりはそうして何時の間にか、

戦う！

死ぬ。

それしか真つ向に考えてない鉄甲のような、不惜身命になりきつて進軍していた。

小山、また小山と、一つ一つ踏み越えて行くほどに、視野の彼方の戦雲の煙は、次第に濃く近く見えて来た。

「やつ、味方らしいが？」

丘道の上へ、軍の先頭が出た時である。血まみれな傷負が一人、よろ這いながら彼方より駈けて来て、何か、意味の聞きとれない絶叫をあげながら近づいて来た。

その兵は、丸根から落ちて来た佐久間大学の郎党であつた。

「主人佐久間殿も、敵の大軍と、四方から焼き立てられた炎の中で、勇ましい御最期をとげられ、同じ時刻に、鷺津砦の飯尾近江守殿にも、華々しゅう、乱軍の中に討死と聞え
ました」

信長の馬前へ、曳かれて来て、その郎党は、傷負ておいの苦しげな呼吸を、自分で励ましなが
ら告げた。

「ひとり生きて、その場を去るのも、面目なしと存じましたが、主人大学のいいつけで、
お味方へ、右の次第、お知らせまでに、落ちて参りました。——落ちて来るうしろに、天
地も揺ゆるがすばかり、敵の勝かち鬨しきが聞えました。鷺津も丸根もあの辺り、すでに眼に見える
もの耳に聞えるものは、敵軍でないものはござりませぬ」

聞き終ると、信長は、

「於藤、於藤」

と、旗本の中へ云った。

佐脇藤八郎は、年少なので、大勢の強つわもの者ばらの中に、埋うずまっているように交まじつてい
たが、信長に呼ばれると、

「はいッ」

と、喜び勇んで、主君の鎧あぶみの側へかけ寄つてきた。

「お召しでございますか」

「於藤か。清洲を出る折、そちに預けおいた数珠じゆずをこれへ」

「お数珠ですか」

藤八郎は、主君のそれを、もし乱軍の中で、落しでもしてはならないと、重責を感じて持っていたらしく、旗風呂敷にくるんで、鎧の上から斜めに掛けて、固く背負いこんでいたが、その結び目を解いて取り出すとすぐ、

「御免」

と、馬上の信長へ捧げた。

信長は数珠をうけ取ると、自身の肩から斜めに胸へ掛けた。それは銀色の大数珠で、彼の着用している萌黄緘もえぎおどしの死の晴着を、なおさら壮美に見せた。

「惜しや、近江も大学も。死出は共に今日の日ながら、信長が働きを、一眼見せもせぬ間に先へ死なしたるは！」

馬の鞍上に、信長は、居住いすまいを正して、そう云いながら、合掌した。

鷲津、丸根の黒煙は、火葬場やきばのようになお、彼方の空を焦がしていた。

「……………」

凝視の眼を、ややしばらくして、刮かと後ろへ向けると、信長は、われも忘れたかのように、鞍つぼ打って、

「きようは、永^{えい}禄^{ろく}三年、五月十九日にてあるぞよ。信長はじめ、そち達の命日と覚ゆるなれ。平常微禄を与え、これとてよき日も見せぬまに、今日の武運にめぐり合うも、信長に隨身なしたる宿命とこそ思い候え。ここより一步先へ従い来る者は、信長に生命をも与えくれたる者と見ん。さはいえなお、今生に未練ある者は、^{はばか}憚りなく^た立ち退く^のがよし。――如何にや、各――

高らかにいうと、

「なんとて！」

異口同音に、将兵は応じた。

「わが君をのみ、死なすべき。御無用なお訊ねごと」

「しからば、迂^{うぐ}愚なる信長に、全軍みな、生命^{いのち}をもくるるか」

「仰せまでもない儀」

「――ならば！ 者どもツ」

大きく、馬腹へ一鞭くれて、

「来いッ。つづけッ。今川勢は早やすぐそこぞ」

先駆する信長の姿は、全軍の駈ける埃^{ほこり}につつまれて行つた。その埃も、^{おぼろ}朧な馬上の影も、

何か、一瞬神々しくさえ見えた。

この一期

道は山間へ。また、低い峠を越えて、いよいよ国境線へ近づくと共に、地形は複雑になつて来た。

「おツ、見えた」

「丹下だ。丹下の砦ツ」

喘いで来た兵は、口々に云つた。鷺津、丸根の砦の二つまでが、すでに陥ちた後なので、その丹下もどうあろうかと、案じ来た眉がみな晴れた。

丹下はまだ支えていた。その味方は、健在だった。信長は着くと直ぐ、守将の水野忠光へ云つた。

「もはや、守備は無用。かような小さい殻は、敵へ投げ与えてもよし。信長の軍が望むところのものは、他にあるぞ」

その兵力も、すべて、前進軍のうちに加え、休息もとらず、さらに善照寺の砦へと

急ぎに急いだ。

そこには、佐久間信辰のぶときの守兵がいる。信長の姿を迎えた刹那、砦の兵は、わツと声をあげた。歓呼ではない、半ば、泣いて揚げたような悲壮な動揺どよめきだった。

「おいでられた!」

「殿が」

「信長様が」

とかく信長とはいかなる大将か、自分らの主君でありながら、まだ端の端までは分りきっていないかったのが事実である。この孤塁に討死と、覚悟をきめていたところへ、突とつとして、信長自身が、出馬して来たことが、意外の余り、兵をして感泣させたのだった。

「御馬前で死ぬものなら」

と、みな奮ふるい立った。

星崎方面へ突き出して働いていた佐々ささ 隼はやと 人ひと 正ただ 政まさ 次つぐも、三百余の手勢をまとめて、信長の旗本へ集まって来た。

信長は、砦の西の峰に、一応それらの兵をまとめ、人数を点呼した。

この暁あけ方がた、清洲の城を出た時は、主従のわずか、六、七であったものが、今ここで閲えつ

すれば、約三千に近い兵が数えられた。

号して、五千と称した。

信長は静かに思った。

これこそは、尾張半国のわが領土のほととの全軍であると。留守も後詰ごづめもない、織田軍の全部はこれきりなのだ。

「本望！」

何かしら微笑された。

そしてもう指呼しごのうちに見える敵今川の四方の布陣と、その氣勢を見るべく、しばらくの間、旗幟きしをかくして、峰の一端から形勢を展望していた。

浅野又右衛門の弓隊は、その本陣からやや離れた山陰やまかげの腹にかたまっていた。弓ゆみの之衆しゆうの一隊ではあるが、今日の合戦に、矢交ぜやまの戦いなどはないと見越して、みな槍を
持っていた。

その中に、藤吉郎の率ひきいる三十人の足軽小隊も交じっていた。休息ツ——という声が、部将からかかると、藤吉郎も、自分の組の者へ、

「やすめ！」

と、号令した。

はツと、みんな大きな息をつくど、ほとんど誰もが一緒に、尻もちつくように山陰の草の中へ、腰を落した。藤吉郎は、湯気の立つ顔を、雑巾のような手拭で、ぐるぐるこすっていた。

「おいツ、誰か、おれの槍を持っていてくれんか。この槍を」

彼がどなると、坐ったばかりの部下のひとり、

「はツ」

と、起つてきて、彼の槍を預かった。そして藤吉郎の歩いて行く方へ、後から尾いて行くど、

「来んでもいい。来んでもいい」

「組頭、どこへお出でになるんですか」

「供は無用。糞しに行くのじや、くさいぞ、帰れ帰れ」

笑いながら、崖道の灌木の中へ、沈んで行つた。

彼の部下は、藤吉郎のことばを冗談と思つたのか、佇んで彼の行方を見送っていた。

藤吉郎は、南向きの山の傾斜を少し降りて、山鳥が土を浴びる場所でも探すように、頃

合な所を見つけると、悠々、腹帯を解いてしやがみこんだ。

実をいうと今こんぎょう暁の出陣は、実に急速だったので、身に具足を着ける時間がやつとあつたくらいで、雪せつちん隠にはいつて腹工合を整えるいとま違すらなかつたのだ。で、清洲から熱田、丹下と駆けて来るあいだも、どこかで軍馬を休めたら、まず何よりも毎日習慣の物をきれいに脱して心おきなく戦いたいものだと思つていたので、今その思いを果しつつ、息やすみながら青空を見ていると、何ともいえない爽快を覚えた。

しかし、戦場の慣いで、そうしている間も、油断はならなかつた。対陣の場合など、よく敵が陣地を離れて、野糞しているのを見つけると、戯れ半分にも、

「あいつを射止めてやろう」

などという気が起るもので、そういう経験は藤吉郎も持っているから、青空ばかり眺めて、恍惚ともしていられなかつた。

山裾やますそから二、三町ほど、先へ眼をやると、黒末川くろすえがわの流れが帯のように蜿うねつて、知多ちた半島の海へ注そそいでいる。

その河畔に、一群の兵が陣取つていた。旗印をよく見ると、味方である。味方の梶かじか川わかずひで一秀の陣だ。

そこから直ぐ海口の方へ寄つて鳴海なるみの城がある。これは一時は織田で墜おとしたが、その後また、駿河勢力に蚕蝕さんしょくされて、今では敵の岡部おかべ元信もとのぶが固めている。

また、黒末川の東岸から南へ一筋の街道が白く見える。鷺津わしづは、その街道の北側の山地にあり、もう焼かれ尽したか、余燼よじんも力なく、いちめんに野路や海辺を煙らせて見える。

その附近の畑や、部落のまわりに、虫のような小さい人影や軍馬がたくさん見える。山の手のほうに拠よつているのが、今川方の将朝比奈主計あさひなかずえの軍勢であり、街道よりに陣しているのが、三河の松平元康もとやすの兵と見えた。

「たくさんいるなあ」

藤吉郎は、小国の兵馬の中にばかりいるせいか、敵の大規模な兵力を見ると、よくいう雲霞うんかの如く——という言葉がそのままに思い出された。

しかも、松平、朝比奈などの軍は、ほんの敵の一支隊であることを考えると、「なるほど、信長様の御決心も、これは当然だわい」

と、思った。

いや他人事ひとごとではない。

自分も、この世に糞をひるのも、今が最後のものと思った。

「人間て妙なものだなあ。これで明日はもうこの世にいないのか」

そんなことまで考えたりしていると、ふと誰やら下の沢のほうから、がさ、がさ、と、灌木をかき分けて上つて来る者がある。

「ヤ、敵？」

戦場でのこの直感は、ほとんど本能的にすぐ頭を突きぬくものだった——敵の物見ものみが信長の居陣きよじんの背後を探りに来たものと、彼はすぐ考えたのである。

忙しげに腹帯締めて、起ち上がると、沢から攀よじ登つて来た顔と、灌木の中からふいに起つた彼の顔とが、云い合わせたように双方から見合った。

「やあ。木下」

「おつ？ 犬千代か」

「どうした」

「おぬしこそどうした」

「どうもしない。御勘気ごかんきをうけて以来、牢人ろうにんして遊んでいたが、殿お討死を覚悟の御出陣と見て、お供に馳せ参じて来ただけのこと」

「そうか、よく来た」

藤吉郎は、眼を熱くしながら、相手の側へ寄って手をのばした。それは旧友前田犬千代。握りあう手と手の裡に、二人は万感をこめていた。

平常かかる折もと、心がけていたのであろう。

犬千代の鎧は華やかだった。小貫から緘まで新しいので、燦爛と眼を射る。

そして肩には、梅鉢の紋打った旗さし物を翳しているのだった。

「よい男振り——」

藤吉郎すら眺めた。

ふと、後に残して来た寧子を想い、彼を考え、そして自分の身に帰って、

「以来、どこにお在でたか」

「佐々殿の舎弟、内蔵助成政どのの好意で、成政どのの乳人の田舎で、時節を待つておつ

た」

「御勘気をうけて、追放されても、他家へ隨身の心も抱かずに」

「もとより——心はない。たとえ御追放はうけても、殿の御折檻、この犬千代を真実、

人間にして下さろう思し召と思えばむしろありがたいがとうて」

「むウ、むウ……」

涙もろい藤吉郎は、もう^{まぶた}瞼を熱くしているのだ。今日の合戦こそ、織田の玉碎であり、全軍一致の戦いと分つていながら、旧主を慕ってこれへ来た友の気もちが、彼には^{たま}堪らな^くうれしいのであり、そしてともすれば瞼の熱くなるわけであった。

「いや、よく分つた。それでこそ前田犬千代。殿は今、この上で今朝初めての御休息、今のうちだ、早く来い」

「待ってくれ、木下。——だが俺は、御前へは、出ないつもりだ」

「なぜ」

「この際だから、一兵でもと、御勘気をゆるして下さいさうなどというつもりではないが、そんなつもりで来たかと、^{そくしん}側臣に見られるのが嫌だ」

「何をばかな。皆死ぬのだ。おぬしも、御馬前で死ぬ気で来たのではないか」

「そうだ」

「しからば、何の^{しんしやく}斟酌もいるまい。人の思わく、世の^{くち}口の端などは、生きている上のことだ」

「いや、黙って死ねばいいと思う。それで俺は本望だ。——殿がゆるして下さいさるも下さらぬもない」

「それもそうか」

「木下」

「む」

「しばらく、おぬしの陣場へ、潜ひそましておいてくれ」

「関かまわぬが、俺の組は、足軽隊の中の三十人組。その武者振りでは目立つな」

「こうしていよう」

そこらに落ちていた馬の腹帯らしい古布を、犬千代は頭からかぶって、足軽たちの木下隊へ這いこんでいた。

すこし身伸びをすれば、そこからでも信長の床几しょうぎば場がよく見えた。信長の高い声すら風の加減では聞えてくる。今、彼の前には、佐々隼さつさはやとのしやう人正 政次が、何やら、命をうけているらしく頭ずを下げていた。

「——そちが手勢を引つさげて、敵の鳴海なるみを横合から突き崩して見せると申すか」
信長の声である。

政次は、それに答えて、

「鳴海乱れたりと見えましましたれば、殿には、無二無三、黒末川にそうてお取りかかりなさ

れませ。そして、敵の朝比奈軍を突きやぶり、松平元康を葬れば、駿河殿の前衛は全からず、義元の本陣へまでも、長驅、迫り得るかと思ひまする」

「よしッ」

信長は、断を下して、行けッと言葉に力をこめて云った。そして佐々政次が、すぐ起ちかけると、

「おくれもあるまいが、隼人の手勢のみではちと不足。千秋千秋。そちも行け」

旗本のうちから名指された千秋加賀守季忠が、黙礼したのみで、床几場から立ち去ると、政次の姿も、もうそこに見えなかつた。

いや、見えないといえ、藤吉郎の蔭にかがんでいた犬千代も、いつの間にか、見えなくなつていた。

「しばらく！　しばらく！　佐々殿しばらく。千秋殿しばらくお待ちをッ」

大声をあげながら軍馬の後を追いかけて来る者があつた。

今、信長の前を退つて。

そしてこれから短兵急に、敵の鳴海へ奇襲すべく、善照寺の峰下から間道へと、疾風のように通りにかけた佐々政次、千秋加賀守、岩室重休などの三百余人の決死隊なのであ

つた。

「止まれッ」

はやとのしょう
隼人正政次は、

「誰だ？」

馬上から振り返った。

千秋、岩室の二将も、

「何者か？」

怪しんで、辺りへ云った。

もう決死の崖ぶちに足をかけている兵である。いかに覚悟の前といえ、眼はつり上がっている。心の平衡へいこうはとれていない。何者かと問えば、何者か？ と、同じように動揺どよめき惑うばかりだった。

「御免ッ、御免ッ」

列の中を、こう叫びながら、掻き分けるように前のほうへ、駈け抜けて来た者がある。

「やッ？」

誰の目にも、すぐとまったのは、その若い武者の翳かざしている旗差物はたさしものの梅鉢の紋であつ

た。

「おッ。於犬おいぬではないか」

佐々隼人はやとが、そういつた声を目あてに、

「犬千代でござります」

と、その馬前へ来て、槍と共に大地へ伏し、

「お伴つれください！」

犬千代は、叫んだ。

隼人は、彼が今日あることを、意外とはしなかった。弟の成政から、常々、それとなく噂も聞いていたからである。

(だが、御勘気の者を)

と、岩室、千秋のふたりに憚はばかられて、すぐ答えもし得なかった。

すると、岩室重休が、

「さすがは！」

と、共鳴して、

「さしつかえもおざるまい。今日という今日においては」

「同意同意」

千秋加賀も、大きくうなずきながら、何のためらいもなく云った。

「死出の友よ。一人でも多いは楽しい。於犬どのの心底、弓矢の神も照覧。佐々殿、彼のねがい、許しておやりなされ」

「かたじけない」

隼人は、犬千代にかわつて、思わず礼をいった。そして馬上から声にも眼にも思いをこめて、

「ゆるす、ゆるす。物の見事に働かれよ」

「ありがとうございます」

犬千代が起つと、同時に、三百人の縦隊は、再び悲壮な眉と唇くちに、一死を見つめながら、白昼を真っ黒に駈けていた。

やがて――

鳴海城の搦手からめての方角に、突貫とつかんのどよめきが揚あがった。

無理押しに、押し攻めたのだ。

無二無三、

わあッ。わあッ。

と、聞える声こえつなみ海嘯のうちに、前田犬千代の声も交じっていたのである。

だが、程なく。

三百の決死隊が前進したばかりの間道を、たった、四、五名の兵が、火の玉のように血まみれとなって——そのうち一人は騎馬で、善照寺の方へすッ飛んで行つた。

信長の陣へは、

(全軍、あらまし、全滅)

が伝えられた。

たった今、信長の前を去つて、まだ眼の底に姿も残っている佐々さつきはやとのしやう隼人正政次、岩室重休しげよし、千秋加賀守らの将もみな、枕をならべて戦死したことが、嘘のように、報告されたのであつた。

佐々、千秋などの率ひきいる奇襲隊が、鳴海城の搦手からめてを衝いて、その一角を破つたという合図を見たらすぐ、信長は正面から全力をもつて当り、一気に鳴海を落して、敵の側面勢力を崩し、一方味方の足場とする作戦であつたのである。

で、彼はもう、全軍をひきいて善照寺の山を降り、

「今にも」

と、戦機を待ちかまえていた出鼻であつた。

ところへ、

「——味方は総敗れ、佐々、千秋、岩室殿にも、前後して、討死なされました」

と、引つ返して来た傷負ておいから聞いて、彼は、いまさらのように、

「最早か」

と、思わずいった。

死の無造作。死の早さ。嘘か事実かを疑う間まもないくらいだった。疾とく、こうとは覚悟の前ながらその慌あわただしさに、さすがに彼も胸騒いだ。

「む、むウ！ そうかッ」

燈あぶみに踏み立って、

「者どもッ」

眉は、黛まゆずみで描いたように、濃く強く見えるほど、凄まじいその相好そうこうの皮膚は、冴えて、血の気も見えなかつた。

「一刻とぎまえには、佐久間大学、飯尾近江。今はまた、佐々、岩室、千秋など、信長の先

駆けして、冥途よみの前触れに立つたるぞ。憎や、小賢こぎかしの敵めら、いで信長がふみ潰つぶして、先駆けの精しょうりよう靈りようどもに手向たむけせん。——つづけッ、信長に！」

四顧しこして、大声にいうと、馬首を敵地へ向けて、駈け出そうとした。

「あいやッ」

「殿ッ」

「逸はやり給うな」

「しばし——しばしの程」

池田勝三郎、柴田権六、林佐渡、その他の旗本たちは、いちどに、鎧よろいの塀へいを、どつと彼の馬前に作つて、

「これより先は、泥田どろたの畦あぜや狭き藪道やぶみち。一筋押しあたらの御先駆けは、可惜あたら、無駄にお生命いのちをすてに逸はやり遊ばすようなもの。——また、織田家中には、殿のほか、人もなきに似たり。おとどまり候え」

「まざまず……」

人々が信長の駒を抑えて、その蹄ひづめの足掻きを、無理に押し返しているところへ——一騎、実にただ一騎——それは意外な方角から、低く飛ぶ鳥影のように来る者があった。

「何者？」

信長の眼が先に見つけた。

「……………」

見まもる全軍の瞳に、それは次第に近づいて来た。旗本の群れのうちから、やにわに躍り出した梁田弥二右衛門が、

「分りました。分りました。あれよ、この方がかねて、海道の方面へ放ち置いたる家の子の一名でござる」

と、眉に手をかざしながら、狂喜して呶鳴った。

梁田の郎党は、それへ来て、主人の名を呼び廻ったが、その主人弥二右衛門が、信長のすぐ側から声をかけたので、はッと、遠くへ手をつかえてしまった。

「何ぞ、諜報しらせやある？」

信長は、弥二右衛門に轡くつわをとらせながら、梁田の郎党の方へ、自身から駒を緩く進めて行った。

「ござりまする！ ござりまするッ！ ……。今川勢の主力、義元とその旗本らの本陣は、つい今し方、遽にわかに道を変えて、桶狭間おけはざまのほうへ向いました」

「なに？」

爛らんとした眼で、

「では——大高へは向わずに、義元は、桶狭間へ道をかえたとか？」

信長のことばのうちに、

「オオ、また来る」

一騎二騎、ここへ鞭むちをあげて来る味方の物見に、人々は異様な眼で呼吸いきを鳴り鎮しずめて待っていた。

前の報告につづいて、早物見の者から、さらに、こういう諜報が信長の耳へはいった。

「今し方、桶狭間へと道をかえた今川の本軍は、同所の南、田楽狭間でんがくはさまの窪くぼから小高い場所へわたつて、本陣を移し、義元殿をまん中に、兵馬を憩いこわせておる様子に相見えする」

と、いうのであった。

「——」
信長は、その一瞬、刀の肌のような澄んだ眼をして黙りこんだ。

死。ただ一死と。

一途いちずに、真つ暗に、捨身に、願うらくは潔いさぎよく——とばかり、この暁から今、陽ひの中天の

頃まで、遮しやにむに二無にむに二来はしたが、ふとここで、

「あわよくば！」

と、雲の断きれ間まから一すじの光を見たように、戦いの勝目を、思ってみたのである。

正直。それまでは、

(勝てる)

と、いう自信はなかった。

彼はただ武門の名において、勝とうとしたのみである。あわよくば、

(勝ち得もせん)

と、考えついたのは、この瞬間——実にこの瞬間、ふとひらめいた考えだった。

人間の脳裡には、生活の一瞬いつとき一瞬を刻むがように、たえず泡つぶにも似た想念の断片が明滅している。死ぬる間際まで、人間は断きれ断きれな想念の連続から声を出し身を動かしている。

正しい想念。身を亡ぼす想念。種々な思慮のひらめきの取捨しゆしやによって、一日の生活が組立てられてゆき、生涯の人生が、織りなされてゆく。

平常の取捨は、熟慮いしまの違ちがもあるが、生涯の大運は、突とつとして来る。

(右か？ 左か？)

は、多くは急場に迫って来るものである。

信長は今、正しくその岐路にいた。そして無意識に、運命の籤くじを引いていた。人間の素質、あるいは平常の心がまえなどが、こういう際の直感を、迅速に助けて、その方向あやまを誤あやまたしめないことは確かであった。

「――」

結んだまま容易あに開かぬ彼の唇くちが、何か、いおうとした時である。梁田やなだ弥二右衛門が、側から呶鳴なげった。

「殿、よい折！ 思うに 治部じぶの太輔たゆう義元よしもとには、鷲津、丸根を陥おとしいれて、織田の手なみ、多寡たかは知れたり。上洛陣の門出、幸先さいさきよしと、すでに慢心な致して、兵馬も誇り立ち、戦気も怠たつてあろうと存ぞんぜられます。――天機は今、不意を衝いて、義元の幕中へ、攻め入らば、お味方の勝ちは必定」

信長は、彼の昂たかぶる声へ合わせて、

「それだ」

と、鞍つぼを叩き、

「弥二右衛門、いみじくもいうたり。信長の意中も、それよ。今こそ義元の首に会わん。
田楽狭間は、この道を真東よな」

柴田権六とか林佐渡とかいう重臣たちは、むしろ物見の報告を、非常な感いと、危惧をもつて聞いたので、信長の直感と、その驀進ぶりを、たつて止めたが、信長は肯かず、「卿ら、老朽の智者ども、この期になお、何を感うぞ。ただ信長につづけ。信長火に入らば火の中へ。信長水の中に入らんには水のそこへ。——さもなくば、田の畦で、儂が行方を見物せい」

一笑を冷やかに浴びせると、信長は静かに、駒首立てて、全軍の突角まで出て行つた。

田楽狭間

ちようど正午の頃である。

山中の静寂にも、禽の声すらしなかつた。風もなく、焦りつくような炎日なのだ。灌木の葉は皆、合歓のように萎んでいるか、乾煙草のように、からからになっていた。

「その辺、その辺」

一小隊の雑兵をつれて、山芝の多い原山の上へ駆け上がって来た武者がいった。

「おいッ。とほり幕をよこせ」

「雑木を伐れ」

今川勢の先駆兵と見えた。

担いで来た幕を抛り出す。

一方では、大鎌で草を刈る。長柄を振って邪魔な灌木を薙ぐ。

その側から、兵は、幕を展げて、附近の松の木や合歡の木の幹へ張り繞らし、そのな
い所には、幕杭を打ち込んで、またたくうちに一囲いの幕屋を作った。

「うう、暑い」

「こんな日もめずらしいて」

一汗拭いて、

「見てくれ、俺の汗を。具足の革も金具も焼けて、火に触るようだ」

「具足を脱つて、一風入れたら、どんないい心地かと思うが、もうやがて、御本陣のお移りも間があるまいし」

「まあ、とにかく、一息つくとしよう」

雑兵たちは、坐りこんだ。原山の芝地には木が少ない。大きな楠くすのきの日陰ひかげへみんなかたまり合った。

日陰いんに憩いこうと、さすがに少し涼しい。それにこの田楽でんがく狭間はざまと呼ぶ原山は、四囲の山々のいずれより低く、盆地の中の丘といった地勢であつたから、時々、前方の低地を隔てた真正面の太子たいしヶ嶽たけあたりから、青葉時らしい冷たい風が、颯さつと、一山の木々の葉裏を白く戦そよがせて落ちて来た。

「……おやツ？」

一人の雑兵がいった。

眼を、空へ吊つて。

わらじまめの足の指に、膏藥こうやくを貼っていたのが、

「なんだ？ おい」

「見ろ」

「何を」

「変な雲が出て来やがった」

「雲が。……む、なるほど」

「降るかな、夕方には」

「雨は欲しいが、俺たち、道みち普請ふしんや荷担にかつぎばかりして歩く組には、雨は敵が出るよりも禁物だ。桑原くわばら桑原、なるべく、あつさり通り雨で欲しいものだ」

今建てた彼方の幕屋にも、頻りに風がうごいて来た。その辺りを、見廻っていた組頭の武者は、

「さあ、起て」

と、部下を促うながして、

「こよいのお泊りは、大高の城だ。沓掛くつかけから大高へ真ツ直に前進と、敵には思わせて、わざと道をかえ、桶狭間からこの間道へと迂回うかいなされたが、晩までには、そこへ御到着の予定。——道々の小橋や、崖や谷づたいの異状なきように、われわれは検めながら先へ進むのだ。——さあ出発するぞ」

その人声も、影も去つて、山は元の静寂しじまへ回かえつた。どこかで、昼の蝻きりぎりす嘶すが啼ないていた。

間もなく、盆地の山陰やまかげを、遥かのほうから軍馬の気はいがして来た。螺らも吹かず、鼓こも鳴らさず、山巒さんらんの間を縫ぬつて、極めて肅しゆく々しゆくと来るのであったが、五千余騎の兵馬

の歩みは、いかに静かにと努めても、天地のあいだその塵烟じんえんと蹄ひづめの音を潜ひそめきるわけにはいかなかった。

憂かつかつ々と、石を蹴り、木の根を踏む馬蹄の音が、はや耳を打つて来たかと思うと、馬印ばんいん、旗さし物など、治部大輔今川義元の本軍は、見るまに、田楽狭間でんがくはざまの芝山と低地を、兵と馬と旗と幕とばりとで埋めてしまった。

義元は、人いちばい汗かきのほうだった。日頃はその汗をすらかくことのない生活に馴れているので、体は贅ぜい肉にくと脂肪しぼうに富み、四十を過ぎてからは、目に立って肥こえていた。

その治部大輔義元には、こんどの軍旅ぐんりよは、少なからぬ苦痛であつたに違いない。肥えたわりに背の低い胴長な体に、赤地錦の直垂ひたたれ、大鎧をつけ、胸白の具足に、八龍を打つた五枚鍔ましころかぶとの兜をかぶつた。

今川家重代じゅうだいという松倉郷まつくらこうの太刀、左文字の脇差、籠手脛こてすねあて当あて、沓くつなどどを加えれば、十貫目をも超えるだろうと思われる武装であり、膚はだえへ風のはいる隙すきまでもない装よそおいだつた。

炎天を、騎行きこうして来たので、鎧かわの革も小貫こぎねも焦やけきつていた——大汗にまみれて彼は今、ようやくたどり着いた田楽狭間でんがくはざまの芝山で駒の背から降りた。

「ここは何という土地ぞ」

義元は、幕へとぼりかくれるとすぐ訊ねた。

彼が、右すれば右、左すれば左へと、近習、侍大将、参謀、旗本、典医てんい、同朋どうぼうの者な
どが、そろそろと護つて歩いていた。

「桶狭間より半里、有松と落合村のあいだ——田楽狭間と申す所でござりまする」
侍大将の落合長門ながとが答える。

義元は、うなずきつつ、近習沢田長門守かぶとに兜をあずけ、小姓頭しまださきよう島田左京しまたさきように具足を解か
せ、絞しぼるような汗になった鎧下の真つ白な肌着を着かえていた。

ひと風入れて、

「爽やかになつた」

と、鎧の胴締めを締め直して、座所ざしよへ移ると、その山芝やましばのうえには、豹ひょうの毛皮けをしき、
陣中の調度の物なども置かれて、飽くまで彼のいるところには豪奢ごうしゃの光ひかりがつき纏まとつてい
た。

「……やツ？ あの音は」

義元は、早くも同朋の者が沸わかしてさし出した茶をいっきつ一啜しながら、何か、石火矢いしびやでも

撃つたような轟とどろきに、眼をうごかした。

「はてな？」

侍臣たちも、耳そぼだを敬そぼだてた。

その中の一人、斎藤掃部助かものすけは、幕のすそを搔かき上げて、外を見まわしていた。いつの間にか、中天へ伸びて崩れだした雲の峰が、灼熱の太陽もてあそを弄もてあそんで、名状すべからざる渦流の彩光を描えいているのが、人々の眼を、強く射た。

「遠雷です。ただ今のは、遠雷の音でござります」

掃部助かものすけが、そこからいうと、

「かみなりか」

義元は、苦笑した。絶えず左の手で腰を軽く叩たたいていた。侍側の家臣たちも、気にしてはいたが、わざとその故ゆえを問とわなかつた。今朝、沓掛くつかけの城を出て発向はっこうする折、義元は、どうしたのか駒の背から振り落されて落馬した。その時、打った患部わづらと思うが、その程度を訊ねるのも、何か主君に恥かしい思いを新たにさせる気がするからであつた。

どよめきが聞えた。

突然、山裾とぼりからここの幕の外へかけて、騒さわがしい人馬の気はいが感じられた。義元はず

ぐ旗本の一人へ、

「何か」

と、いった。

見て参れ——という命も待たず直ぐ二、三名は、幕へ風を残して外へ身を翻した。こんどは雷鳴の音ではない。騒然たる馬蹄や兵の蹙音は、もうこの山の上のものだった。

それは約二百ほどの騎兵隊なのであった。今し方、先陣の鳴海附近で討ち取った夥しい敵の首級を護つて、

(戦況はかくの如し)

と、本陣の義元へ見参に入れ、幸先よき味方の勝利を祝ごうとて、これへ齎して来たものだった。

「何、鳴海へ襲せた敵の首級が届いたとか、わざわざ首を授けに来おった笑止な織田侍の死顔。どれ、並べてみい、視てくれよう」

義元は、機嫌であった。

「床几を直せ」

と、座形を改め、扇子を顔にかざしながら、次々に差し出す首を検分した。

首帳を誌つづけている者は、七十余首と数えあげた。

その中には、織田軍の侍大将と、今川方にも知られている佐々さつ政まさ次つぐ、岩室いわむろ長門ながと、
 千秋加賀守ちあきかがのかみの首もあつた。

見終ると、義元は、

「血ぐさい。血臭い」

と、顔を振つて、後ろの幕とばりを揚げさせた。

そして、鮮やかな真昼の空の乱雲を仰ぎ、

「やれやれ山間やまあいらしい涼風すずかぜが立ちそめて来た。もはや刻限は午ひるちこうないか」

「いえ、午うまの刻は、はや過ぎておりましよう」

侍臣が答えると、

「道理で空腹を催した。昼飯をしたためよう。兵馬にも糧食の休みを与えよ」

「はッ」

と、旗下きかの人々が、令を伝えに出る。幕とばりのうちには、同朋衆や小姓や賄まかない方かたの者たちの
 動きで和なごんだ。折ふしまた、近郷の社や寺々や庄屋などが、連れ立って、祝の酒と土地の
 産物などを肴さかなに持ち、

(陣お見舞に)

と、称して、献納して行つた。

義元は、遠くから、その者たちに眼通りを与え、

「上洛の帰途には、追つて、何かの沙汰を下すであろう」

と、善政を約束した。

そして土民の代表者らが立ち帰ると、

「よい折じや。酒をひらけ」

と、命じ、再び獣皮の褥しとねにくつろいだ。

幕外の將たちも、こもごもに彼のまえへ来て、鷺津わしづ、丸根の勝かちいくさ軍につづいて、鳴海

方面の戦況が、刻々、有利に展開していることを祝した。

「これでは、お汝ことらも、ちと手応えに不足で、物足らなくあろう」

義元は、戯れ顔に、そんなことをいつて、近習から伺候しごうの人々にまで、残らず杯を与えて、いよいよ麗うるわしい機嫌であつた。

「お館やかたの御威勢によるところなれば、めでとうはござれど、仰せの如く、かように進むところ敵なしでは、日頃鍛きたえた腕もむなしゆう鳴るばかりで」

「待て待て。明日の夜は、清洲きしすの城へ乗り掛けん。いかに骨細の織田といえ、清洲へかか
られたら、少しは、手応えもみせよう。——各、貪むさぼつて軍功をあげい」

「されば、両三日は、いずれ彼処かしこに御滞陣。月も踊りも、清洲で御覽あらましよう」
いつか、陽は陰かげつていた。

酒に興じていて、誰も気づかぬまに、午うまの下刻げこく（一時）頃から、暗い真昼に天候が變つ
ていたのである。

一陣の風が、幕とぼりのすそを高く吹きあげた。ポツ！ポツ！と、雨さえ交じつて来たの
である。雷鳴がとぎれとぎれに耳を打った。しかし、義元以下、その将領たちは、なお
哄笑雑談、明夜の清洲城一番乗りを、ことばの上で氣負きおい合ったり、信長何者ぞと、誇つ
たりしていたのである。

信長、何者ぞ。

義元の帷幕いぼくで、旺さかんにそう嘲あざけり笑われていた時刻、その信長は、街道の小坂、相原村の
中間から、太子たいしヶ嶽たけの道なき道を遮しゃ二無二越えて、もう義元の本陣へいくらもない地点ま
で来ていたのであった。

太子ヶ嶽はさして高い嶮峻な山ではない。樗、くぬぎ、櫟、もみ、はぜ、などにおわれてゐる雑木山であつた。もとより樵夫が通うくらいなもので、道とてはない所を、五千の人馬が遮二無二急ぐので、木は裂け、草は薙がれ、崖は躍り、谷川は飛沫をあげて駈け渉るのだった。

「落馬したら駒も捨てよ。木枝に絡まれて旗差物を失わば、旗差物も打ち捨てて逃げ。要は、今川が本陣の核心へ、真つ向に突き入つて、治部大輔が首見ることぞ。身軽がよし、空身が利ぞ。——敵中にはいつて敵を突き伏すとも、いちいち首を揚げて手間取るまいぞ。斬り捨てに。突き捨てに。——次へ次へ今生の限り敵にまみえよ。ゆめ、殊勲を人に見せんと思うな。見よがしの殊勲は、すでに殊勲にはなきぞ。八幡照覧、信長の眼前、ただきようを一期と無我無性に働く者ぞ真の織田武士なれ」

信長はいう。

叱咤してさけぶ。

それはまた、暴風雨の前駆が吠えて行くようにも聞えた。

午後の空は一変して、墨を流したように晦い。風は、団々たるその雲間からも、谷からも、沢からも、木々の根からも吹き起つて、海の中を行くようだった。

「やおれ。田楽狭間は、はや間近ぞ。この沢こえて、彼方の山陰の向うの尾根ぞ。死に支度はよいか。駈けおくれて、末代末孫に、恥を遺物かたみにのこすなよ」

信長の声のする所を軍の主流として、二千の手兵は当然、後れるもあり、散開して進むのもあつて、隊形をなしてはいない。しかし、心は、また耳は、絶えず信長の声のするところへ集まつていた。

その信長の叱咤も、今は声も皺しやが暖ぬれてしまつて、何を叫んでいるのか、意味も聞き取れなくなつていた。けれど言葉の意味などは、もう将士に不要になつていた。ただ味方の上に、信長あり！と、分つていただけでよかつた。

そのうちに。

槍の穂光りのような大粒な雨が横よこ撲なぐりに打つて来た。頬や鼻にぶつかると痛いのである。木の葉を捲いた疾風はやてが伴つていたので、何が顔にあたつていいのか分らなかつた。また突然、山を裂くような雷かみなり鳴なりだつた。一瞬、天地は一色になり、豪雨に白く煙つた。雨が去ると、沢の底地や崖には、滝津瀬たきつせとばかり流れる水と、濁流つがに浸ひつて足もととを見出した。

「あッ、あれだッ」

藤吉郎は、呶鳴った。

顔を雨に打たせて、鯉のように睫毛の雫をしばだたいている部下の足軽たちを顧みて指さした。

今川の陣地が見えたのだ。雨に打たれて濡れはためいている幾十の敵の本陣の幕屋がそれ！

眼の下は沢。すぐ彼方は、田楽狭間の丘陵。一跳びの間である。

見ればもうそこへと、味方の甲冑の人影は殺到していた。

槍を、太刀を、長柄を——思い思い引つ提げて、

(身軽が利ぞ)

と、信長からいわれたように、兜は背へ投げ、差物もささず、一筋の槍だけを横たえた者が多かった。

木の間を縫い、芝地の崖を踏みこりしながら、いちどに敵の幕屋へ攻めかかってゆく人影の上へ、時折、青白い雷光がひらめいて、白い雨、暗い風、まったく晦冥な天地とはなつた。

「そらッ、かかるのだッ」

藤吉郎は、そういうと、沢へ駈け下りて、向うの山へ取ツついた。彼の部下は、^{すべ}こつても転んでも、藤吉郎の側にいた。進んで血戦の中へ駈けこんだというよりも、うろろうろしているまに、いつか戦^{いくさ}そのものが、藤吉郎の一小隊をも、戦場の中に巻きこんでいたというほうが真実に近かった。

白雨・黒風

義元の帷幕^{いばく}では、雷鳴のしているうちは、むしろ爽快として笑いどよめいていた。烈風が、ふき募^つつて来ても、四方の幕^{とまり}のすそに重石^{おもし}を置かせ、

「これで暑気も一掃した」

などと未だ杯をめぐらして飲んでいたのである。

が、陣中だし、夕方までに、なお大高まで前進する予定なので、誰も、酒の量をすごして、軍旅の疲れを呼び出すことは、^{いまし}誠めながら飲んではいた。

そのうちに、

「飯^いが炊^かけました」

と、兵站部^{へいたんぶ}の雑兵が来ている。そうだ、もはや殿へも御膳をさし上げると、幕将たちも杯を納め、運ばれて来た兵糧米の炊きたたと、大きな汁鍋^{しるなべ}とを席に見た頃、

ぽつ！ ぽつ！

ぽつ！ ……

と、鍋へも飯籠^{はんご}へも、また、蕙^{むしろ}にも、各の鎧^{よろい}にも、大きく音を立てて落ちて来た雨の光に、

「やあ、これは」

と、険^{けわ}しい空の形相に気がついて、ようやく蕙^{むしろ}の位置をかえ始めたのだった。

その幕中に、幹の太さ三抱えもある楠^{くす}の大木があった。義元は、雨をも忌^{いと}って、梢^{こずえ}の下へ寄った。

「ここならば——」

と、後から、人々は義元の敷物やら膳部を、あわててそこへ移して行ったが、楠の巨木は根土をゆるがして、烈風の中に吼^ほえていた。病葉^{わくらば}も若葉も、塵^{ごみ}のように舞って、人々の鎧へ吹きつけて来るし、炊事している兵站部^{へいたんぶ}の、薪のけむりが風圧のために地を低く這って、さなきだに息づまっている義元や幕将たちの眼や鼻をついて来るのだった。

「暫時、御辛抱くださいませ。今、雨あま覆おほいの幕とばりを懸かけさせまする」

幕將のひとり、大声で、雑兵たちを呼びたてた。その返辞はなかなかない。真白な雨しぶきと、樹々のうなりに、こちらの声も宙へ攫さらわれてしまし、彼方の声も届いては来ないのである。ただ、旺さかんに炊事の煙を吐いている兵站部の幕の蔭で、薪を割る音ばかりが高くしていた。

「足軽頭ツ。足軽頭ツ」

幕將のひとりが、雨を衝ついて、外陣のほうへ駈け出して行ったと思うと、異様な声が辺りに湧き上がった。

唸うめき声。大地の音。打物と打物との烈しい響きなどである。

しかし、暴風雨あらしは、皮膚の外のみでなく、義元の頭脳あたまのうちにも荒れて混乱させていた。

「やツ、何じゃ？ 何かツ」

事態の正視がつかない眼いろだった。幕將たちも、惑うばかりで、

「裏切ではないか」

と、いつてみたり、

「また、雑兵どもの、喧嘩沙汰ではないか」

と、いつたりした。

しかし、何事に依れ、そこらにいた侍側の将士たちは、無意識にも、義元の身のまわりを桶のように囲んで、咄嗟とつさに、警備の形を作った。そして槍を、太刀の柄を、各が持ち構えて、

「何かツ、何事かある」

と、どなつたが、時すでに、潮うしおの如く、幕中へなだれ込んで来た織田勢は、ついその幕とぼりの外にも、桶くすの後方にも、彼方の広い場所にも、雄たけびして、駈け歩いていた。

「敵だツ」

「織田勢だツ」

うろたえ呼ぶ味方の上に、槍はが刎はね、燃えさしの薪が飛ぶ。

義元は、桶くすの大樹を後ろに、ものをいう口を忘失していた。その唇を、黒々と光る鉄漿かねの歯が噛みしめていた。眼の前の現実を、まだ信じられないもののように立っていた。

義元のまわりには、幕将庵原将監いはらしやうげんがいた。その甥おいの同どう苗庄次郎みょうじやうがいた。侍大将おちあいながと落合長門おちあいながとがいた。近習頭きんじゆうがしら沢田長門守、斎藤掃部助さいとうかものすけ、関口越中守などもいた。

その他、

むれもんど
牟礼主水。

かとうじんごべえ
加藤甚五兵衛。

しのみやうえもんすけ
四宮右衛門佐。

とみながほうきのかみ
富永伯耆守。

といつた旗本の錚々も、硬ばった顔をひしと並べて、

「謀叛かッ」

「謀叛人かッ」

と、繰り返して呶鳴っていた。

それへ答えるのではないが、すでに営中の彼方此方で、敵だッ、敵々ッ、と叫んでいるのが、耳には聞えているのに、なお、頭のどこかに、

(よもや?)

という気があるため、自分らの耳を疑っていたものである。

しかし、それとて、長い時間ではありえなかつた。明らかに織田武士の躍る影を見、身近く尾張訛りの聞きつけない怒号を聞き、二、三、こつちを眼がけて、

「駿河殿よなッ」

喚きつつ、阿修羅のように、槍もろとも、泥水を芻ね上げて突ツかけて来る人間を見る
と、

「あッ、織田のッ」

驚愕を革めて、

「織田の奇襲ぞ！」

と、ようやく事態を正しく知ったほどだった。

夜討を襲けられた場合よりも、狼狽はむしろ甚だしかった。信長を見くびっていた点と、白昼であったことと、烈風のため敵を営中に見出すまで、敵の近づく聲音すらも知らずにいたためだった。

いや、それよりも、本営の幕將たちを安心させきっていたものは、味方の前衛にあるともいえる。本陣付の部將松井宗信と井伊直盛の両將は、ここの丘を距ることわずか十町ほど先の地点に屯して、主陣護衛の約束どおり千五百ばかりの兵で、きびしく固めていたはずなのである。

その外陣の衛星から、

(敵、来る)

とも、

(敵、近づく)

とも、何の合図もないまに、義元以下、営中の幕僚たちは、いきなり獅子奮迅の敵影を、眼のまえに見たのである。内乱か、謀叛か、と、疑ったのも無理な狼狽ではなかった。

信長はもとより、前衛部隊のいるような地点には出なかった。太子ヶ嶽を縦横して、いきなり田楽狭間の直前へ駆けあらわれ、鬨の声をあげた時は、もう信長自身でさえ、槍をふるって、義元の幕下の士と、戦っていた。

信長に槍をつけられた敵の士は、それが信長とは恐らく知らなかったろう。

敵の二、三名を突き伏せて、信長はなおも、本陣の幕へ近く駆け寄っていた。

「楠のあたりぞッ」

信長は、味方の強者が、自分のそばを追い越して、轟しぐらに行く姿を見ると云った。「駿河公方を逃すなッ。義元の床几は、彼処の楠の巨木を繞る幕のうちと覚ゆるぞッ」

地形から視て、彼は、何とはなくそう直感に云ったのである。将の床几をすえる場所と、いうものは、その山相を観れば自然にわかるし、その場所は、一つ山に必ず一カ所しかないものだった。

「あッ、殿ッ」

乱軍の中の、ぶつかり合うばかりな出会い頭、誰か、彼の前に、血槍を伏せて、ひざまずいた味方がある。

「誰だッ」

「犬千代めにござります」

「おッ、於おいぬ犬か。働いけッ！ 働いけッ！」

夜のように、雨は暗く風は地を掃はいて、泥水を降らした。

楠の枝や、松の小枝がひつ裂かれては、大地へ叩きつけられて来る。ザ、ザ、ザ、ザ……と義元かぶとの兜の上へ、こぼしたような梢こすえの溜り水が落ちた。

「お館やかた様ッ。彼かしこ処の内へ。——彼かしこ処の蔭へ」

旗本の山田新右衛門、近習の島田左京、沢田長門ながとなど、四、五名は義元の身を、八方だて楯のように囲んで、幕とほりから次の幕へと、急を避けた。

去った瞬間、

「駿河殿やこれにあるッ」

と、残余の幕将へ目がけて、槍をつけて来た織田方の武士があった。

「推参ッ」

と、齋藤掃部助かものすけが、槍をあわせた時、敵は、

「信長公の身内、前田犬千代ッ！」

と、喘あえぐ息で名乗つたので、

「今川家譜代ふだいの臣、齋藤掃部助ッ」

と、彼も応じ、

「かツッ」

と、くだ槍の先も突き折れよと、一挙いっきよに圧おして行く。

「何をッ」

犬千代は、身をひらき、敵へ空を突かせて、よい機しおを見たが、長槍を持ち直している違いとまがなかつたので、掃部助かものすけの頭なぐを撲りつけた。

かんと、兜かぶとの鉢金が鳴った。掃部助かものすけは、雨の中へ、両手をついて、四つん這いになつた。ところへ、

「高井蔵人たかいくろうどッ」

「四宮右衛門佐しのみやうえものすけッ」

などと名乗りかける敵の声が耳のそばでした。犬千代が、槍を向け直した時、敵か味方が仰向けに、ぶつ仆れた者がある。その死骸につまずいて、犬千代も踰めいた。

「木下藤吉郎ツ」

どこかで、名乗っている声がある。犬千代は、にことした。その笑鬨へ、風が、雨が、びゅツと打つけてくる。何を見ても、泥であった。何処を見ても、血であった。

迂る、転ぶ。——と、思うと、もう側にいた敵も味方もいない。死骸の上に、死骸が折り重なっている。雨がバチャバチャとその背で音を立てている。武者草鞋は真つ赤だ。血の河を蹴ってすすむ。

庵原将監と名乗って来た者を突き伏せた。しかし、突き捨ててまたすぐ進む。——鉄漿公方はいずれにありや。駿河殿の首級な申しうけん。雨も叫ぶ。風も叫ぶ。

父将監討死ときいて、義元の小姓庵原庄次郎、善戦して、織田武者の群れのなかに死骸となる。

関口越中守、富永伯耆守など、今川軍の名だたる猛将も、それぞれ恥かしくない死に方であった。

勿論、織田の将士で、傷つく者も多い。けれど、敵の十に対して一ほどの死者もなかつ

た。

どこで、どう組んで、敵に挽もぎとられてしまったのか、進軍の途上、信長の馬前にすがつて、陣借じんがりして参加した甲州ろうにん 人の桑原くわばら 甚じんない 内などは、腰から下の具足や草摺くさすりは着けていたが、上半身の鎧は失つて、半裸体のまま、血あぶらに染んだ槍を握りしめ、

「駿河殿に見参まッ。御大将義元には、いずれに在おわすや」

楠の後ろの辺りを中心に、十歩、二十歩、あなた此方、シャ嘎がれ声をしばって駈けまわっていたが、そのうちに、一カ所の陣幕のすそが、烈風にふき煽あおられてぱつと剥めくられた刹那、チラと、その中にいた赤地錦の鎧直垂よろいひたたれと八龍の兜との人影を、一閃いつせんの雷光いなずまの下に見つけた。

その義元の声らしく、

「儂みにかまうなッ。急場ぞ、急場ぞッ。義元の身辺に、人数は要いらぬ！」

烈しい声で、辺りに躁さわぐ幕僚や旗本たちを罵ののっていた。

「——狼狽うろたえずと、敵を退け、みずから首を授けに来たりしこそ幸いなれ、信長めを、討つて取れッ。義元の身を護るよりは敵へ当れッ」

さすがに彼も三軍の総帥そうすいであった。誰よりもはやく、形勢の全体を察知した。いたず

らに右往左往したり、身近に従きまどつて、無意味な呶号ばかりしている将士らを腑がいなしと怒っているのだった。

それに鞭打たれて、

「あッ——」

と、彼の身边を離れた将士は、日頃の鍛錬と恥を思い起して、各、戦いの中へ身を投じて行つた。

ばツばツと泥水を刎ね上げて行く幾名かのその足元をやりすごしてから、物蔭に潜んでいた桑原甚内は、確かに、大将義元と見たそこを窺つて、槍の先で、濡れた陣幕のすそを払い上げた。

「……やッ？」

義元の姿はもうなかった。

一人の武者もいないのだ。

とぼり
幕のうちには、大きな木鉢の飯が覆つて、雨水の中に飯つぶが白くふやけているのと、
四、五本の燃えさしの薪がいぶつているだけだった。

「さては」

早くも義元は、二、三の侍臣だけを連れて落ちたな——と、甚内は覺つた。幕から幕を覗いて行つた。あらかたの幕は切り裂かれて落ちてゐるか、血に染んで踏みつけてあつた。

「そうだツ、馬備え？」

徒歩では落ちまい。すると馬繋ぎへ駈けつけたに違ひない。だが、たくさんな幕と乱軍の営内では、どこが敵の馬繋ぎ場か、ちよつと見当もつかないのである。

それに、馬もじつとしてはいなかった。雨と、劍光と、血の中を、馬も狂つて、何十頭となく駈けまわつてゐる。

「どこへ潜んだか」

甚内は、槍を立てて、乾からびた喉へ、鼻ばしらから伝う雨水のしずくを飲み下してゐた。

すると直ぐ眼の前を、自分を敵とも気がつかずに、一頭の青毛の駒の狂うのを、懸命に曳いて行く武者がある。

金砂子の覆輪を取つた螺鈿鞍に、燃ゆるような緋房をかけ、銀色の轡に紫白の手綱。——甚内の眼は射られた。

まごうなき大将の乗用である。眼をつけていると、駒はすぐ先の一叢の松の木蔭へ曳

かれた。そこにも、幕が仆れている。また、まだ懸けめぐらしてある幕が風雨に大きな波を打っている。

甚内は、一跳びに、

「ござんなれ」

と、ばかり近づいた。幕を払う。

義元はそこにいた。

今しも、義元は、身を潜めていたその少し先から、家臣の者が、駒を曳いて来たことを性急に告げ立てたので、幕の外へ、身を移そうとした折だった。

その背を目がけて、

「駿河殿と見うけたり。織田家の懸かかり人桑原甚内、御首みしるしをいただきに推参。お覚悟あれッ」

声と共に、槍の柄が、

かんツ——と、響いた。

義元の一閃いっせん。

松倉郷まつくらこうの太刀が、振り向きざまに、中断したのである。

「しまつた」

と、跳び退く甚内の手には、槍の柄の手元、四尺ばかりしか残っていなかった。槍の折れを、投げすてて、

「御卑怯ツ。名乗る敵へ、背を見せ給うかつ」

甚内は、喚いて、腰の剛刀を払い、ふたたび義元の背へ、躍りかかろうとしたせつな、
「やツ、殿へ」

と、甚内の背後から、今川方の平山十之丞が組みつく。

でんと、雨溜りの地へ、十之丞が投げつけられた時、

「おのれツ」

と、同僚の島田左京が、甚内の横から斬りつけた。

身を反らしたが、十之丞に足首をつかまれていたため、かわしきれずに、桑原甚内は、左京の刀下に、真二つになつて仆れた。

「殿ツ、殿ツ。——一刻もはやくこの場をお落ちなされませツ。乱れ立つたる味方、気負いぬく敵、拾収はつきませぬ。無念ながら一先ずここは」

喘いでいう島田左京の顔は、左京と見えないほど真っ赤だ。満身、泥にまみれた平山十

之丞も、刎ね起きて、左京と共に、

「いざ、お早く」

と、せき立てた。

「あいや」

突忽として、その前へ、

「治部大輔義元殿へ見参ッ。——織田殿の御内にて、服部小平太ともうす者」

声があつたかと思うまに、黒緘しに黒鉄の鉢兜を眉ぶかにかぶつた偉丈夫を見た。

——だツと、一足、義元の退る前へ、朱柄の大槍はうなりを含んで突いて来た。

「曲者ッ」

と、身をもつて遮つた島田左京は、太刀をふりかぶるまに突き伏せられていた。平山之丞、つづいて立ち塞がったが、小平太の烈しい槍先にかけられて、これまた、朱になつて、左京の死骸へ折り重なつた。

「待たれいッ。何処へ」

電撃の槍は、義元を趁う。

義元は、大きな松の根方を、一めぐり駈け巡ったが、

「推参ッ」

振りかざした松倉郷の太刀の下から、はッたと、小平太を睨めつけたが、

「む、むッ」

突き出した槍は、義元の鎧の脇腹へはいった。しかし、小貫こぎねの鍛きたえは良し、義元も剛気、かッと開いた口が、

「下郎ッ」

と、いうと、槍の蛭ひるまき巻まきから、斬つて落していた。

小平太はあわてず、

「心得た」

と、すぐ柄えを投げすてて組まんとばかり、体当りにとびかかった。

義元、

「さはさせじ」

と、膝を折り敷き、八龍の兜を前かがみに、跳びついて来る小平太の膝首のあたりを、がつんと横に払う。

太刀はよし、必死。鎖膝行袴くさりたつつけから火を出した。小平太の膝がしらは、柘榴ざくろのように割れ、傷口から白い骨が出た。

「——あッ」

小平太は、尻もちついた。義元もまた、前へのめって、兜まえたての前立で地を打った。その顔を上げたかと思えた途端、

「毛利新助秀高もうりしんすけひでたか！」

と、横あいから名乗った男が、義元の首へ組みついて、諸倒もろだおれに転がった。

義元の胴が、ために伸びると、先に突かれた槍の傷口から、噴き出すような血ほとばしが迸ほとばしった。「ちッ、ちえッ」

下になった義元は、毛利新助の右手の人差指に噛みついていた。掻切られた首となつてからも、義元の紫いろの唇くちびると鉄漿染おはぐろぞめの齒の中には、白い指がはいつていた。

虹

味方が勝つたのか。敵が勝っているのか。

いったいまた、自分らは、どう戦ったのか。

「おういッ、ここは何処だ」

藤吉郎は、息をついて、われに回ると、誰へともなく、辺りへ呶鳴った。

「……？」

何処のどういう地点まで来ているのか、分っている者は一人もいなかった。彼を、小隊の組頭と頼つて、彼のまわりには、十七、八名の足軽が生き残っていたが、どれも皆、うつつの血相である。人間の顔いろではない。

「……はてな？」

藤吉郎は、耳をすました。

雨は、霽はれて来た。風も小やみだし、雲の断きれまから、また強烈な陽がこぼれている。夕立のあがり頃から、田楽狭間でんがくはざまの阿鼻叫喚あびきようかんも、雷鳴かみなりの行方と一緒に、遠く消えて、その後を、実に何のこともなかったように、蝉せみや蝸くわしが啼ないている。

「整列ッ」

藤吉郎は、号令した。

足軽は横隊に並んだ。

頭かずを眼で読むと、三十名の組が十七名に減^へっている。しかし、そのうちの四名は、組頭の藤吉郎も、見たことのない顔の足軽だった。

「おい、四番目の」

「はッ」

「そちは、何処の組の者だ」

「遠山甚太郎殿の手の者ですが、田楽狭間^{でんがくはざま}の西の崖で戦っているうち、崖から^{すべ}り落ちて本隊を見失い、ちようどそこへ、敵を追いかけて来たこの組に交じって、そのままこれまで来てしまいましたので」

「そうか。七番目のは」

「はッ。てまえも、乱軍中に、自分の組で戦っているつもりでしたが、気がついてみると、木下殿の組にいました。——けれど何処の組で働こうと、御奉公は一つと思つて」

「そうだ。その通り」

藤吉郎は、そういつて、後の者は問わなかった。

恐らく、自分の組下で、戦死した者もあろうが、幾人かは、他の組へ^{まぎ}紛れこんで、生きているであろうと思つた。

いや、箇々の兵が、乱軍で皆、その所属を見失つたばかりでなく、木下組の小隊そのものが、すでに本陣とも、主隊の浅野又右衛門の軍からも離れて、迷子になっていたのだつた。

「——ほぼ勝敗はついたらしいぞ」

藤吉郎は**つぶや**ながら、部下を率ひきいて、元の道へ引つ返した。四方の山から沢へあつまつて来る濁水は、風雨が霽はれてから水かさを増していた。その水に洗われている死骸や、崖の途中に重なっている死骸の夥おびただしさに、藤吉郎らは、生きている身が、奇蹟のような気がした。

「お味方の勝利だぞ。——崩れ立つたは敵。見よ、この辺に死んでいるのは、みな今川の本陣付の侍ばかりだ」

藤吉郎は、指さして、部下へ語つた。道々見る敵の死骸によって、潰かい走そうして行つた敵の主脳部の径路が彼にはやや分つて来たからである。

だが、部下の兵らは、

「……はあ」

と、ばかりで、まだほんとのわれに回かえつていないし、凱歌をあげる気力もなかった。む

しろ味方の主隊から迷子になって、わずか十七、八名で、さまよっている心細さに囚われ
ていた。急に戦場の空気が静かになったのは、一方で信長の本軍が全滅しているのではあ
るまいか。何しろいつ敵に包囲されて、自分らも、そこらに転がっている死骸と同じ姿に
なろうやも知れない、そうも思う懸念のほうが強かった。

すると、田楽狭間の高地で、わあッ、わあッ、わあッ——と、天地もゆるがすような
勝鬨が三度ほど聞えた。

勝鬨の声にも、武者押しの声にも、どこかお国風がある。
声をあわせて、

「わあッ」

と、いうだけでも、駿河衆のそれと、織田武士のそれとは、自然気あいの違うものであ
る。

「勝軍だッ。戦はお味方の勝利なるぞ。それ行けッ」

藤吉郎が先に駈けると、

「わあッ」

今まで、人心地もなかつた足軽たちも、突然、

——われ生きたり。

——われ勝てり。

と、武者ぶるいする身心地を取り回して、遅れじと、藤吉郎につづいて、勝鬨の聞える丘のほうへのめッて行つた。

「おーいッ」

呼び止める声が出た。一方の山の中腹の道からである。

藤吉郎は、小手をかざし、

「味方か」

訊ねると、先からも、

「そこへ見えたは、いずれの隊か。この方は、お使番 中川金右衛門」と、いった。

「浅野又右衛門の手の者。足軽三十人組の木下隊でござる」

口へ手をかざして、大きくいう。

すると、中川金右衛門は、崖の小道を駆け降りて来て、

「足軽の木下隊か。御本陣その他皆、この先の間米山へ移っておられる。浅野殿もそれ

へ引き揚げられた筈。はやく、そこへ急がれい」

かたじけな
「忝い。——して御合戦のもようは」

「もとよりお味方の大捷たいしょう。今の勝鬨かちどきをお聞きなかつたか」

「多分——とは存じたれど」

「すでに、駿河勢は、総くずれとなり、義元殿のお首級しるしも、味方の手にあがりたれば、この上の長追いは無用とのお下知げち。——全軍ひとまず間米山の御陣地もとの下へあつまれとの御命令である」

お使番の中川金右衛門は、そう伝えると、すぐ先へ急ぎかけたが、またふり返つて、
「これより西の山間やまあいには、まだ他に、迷れた味方はぐがおつたであろうか。——長追いして、
歸らぬ味方を見なかつたか」

と、訊ねた。

藤吉郎が、遠方から、

「ない。ない」

首を振つて見せると、金右衛門は方角をかえて、他の道へ、味方の迷子を探しに駈けて
行った。

間米山まごめやまは、田楽狭間でんがくはざまの少し先、大沢村のうちの小部落にあつた。低い丸い丘である。

見れば、この丘から部落に至るまで、真つ黒に味方の人数で埋まつていた。華やかな色とは何一つなく、泥と血と雨にまみれた三千余の戦兵であつた。戦たたかい熄やんで、一かたまりになつた時、雨も熄やみ、陽も照り、濛もう々もうと、三千の武者いきれから白い湯気が立ちのぼつていた。

村民は、清水を汲んで、陣地へ担にないこんでいた。芋いもを煮ていた。餅もちをついていた。馬も、草や人參にんじんを唾くわえていた。

「浅野殿の隊は」

藤吉郎は、武者混みむしやごへ割つて入りながら、帰属する自分の隊をたずね廻つた。彼は、血まみれな人々の甲かち冑ちゆうにふれると、何か、面目ない気がした。自分も恥なき戦いはしたつもりであるが、これという人目立つ手功てからは何もないせいであつた。

ようやく、本隊へ戻つて、彼も武者いきれの中に立ち、初めて心の底から、
「勝つたのだ」

と、むしろ敗れた敵の大軍が、その丘から眺めても、もう何処にもいないのが、不思

議のようにさえ思われた。

やがて。

丘の上なる信長の前へ、集められて来た敵の首級は、二千五百と数えられた。治部大輔じぶのたゆう義元の存在も、その中のただ一箇でしかなかった。

敵の首級二千余に対して、味方の死者も少なくなかった。使番が四方に駈けまわって、引き揚げを令しても、帰らぬ将士が幾十人かあった。

しかし、敵の夥おびただしい死者の数から見れば、味方の犠牲は、何十分の一でしかない。

わけて、敵ながら悲壯を極めたのは、井伊直盛いいなおもりの隊であった。直盛は、田楽狭間でんがくはざまの義元の本陣を約十町ほど離れて警備に就いていたが、暴風雨あらしのために、信長の軍が、前衛の警戒線を突破したことをまったく気づかなかった。

それと騒いだ時は、すでに敵は本陣へ突き入り、義元は討たれていたのである。直盛の将士は、その自責から最も奮戦力闘した。直盛が乱軍の中で自刃すると、以下の将士も皆、斬り死するか、自害して、一人も生き残らなかつた。

その他、目ざましい最期を遂げて、敵とはいえ、眼に残って消えない武士さむらいがたくさんあった。戦い果てて、

(われ彼に勝つ)

と、知ると共に、武士の心には、そうした床ゆかしい敵の働きぶりだが、味方の得意な顔以上、眼に残った。いつまでも心に刻まれて、暗黙の中に、追慕されていた。

(惜しい敵だった)

(よい死に方だった)

口には出さないまでも、あすはわが身にもあることと思うのだった。そして、今さらの
ように、

(よい御主君を持ち得たるものかな)

と、勝者の軍にいる自分の幸さちを思い、戴く人を心に仰ぎ直すのであった。

おだかずさのすけのぶなが
織田上総介信長。

その信長も、血と泥土にまみれた姿のまま、間米山の中腹に見えた。その床しょうぎ几ぎから
数歩を距へだてた地上を今、数名の足軽たちが、鋤すきくわ鋤くわを持って、大坑おおあなを掘りにかかっ
た。坑あなのまわりには高く土が盛り出されていた。

二千の首級は、一つ一つ検分された上、やがて、その坑へ投げこまれてゆく。信長は合
掌して見ていた。周囲の将士も、肅然と口を結んだまま立ち並んでいた。

誰も念仏一ついわない。

しかし、武士が武士を埋葬する最高な礼式をもって、それは行われたのだ。坑あなに入る首は、これからも生きてまた戦つてゆく武士に、何ものかを訓おしえ残して行つた。どんな小者の首一つでも、いけぞんざいには扱あつかえなかつた。森しんげん敵てきな氣に打たれずずにいられなかつた。幽ゆうげん玄げんな生死の境を足もとに見て人間を——武士の人生を、思わずにいられなかつた。

誰も皆、掌てはひとりでに、鎧の胸に合わさつていた。土がかぶせられ、塚に盛られ、氣がつくと、雨後の大空には、美しい虹が懸かかつていた。

そこへ、一隊の物見が歸つて来た。

これは田楽狭間を潰かいめつ滅めつさせると直ぐ、大高方面へ偵察に向けられた隊である。大高には、三河の松平元康が、義元の先鋒せんぽうとして働いていた。織田砦とりでの鷲津わしづ、丸根を攻め墜おとした手際から見て、信長は、最も油断のならぬ敵として、重視していたからである。

「義元戦死と聞え、大高の陣中も、一時は騒然とあわてた氣配にござりましたが、数度、物見が出た様子で、程なく、事実と知ると、やがてひそまり返り、三河へ引き揚げの準備にかかりましたれば、無謀な戦意はなしと見届けました。三河勢の退去は、恐らく夜を待つて行われるかと存じます」

以上の報告を聞き、なお、鳴海に残っている敵の岡部元信の動静をも確かめた上、信長は、

「いで、帰らん」

と、凱旋がいせんを宣した。

まだ陽は落ちていなかった。いちど薄れた虹がまた濃く立つ。彼の騎うまの鞍側くらわきには、首一つ、みやげに結ゆいつけられてあった。いうまでもなく、今川治部大輔じぶのだゆう義元よしのの首級である。熱田の宮の社前へかかると、信長はひらりと下馬して、

「神前へ御報告つかまつな仕ろう」

と、宝前ほうぜんへすすんだ。

凱旋の将士もすべて、宮の中門まで詰めて、黒々と大地ぬかずに額ぬかいた。

遠く、振鈴がひびいた。

宮の森は、篝火かがりで赤くいぶされた。霧とけむりの上に、宵月があつた。

信長は、一領の神馬しんめを、宮のお厩うまやに献上して、

「さらば、清洲へ」

と、ふたたび急いだ。

着ている武具は重かつたし、体は綿のようにつかれていたが、騎にまかせて月の道を帰る彼の気もちは、もう浴衣ゆかたがけの人のように気軽に見えた。

清洲の城下は、熱田の町以上にたいへんな騒ぎであった。千戸に万燈まんどうをかけ連ねていた。辻には大おお篝かざりを焚き、家ごとの軒下には、老人としよりも子も若い娘も皆出て、凱旋将士を見ると、

「帰りませ！」

「帰りませ！」

と、熱狂した。

辻にも、黒い人の山が押し合っていた。肅々と、城門へ練ってゆく鉄甲の列のなかに、わが良人つまやあるとさがし廻る眼。わが子ありと、人へさけぶ老人。恋人の影を求める若い女。しかし、そのすべてが、やがて馬上の信長を夜空に見るや、

「オオ。オオ」

「国主」

「わが国主」

「信長様」

一瞬は、歓呼とどよめきの坩堝るつぽであった。彼らにとって、信長こそ、わが子以上のものであり、わが良人つま以上のものであり、恋人以上の恋人であった。

「——今川治部大輔が首見よや。信長がきょうのみやげはこれぞ。あすからは、そち達にも、国境の憂いはないぞよ。精出して働けよ。働いてよう遊べよ」

馬上、庶民たちの歓呼へ、信長は、右へ向いては云い、左の群集へ向ってはまた答えて行つた。

城へはいると、

「さい、さい。何よりは一風呂あみたい。風呂と、湯漬ぞ」

信長はいつた。

風呂を出る間に、彼の胸には、きょうの合戦で働いた約三千余の将士に対する賞罰もきまっていた。

すぐ林佐渡と、佐久間修理しゆりの二人へ、旨を達しておいた。

梁田弥やなだ二右衛門政綱まさつなに、沓掛城くつかけじょう三千貫の采地さいちを与う——という賞賜しょうしを筆頭に、

服部小平太、毛利新助など、約百二十余名への賞賜を、信長は、口頭でいって、それを佐渡と修理に記録させた。

小者の端の——誰も知らないようなことまで、信長の眼は、いつのまにか見ていた。

「於犬おいぬには、帰参をゆるしてとらす」
最後にいった。

それはすぐ、前田犬千代に、その夜のうちに伝えられた。なぜならば、全軍が城内へはいつても、彼一名は、城外に止まって、信長の沙汰を待っていたからである。

藤吉郎には、何の恩賞もなかった。勿論、藤吉郎も、恩賞の沙汰をうける覚えがなかった。けれど彼は、千貫の知行以上のものを、たったこの一日のうちに身に享うけた。それは、生れて初めて、ほんとの生死の線を通つて来た尊い体験と、眼まのあたり信長から身をもつて教えられた戦いくさというものの機微、人心の把握など、総じて、将たる器うつわの大度たいどを見たことであつた。

「よい主しゅを持つた。信長様に次いで果報者は、この俺だぞ」

彼はそれ以来、信長を主君と仰ぐばかりでなく、信長の一弟子という心をもつて、信長の長所に学び、由来無学鈍才な自身を研みがくことに、一層心をひそめていた。

夕顔ゆうがおの門もん

たしかに、急激な速度で、世の中は変革しかけている。けれどどう眺めても、そう動いてもいないように見えるのが、世の中の表面でもあった。

桶狭間おけはざまの一戦の大捷たいしょうは、さすがに十日余りも、清洲きよすの城下を昂奮あつぱの坩堝るつぼと化して、盆も夏祭も一緒に来たような騒ぎだったが、それも常態かえに回ると、鍛冶かじの家には鎚つちの音が聞え、桶屋の軒には桶を叩く音が洩れ、厩うまやの裏には馬糞まぐさを刻む音が静かにして、各がその職分に精出し始めると、炎天の城下町は、人通りさえ稀れで、からんと、往来の道ばかり白く乾いていた。

「木下様」

誰か、呼ぶ声に、

「おうい」

藤吉郎は、昼寝していたが、眼をあいて、床ゆかむしろ 藁わらから首だけ擡もたげて云った。

「どなたかな？」

「志村しむらの家内しむらでござります」

「やあ、お向いの御内儀か」

「ちとばかり、手作りのそう麺めんを冷やしましたので」

「また、戴き物でござるか。それは恐縮」

「箆ざるはお貸し申しておきますゆえ、お勝手へ置いて参ります。後でまいちど、清水で晒さらして、召し上がって下さいませ」

「ごんぞ、ごんぞ」

「お召使は、見えませぬ」

「ごんぞは見えませぬか。では下婢おんなは」

「針を持ったまま、勝手元の部屋で寝てござりまする」

「やれやれ、主人が眠ると、猫までが眠る。では、箆ざるは後からお返しに遣つかわします。御主人にも、よしなにお伝えを」

口愛想はよいが、物臭く、腹這いのまま、奥から呶鳴っているのであった。

城内ではとかく、白眼視されているが、この桐畑の組屋敷の近所界隈かいわいでは、彼の人気は至つて良かった。それも主人よりは細君のほうに良く、細君よりは娘子供にな良かった。

しかし、きれいな娘を持つ家庭では、独り者の彼に対して、相当周到な警戒をしていた。

退屈で困っています。少し話しにいらっしやいませんか——などという誘いを、娘の親の前でも、平気で彼はいうからであつた。

退屈といえ、この五、六日、彼は体をもてあました。ちと遠国まで供を申しつける程に、旅支度いたしておれ。十日以内に出発の沙汰いたす。それまでの間、休養して、余り外出はすな。また、他言もならぬことは改めていうまでもない。

こう信長からいわれて、彼は、その出発を待機していた。支度といつても何も無い。留守は、ごんぞと下婢おんながいる。

「——供を申しつけると仰つしやつたが、御主君のお旅立ちとはおかしいな。何処へお出かけになるのだろ」

起き直つて、今もぼんやり考えていた。そしてふと、庭垣に、夕顔の花の蔓つるを見ると、彼は、寧子ねねのすがたを想い出した。

沙汰の下るまで、余り外出はすなと命じられていたが、夕風がふくと、彼は行水をひと浴あみして、寧子の家の前を通つてみた。近頃はなぜか、訪れるのは、羞恥はにかましくて、それと寧子の両親に会うと、改まつて、用事でもない、こちらの肚みすかを見透されそうなので、ただ、彼女の家の門を、行きずりの人の如く装つて、行つたり来たりしてみるだけで、戻

つて来るのであった。

寧子の家の庭垣にも、夕顔が咲いていた。きのうの夕方は短檠たんけいに灯ともしていた彼女の姿を、ちらと外から垣間見て、思いを果したように帰って来たが、夕顔の花より白いその折の横顔を、今ふと思ひ出したものであった。

「お目ざめでございましたか」

若党のござが帰って来た。

ござは直ぐ、井戸水を手桶に汲んで、藤吉郎が、独り坐っている庭先へまわり、

「ちと、水でも打ちましよう。きょうの暑さはかくべつ。地割れのするほど乾いておりますで」

百坪にも足らぬ狭い庭へ、手桶の水を、何杯か撒まいた。

「そうそう、ござ。勝手に、御近所から到来物のそう麵めんがあるぞ」

「はい。戻る途中で、お向いの御新造さまに出会い、左様に伺いました」

「そちは、どこへ出かけていたのか」

「職人町の辻で、捕物とりものがあるとかで、町の者が騒いでおりますゆえ、物見に出向きましたので」

「耳ざとく、よく町へ弥次馬に出かける奴じやな。捕物とは、盗人でも捕まったか。清洲の御城下に、盗人があったとは珍しい」

「いえいえ、それどころではござりません。職人町の鏝横丁という裏町をご存じでござりましょうが」

「うム」

「あの路地の角の酒屋、二軒目の渋紙屋、その並びの烏帽子折、塗師屋、柄巻職人など住んでいた一と長屋が、一夜のうちに皆、空家になりましたな」

「ふーム」

「夜明けと共に、近所で騒ぎ立ち、直ぐ訴え出ましたので、取調べたところ、あの鏝横丁の一と長屋と職人が皆、稲葉山から廻された美濃の間者だと知れました。——で、なおも近所合壁の者どもを一人一人囲いへ入れて、今朝から厳しく調べておるうちに、二、三、怪しい者が現われたので、引縛ろうとすると、やにわに得物を把って手むかい致し、近所の衆、役人方の五、六人も、殺傷された揚句、ようやく捕えましたが、一時はえらい騒動でござりました」

「美濃の謀者が一と長屋に住んでいたのか」

「知らぬも不覚なことでござりました。敵国の人間が、御城下に一かたまりも巢を喰つて、悠々と、美濃へ通じているのをば」

「ははは。お互いごとじや。——ごんぞ、下婢おんなにいうて、行水の湯を沸かさせておいてくれ」

「そしてまた、お出かけでございましょうな」

「このところ、毎日閑役かんやく、一あるきして来ぬと、腹が減らぬ」

やがて薪まきの煙が、勝手から家の内を吹きながれた。湯浴ゆあみして、帷子かたびらにかえた藤吉郎は、草履をはいて、庭木戸から外へ歩みかけた。

そこへ、城のお使番の末の者が、訪れた。御用ごようばこ筥から召状を出して手渡すと直ぐ帰つて行つた。藤吉郎は、あわてて屋内へ戻り、急に衣服を改めて、林佐渡の私邸へ急いで行つた。

先頃から待機していた御沙汰なるものを、彼は、家老の私邸で、林佐渡から直接に申しつかつて戻つて来た。

（——明朝の卯うの頃までに、旅装を整えととの、御城下端はすれ、西の街道口、豪農どうけせい道家清十郎じゆうろう宅まで参らるべし）

と、いう沙汰なのである。

それ以外は、

(行けば分る)

とだけで、何も聞かしてはくれなかつた。

遠国へ、信長が微行しのびで——その供のうちへ自分も——と、こう考えて来ると、多くを聞かなくても、彼にはほぼ主君の目的のあるところが分るような気がした。

「これは自分、帰れないらしいぞ」

同時に彼は、寧子ねねともしばしは別れと思つて、折ふしの夏の月に、ひと目でもと、途中から会いたさが胸に増して来た。

思いたつと、彼は、矢もたてもない性さがだつた。煩惱の子であつた。

彼の心にも住む意馬心猿いばしんえんは、彼を、寧子の家のほうへ駆りたてていた。そして、世間によくある深窓の灯を窺うかがう不良児と、何ら変らない恰好かっこうして、藤吉郎も、その家の垣の外をうろついていた。

弓之衆の組長屋なので、この界限かいわいを通る者は、たいがい顔見知りの人たちである。彼は、往來の蹙音あしおとにも心をおき、家の中の寧子の両親や家族から覺さとられることもひどく惧おそ

れた。

その臆病な、小心な態は、笑うべきものであった。もし藤吉郎自身でも、他人のそういう振舞いを見たら、軽蔑するにちがひなかった。けれど今の彼には、男の面目も、万一の外聞も、反省している違がなかった。

「寧子は、どうしているか」

彼が求めているのは、つまるところそんな他愛ないことでしかなかった。垣根の隙間から、彼女の横顔と、この夕方の彼女の生活の端を、一目見れば、それで気はすむのであった。

「もう、湯浴みをして、化粧しているかな。親たちと、膳をかこんで、御飯でもたべている折かな？」

三度ぐらい、その垣の外を、彼はさあらぬ顔して、行きつ戻りつした。宵なので、誰か一人や二人は往来があるのだった。垣根にすがって覗きこんでいるところを、

「木下殿」

などと知っている者に呼びかけられたら大いに赤面ものである。いやそれよりも、折角、犬千代が手をひき、親の又右衛門も、その後、考え直して来て、寧子と自分との結婚の工

作が、このところ好転しかけているものを、自分でぶち壊すような結果を招来する惧れもある。

今は。

そつとしておくに限るのだ。寧子の母も、寧子も、心はきまっていよう。だが、父親の又右衛門がまだ、容易に、肚を決めかねているところだ。七分三分の考慮中で、娘と父、母親と父親とのあいだにも、なかなか易々とは一致をみないままに、ここはお互いが、心の推移を待つているといった按配に——先ず寧子の縁談は、家庭のうちでは、打ち切られたすがたになつているのであろう。

そこへ。

この前のような短兵急に、厚顔しい押しの一手で、

「寧子を給われ。婚礼の日どりを決めて欲しい」

などと自分でもちかけると、かえつて又右衛門の厳格な父性は反撥するかも知れないし、寧子や寧子の母親が、せっかく寄せている好意をも、興さまして、ふと、考え直されでもしたら、取り返しはつかない。

先年までは、犬千代という強敵が居、消極的に、失恋を待つていたら、とても勝目はな

いので、あらゆる智慮と熱情をもつてそれと闘つたが、もう自分の恋を脅威する相手は、
(寧子をたのむ)

といつて国外に去り、その後、桶狭間の合戦の後、ふたたび御勘気をゆるされて、城内へ帰参してはいるが、もう以前のように、この家へ近づいているふうも見えないのである。又右衛門が苦にしていた問題の「犬千代との結婚の口約」なるものも、自然解消のままになつて、今日では何の憂いもない筈のものになつている。

「焦心する必要はもうない。今はそつとしておいて、又右衛門の気もちが、もう一步、好転するなり、よい口ききが、他から現われるのを待つのが上策」

藤吉郎は、その辺、心得ぬいていた。——しかし、寧子のことに限つては、彼のそうした賢い思慮と、彼の愚かな垣覗きの心理とが、一箇の彼という中に、べつべつに働いていた。

蚊遣の煙がながれている。台所のほうでは瀬戸物の音が聞える。まだ夕餉も前らしい。「才、働いてござるな」

藤吉郎は、やがて、わが宿の妻ときめている寧子の影を、仄かな明りのさす台所の辺りに見出して、

「あれなら世帯も好う持とう」

などと人眼を忍ぶ急場にも、そんなことまで考えたりした。

彼女の母の呼ぶ声がある。彼女の返辞は、垣の外から覗いている藤吉郎の耳にもひびいた。藤吉郎は、歩き出した。往來を誰か人が通って行ったからである。

「よく働く、そして柔順だ。あの女なら、中村の母にも気にも入ろう。百姓していた姑と、わしの母親を、粗末にするようなことはあるまい」

彼の恋は、煩惱のうちにも、遠大な考えまでした。

「貧乏に耐えよう。虚榮には囚われまい。良人は大事に、良人の陰で助ける女になれよう。おれの欠点も、ゆるすだろう」

何もかもよく考えられる。

第一眉目も麗しい。

あの女性を措いては、おれの妻はない。そうまで、思い込んだ。ひとりでに胸が膨らんでくる。大きな動悸を打っているのだ。——ふウツと、星を仰いで大きな息をついた。気がついてみると、組長屋の一郭を一まわりして、またいつのまにか寧子の家の前に出ているのだった。

ふと、垣の中に、寧子の声があった。水桶を持って、井戸のほうへ行く姿が、夕顔の蔓のすき間から見える。こぼれそうな星明りだし、夕顔の花明りに、その横顔も白々と見えた。「下婢かひのする水仕事まで手伝つてするし、あの手で、箏ことも弾くし……」

藤吉郎は、中村の母親に、わたしの嫁はこういう女性であると、一日もはやく見せたい気がした。涎よだれをたらさないばかりな顔である。その顔を垣へ寄せたまま、彼自身、眺め飽くことを知らない態であった。

井水いみずを汲み上げる音がする。だが寧子は、水桶を提さげずに、じつとこつちを振り向いていた。

「ア、気づいたかな？」

思う間に、彼女の姿は、井の側を離れて、裏の木戸のほうへ歩いて来た。藤吉郎は、胸に火を当てているように、熱い鼓動を覚えた。

「……？」

彼女が、そのの木戸を、そつと開けて、外を見まわした時、藤吉郎の影はもう、後も見ずに駆けていた。

遙かな、道の辻を、横へ曲る時、藤吉郎は振り向いて見た。白い顔が、怪訝けげんそうに、ま

だ木戸の外に立っていた。

「……………」

恨むような眼がこつちを見ているようにも思われた。けれど藤吉郎は、とたんに、明日の卯うの刻くの旅立ちを考えていた。他言を禁じられている主君のお供である。寧ね子にもそれはいえないことであつた。

彼女の無事を知り、姿を見、ここまで離れて来ると、藤吉郎はもう常の彼に立ち回かえつていた。一目散に家に帰つた。そして眠ることになると実に屈託いびきのない鼾声であつた。

若党のごんぞは、いつもの朝より早く起きて、

「旦那さま、お支度なされませ。そろそろお時刻でございますぞ」

枕元に坐つて起した。

おうと匆はね起き、顔を洗う、飯を喰う、旅支度にかかる。

こういう起居の手ばやくて活潑なことは、信長仕込みというか、藤吉郎もおそろしく気短かであつた。

「行つて来るぞ」

何処へとも、召使にも云い残さない。命令の卯の刻すこし前に、彼も、城下外の西の街

道口、豪農どうけせいしゅうろう道家清十郎の宅まで行き着いていた。

てつこくじゆんゆうき
敵国巡遊記

「やあ、猿どのか。おぬしもきようのお供に見えたか」

豪農道家清十郎の門口に立っていた田舎侍いなかざむらいが、彼を見ると呼びかけた。

「や、於犬おいぬ」

これは意外といった顔つきの藤吉郎であつた。

その犬千代が来ていることはさして驚くに足らないが、服装がいつもとまるで違う。髪ゆの結ゆいようから大小、脚絆きやはんの拵こしらえまでが、どう眺めても草深い田舎から出た野侍のざむらいとしか見えないのである。

「これはまた、どうした仔細」

訊ねかけると、

「御一同もすでにぼつぼつ揃うて在いらせられる。はやく通れ」

門衛もんえいのように犬千代はいう。

「お汝は」

「わしか、わしは暫時、門番を仰せつけられた。後で通る」

「然らば」

「ごめんと通つて——藤吉郎は門内の前裁せんざいに佇たたずんだ。庭へ通う道と、入口へ向う道との、いずれへ通つたものか一思案という顔だった。

豪農道家清十郎の家は、藤吉郎の眼にもめずらしい旧家だった。吉野朝以前からの建物か、もつと古い時代の物か、想像もつかなかつた。姉妹兄弟一族が、みな一囲いの中に生活していたという大家族制の頃の遺風さえ見えて、どっちを見ても長屋があり、棟むねがあり、門の中に門があり通路があつた。

「猿どの。此方こなたじゃ」

庭の方の門から、またひとり田舎侍さむらいがさしまねく。見ると、池田勝三郎である。

そこをはいると、同じように——といっても服色は雑多だが、田舎武士づくりの家中が二十名もいた。藤吉郎も、かねていわれていたことなので、田舎者に見えることにおいては、人後に落ちない支度では来た。

「……おや」

中庭のほうの縁には、約十七、八名の山伏が、休息していた。それも、家中の屈強な武士たちの変装した群れであつた。

中庭の彼方の小座敷には、信長が見えておるらしい。もとより微行しのびであつた。道家家でも、主人とほんの家族しか近づいてはいないらしい。藤吉郎は、他の相役と、溜たまりを作つて休んでいた。

「何のお微行しのびである」

誰も訊く。誰も知らない。

囁ささやき合つて、

「殿にも、きょうのお支度は、まずちとばかり家来も持つ、郷土の倅せがれ殿どのと見たらよいようなお装つくりなのだ。何かまた、飄ひょう気げたお遊びでもあることと思つて来たら、そんなふうもなし、嚴おごか、秘ひそかに、ああして供人の揃そろうのを待つておいでなされる。やはり遠国へ向つて、ほんとに旅立ち遊あそばすのやも知れぬ。——となると、その行き先だが、誰か、小耳にでも洩れ聞いておらぬかの」

「よう聞かぬが、先頃、林佐渡様のおやしきへ召し呼ばれた時、京のあたりへと伺つたが」
一人のことばに、

「え。京都へ」

人々は声をのんだ。

危険なということが第一と、京都へ上る以上は、信長の胸に、何の大志、何の秘策かがあつてのことにちがいないがと、その目的の何か、かえつて大きな怪訝いぶかしみに囚とらわれたのである。

藤吉郎は、人知れず、

「さてこそ。さてこそ」

独りうなずいて、信長の立ち触たぶれが出るあいだ、邸内の菜園をぶらぶら歩いたり、屋根の子猫に手招きしたりしていた。

信長を囲む田舎武士の一群と、それを遠見に護つて歩く山伏の一群とは、やがて幾日かを経て、都へ出ていた。

これは東国の田舎武士にて候、年ごろの望みかのうて、このほど叔父、甥おい、友ども打う語ちかたらい、鳩におの湖うみこえ、花の都へ、見物に入りもうして候。

暢のんびりと、信長はじめ、人々はそういつた態ていをつくろつた。桶狭間おけはざまに見せたような

険しい眼光は、誰もみなしまいこんで、面おもても言語も、悠長に、そして何処かごつい、東国

武士となりすましていた。

宿所は、道家清十郎から、疾く手まわししておいた洛外の腹帯地蔵の在家。山伏たちは、附近の農家や安旅籠へ、ちらかつて泊った。

「さて、どう遊ばすかな」

藤吉郎は、信長の行動に、多大な期待と、興味をもって見ていた。

「猿も、供に」

と、いわれる日もある。また、自身は連れて行かれず、他の者を従者として洛中へ出向く日もある。

いうまでもなく、いつも日除笠眉深に、質素で野人そのままな身ごしらえであった。供はせいぜい四、五名。遠く離れて山伏姿の何名かが、それを見護っていたが、彼を彼と知って、近づこうとする刺客があれば、目的は易々たるくらいな程度であった。

「きようは見物しよう」

と、まったく放心して、洛中の人中を、終日、埃をあみて歩いて帰る日もあったが、また、時ならぬ時刻に、突然出て、公卿堂上の門を訪い、その奥で密談した上、すばやく帰ったりする夕べもあった。

一切は、信長の胸三寸の行動で、若い侍臣たちには、何を目的として、乱国の危険な巷ちまたに、この冒険を彼が敢あえてしているのか、分らなかつた。

藤吉郎にも、もとより這般しやはんの消息は、知るよしもなかつた。けれど彼は彼で、その間、よい見学をしていた。

「京都みやこも変つたなあ」

と、思う。

針を売つて、漂泊していた頃、彼は京針を仕入れにここへ出て来たこともある。指折れば、六、七年前でしかないが、皇城こうじょうの地の世態せたいは、甚だしく變つていた。

室町幕府はあるが、十三代足利義輝あしかがの存在は、名ばかりの將軍家であつた。

管領かんりよう細川晴元はあるが、これもあるという名ばかりで、実権はない。

古い池のように、ここの人心も文化も、澱よどみきつていた。あらゆるものに末期まつぎが感じられる。

實際の主権者にある代管領の三好長慶みよしながよしは、その老臣の松永弾正久秀まつながだんじょうひさひでのために左ひだり右みぎされていて、ここにも醜みにくい葛藤かつとうと、うごきのつかない無能や暴政ばかりあつた。民衆の眼にさえ、

「もう遅くはない」

と、自解のきざしを陰かげぐち口に嘯ささやかれています時流だった。

では、その時流は、どう向いてゆくか。といえればこれは誰にも暗澹あんたんであつた。徒らに華美で浮薄で夜の灯も盛りながら、一面には蔽おほい難い暗さが人々の心を占しめているのも、

「明日あしたは明日」

と、方向のない生活から湧く、どうしようもない濁流であつた。

政庁の三好、松永が頼むに足りないとしたら、管領のほかには、世に將軍家の御相伴ごしょうばんし衆ゆうといわれている山名、一色、赤松、土岐とぎ、武田、京極きよとく、細川、上杉、斯波しばなどという大名たちはどうしているのか。

それらもまた、各自の国々において、同じ時代の悩みにつき当っていた。京都は京都、將軍家は將軍家。より以上、自分たちの国境や内部において、その多端に奔命していた。大きく世を思い、他を顧いとまみる違ちがひなどはなかつた。

そうした京都みやこへ来て、藤吉郎はまた、その眼に見、耳に聞いた。

朝廷の御衰微ごすいびの想像以上だったことである。

畏れ多いが――

と、よく下々の噂にも聞かぬ沙汰ではなかつたが、御所の築土は破れ果て、御垣守の影すら見えない。栗鼠や野良犬さえそこを越えているのだ。内侍所に雨や月影が洩つて、冬ともなれば、御衣の料にすら事を欠くと、勿体なげに沙汰する下々の憂いも真である。

誰であつたか、その頃。

公卿の常盤井殿へ伺候して拜謁を願ひ出たら、折しも十二月の中旬というのに、垢じみた衣冠すらなく、夏のままな単衣に蚊帳を上まに纏うて会つたということである。

近衛殿あたりでさえも、年に一度の式日に、賓客が馳走を眺めて、口に入れられそうな物は、三宝にのつている小豆餅ぐらいな物であつたという。

皇子の御在所も、親王家の宮居も、ありやなしやの状態だつた。御料の地も、遠国の御田はもとよりのこと、山科とか岩倉あたりの近くの御田や御林まで、野武士や乱逆の郷士らに荒されて、一粒の供御も上がつては来なかつた。弊を正す大名が国々にない。その罪を懲らし、大逆の行為を論してやる司法者もないのである。――まして庶民の中の弱者の田や畑は知るべきであつた。

信長は、実に、その折も折に、京都へ微行で出て来たのであつた。

どこの国の大名も考えつかないことだった。

いや上洛して、自己の三軍の覇を誇示し、綸旨を仰ぎ、將軍や管領を強迫し、もつて八道へ君臨しようという野望家は、ひとり先にその途上で挫折した今川義元があるばかりでなく、宇内いたる所の国々に割拠する大名豪傑の輩が、みな理想とされていることではあつたが、单身、京都へ上つて、将来の計をなそうとするような——そんな身軽な豪胆さは、信長以外に持ち合わせている者はなかつた。

彼が、そうして、三公九卿の門に、密かに往来している間に、何らか、後日の政治的な基礎が、一つぶの胚子ほどでも、蒔かれていたことは間違ひなからう。

彼はまた、幾たびか足を運んで三好長慶の執達を通して、十三代の義輝將軍に会つた。

勿論、三好家の館までは、いつものような東国侍の微行すがたで、そこで式服に改め、室町の柳営へ出向いたので、まったく誰も知らぬ会見であつた。

室町の柳営は、絢爛な廢墟に似ていた。足利十三代の間になし尽した將軍たちの逸楽と豪華と、独善的な政の跡を物語る夢の古池でしかなかつた。

義輝將軍は、信長を見て、

「お許もとか、信秀どのの子息信長とは」

と、いった。

力のない声である。

型の如く、近習や作法張った儀式はあるが、精せい彩さいがなかった。將軍職の名はあっても、ここに実際の力がないことが、すぐ感じられた。

「信長です」

平伏して、お見知りおきください、と彼はいった。平伏している彼の小さい姿のほうが、遥かに四辺あたりを払い、上段の人を押し、声に力があつた。

「父信秀を、御存じでござりましたか」

義輝將軍は、

「存じおる」

と、うなずいて、信長の父信秀を知った縁故について、記憶を語った。

それは、かつて、皇居の荒廢のあまりの甚だしさに、諸国の豪族に対して、朝廷の御名をもつて、

だいりごしゆうりのりようけんじょうのゆたつ
内裏御修理之料献上之諭達

が発せられたことがあつた。

ところが、勅にこたえて、奉仕を申し出る大名はほとんど稀れであつた。諸国戦乱の絶えまもなく、各々が自己の存立に汲々としてゐる世情の常とはいつても、浅ましい限りであつた。

(これが、皇土皇天の国にあることか)

と、朝臣たちも、雨漏り風の防ぎもない内裏の荒廢をながめて、ただ啣ち嘆くばかりであつた。

それは、天文十二年の冬のことであつたから、信長の父信秀の立場なども、四隣に強敵をひかえ、微弱な領土と兵力を擁して、一方に勝てば一方において敗れるという有様で、わけても苦境のまつ最中であつた。

にも関わらず、勅をうけると、信秀は、すぐ使者を京都に上せ、御料四千貫文を献じ、また、他の有志らと計つて、御築土、四足門、唐門などの御修理をもなしとげたのであつた。

「いや、お汝の父は、勤王家であるばかりでない、武人にはめずらしい、敬神家でもあつたよ」

ごきげんの麗うるわしい日であつたとみえ、義よして輝將軍は、初めて会う信長に、よく話した。「畏れ多いことじやが、伊勢神宮の内宮うちみやは、往古いにしえから二十一年ごとに、新しゆう改造する制であつたが、応仁おうにんの乱以後は、そのことも廢すたれて、ここも荒るるにまかせてあつたを、お汝ごとの父信秀には、その御式の復古に、いたく力を尽されたそうな。——いずれにせよ、ゆかしい仁じんであつた」

義輝は、そんなことで知つていふという意味を、さりげない雑談にいうのであつたが、聞く信長には、亡き父に対して、新たな追慕と大愛が思い出され、しばしは、さしうつ向いていたことであつた。

信長は、何人よりも、自己を信念することによい性質だけに、ともすれば、父と子の情愛を離れては、父をも、さしたる武人とは思わなかつたが、自身が實際の世につき進んでみると、何処にもここにも、父の遺のこして行つた子のための捨石が築かれてあつたことに気がついて来た。その遠謀と、愛の大きいことが、近ごろ分りかけて来たような気がするのであつた。

たとえば、亡き後の子の経営に、平手ひらてなかつかさ中務なかむらや、その他の良い家臣らに目をかけておいて、遺のこして行つてくれたのも、今となれば、ひしと有難さを思う。

また先頃の桶狭間の大捷にしてもそうである。あれは自分の乾坤一擲が奏功したのだと一時は思ったが、よくよく後になって考えてみれば、今川の上洛計画は、すでに父の生きていた頃からのことで、父信秀は、小豆坂や、その他の戦場で、幾度かその今川の気鋒を叩きに叩きつぶしていた。そして織田の将士に、強い敵愾心と多年の訓練とを、骨髓にまで、植えこんでおいてくれたものである。

その遺産があつたればこそ、田楽狭間の一挙も、あの功を奏したのである。いかに、自己の死を決し、また兵に向つて、死ねやとさげんでも、主君として立つてまだ徳の浅い、月日も短い、自身だけの手飼に過ぎない兵と、伝統のない織田家であつたら、どうして、あの大捷を博すことが出来得たろうか。

戦い終つて後。勝つての後。信長はひとり静かにそう思うことがしばしばであつたし、今また、義輝將軍から、計らずも父の遺徳をうわさされたので、こうして義輝が会つてくれたのも、その徳の一つと、沁々、今さら有難さを覚えたことであつた。

四方山のはなしの末に、

「こたびは、ほんの微行の上洛。それに尾張の田舎者、何ひとつ、都人のお目に珍しき国産とてもござりませぬが」

と、手土産の目録を献じ、やがて信長は、暇いとまをつけて、退さがりかけた。
すると、義輝將軍は、

「待つがよい」

と、信長をひき止めて、程なく黄昏たそがれともなろうから、食事をしてゆくがよいと云い、
席を饗応の間へ移した。そして、酒を賜うことになった。

東山ひがしやま義政よしまさの数奇すきと風雅をこらした苑にわがあつた。紫陽花色の夕闇に、灯に濡れた苔こけの
露が光っていた。どんな席に置かれても、眼上めうえの前でも、至つて窮屈がらない質たちの信長は、
眼八分に持つてくる銚子にも、小笠原流の料理、故実こじつのやかましい膳部も、極めてこだわ
りのない姿で、

「御一献ごいつこん」

と、注つがれば、

「は」

と、素直に受け、

「お箸を」

と、すすめられれば、

「頂戴申す」

と、辞儀して、みな喰べた。

客の食欲をめずらしがるように、義輝將軍はながめていた。

善美や儀式に飽いた將軍家は、信長の喰べるのを見て、年も若いし、田舎者には、都の物が、何を喰べても美味なのであろうと、せめて、そう思うことで、ほこり矜ほこりを持していた。

「信長」

「は」

「どうじやの、館やかたの庖丁は」

「結構でした」

「美味か」

「ただ、われら武骨の者には、どのお料理も、塩味がうすうて、かかる味ないお料理は、信長、めずらしく戴きました」

「ははは。むりもない。そちは茶はたしなまぬか」

「飲むすべは、湯の如く、幼きよりわきま弁わきまえておりますが、大人のあそぶ茶とやらの道は、不ぶ躑たしなみでござります」

「苑にわを見たか」

「拝見いたしました」

「どう思う」

「小さいと存じました」

「小さい？」

「きれいではありませんが、信長の田舎清洲きよすの丘の眺めから較べますと」

「そちには何もわからぬとみゆる。ははは、生なまもの知りより、あどけのうてかえってよい。したが、そちの躰たしなみとするは何ぞ」

「弓矢。それ以外に、何の弁わきまもござりませぬ。そのかわり事しあれば、尾張より美濃近お江路うみじの敵地もこえて、三日のうちには御所みかきの御垣みかきまでいつなと馳せ参ずるが信長の能事のうじにござります。——諸国乱麻らんま、王城の地とて、いつなん時の変あろうも測られませぬ。信長あることを、お覚えおき下さればありがたいがどうぞんじます」

莞爾にっことしていった。

義輝よしては、見つけない人間と、聞きつけられない言葉とに接したようにその笑靨えくぼを、見まもっていた。

本来ならば。

その乱世に乗じて、將軍家が前に地方の守護職に任命してある斯波家を亡ぼして、無断、その国主の位置にとつて代つてゐる信長である。將軍家の權威として、

「豎子！ 何者」

と、これを問注所の白洲へ蹴落しても、当然であつていいのである。

だが、寄りつく大名として近頃はなく、孤帳寂寞の感にたえなかつた將軍家は、むしろ信長の来訪に、無聊をなぐさめられて、なおもはなしたい容子であつた。

はなしのうちに、官職や位階でも欲しい意味を仄めかすのかと思えば、それもなく、信長はやがて爽やかに御館を退出した。

京都での滞留は、およそ三十日ばかりで、信長は、

「帰る」

と、触れ出した。

帰るとなると、それも急で、

「明日」

と、気がはやいのである。

山伏、田舎侍などに姿を変えて、分宿していた侍臣たちは、忙しく旅立ちの用意にかかったが、その夜、国元の尾張から使いが来ての書状に、

清洲御立おたちの後、風説頻りと行われおり候、御帰国の方途ほうとわけて御細心に、路上の変異
くれぐれおん備そなえあそはさる被遊ごじそくべく候

御侍側

とあつた。

伊賀伊勢路へ出て帰るも、江州ごうしゅうから美濃を越えて帰るにしても、敵国また敵国である。

伊勢には、宿年の敵、北畠家があり、美濃には、斎藤。そのほか、一尺いっせきの地でも、敵地を踏まずに帰れないことはいうまでもない。

「どう道を選んだが御無事であろうか。いっそ、船路の便ということも考えられるが」
信長の滞在している土豪の家に集まって、その夜家臣たちは、額ひたいをあつめて凝議ぎようぎしたが、なかなかはなしは纏まとまらなかつた。

すると、池田勝三郎。

信長の居間にあてられている奥のほうからずかずか出て来て、

「御一同、まだ寝ないのか」

と、そこを覗いた。

怪けしからぬことを、といわんばかりな顔をして、一名がいった。

「大事なことを評議しておるのに、まだ寝ないのかとは、無礼なおことば」

「御評議中か、それは知らなかった。いったい何の御相談事か」

「殿のお側にありながら、暢のんき気なことをいわれるものかな。宵に着いた飛脚の書状、ご存じないか」

「伺った」

「帰途、万一の変でもあつては一大事。いずれの道からお帰国あつたがよいか、それについて、心を砕いておるところだ」

「はははは。いやそのご心配ならご無用。殿にはもう決めておられる」

「え、お決めになつておられると」

「上洛の折は、ちと人数が多すぎて、かえつて人目立つ心地がする。帰国の際は、ほんの四、五名がよい。家来どもは家来どもで、ちりぢりに、好きな道を選んで帰れと、そのおつもりでいらつしやる」

啞然^{あぜん}として、一同は、そのままにかく朝を待った。

朝もまだ仄^ほぐらいうち、信長はもう支度して洛外^{らくがい}を立っていた。池田勝三郎のことばに違^{たが}わず、山伏姿やその他の家臣二、三十名は後に残して、

「随意^{ずい}、帰国せよ」

と、いつて別れてしまった。

附き従う者は、わずかに四人であつた。勝三郎はもちろんその中にいたが、最も光榮に感じたのは、木下藤吉郎で、彼もその中に選ばれていた。

「余りのお身軽」

「よいかしら？」

なお、不安にたえない残りの家臣組は、大津あたりまで、見えかくれに信長の姿を守護して行つたが、そののち駅路^{うまやじ}の馬を雇つて、信長たちは、さも気やすげに、瀬田^{せた}の大橋を東へ去つた。

関所の木戸も、幾つかあつたが、難なく越えた。信長は、三好長慶^{みやしながよし}から乞いうけた「管領^{カンリョウケ}家人、東国へ下ル者」とある往來手形を、木戸へかかるたび、所領の役人へ出して示した。

菊きく便だより

片田舎の草屋そうおくでも、近ごろは茶をたしなむ風がさかんであった。

余りに動流の激しい、そして血なまぐさい世の中なので、その半面の「静」を求め、血なまぐさい一瞬いつときを離れて、寂じやくの中に、息をつこうという人々の声なき求めといえるであろう。元々これは、東山殿の贅美ぜいびと退屈の果てから生れた貴族趣味のものだったのが、いつの間にか、その東山殿の足利文化あしかがを、過去の殻からとして、次の生々いきいきと伸びかけている草民そうみんのうちへ、極めて、平民的に、また生活に即して、日常に愛され行われるような傾向になりかけていた。

「動」の生活に対する「静」の一瞬として、この雅境がきようを最も愛し始めたのが、怖ろしく一面に破壊的な、また血なまぐさい日常を持つ武人であり、それを見、草屋の廂ひさしの下にまで、平民化して来たのは、近頃、専らそれを業わざとして、一流一派を称しだした茶宗ちやそうの流れを汲む各地の小茶人達であった。

誰まなに習ねんだか、寧ね子ねも、その茶をひとおりはやる。

喫むのは好きな父の又右衛門があるので、独り稽古のそら箏を、垣の外ゆく人へいたずらに聴かすのとはちがつて、茶をたてるにも、張合いはあるし、それに、朝のしずかな生活と、父娘の和やかなほほ笑みは、瀬戸黒の茶わんにたたえた緑の泡の湯加減から始まるといつてよいほど、これは遊戯ではなく、生活の中にはいつているものであった。

「めつきり、庭草が露ぼくなつたのう。菊のつぼみは、まだ固いが」

ぬれ縁から、十坪ばかりの囲いをながめて、又右衛門は、つぶやいていた。

「……………」

返辞のないのは、炉の前に、寧子の手が折ふし茶柄杓にかかっていたからである。沸きたぎる釜の湯から酌み出されたそれが、茶わんのうちへ、とうとうと、泉の口でも落したように、部屋の寂寞を快くやぶつて注がれると、彼女は、にこと横を向いて、

「いいえもう、表の坪の菊は、二、三輪ほど、よい香を放っております」

「そうか、咲いたか。……今朝も箆を持って掃いたに、気がつかなんだ。花も、武骨者の軒に咲いては、情なしよと、無情かろうな」

「……………」

茶筌のかるい迅い音が、寧子の指さきからササササと掻き立てられている。――が、

なぜなのか、又右衛門のことごと共に、彼女の顔には、さつと紅い羞恥はじらいがさして見え
た。

そんなことに、気のつく又右衛門ではない。茶わんを寄せる。押しただく、飲む――。
アアいい朝だといった顔つきである。

だが、ふと、

(娘を、他家へやったら、もうこの茶ものめぬ……)

冬来れば冬枯れる、庭面にわもの移りなど想いながら、ふとそんなことも考えたりしていた。

「ごめん遊ばせ。……」

こぶすま
小襖そとの外。

「こひか」

妻の顔を見ると、又右衛門は、寧子ねねへ、茶わんを戻して、

「母へも、一ぷく、たてて与えよ」

「いえ。お後で」

見ると、こひは、状じょう笥ばこを持っていた。今、玄関に使いが見えておりますというので
ある。状笥を膝へ取って、蓋ふたを払うと、

「はてな」

又右衛門は、いぶかしい顔した。

「――殿のお従兄弟様。名古屋因幡守様からのこれは御書面。何事やらん」

にわかになつて、口を漱ぎ、手を淨めて来て、状を拝し直した。主君の御一族とあれば、手紙といえども、その人の前にあるのと同じ礼儀を執るのであつた。

その状を読み終ると、又右衛門は妻の顔を見て、

「お使いは、お待ちになつておられるのか」

「はい。けれど御返辞は、御口上でもおよろしいとのこと」

「いやいや、失礼にあたる。ちよつと、硯を」

「はい」

料紙へ、一筆して、又右衛門はすぐ、使いへ戻した。

妻のこひは、手紙の内容が気にかかった。主君の信長の従兄弟にあたる名古屋因幡守から、この末臣の家へ、直々に状を持たせて使いをよこすなどは極めて稀なことである。

「何の御用であらうな」

それは、又右衛門にも、解せぬらしい。といつて、手紙の内容は、至つて悠閑な消息に

過ぎない。内密の用事でとか、折入つてとかいう言葉は見えなかつた。

自分はきようは一日、堀川ほりかわ添そでいの閑居へ来て終日読書している。自分の栽つくった菊がこの好日の下に清香せいこうを放つているが訪う人もないのを嘆じている。あなたの御都合ごごはどうか。もしお暇さいもんだつたら柴門さいもんを叩いてくれ。

——これだけの文字に過ぎないのである。けれどこれだけの用事であるはずはない。又右衛門が特に茶にたしなみが深いとか、殊勝な読書子であるとか、風雅とりえに取柄おとこのある漢おとことかいうのなら知らぬこと、わが家の門に咲いた菊さえ気がつかない。弓の塵ちりならずぐ目にもつけるが、菊の花などは踏んで通つてしまひそうな人なのである。

「とにかく、参つてみよう。こひ、衣装いしやうを出せ」

又右衛門は、起つ。こひと、寧子ねねは、又右衛門の左右から、衣紋えもんよ、袴腰はかまよと、手を添えた。

「行つてくるぞ」

明るい秋の陽ひの下に立つて、又右衛門はいちど我が家を振り向いた。寧子とこひが、揃つて、門まで出て、見送つていてくれる。彼の心は珍しく泰平を味わたつた。乱世の中にもたまたまこんな日がある。にこと笑う。寧子やこひも、にこと笑う。すたすたと彼はもう

大股に背を見せて歩いてゆく。弓之衆ゆみのしゅうの同僚の庭や窓から、やあと声をかける人がいる。やあと挨拶して通る。

相かわらず何処のやしきも貧乏と質素な景色である。しかし、織田の御家中はみなかくの如く息災だと、又右衛門はひとり祝福して眺めてゆく。貧乏と質素につきものの子沢山は、弓之衆の組長屋にも沢山いて、屋敷屋敷の垣ごしには、襦袢むつきの干してあるのがひどく眼につく。又右衛門自身が実子を持たぬせいもあるう。ひとりの姪めいを娘として育てて来たのが、ようやく妙齡みょうれいとなつたので、

「やがて、自分の家にも、あのような孫の襦袢が」

と、自然考えられて来る。——それは又右衛門にとって、余り感心したことではなかった。やがて孫から、おじいちやまなどと呼ばれる日を想像するのは、楽しくなかった。まだそうなるには心外なような自分を足腰に残しているつもりなのだ。つい先頃の田楽狭間でんがくはざまでも、人におくれはとらぬつもりで働いたが、

「この先とても」

と、戦場の馳駆ちくくを、また、武功帳の筆頭ふでがしらにもなろうことを、決してあきらめてはいないのであった。

「……お、いつのまにやら」

城下町の堀川添いに、彼は、これから訪れようとする人の閑雅な別業べつそうを見て立った。それは以前、小さい寺であつたのを、信長の従兄弟いとこいなばのかみ因幡守が、別宅に造り直した家だつた。

玄関に備えてある撞しゅもく木をもつて訪鐘ほうしようをつく。取次があらわれる。誘いざなわれて通ると、名古屋因幡守は、又右衛門の早速の来訪に、斜めならぬ機げんである。よう来てくれた。ことしも戦乱の中だが、菊も栽つくつた。後で、菊畑へ出て見てもらおう——などと隔壁かきいもなimotoなしである。

だが、主筋の人なので、

「はい。はい」

と、又右衛門は、席を遠くにし、辞を低くしないわけにはゆかない。それと、何の御用か？ が、胸のどこかで、気がかりを持っている。

「又右。もそツと、寛くわんいだがよい。敷物も取るがよい」

「はい」

「ここからも菊が眺められよう。菊を見るは、花を見るのでなく、丹精をながめるのじゃ。

人に見せるは、人に誇るにあらで、歡びを分つて、人の歡びを歡ぼうとするのじや。かう
 いう好日かの下に、菊の香を嗅ぐかのも、君恩の一つであるな」

「寔まことに」

「よい御主君を持ったことを、われわれはこの頃、痛切に思うようになった。桶狭間おけはざまの
 折に仰いだ信長様のおすがたは、終生、われらの眼底から消えまいと思う」

「畏れながら、あの日のおん姿ばかりは、お人とは思われませなんだ。武神ごんげの權化かと思
 われました」

「しかし、お身らわしらも、共にようやつたな。そちは弓之衆じゃが、いずれもあの日は、
 槍隊となつたな」

「御意にござります」

「今川が本陣へかかったか」

「すんでに、彼の丘かおかへ、なだれ打つて寄りました折は、敵とも味方ともわからぬ乱れの中
 で、首取ツた、駿河殿打ツたと、わめき声が聞かれました。後で伺えば、毛利新助どので
 在おわしたそうな」

「そちの組のうちに、木下藤吉郎という者がおつたか」

「おりました」

「前田犬千代は」

「御勘気をうけていた身、御陣借ごじんがりをゆるされて、勝手働かたてきした由でございませぬが、戦場でも戻つてからも、まだ見かけませぬが、御帰参はかないましたか」

「かのうた。——そちはまだ知るまいが、つい先頃、殿のお供して、京都へ上洛のぼり、無事帰城して、御城内に勤めている」

「京都へ。殿もお上洛のぼりとはいかがなわけでございますか」

「今となつては、申してもさしつかえないが、わずか三、四十の者をお供に召され、御自身も東国侍の何げない熊野詣くまのもうでと装われて、およそ四十日余りも、お留守であつたのじゃ。

——家中にもすべてその間は御在城のていにしておいたが」

「ははあ」

又右衛門は、驚いた顔した。こういう驚きを、後で知つた家中は皆、同じように喫きつし合つたことであつた。

「起たぬか。自身、菊畑へ案内してつかわそう」

促うながして、因幡守いなばのかみは、縁へすすんだ。沓石くつぬぎに新しい草履を見た。又右衛門は侍かしずくが如

く因幡守の後について庭へ出た。菊の栽り方について、因幡守はいろいろな苦心を話した。嫩葉ふたばから花を見るまでにするには、風雨の朝夕、子を育てるような細心の注意と愛がなければ、などともいつて、

「そちにも、寧子ねねとやらしい愛まなむすめ娘があるそうじゃが、子どもは一人か」と、訊ねた。

そして、縁へ歩みを移し、また席へ戻つてから、時に嫁につかわす気はあるかないか。ひとり娘とすれば、他家へはやれまいが、簪むすこをとるつもりかなどと、だいぶ話は立ち入つて来た。

ははあ、さては用談の内意は、寧子ねねの縁談についてのことであつたかと、又右衛門は察して来たが、それにしても主筋のお方からお声があるうとは、思いもうけないことでもあるし、冥加みよがにすぎた面目とも思うのだつた。

「おたずねの娘寧子は、実は自分たち夫婦の生なした子ではございませぬ。養女なのでござります。生みの親は播州ばんしゅう龍野たつのから御当領の愛知朝日村あいちあさひむらに移り住んでおります木下七郎兵衛家利いえとしが娘で、一男二女の三人の子の、うちの一女をもらいうけて育てあげたのでござります。木下七郎兵衛が祖先は、平相国の孫維盛これもりより出で、杉原伯耆守すぎはらほうきのかみ

が十代の末孫、血すじも正しい者にござります」

親いなばのかみごころは、つつんでもつつみきれない歎びをすぐ現わして、縷るじゆつ述するのであった。
因幡守は、うなずいて、

「血すじもさることながら、何よりは心ばえのよい娘じゃそうな。よく噂を聞く」

「おそれいりまする」

「——では、どうしても家名はつがせねばならぬの」

「御意にござりまする」

「その聳むしを、因幡が世話いたそうと思うが、どうじやな」

「……は」

又右衛門は、身を折るように、額ひたいをつけた。何か、ためらいがあつた。この問題にさし迫ると、今なお、考え出されたり処置に迷うものがあつたからである。

因幡守いなばのかみは、そのためらいも眼にないように、独りのみこみ顔していった。

「よい聳むしがひとりある。わしにまかせい。悪いようには取り計らわぬが」

「勿体ない。冥みよう加がなおことば添え、帰宅のうえ篤とくと家内どもにも、ありがたい御意をつたえまして」

「相談するがよい。儂が世話しようという智どのは、ふしぎや寧子が生家とも同苗の
木下藤吉郎。そちもよう見知つてる男じゃが」

「えッ……」

又右衛門は、思わずそういつてしまった。ぶしつけなど、直ぐ自分の驚き声をたしなめたが、意外とせざるを得なかつた。

「返辞を待つぞ」

「はい。いずれ……」

と、だけで、又右衛門はその日は暇をつげて出た。——どうしてとか、どういふわけ
とか、問いたさは山々だったが、主筋の人だけに、根ほり葉ほりもできなかつた。

帰つてくると、彼の妻は、待ちわびていた。又右衛門からはなしを聞くと、妻のこひは、
又右衛門が即答せずに帰つて来たのを、むしろ難じるように、

「おうけなされませ。よいおはなしかと私もぞんじます。縁事には総じて時というもの
がありますし、こうまでに、藤吉郎どのおはなしが重なるのは、よくよく宿世からの縁
も浅からぬことと思われまます。主筋のお声がかかりゆえ、よんどころなく遣わさねばなど
とお考えあそばさずに、その主筋のお方すら、仲に立つて口をおきき遊ばす程、藤吉郎ど

のには、どこか見所みどころがあるのでございます。……あしたにもどうぞご返辞を先様へなされますように」

「だが、寧子ねねの胸も、一応訊いてみねばなるまいが」

「それはいつか彼娘あれが申したではございませんか」

「ム。……じゃがあの折のとおりな気もちで、今もいるのか」

「あまり口はきかぬ寧子でござりますが、こうと思ひさだめたことは、なかなか変える娘こではございません」

「……………」

又右衛門の父性的な取りこし苦勞は、ひとりですもうを取って、ひとりで投げすてられたような手もち無沙汰をおぼえた。

ここのところ、とんと顔も見せないの、先も忘れぎみかと思つていた藤吉郎のすがたが、ふたたび家庭の中に、又右衛門夫婦や寧子の胸に、眼の前の人として、大きくうかび出して来た。

翌る日、又右衛門はさつそくに、名古屋いなばのかみ因幡守いんぱんのかみのほうへ、返辞に出向いたらしかった。帰ってくる早々、

「いや、わからぬもの、案外なおはなしの筋じやった」

と、妻にいう。妻は、良人の顔いろで、すぐ外のことを知った。都合よくはなしが運び、良人の胸も解けて、寧子の問題に、明るい光がさして来たことを、共に笑顔へあらわした。「きようはの、思いきって、どうして因幡守様が、寧子の智ばなしになど、お口添えあそばすか、そこを、お主筋のお方で、寔に伺い難かったが、——お糺し申してみたところ、何と、前田犬千代から頼みがあつて、では、口をきいて遣わそうということになったのじやそうな」

「え。犬千代どのから、因幡守様へ——。寧子と藤吉郎どのを媒わせと、お頼みなされたというのでござりますか」

「何でも先頃、殿様がお微行で京へ上られた道中で、はなしのあつたことらしい。——で、信長様のお耳にも、ちらと、入つたのではあるまいかと思う」

「ま。……勿体ない」

「寔に、畏れ多いことだ。旅の徒然などのひまに、犬千代、藤吉郎などが、君前において、あけすけに寧子のことどもをお物語いたしたらしい。その果てに、然らば、因幡が仲立ちして、藤吉郎が望みをかなえてとらせよ、とお声があつたものと察しられる」

「では、犬千代どのも、ご承知のうえで」

「その犬千代が、その後も、因幡守様の許へみえて、ぜひお骨折りをと頼んだということゆえ、もうその方の憂いはさらさらない」

「それでは、きようは因幡守様に、はつきりお答えしておいでられましたか」

「む。何分、おねがい申しますると、いうてもどった」

又右衛門は、これで内々の心配が、からりと霽れたように、胸をそらした。妻のこひも、「ご安心でございましょうが」

と、良人の歎びを共によるこんだ。

すこし離れた板屋の小間では、寧子がきようも針を運んでいた。祖母の代からあるという小袖なども引き出して、古糸を抜いて鞣に溜め、布は一きれ一きれ張り物にかけて、ふだんの台所着に縫い直しなどしているのだった。

時折には、独り閉じて、箏をかき鳴らしていることもあった。その古箏も絃も久しいので、

「買ってやらねば」

と、又右衛門は、音を聞くたびに呟いたが、まだまだもう一戦して、名だたる敵の

首でも挙げなければ、新しい箒も娘に求めてはやれない家計だった。

しかし、聳が来る。又右衛門も、こひも、そうきまると、何となく心せわしい。

もつとも貧しいながらも、その用意はしているけれど、いったいどんなことにしたものが。

年はこえて、永^{えい}禄^{ろく}四年。

戦雲のけわしさは依然たる中である。この一家庭のために、世の中は停止していない。

はなしは途中でまたおくれて、夏となり秋八月となった。

すつかりきまると、聳の君は、いたちの道を切ったように、絶えて姿も見せなかったが、

いよいよ八月の三日という吉日、浅野家の長屋に、華^{かし}燭^{よく}の典は挙げられることになった。

聳^{むこ}の君^{きみ}

「はて。せわしない」

藤吉郎はつぶやいてみた。悪い^{せわ}忙^{せわ}しきでないからである。

そのくせ忙しいのは、若党の^かごんぞや下^か婢^ひや手^か伝^ひいに来ている人々であつて、彼自身は

漫然と今朝から家の内や外をぶらぶらしているに過ぎないのである。

「きょうは八月三日だな」

分りきつたことを何度も胸の中でただしてみろ。時々、押入を開けてみたり、褥しとねに落着いてみたりするが、どうも落着かないし、何も手につかないのであった。

「寧子ねねと婚礼する。おれが聳入りする。いよいよ今夜のことになったが、何だか、急にまがわるいぞ」

祝言しゅうげんのことが知れてから、彼にも似あわず、家の召使たちにも、ひどくこの頃は来ていた藤吉郎であった。聞き伝えて、近所の細君や同役の誰彼が祝い物など持つて来ての応対などにも、

「いや、もうその……ほんの内輪の祝言でござって。……まだまだ家内など持つのも、ちと早いと存じてはいたが、どうも、先もいそぐので、止むやをえず」

などと顔を赤らめながら、いうことは自分の沽券こけんのいいようなことをいつていた。

前田犬千代に譲らせたり、その犬千代から主筋の名古屋いなばのかみ因幡守をうごかしたり、躍起となつて、遂に思いを實現させたことなどは、誰も知らないので、

「聞けば、因幡守様のお声がりだそうな。それにあの浅野又右衛門どのが、聳にとゆる

すからには、やはりあの猿どのには、どこか見どころがあるものとみえる」

と、同役はじめ上下の評判は、この婚礼についても、藤吉郎に箔はくをつけたものにこそなれ、悪い声は生まなかつた。

だが藤吉郎は、そんな衆しゅうこう口くちのよしあしなどはどうでもよい。彼としてはまず第一に中村の母へこの由を報じてやった。自分で飛んで行つて云々しかじかとつもる話と共に嫁すじよの素すじよ姓うや人がらなどについてもくわしく告げたかつたが、一ひとかどの者となるまでは、母も中村で過そう、そなたも母に心をとられず、お主大事に仕えよといわれているので、

「まだ、まだ」

と、逸はやる会いたさを抑えて、こんどのことも手紙でばかり消息していた。

母からもしばしば使いが来た。いつの手紙でも使いのはなしでも、その欣よろこびようといつてはない容ようす子が会あわなくてもよく分るのであつた。わけて藤吉郎の心をやや慰めたものは、追々と藤吉郎の出仕しゅっしぶりが村にも知れ、またこんどは然しかるべき武家の娘と結婚し、しかもそのお媒なこうど人が信長様のお従いとこ兄弟にあたる人と聞いたので、村中の者の見る眼が、藤吉郎の母や姉に対してもすつかり変つて来たという事実であつた。側わきにいて母に孝養もできない彼には、せめてもの安心であり、またいささか無言のうちに郷里へ示す誇りをも覚え

たことであつた。

「旦那さま。お髪ぐしを上げておきましよう」

「ごんぞは、櫛くし篋ばこを持ち出して、彼のうしろに坐つた。

「や。髪ぐしも結ゆうのか」

「こよいは、髻ぐしの君。そのお髪ぐしではなりませんまい」

「ざつとでいい」

鏡かがみ蓋ふたをあけて立てる。

藤吉郎は、鏡に向つて、真面目まじめな顔していた。なかなかざつとでいいこともないらしい。

自分でも笄こうがいを持ち、しきりと鬢びんをなでたり、根を上げよとか下げよとかやかましい。

髪かみがすむと、庭へ出た。厨くりやでは近所の細君と下婢かひたちが、行水の湯をわかしている。門

のほうにはまた、祝ことばいの辞ことばをのべに来る客の声に、ごんぞが慌あわてて駈あわけ出してゆく。

「ああ、日暮ひぐれもまぢかい」

白い夕星ゆずえがもう桐畑とうばたの梢こずえに見えはじめている。髻ぐしの君も、この夕は、多感であつた。

今の彼は、大きな歓びの中にあつた。大きな歓びに会うたびに、彼は中村の母が思い出された。そして、その歓びを共にすることのできない今を寂さびしく思った。

「慾をいえば限りがない。世には母の亡い人すらあるに」

独り彼はなぐさめた。別れてこそいるが、母はまだ石となつている人ではない。また、こうして別れているのも、母の心は自分をして御奉公に専念させ、自分の考えも後日の大を誓っているからである。お互いに、

——もうこれなら。

という日を待つて迎えましょう、母も息子の許へ来よう、という楽しい希望のためにであつた。

「俺は倅せ者だ」

沁々、今も思う。幼い時からどんな逆境に泣かされた日でも、自分は不倅せだという考えは持った例のない藤吉郎であるが、きようはわけても深くそれを思った。よく世間の不遇な人々の中に聞くのは、なぜ人間に生れたらうとか、こんな厭わしい世はないとか、自分ほど不倅せな生れつきはないとか——何でも人間は皆、自分ほど不運で不幸な者はないと思つているものらしいが、藤吉郎は、まだかつて、世の中を、また人生を、そう観て嘆いたおぼえない。

逆境の日も楽しかった。それを乗りこえて、逆境を後に見返した時はなお愉快だった。

彼はまだ二十六である。自分でも、前途の多難は覚悟しているが、これから先とても、ぶつけて来る困難にベソをかく日があるうとは思わない。どんな濤なみでものりこえて見せようという覚悟が、強しいて覚悟と意識しないでも肚にすわっている。そこに洋々たる楽しさが前途に眺められた。波瀾があればあるほど、この世はおもしろく観じられるのであった。けれど彼は、

(われこそ天下の何にならん)

とか、

(武士と生れたからには百世に名をのこし、生ける間には一国一城の主とも)

などと、よく城内の若わこうど人たちが寄るとさわると、衣の袖をたぐしあげて傲語ごうごするような大言壮語はしたことがなかった。実際にまた考えてもいかなかった。

彼のねがいは、人並に人たろうとすることであった。彼の誓いはいつも現在の職分に忠実に、草履取となれば草履取になりきり、お台所方に勤めればお台所用人になり切り、お厩うまやぎむらひ士となればお厩者になり切つて、その職責を全うするほか他意のないことであつた。

その代り彼は、何を勤めても、なくてならない人間になっていた。ずいぶん誹謗ひぼうもされ、

あぶない奸計にもかかりやすい彼であつたが、いよいよとなるとやはり、
 (なくてはならない彼)

であるその根を、今は清洲の重臣でも、容易く抜き捨てることができなかつた。それに
 また信長が、近頃は彼の才幹を認めだして来ているので、彼の位置は、何といつても相変
 らず低いものだつたが、そういう方の憂いはまずなく、安心して御奉公に尽し得られると
 いう今日の礎はできていた。

——だからこの折に、寧子との結婚を機に、中村の里から母を迎えてもよいのであるが、
 浅野家のほうでは、嫁にはやれぬ娘とのことで、その結果、入贅というので話はできて
 いるのである。その点からも、今はまだ母を呼び迎える時期ではなかつた。

それに、祖先はとにかく、母は百姓である。その母をしていじらしい気がね遠慮や恥は
 かかせたくない。藤吉郎は、そんなことも思つたりして、

「もう一、二年のうちには」

と、ひとり呟きながら、行水の湯盥に浸つて、こよいは特別丹念に、黒い襟首など
 洗つていた。

行水を浴び、浴衣になつて家の内へもどつてみると、もう家じゆうは人でいっぱいの混

雑である。自分の家か他人の家かわからない。何を忙^{せわ}しがっているのか、あれよこれよと、座敷も台所もひとつに眼を廻している。藤吉郎はしばし部屋の隅で蚊を追いながら、他人^{ひと}事^{ごと}のように傍観していた。

「聶さまの、懐紙^{かいし}や持物は、みなお衣裳のうえに添えて置きなされや」

「添えておきました。お扇子^{せんす}も、印籠^{いんろう}も」

かん高い声でいいつける。合点する。駈^かけまわる。

どこの女房か。

どこのお内儀か。

どこの主人か。

そう深い縁者でもないのが、みな親類以上、親身になって働いてくれる。お聶さま、お聶さまの声で、家^{うち}も外も、持ちきつているのである。

「あ……お城^{しろ}普^ふ請^{しん}の折の大工棟梁あばたも手伝いに見えておるな。左官の女房もやって来ておる。……炭薪^{すみまき}奉行の頃から親しい、山の者も村の者も。……何ぞといえは忘れずに皆」

隅でぼつねんと蚊を追っていた聶の君は、そうした人々の顔を思い出して、心のそこか

ら欣しく思っていた。

聳入り、嫁娶りの故実こじつにやかましい老人も中にはいて、

「聳どどの草履ぞうりがすり切れておるではないか。古草履ではならぬ。新しい草履を召されて、嫁どどの家に着くと、先様の仕女つかいめが、すぐそれを取って奥へ持ってゆく。そしてこよいは、嫁方の舅しゅうと 聳どどのが、その草履の片方ずつを抱いてお寝やるのが古からの仕きたりじや。聳どどの足をこうして留めますという足留めの式でな」

また、ひとりの老婆としよりは、

「松明たいまつのほかに、脂燭ししよくの用意もしてありましような。裸火にしては持ち歩けぬゆえ、消えぬよう、明りに紙覆おひをかけて、嫁君のお家まで持つてゆく。そして、あちらにも脂燭ししよくの御用意がしてあるはずゆえ、御挨拶ごあいさつといっしよに、その灯あかりを、あちらの物に移し、

三日三晩は、消えぬよう、神棚にあかあかとぼしておくのでござりますぞ——おわかりかの。誰かよう、聳どどのに従したがって行く衆が覚えておいて下さらぬとませぬが」

と、わが子を聳にでもやるように親切である。気をもんでくれる。ただ世話ずきとのみは片づけられない。藤吉郎は、母こそ側にいなかったが、母が側にいてくれる程、何もかも任していられた。

そのうちに、表のほうで、

「お使いじや。嫁御から聶どのへ、お式日の文ふみはじ初めのお使いじや」

と、鄭重のうちにもどやどやして、やがて蒔まきえ絵の文ふばこ笥の房長なのを恐々こわこわ持った近所の内儀が、

「おや、そういうえば、聶どのは一体どこにお在いでなされてじや。まだ行水をつこうておいでかの」

藤吉郎は、縁の端から、

「これにあります。これにあります」

「ま。そんな所に」

と、文ふばこ笥を恭しく出して、

「嫁御様からの、文ふみはじ初めでございます。お武家のことゆえ、古いお式も、堅く遊ばすものとみえます。聶君からも、何ぞ一筆、書いてお返しなされるのが、お作法でございますゆえ、一筆、お認めしたたなされませ」

「何と書くのでござりますか」

「ほ、ほ、ほ」

内儀は、笑うのみで、教えてもくれない。そしてただ料紙と硯すずりばこ、笥すとを藤吉郎の前へ持つて来た。

文通ふみがよいとか文初めとかいう式は、古い平安頃からの聳取りの慣わしらしいが、近頃は戦乱多事な世でもあり、もしまた、聳君が悪筆なために、当惑させてはなるまいという例もしばしばあつて、今はめつたに行われない儀式なのである。

だが、足利義満將軍の頃に、武家の婚礼儀式はかなり作法やかましく定められたことがあつて、それが風習となつて今でも家柄の古い武人は、どこことなく真似事まねごとでもしなれば気のすまない風がある。

聳どののほうは、何もそういうことは頓着ないほうであるし、

(体さえ持つてゆけば)

と、簡単に考えていたが、先の浅野又右衛門夫婦は、それではすまないであろう、型のごとく文初めの使いをよこしたわけである。

「さ。なんと書いて遣やらう」

藤吉郎は筆を持つて当惑した。

文事に深く身を入れたということもないが、村の寺小僧にやられているうち、また、茶

わん屋に奉公中にも手習いだけは人並にしているので、そう人前に出せない悪筆とも自身卑下ひげはしていない。

ただ文言もんごんに困ったのである。

そこで彼はこう書いた。

よろしき夜にて候

聾ろうどのも、ほどなくまいり語らうべく

先はかしく

書いて、それを持って、

「お内儀、お内儀」

硯すずりぼこ 筥ぼこを取ってくれた近所の細君へ示してたずねた。

「これでいいんでしょうか」

細君はおかしがって、

「いいですよ。多分」

「あなただって、今の御主人からもらったことがあるんですよ。覚えていませんか、その

時の文句を」

「わすれましたね」

「はははは。当人が忘れるようじゃあ、大したことではありませんな」

文使いが帰る。餅が搗けたという。立ち振舞に、餅をたべる者と酒を酌む者が、一つ座にあつまって、賀どのを祝ぎことほ囉はやしたりする。

荷駄馬にだうまに、青い布や赤い布を飾って、その背に、当夜の餅を載せて、手紙と共に、中村の母へ持たせてやると、

「さ。お支度を」

と、賀どのは、これから婚家へ着てゆく晴れの麻がみしも袴だの、扇子だのを突きつけられた。

「はい、はい」

何事も、手伝いの女まかせに着せてもらう。

それを着終る頃。

空に新秋八月の宵月がちらとさし、軒かどばには、門かど立ちの松たいまつ明があかあかといぶされていた。

曳馬ひきうま一頭、槍二本。その後から、智どのは、新しい草履で、てくてく歩いた。

先には、二、三人が松明たいまつを持ってあるいてゆくのである。貝桶かいづつだの、屏風箱びょうぶばこだの、唐櫃からびつだのという華やかな祝言の荷は何もないが、鎧櫃よろいびつ一つに衣裳箱にせひとつは担になわされている。足軽三十人持ちの当時の侍が智立ちとして、何の負目ひけめもないものであつた。

負目ひけめどころか、藤吉郎自身はひそかな誇りをすら抱いていたであろう。こうしてこよい世話してくれる者や供についてくれた者はみな、縁者でもなければ頼んでつれて来た者でもない。すすんで自分のことのように、こよいの婚礼を歓んだり案じてくれる人々であつた。

婚家の座敷に積んでみせる贅沢な荷もつはないが、彼の身はこういう人望を負って行つた。

弓之衆の長屋はこよい門ごとにあかあか明りがうごいていた。浅野又右衛門の家一軒の祝い事のために皆、門をひらいているのである。門辺かどべにかがりを焚たいている家もあるし、紙燭ししよくを持ってわざわざやがて通るであろう智どのの到着を、婚家と共に、待ち久しげに佇たたずんでいる人々もある。

子を抱いたり、手をひいたり、近所の顔が、近所の火明りに、なんとなく華やいでいた。

そのうちに、彼方の辻から、童たちが駈けて来て、

「来たよ、来たよ」

「お髻さまが見えたよ」

童たちの母親は、子の名を呼んで、静かに、とたしなめて側へ寄せていた。宵月の光が淡く往来に濡れていた。童たちの先触れが露払いとなつて、それから誰も往来をよぎらないことにして、いと静肅にひそまり返つていた。

辻が赤く染まつた。

二本の松たいまつ明が曲つて来る。

その後から、髻殿は歩いて来た。曳馬ひきうまの飾りには、鈴がついているとみえ、松虫の啼く音のようにりんりと揺れてくる。具足櫃ぐそくびつ、二本の槍、誰彼と、四、五名の供も来る。このお長屋としてそう見苦しい程でもない。

わけて髻の君の藤吉郎は、至極神妙のていに見えた。小兵こひょうではあるが着飾らない程に身なりも整つておるし、一部でひどく悪口ふきりよういうほど不縹ふきりよう緻でもないし、才気を鼻にかけ、男とも見えない。

その夜、長屋垣や門辺たたずに佇んで、眼の前に通るのを見た人たちに、髻殿の人物をどう見

たかを正直に問い糺ただしてみたとすれば、一様にみなこういつたろうと思われる。

「あたり前なお人や。あれなら寧ね子ねさんの智ちどのとしたところで、そうおかしいほどでもないがの」

女房たちの評も、その辺が代表的なものであつたし、近所住いの侍仲間でも、

「当りまえな人物」

と、いうに一致していた。要するに、男ぶりも見ツともない程ではないが、優すぐれて立派でもないし、人物としても将来そう破格な出世もしまいが、弓之衆の家へ来る智ちどのとして不足をいう程でもない——と、いうところが衆評であつた。

「お着きなされました」

「智ちどののお入り」

「めでとうお迎え申しまする」

又右衛門の家の門辺には、待ちもうけていた縁者や家族たちが、藤吉郎のすがたを迎えひとしきて、一ひとしき頻り揺れる明りに華やいだ。智ちどのの家から大事に消えぬように持つて来た脂ししよ燭くの灯ともを、すぐ婚家の婢ひが、その家の脂燭に移し灯ともして、奥へかけこんでゆく。

供と供のあいだに、門かど挨拶が交わされる。智ちの君は、何もいわず、玄関へかかつて上が

る。沓取人くつとりの下婢かひが、その草履をすぐ取つて、これも婚家の奥へ大事そうに運んで行った。

「どうぞ」と、髷どのはただ一人、べつの一室に案内された。ここでしばらく待っているものらしい。藤吉郎はぼつねんと坐っていた。狭い家である。六間か七間であつた。ふすまのすぐ隣で手伝い人たちのがやがやが手に取るように聞える。狭い中庭のすぐ向うが台所みずやの水屋なので、そこにも茶わんを洗う音や煮もののおいが間近だつた。

お媒なこうど人たる名古屋なごや因幡守いなばのかみは主筋たいしんであり大身に過ぎるので、こちらから辞退して、御家臣なながしの某が夫妻で、今夜は手伝いがてら見えているらしい。藤吉郎は、往來を通つて来るうちは左程でもなかつたが、ここへ坐ると急に自分の動悸が耳について、しきりと口ばかりかわ渴かわいてきた。

髷の君は置き忘れられたように、いつまでもその一間にぼつねんと坐っていた。しかし彼は、行儀をくずすわけにもゆかないので、誰が見ていなくても、威儀端然と正していた。

「……………」

幸いなことに、藤吉郎はむかしから退屈ということを知らない質たちだつた。もとよりこれ

から華燭かしよくの下に、花嫁とまみえる身の智殿として、退屈など覚えるわけもないが、それにしては彼は、いつのまにやら、その智の身であることは忘れて、あらぬ空想に、その久しい間を、独りなぐさめていた。

彼の空想は今、途方もないところへ飛んでいた。それは三州岡崎城であつた。岡崎城の向背こうはいがどう傾くか？　これがこの頃の彼の頭脳あたまにあるいちばんの興味であつた。それを考えると、こよいの花嫁が、あしたの朝、自分にどういふ言葉をいうか、どんな姿で自分に朝のあいさつするだろうか？　——などと空想するよりも、もつと大きく心を囚とらわれてしまふのだった。その岡崎城は今、

（今川へ向くかな？）

とも思われ、

（御当家に傾いて来るかな？）

とも考えられ、岐路きろの運命にあるものだった。

去年、桶狭間おけはざまの役えきに、今川家が大敗して後、三州岡崎の松平家というものは、

——従来どおり今川家に加担かたんで通すか。

——今川家にも織田家にも属せず、この際敢然かんぜん、孤立を表明するか。

——織田家と和協の道をとるか。

の三つの方策に当面して、遅かれ早かれ、そのひとつを選ばなければならない立場に置かれていたのであった。

年久しく、松平家は、今川家という大樹に拠つて存立して来た寄生木であった。その根幹は桶狭間で仆れたのである。自立するにはまだ力が足りないし、今川義元の亡き後の今川家そのものも、遺子の氏真も恃むに足りないものだった。

岡崎城は悩んでいる。

巷ちまたのうわさや、上層部の政策を、ほのかに洩れ聞く程度の知識ではあったが、藤吉郎は、非常な関心と興味をもつて、

(——ここぞ松平元康もとやすの器量のわかるところ)

と、眺めているのである。なぜか彼は、その岡崎の城主松平元康という人に、人いちばい関心をもつていた。それは彼が諸国を漂泊中に、つぶさに岡崎城の士風だの、よく多年の艱苦かんく欠乏けいそくや隸属れいぞく的な侮蔑ぶべつに忍耐して来た上下しょうかの実状を目撃しているせいにもよるが、もつと深い原因は、松平元康の通つて来た今日までの経歴にあった。

(一国一城の主あるじと生れても、自分以上に艱苦もし、不運な人も世にはいる)

と、その元康の境遇を人のほなしに聞いてから、深く心をひかれていたのだった。

しかもその人は、ことしまだ二十歳の若さと聞いている。桶狭間の合戦の折、義元の先手を承つて、味方の鷲津、丸根の砦を墜したあの手際もよかつた。

義元討たれぬ——と、知つて、夜のうちに、さつと三河へ退いて行つた退軍の態度もよかつた。

織田の陣中でも、その後の清洲でも、元康の評はよいほうである。従つてよく話題にのぼる人物だ。——藤吉郎もまた、その元康の岡崎城が、やがてどういう方向をとるかなどと、独りそんな空想に耽つていた。

「智どの。これにおいでか」

襖があいた。藤吉郎はわれに返つた。いや智どのの自身に返つて、

「お。これは」

と、そのまま、会釈した。名古屋因幡守の臣で、こよいの名代媒人、丹羽兵蔵夫婦がはいつて来たのであつた。

「不つつか者ですが、主人因幡守様の名代として、てまえ丹羽兵蔵夫婦が、お媒人役つとめます。何など御用仰せ下さるようにな」

媒人なこうど夫婦の挨拶である。

藤吉郎も、ひと通り、

「ご苦労にぞんずる」

と、会釈を返して、勢い聳どのらしく取り澄ました。

媒人なこうど夫婦はすぐ、

「縁者どものうち、やむなき用事のため、遅参の者がござって、智殿にいかいお待たせ申しあげてござるが、さらば早速、これにて、ところあらわしの式仕つかまつれば、暫時、それにてお控え下されませ」

と、いう。

藤吉郎はまごついて、

「ところあらわし、とは一体なんでござるか」

「嫁方の舅しゅうとしゅうとめご姑御をはじめ、お身内の縁者どもと、聳どのとの、初の御対面を取り行う古式でござる。——と、いうても、時節がら、また御質素の御家風ゆえ、ほんの顔あわせのみで、さしたる式作法いたすわけでもおざらぬ」

と、いう間に、媒人女房は、

「おざりませ」

と、襖ふすまをあけて、次の間にひかえた人々を招く。

いちばん先に、挨拶にすすんで来たのは、舅姑の浅野又右衛門夫婦で、

「よろしゅう」

と、これは知り過ぎている顔であるが、式なので型のごとく挨拶する。

見馴れている二人を見ると、藤吉郎はもつとくだけて、頭でも掻きたいように手がうずいた。

「は。何分」

真面目すぎるほどの躰振りであつた。舅姑たちが済むと、

「わたくしは、寧子ねねの妹、おや屋やでござります」

十六、七の愛くるしい娘が、羞恥はにかましそうに三つ指をつかえた。

——おや？

危なくそう云いそうな藤吉郎の眼であつた。寧子ねねよりも美人なくらいきれいな娘であつた。それよりも寧子にこんな妹があつたことを彼は今まで知らなかつた。深窓の佳人という言葉があるが、どこにどんな帳裡ちやうりの名花があるか、武家の家というものは、幾ら手狭てせま

でも奥行の知れないものだと思つた。

「これはどうも。……私が御縁あつて参つた木下藤吉郎です。よろしくどうぞ」

これから義兄あにとよぶ姉上の聳君がこの人かと、おや屋は少女らしい眼で彼の顔をのぞきあげたが、すぐ後からまた縁者の一組が、

「これは、寧子、おや屋の里方の叔父にあたる者。つまり当家の又右衛門どのの家内こひ女の兄、木下孫兵衛家定いえさだでござる。初めての御見ぎよけん、この後はわけても御昵懇ごじつこんに」
すぐまた、

「てまえは、こひ殿の姉にあたる者の良人おとと、医師の三雪さんせつと申すもの」

と、べつな一組があらわれていう。藤吉郎は、誰が誰の伯父やら姪めいやら従兄弟いとこやら、覚えきれないほどの縁者に一度に会つた。

(多いなあ、親類が)

ひそかにこの後のうるささも思われた。けれどまた、にわかにきれいな妹だの、話せそうな伯父だの、叔母だのが殖ふえたことも、彼の気もちを賑わした。身寄りのすくない、寡か婦ふの母の手には育てられたが、彼の性格としては、大勢がすぎだった。大勢で賑にぎやかによく働きよく笑える家庭が理想だった。

「聳殿。しからば、あちらの祝言のお席へ」

媒人夫婦は、こう促して、やがて聳どのを伴って、こよいの曠の席へ——といつてもすぐ二間越しのそこもそう広からぬ一間であつたが、設けの席へ誘つて、聳殿の坐るところへ聳殿を坐らせた。

水掛祝い

秋とはいえ屋の内は、まだ蒸し暑い気もする八月の夜なのである。

窓すだれも軒すだれも、まだ夏のまま懸け残されてあつた。そこへ洩れてくる虫の音と夜風に、短檠の灯は仄かにたえずうごいている。そして塵一つない婚礼の席は、華燭という文字には当嵌らないほど仄暗かつた。

室は八坪ばかりの広さで、何の飾りけもないのがかえつて清々と見えた。床には、簀搔藁を展べ、そのうえに薄縁が布いてある。うしろの床には、伊弉諾尊、伊弉册尊の二神を祀つて、そこにも一穗の神灯と、一瓶の神榊と、三宝には餅や神酒が供えられてあつた。

「……………」

藤吉郎は身が緊しまつてきた。そこに坐つてから、ひしと考えさせられたことである。

これへ坐るまでも、決して苟かりそめ事や戯れ交じりでないことは勿論だが、その真面目まじめをいっそう真面目に、

「今宵からは」

と、良人となる身の責任やら、変つてくる生活やら、またそれに附随する身寄り縁者の運命までが、みな自分とのつながりを持つてくる、不思議なる儀式の中に自分を見直していたのであった。

わけても。

寧ねね子は好きでならない女性なのである。とくに、他へ嫁とつぐところをも或る程度の人力で、彼女の運命を自分へ向け直して、こよいの祝言とまでしてしまった女性であった。

(不幸にさせてはならぬ)

聳の座にすわると共に、最初に彼の思ったことはそれだった。男の力でうごかせば動かすにも足りる運命の弱い女——不愜ふびんな女——可憐かれんなるものを——と、思い遣やるのだった。

「ここでは。」

そう長からぬ間に、やがて式事は運ばれた。実にといつていい程、すべてが質素にである。

まず。

髷どのが着座すると程なく、花嫁の寧子は、物吉の女と称う世話女藤に導かれて、髷どどの隣へ音もなく坐る。その粧いはとみれば、髪には垂鬘をつけて紅白の葛の根がけを用い、打掛は、白無垢の丸生絹に幸菱の浮織——それを諸肩からぬいで帯のあたりに腰袴のように巻いていた。下の小袖も同じような白の生絹である。もう一重その下に、紅梅の練絹をかさねて袖口にのぞかせている。

また、襟元から胸の守りというものを掛けて、それを懐に抱いていた。他には、金釵銀簪のかざりもないし、濃い臙脂や粉黛もこらしていなかった。茅葺屋根に簀搔筵のこの家の家造のとおりに、生地そのままであった。この中に人の心をひく美があれば、それこそまったく粧った装飾の美ではなく、飾らないありのままな生地的美であった。

ただ飾られているのは、そこに把る手を待っている女蝶男蝶の一对の瓶子だった。「お久しゆう、めでとう、百千秋までも、お添いとげなされませ」

嫁君、聶君、一對ついでに端坐ついでしている前へすすんで、物吉の女が、こういいながら、銚子を把とる。

媒人夫婦なこうども、縁者一同も、この席にはいない。みな襖ふすまどなりに控えているのであつた。

「……………」

藤吉郎は杯を持った。

酌人しやくにんは、寧子へ取り次ぐ。

「……………」

寧子ちぎも契りをのむ。

藤吉郎の顔はさすが上気して胸も動悸を覚えたが、寧子は思いのほか落着いていた。

これからの生涯、どんなことに出会おうとも、自ら求めたものとして、親をも神をも恨まじとちかうような決意が、杯のふちへそつと触れる唇に、可憐とも悲壯とも云いようなく見えていた。

聶の君と花嫁との杯事がすむと、陰かげの間にひかえていた媒人役なこうどやくの丹羽兵蔵にわひょうぞうが、

音ずれは

松にこと問う

浦風の落葉衣の袖そえて

木蔭の塵を搔こうよ

所は高砂の——

祝謡いわいうたの一ふしを戦場鍛えのさびた喉のどで、精うたいっぱい謡うたいだした。

尾上の松も年古ふりて

老の波おいもよりくるや

木の下蔭の落葉かく

なるまで命いのちながらえて

なおいつまでか生いきの松

それも久しき……

ここまで丹羽兵蔵が謡うたつてくると、何者か、夕顔の花のまばらに白まがきい籬まがきの外の暗くらがりで、不意ふいに、

「——名所かな。——それも久しき名所かな」

と、謡うたい取とつて、唱和しょうわした男おとこがあつた。

兵蔵の祝いわいうた謡うたに、家の内うちも近所ちかところもしいんとしていた。それだけに、突然とつぜん、ぶしつけに

垣の外で謡い取った男の声も目立った。

「……?」

兵藏は、愕おどろいて、ちよつと絶句してしまった。身寄り縁者の人々も驚き顔を見合わせた。聳こどのの藤吉郎も、思わず、庭にごしに横を見た。

召使の者であろう。

「誰だツ」

と、その悪戯いたずらもの者を、家の横から叱なつていた。

すると、垣の外の人影は、なおも猿楽能ざるがくのうたいの謡口調で、

「——抑 《そもそも》、これは、九州肥後の国、阿蘇あその宮の神主かみぬし友成ともなりとはわが事なり。われまだ都を見ず候ほどに、このたび思おもいたちて上のぼり候。またよきついでなれば播ばんし

州ゆう高砂たかさごの浦をも一目見ばやとぞんじ候」

朗々と、そう云いながら、男は厚顔あつかましくも庭木戸をあけて、中へはいって来るのであった。

つかつかと、藤吉郎は、われも忘れて、花聳はなこの座を離れ、縁先まで歩いて行った。

「おツ。犬千代どのではないか」

「聳どのか」

顔をつつんでいた麻の頭中ずきんを払って、前田犬千代は、

「水掛祝みずかけいわいに来た。さつそくの水掛祝いじや。通つてもよいか」

藤吉郎は、手を打って、

「よくぞ来てくれた。上がってくれ、上がってくれ」

「友達も大勢従えて参つたが、よろしいかの」

「よいとも。何の仔細があらうぞ。杯は今すんだ。こよいから某それがしは当家の聳でござれば」

「よい聳取つたな。又右衛門どのからも一献こんもらおう」

犬千代は、垣の外を振りかえつて、暗がりへ手招きした。

「おーい、方々かたがた、この家の聳へ水掛祝いしてくれよう。はいりなされ、はいりなされ」

すると、声に応じて、

「水掛祝いしよう。水掛祝いしよう」

と、異口同音にいいながら、庭いっぱい押し込んで来た顔を見ると、池田勝三郎がいる、佐脇藤八郎さわきがいる、加藤弥三郎がいる、また、旧友が甘まくが見える、あばたの棟梁すがきむしろもいる。そのほかお厩方うまやや台所方の近年までの同僚など、犬千代に従ついて、もう簀搔すがきむしろ蕙むしろのう

えへどやどや上がりこんで坐っていた。

水掛祝いというのは、賀入りした家へ、賀の日ごろ親しい友達らが押しかけて祝う習慣である。婚家はこの際できる限りこれを歓待する義務があり、押しかけ祝いの客たちは、ぞんぶん振舞いに甘えて騒いだあげく、花賀を庭上へひき出して、水を掛けて帰るといのが例であった。いつの時代から流行りだした風習か、花嫁の「さうどう打ち」などという慣わしと共に、室町から戦国頃の婚礼には、きまつて行われたことの一つであった。

——だが、今夜の水掛祝いは、すこし気が早い。

ふつう世間であるのは、賀入りしてから半年目とか一年目とかに押しかけるのが例なのに、まだ、杯事の式が今すんだばかりのところへ、

「水掛祝いに参った」

と、犬千代が、しかも大勢で、婚儀の席へちんにゆう入してきたので、

「——これは狼藉ろうぜきな」

と、又右衛門一家はもとより、みょうだいなこうど名代媒人の丹羽兵蔵も驚き呆れるばかりだった。けれど花賀の藤吉郎は、むしろ非常な歓びらしく、

「よく来た」

と、席をすすめ、

「やあ、貴公もか」

と、めずらしい顔へは愛想などいい、そして、たった今、杯を交わしたばかりの白装束しろしよの花嫁をつかまえて、もう、

「寧子ねね、とりあえず、何なりと肴さかなを持て。そしてな、酒だ、酒をたくさんにこれへ」

と、いいつける。

「はい」

寧子も、さすがに、この不意打にはさつきから眼をみはっていた。しかし、かかることに驚くようでは、この良人の妻として生涯添うてはゆけないものと、はやくも分った容子ようすでもあつた。

「——かしこまりました」

すぐ次の間で、花嫁は花嫁の雪せつぱく白しろな打掛を解いた。そして白小袖しろこまぎのうえに、平常ふだんの濃こ袴しきを腰こしにまとい、襷たすきもかけて、立ち働たむかきはじめた。

「かような婚儀こんぎがあるうか」

一間では、憤然と、怒っている縁者の声もする。

「な、なんじや！ あの態ていは。——まるで祝言を荒しに來たようなもの。聳こどのも聳こどのではないか。寧ね子、寧ね子。花嫁がなんたること。止やめんか。止やめい」

無理もない憤りではある。親類のなかには、こういう立腹屋が必ず一人や二人はいるものでもあつた。けれどそれを宥なだめる身寄りもあり、女たちもいて、口を極めて抑えている。「まあ、まあ」

そこを覗のぞいて、こうなだめたりまた、大勢のどよめきに、うろろうしたりしているのは又右衛門夫婦であつた。

又右衛門としては、犬千代と聞いた時、実はどきツとしたくらいであつたのが、聳この藤吉郎とも、傍眼はためで見ても清すがすが々しい程、仲よく、打ち興じて、語り合っている様子に、ほツと胸をなでおろしていた。

戦国そだちの、これからの時代はもつと、どうこの世がもんどり打つて変わるか知れない時勢に臨んでゆく若者輩わかものばらだ——。これくらいなことはなんでもない。いやこれくらい骨太でなければ、むしろ頼もしくもないというものだ。——又右衛門はあわてている中で、そんなふうにしてみたりした。そしてもう聳こときまつた藤吉郎へ、無意識に身びいきの眼がかかつていた。

「寧子よ。寧子よ」

彼も呼びたてた。

「酒が足りねば、酒店へ走らせての、ぞんぶんにこれへ、酒を運べよ。こひ、こひ」と、また、自分の妻をよび、

「何をうろうろしているのじゃ。酒ばかり来て、皆様に杯が来ておらぬではないか。どうせ馳走はなくても、生味噌なまみそ、生ねぎ、生生姜なましょうが、何など、あるがままのもの持って来い。――やあれ嬉しや、犬千代どの、御一同、ようぞお越し召された。老人もうれしゅうおぎる」

「やあ。又右衛門どのよな。お久しいのう。犬千代じゃ。一献いっこん、お祝いのおながれ戴こう」

「うむ。参らする」

又右衛門は、慥しかと、杯を持ち直して犬千代へ酌さした。無量な感慨が犬千代のほうにもある。最初のうちは聳舅しゅうととなる者は、こう二人のはずであった。縁がなかったのだ。ふしぎといえばふしぎ、飽くまで縁である。このうえはお互いに清々すがすがときれいに、ただ侍同志のつきあいでありたい。犬千代も祈った。又右衛門もそう謝しながら杯を酌さした。万感という程なものが胸にあっても、心のうちに止めて、仄ほのかにしか色にも言葉にも出さないの

が、おたがい侍同志であつた。

「いや又右衛門どの、犬千代もうれしゅう存ずる。よい聳とり召された。心からお祝い申す」

と、杯を向けて、

「寧子どのも倅せ、木下も倅せ者よ。大いに飲まざばなるまいと、ここにおける大勢どもを語ろうて押しかけて来た。かまうまいか」

「かまわぬ。かまわぬ」

又右衛門も弾はずんで、

「夜もすがらでも」

と、受けて飲む。

「はははは。夜もすがら、飲のうで謡うたい明かしたら、嫁君に怒られまいか」
すると、藤吉郎がいった。

「なんの、宅の女房に、そういう躰しつけ方はせぬ。至ていつて貞じよ女もの者でもござれば」
犬千代は、膝を詰めよせて、戯たわむれかかり、

「これ、もうそのような、厚かましいことをいわるるか」

「いや、謝る。過言過言」

「ただはゆるさぬ。この大杯で——」

「大杯はごめん。小さいほうで頂戴する」

「なんのこの智めが、意気地のない」

「いや、ごめん」

子らの遊び事のように戯れ合うのだった。だが、そんな酒の中でも、藤吉郎は、こん夜
のみに限らず、常に暴酒はのんだ例ためがない。幼少の頃の苦い記憶があつて、癖の悪い酒
のみや、無理強じいされる大杯を見ると、その酒に身持のわるい養父の筑阿弥ちくあみの顔が映つて
見えてくるのであつた。その悪酒によく泣かされた母の顔がすぐ思いうか泛ぶからだった。

それと彼は、自分の健康の度をよく知つていた。育ちざかりを貧窮の中に伸びて来た体
である。人すぐれた骨ぐみでは決してなかつた。青年に似あわず人知れず体をいとうこと
を知つていた。

「大杯は無体じや。小さいのにしてくれい。そのかわりに、謡うたなとうたおう」

「何。うたうか」

返辞のかわりに、藤吉郎はもう膝つづみを鼓つづみに打ちたたいて、謡うたい出しているのである。

——人間五十年

化けてん転のうちをくらぶれば

ゆめ幻のごとくなり

ひとたび生しやうを得て

滅せぬもののあるべきか

「やい、待て」

犬千代は、謡いかけた藤吉郎の口を抑えて、

「それはお汝ことが謡ではない筈だぞ。わが君が何ぞというところよくお得意に謡い遊ばす敦盛あつもりの謡じゃ」

「されば、清洲の町人友閑ゆうかんをお招きなされて、常々、舞と小謡こうたを遊ばしておられるのをいつのまにか、この方も見様聞き真似まねで覚えてしまうのだ。べつにお止とめうた謡というわけではないし、謡うて悪いこともあるまい」

「いや、悪い悪い」

「なぜ、わるいか」

「めでたい婚礼の席に、ふさわしゅうない謡を、何も謡うことはない」

「桶狭間へ御出陣の晨、わが君が舞ってお立ちなされたという小謡。これから貧しきわれらの若夫婦が、世の中へ出る門立ちにも、満ざらふさわしくないこともなからうが」「そうでない。戦場に立つ覚悟は覚悟、新嫁を迎えた祝事は祝事。友白髪までも、尉と姥のようにまで、長寿もしようと心がけるのが、かえって真の武士というものぞ」

「それよ」

藤吉郎は、膝を叩いて、

「実をいえば、この方の望みといえはそこにある。戦となればせひないが、仇には死なじ、五十年はおろか、百歳までも、寧子と仲よう添い遂げたい」

「またいうたな。さあ舞え、さあ舞え」

犬千代のせめたてる後について、他の大勢も、舞え舞えと、囃したてた。

「ま、待つてくれ。今に舞うから。今に舞う」

囃す友人たちを、一時のがれにそう宥めておいて、藤吉郎は、

「寧子、酒がないぞ。——この銚子も、この銚子も。ほ、これにもない」

手を叩きながら厨のほうへ振り向いて呼ぶ。

「はい」

と、寧子の返辞だった。

銚子を持つて、いそいそとそれに見え、藤吉郎にいわれるまま、素直に酌もする、客たちへも悪びれない。一座のていを、ただ呆れ顔に眺めているのは、縁者どもや、寧子をつまで子どもとしか見ていなかった親どもだけで、寧子の心はもう良人と一つになりきっているし、藤吉郎もその新妻へ、もう何の氣づまりも体裁もなかった。

犬千代は、さすがに、寧子と面とおもて面を合わせると、持前の多感な血が、酒の氣と共に、顔へ出てくるのをどうしようもなく、

「これは寧子どので在おわしたか。——いや今宵からは木下殿の御内室。改めて御祝儀な申そう」

と、杯台を、彼女の前へ送って云った。

「誰も彼も、友だちどもは、隠れものう知っておることよ。今さら、面伏おもぶせに、云い籠こもっておるよりは、さらりと、胸のうちを申してしまおう。……のう、木下どの」

「何か」

「しばし、お内儀を拝借もうすが」

「はははは。さあどうぞ」

「よろしいか。さて然らば、寧子ねねどの、聞いていただききたい。——一時は、世間の口の端にもいわるる程、犬千代は、貴女あなたが好きであつた。今とても変りはない、寧子どののは、犬千代が好きな女性のおひとりでござる」

「……………」

急に犬千代のことばの節ふしは、真面目になつていたのである。さなきだに、寧子の胸にも、人妻となつたばかりの感傷がいつぱいであつた。今宵で過ぎる娘時代のうちの一人の男性として、犬千代のことばはこの先とも思ひ出の中から除ききれははずはなかつた。

「寧子どの。……おとめしころ処女心とよく人は危うげに申すが、貴女はよくもこの藤吉郎どのを見立てなされた。——恋というも愚かなほど、好きで好きでならなかつたおん身を、この犬千代が木下殿へ譲つたのも、実は貴女以上に、わし自身、木下どのの人間に惚れたからでおざるよ。されば、男が男に恋の引出物として、貴女に熨斗のしをつけて彼に与え申した。……というては品物のようにするようじゃが、男とは、そんなものよ。ははははは。——いや、そうじゃないか木下」

「うむ、おおかた、そんなお心根かと、遠慮のう娶めとろうたのだ」

「そうとも、こんなよい妻、遠慮などしたら、見損うた男と、犬千代はかえつて蔑さげすむぞよ。

お汝ことには、過ぎた女房ぞ」

「ばかを申せ」

「あはははは。何せい欣うれしい。のう木下、おぬしとわしとが生涯つきあおうが、かかるめでたい夜はあるまいぞ」

「む。あるまいな」

「お媒なこうど人の名代殿には、いずれへ退散してしまわれたか。寧子どの、そこらに、小鼓はないか」

「ござりまする」

「犬千代が小鼓をいたせば、誰ぞ立つて、幸若舞こうわかまいなど、田楽舞でんがくまいなど、一さし舞わしやれ。木下どのは話せぬ男で、まだ舞はよう舞わぬそうな」

「……では、お座興に、わたくしがふつつかな舞を一さしお眼に入れましょう」

起つたのは花嫁の寧子なのであった。犬千代や池田勝三郎や、そのほかの豪の者も、これにはあつと眼をみはつた。

舞をまうということは、その時代にあつては、さして物改まってすることではなかった。日常生活の一つとさえいえる程、折にふれ事にふれ、舞を舞った。武家の子女ならたし

なみの一つとすらいえる程だった。わけて田楽舞とか幸若舞などは、武家の間に好まれた。天沢和尚てんたくおしょうが、武田信玄から、

(信長の好みは何か)

と、訊かれた折、

(信長どのの数寄すきは舞と小謡こうたいなそうでおぎる)

と、答えたというはなしもある。

その信長は、清洲の町人で友閑ゆうかんという者を、時折城内へ召して、舞を見たり自身舞つたりした。

また、もつと後のことであるが、安土あつちの総見寺そうけんじで家康に大饗応をした時も、幸若こうわかや梅若うめわかに舞をまわせ、梅若が出来でなかったというので、信長から楽屋へ、

(舞い直せ)

と、叱りにやったなどという例もある。

生きるにつけ、死ぬにつけ、武人が舞を舞った例ためしは、その頃のはなしにも数えきれないほどある。

家康が高天神たかてんじんの城をかこんだ時に、城将の粟田刑部あわだぎょうぶが、

(今生の思い出に、一さし舞いたい)

と、乞うと、

(やさしき心よ)

と、許して、刑部の舞う幸若舞の高館たかだてを、敵も味方も見たなどということもあつた。

天正十年、秀吉が中国の高松城を水攻めにした折も、孤城五千の部下の生命いのちに代つ

て、濁水だくすいの湖心に一舟いっしゅうを泛うかべ、両軍の見まもる中で切腹した清水長左衛門宗治むねはるも、

敵の秀吉から贈られた一樽ひとたるの酒を酌しやくんで、

(見よかし人々)

と、武士もののぶの死出を笑つて、誓願寺せいがんじの曲ひとを一さし舞い、舞い終るとすぐ舟のうちで屠と

腹ぶくしたと、後の世までの語りぐさに伝わっている。

それとは違う飲あふびの溢あふれからであつたが、寧子は、犬千代の小鼓うながに促うながされて、一扇いっせんを

ひらいて起つと、素直に、幸若のうちの源氏物ひとを一ふし舞つた。

「出来た、出来た」

と、自分が舞つたように手をたたいたのは、賀殿むこどのの藤吉郎であつた。

だいぶ酒のまわつたせいもある。興きように浮いた人々の勢いきほいは熄やまない。誰たれがいい出した

か須賀口へ押し襲せようではないかという。須賀口とは清洲の宿駅でいちばん明るい紅燈の巷である。否というような理性家は一人もいそうもない。こよいの聳どのたる藤吉郎からして、

「よし、参ろう」

と、真つ先に腰を上げたものである。呆れる縁者たちを無視して、水掛祝いに来た連中は、それも忘れて聳どのの首にかじりついたり、腰を押ししたり、手を振ったり、躊躇めいたり、暴風の去るように婚礼の席からどやどや出て行った。

「いとしや嫁御寮」

縁者たちは、取り残された寧子の心を思いやって、彼女のすがたを探したが、今舞っていた新妻はもう見えなかった。門の妻戸を押しして外へ出ていたのである。そして酔い興じた群れに囲まれてゆく友達の中の良人を追って、

「行つていらつしやいまし」

藤吉郎の懐に、彼女がさし入れた金入れの巾着が残っていた。それも分らないほど酔っている聳どのでもない。しかし、それではツとしたりするほど初心な聳どのでもない。流れる水のままに押されてゆくように、藤吉郎の振る手も首も、大勢の友につつまれて、

紅い夜霧の彼方かなたへ薄れて行つた。

いつも、城内の若殿輩わかとのぼらが押しかけては、酒陣をかこむ布川ぬのかわという茶屋がある。この須賀口の古駅に織田家や斯波家しばなどの領主よりも以前から住んでいる酒商さかあきなの老舗しにせから転化して、茶屋になったものというから、その屋構やがまえの旧ふるさも間の抜けたほどの大まかさも知るべきであるが、清洲の若殿輩にはそれが気に入って、何かといえは、

「布川ぬのかわへ参ろう」

「ぬの川へ」

が、酔うとすぐ囁言うわごとのように、誰の口からとも出て来るのであった。

もとより藤吉郎も再三ならず布川に馴染なじんでいる。いやこういう所に集まる時などは、彼の顔が見えないと、茶屋の者も友達も、一本の歯が足りないような物淋しさを覚えるのが常で、何かの行合わせで、彼を誘わずに来ても、とどのつまりは、

「木下へ伝えてやれ」

「使いを走らせる」

と、仲間のなかに、彼の姿を見なければ、何となく納まらないくらいなものであった。その藤吉郎が、こよいは花婿となったことである。平常の酒戦場でも、杯を挙げて披露

に及ばずばなるまいと——これは酒のまわっている頭脳あたまで思う常識で——わいわいとその家の門かどのれんまで押し揉もんで来たのである。そして、池田勝三郎やら前田犬千代やら知れないことだが、門のれんから大土間の内へ、

「やいやい。布川ぬのかわの女どもも、男どもも、ばばどもも、みなこれへ出て出迎えぬかやい。三国一の智殿な引つ連れて参りつるぞ。花智な誰と思う。木下藤吉郎となんいう男じゃげな。花嫁な誰と思う。清洲の小町といわるる弓長屋の寧子ねどのじゃげな。——さあ祝え祝え。水掛祝いじや」

足もとの危ないのが危ないのへ絡からみつく。藤吉郎はその中に揉まれたまま、土間のうちへ踰よめき込む。

呆つ気にとられた茶屋の者も、やがて事の次第が分つて笑いどよめいた。祝言の杯を酌んで席から智盗みをして攫さらつて来たのだと聞いて驚きもした。水掛祝いという慣わしはあるが、それでは智むこ攫さらいじやと腹を抱えて智殿を珍しげに眺め合う。藤吉郎は、逃げのように座敷へ駈けこむ。暁までも智を擒人とりこにして帰すなど、悪戯いたづら好みの友たちは円坐を作つて、酒々と性せつ急かちに呼び立てたりする。

そうしてどれほど飲んだらう。また、何を歌つたり舞つたりしたことか、弁わえてまいる者

はほとんど幾人もなかつたろう。やがての果ては型の如く、手枕、大の字、思い思いの寝相ぞうして、その広間に酔いつぶれていた。

夜も更ければしんと秋の味がしてくる。八月の庭面にわもはもう秋草だった。酔っぱらいたちが静かになると、虫の音がすだき始める。草の根にまで白い夜露が降りていた。

「……おやツ？」

犬千代が、がぼと、突然顔を上げて見まわした。見ると、藤吉郎も首を上げている。池田勝三郎も眼をあいている。

「……………」

眼を見あわせながら、お互いの耳をとがらしていた。庭面にわもを越えた往来に聞えるのである。憂々かつかつと、深夜のしじまを破つて通る轡くつわの響きで眼をさましたのであった。

「はてな？」

「何である」

「だいぶな人数だが……？」

犬千代は、何か思い当つたように、はたと小膝を打つて云つた。

「そうだ。先頃、三河の松平元康の許へ、使者として渡られた滝川たきがわかづます一益殿が、ちよう

どうも帰らるる頃。——それではないかな」

「そうだ、織田家につくか、今川家に拠るか、三河の向背も、お使者は胸にたたんで帰られた筈……」

後から後からと、みな眼をさました様子だが、それも待たず、三名は布川をとび出した。そして先へ行く轡の音と、一群の人馬の影を追って、城門のほうへと駈けて行つた。

背和前戦

滝川左近将監一益が三河へ使いに立つたのは、去年桶狭間の戦いの後、これ

で幾度か知れないほどであった。

その任務は、三河の松平元康を説いて、

「織田家と提携しないか」

という外交的な重大使命を帯びてであることは、もう隠れもないこととして、清洲には一般に知れ渡っていた。

もとより三河は、きのうまで、今川家に隷属していた弱国である。尾張は小なりとい

えども、強大今川に致命的な一撃を与えて、天下の群雄に、

(現代に信長という者あり)

と強く記憶させた、新興の藩力と勝戦かちいくさの意気を持った領土である。

提結する聯盟するといっても、おのずから織田家はその優位のうえにおいて、松平家を傘下へ誘おうとするのであって、そこにむずかしい外交の呼吸もある。だが、尾張にその懸引かけひきがあれば三河にもまた、凶はかるところがあるのは当然だ。弱小なれば弱小であるほど、毅然たる態度も必要とする。

(与くみしやすし)

とみられたら、何の提携の使者など立てて手間暇かけている隣国であろう。一挙、武力の併吞へいどんがあるばかりである。

しかも実状は、義元の死後、三河一国は今や死活のわかれ目に立っていた。

氏真うじざねに拠よつて、今川加担かたんをつづけてゆくか。

この際、それと絶縁するか。

そして織田家とは？

宿年の国境にふたたび争奪の戦いをくりかえして「孤立三河」から現在の苦境を打開し

たほうがよいか。それとも、織田家がしきりと提盟ていめいを誘うてくるこの機会をつかんで、後図こうとを計るべきだろうか。

岡崎城では、

(この儀如何に)

と、幾たびの評議、幾たびの使者の交換、議論、献策などが、行われて来たかしれなかつた。

その間にも、今川氏真うじざねと三河与党との小合戦。織田家の出城と、三河方との出先の小競り合あいなどは、勿論、熄やむまもなかつたし、それがいつ大きな発火点となって、両国の運命を賭とすものとなるか、決して予測はできなかつた。

(始まらないかな?)

と、待っている国々が織田、松平のほかは無数にある。美濃みのの斎藤、伊勢いせの北畠、甲州の武田、駿河するがの今川氏真。

不利である。

松平元康は、戦う気はない。織田信長も、大勝の気負きおいにまかせて、三河と今戦うことの愚をよく知っている。

とはいえ、

(戦いたくない)

顔は示すべきでない。こちらの足もとを見せたら凶にのるのだ。一戦も辞せず、としての外交でなければならなかった。その外交も、彼の容れやすいようにしてやる必要があった。三河武士の硬骨と我慢、つよい性質を知っているので、その体面を充分に考えてやることが大事であると信長は思った。

みずのしもつけのかみのぶもと

水野下野守信元は、知多郡ちたの緒川おがわを領していて、これは織田幕下だが、血縁から

いえば三河の松平元康の伯父にあたる者である。

信長は、その水野信元へ、

「そちからも説け」

と、いつてある。

信元は、意をふくんで、岡崎を訪れて、元康にも会い、三河譜代ふだいの石川、本多、天野、高力こうりきなどの諸臣にも会って、側面から誘引ゆういんに努めた。

正面側面のあらゆる外交的誠意が、ようやく三河一藩をうごかしたとみえて、先頃、松平元康からその儀について明確な返答のある由が伝えられて来たので、滝川一益は、その

盟約が調うか不調に終るか、最後の返答をうけ取るために三河へ使いして——そして今宵、帰り着くと、夜中ながらすぐその足で清洲城へは行ったものであった。

一益の通称は、彦右衛門ひこえもんといった。織田方では一方の部隊長であり、鉄砲に詳しく、射撃の上手だった。

が——信長は、彼の射術よりも彼の才智をずっと上に認めていた。

雄弁家ではないが、彼の諄々じゆんじゆんと物いう弁才は、非常に尤もつともらしく聞えるのが特長であった。真面目で、常識に富んでいて、それでなかなか眼はしもきくのである。以て、外交の衝しょうに当らせるには適材であると、信長は見ている。

「待っていたぞ」

深夜であつたが、信長はもう出座していた。

「ただ今、戻りました」

一益は、旅装もそのまま、平伏していた。

こういう折に、

(汚れ果てた旅装のまま、君前に出ては、御無礼にあたる)

などと思ひ過して、衣服や髪を整えたり、汗のにおいなど洗い消してから、さてと、御

前へ出たりすると、

(花見の使いに行つたか)

などと、頭から不機嫌な叱りをうける例を、まま同僚に見ているので、馬臭い身装みなりのま
ま、

(ただ今)

と、喘あえぎも止まらぬうちに両手をつかえたがよいのであつた。

その代りに、信長もまた、使臣を長く待たせておいて、悠悠と出座するなどという例ため
はめつたにない。

「どうであつた?」

待ち構えていていふのである。

この答へにもこつがある。

よく使いに遣やられた者が、戻つて来てその任務の返辞をするのに、あれこれと、途中の
ことやら枝葉しやうの問題ばかり長々といつていて、かんじんな使命の結果は、調ととのつたとも調わ
ないとも、容易にいわない癖の家来がある。

信長はひどくそれが嫌いで、わき道のはなしばかり答えている使臣には、傍眼はためにもわか

るほど眉に焦々いらいらといやな気色をただよわせる。それでも気づかずに無駄をいつていると、「用事は。用事は」

と、注意する。

或る時、信長は、侍臣たちへそのことについて、こう語ったことがある。

「使いを立てた出先の用事が、首尾よいか、不首尾か、待つ身は案じておるものじゃ。要いらぬ枝葉のはなしは、後にて足せ。主人の前へ復命に帰りなば、口を開く第一に、お使いのこと、調ととのいましてござりますとか、お使いの儀、残念ながら不調に終わりましたとか、肝腎の結果を先に申し告げて、それよりゆるゆると、かくかくの仔細とか、先方のはなしとか、何なりと余談かたずいたすがよいものぞ」

彦右衛門かす一益も、それは伝え聞いていたし、こんどの重大な外交に選ばれて使いた程の者であるから、信長の姿を仰いで、一礼すると、すぐ先にいった。

「——殿。およろこび下さいまし。三河殿と和協わきようの議、遂に、調しらいました。しかもほぼ御当家のお望みに近い約やく定じようの下に」

「できたか」

「はい。一決いっけついたしました」

「そうか」

信長は、当り前な顔をしていたが、言葉の裏で、彼の心は、息づいていた。

「なお、細目にわたる箇条は、他日、鳴海城なるみを会見の場所として、てまえと、松平家の石川数正かずま殿とで出会い、談合を遂げんと約して立ち帰りました」

「然らば、三河殿始め家臣一統にも早、当家との和盟に異存なく、将来の聯携れんけいを約されたというか」

「御意にございます」

「大儀だった」

ここまで聞いてから信長ははじめて、彼の労に一言の犒ねぎらいをいった。

君臣のあいだに、審つぶさな報告から余談などが交わされたのは、それからのことであつたらしい。

滝川一益が、御前さがを退つて、下城して行つたのは、もう夜明け近くであつた。

その夜明けの微光が、詰所つめしよ、武者溜りむしやだま、狭間廊下はざまろうか、厩うまやの隅々にまでこぼれ渡つた頃にはもう、

「御当家と三河殿との和盟が成立したそうだ」

という噂が、明るい朝の顔と顔との間に、呼び交わされていた。

近くまた、両家の代表が、鳴海城で会見を遂げ、正式に調印のうえで、明年——永禄
五年正月には、岡崎の松平元康が、この清洲城へ初の訪問をして、信長様と対面あるだ
ろうなどという内々の儀も、密やかながら逸早く家中には知れ渡った。

夜来、須賀口の遊びの出先から、帰城の使者を認めてそれを追いかけて、城中の一室に
来てじつと坐り詰めたまま、主君信長の気もちと一つに、三河との和戦はいずれにきま
つたかを、固唾をのんで待っていた——前田犬千代、池田勝三郎、佐脇藤八郎、そのほかの若
侍の面々の中に、ゆうべの智殿の藤吉郎も、勿論交じっていた。

「欣び召され」

佐脇藤八郎は、小姓組なので、君側ではなしを、逸早く誰かに聞いて来て、

「……云々じゃ」

と、一同へ告げた。

「きまつたか」

およそはこうと予期されていたことではあったが、決定と分ると、誰の眉にも、一層な
明るさと、前途への意気が盈ちて見えた。

「……これで戦える！」

誰かつぶやいた。

家中の気もちは、戦いが遁れられるという意味で、三河との同盟を礼讃しているのではなかった。べつな敵へ、全力を向けて戦うことができるために、背後の一国、三河との提結を、心から受け入れたのであった。

「よかつたなあ」

「御武運のよさ」

「三河のためにもだ」

「まず、めでたい」

刻々と、方向のうごいてゆく時勢に対して、敏感に喜憂を先にするのは、何といつても、こうした若い人々の仲間だった。

「そうと、お使者の結果を知ったら、何かこう、急に眠とうなってしまった。……考えてみると、ゆうべから寝ていない」

祝福しあう声の中で、ひとりがいうと、藤吉郎が大きな声で、

「わしは違う。それとはあべこべだ。ゆうべもめでたし、けさもめでたし、こう欣喜が重

なつては、もいちど須賀口へ立ち戻つて、新しく飲み直しとうなつた」

すると、池田勝三郎が、

「嘘をもうせ。帰りたいたいののは、寧子ねねどのの許へであらう。やれやれ、初夜の嫁君は、いかに夜を明かしつろう」

からかう尾について、

「はははは。木下殿よ、いらざる我慢なむだに候ぞ。きょう一日、お役のお暇いとまを乞うて、帰つてはどうじゃ。待つ人もあるに」

「ばかな」

藤吉郎は、わざと力りきむ。友だちどもが笑うのを承知のうえである。どつと朝ぼらけの哄笑が廊下へ流れ出た。とうとうとお城の上では太鼓が鳴っていた。各、役目に従つて、その働くところへ急いで別れ去つたのであつた。

「ただ今、戻つた」

広くもない浅野又右衛門の家の玄関であるが、藤吉郎が立つと大きく見える。声が高いし、容子ようすが明るいからである。

「——あら」

式台で鞠まりをついていた寧子ねねの妹のおや屋は、眼をまろくして彼を見あげた。客かと驚いたのであるが、それがゆうべの賀かどので、姉の新郎様とわかると、クツクツと笑つて、奥へ駈かけこんでしまふ。

「は、は、は、は」

藤吉郎もわけなく笑つた。妙におかしい心地なのである。

祝しゅうげん言の席から友達と飲みに出てしまつて、そのままお城勤めをすまして今歸つてみると、またゆうべの祝言の時刻に近い黄昏たそがれなのである。

もう今夜は門に燎火にわびは焚たかないが、三日のあいだは何のかのと内輪の式事や客往來の慣わしがあり、こよいも奥は訪客の声に満ち、玄関には履物はきものの数が多く見える。

「——今戻つたツ」

快活に賀かどのはもう一ぺん奥へ呶鳴くりやつた。厨くりやも客間まぎも紛まぎれているため、誰も出迎えに出ないからであつた。

藤吉郎は思うのである。もう昨夜から自分はここの賀かである。舅しゅうとじ御ごをのぞいては主人たる者だ。出迎えの揃そろわぬうちは上がるまい。

「寧子ねねツ。今歸つたぞ」

袖垣の彼方の台所らしい方で、びつくりしたように、

「はいッ——」

と、優しい返辞が遠くした。それと共に、むしろ何事かと疑うように、又右衛門夫婦やおや屋や、縁者の者や召使の小侍などが、ぞろぞろと出て来て、彼のすがたにちよつと呆つ気にとられた顔をした。

寧子ねねはそれへ来ると、水仕業みずしわざしていた腰袴こしはかまを急いで取りはずし、端へ坐つて、

「——お帰りあそばしませ」

と、指をつかえて出迎えた。それを見て、他の者もあわてて、

「お戻りなされませ」

と、一度に揃つて頭を下げたが、勿論、又右衛門夫婦だけはべつである。この場を眺めに出たようなものだった。

「うむ」

寧子へ向つて、また一同の頭に対して、藤吉郎は一つうなずいた。そして箱段はこだんを上がつてずつとはいると、こんどは自身から舅姑しゅうとの前へ慇懃いんぎんに辞儀をして、

「ただ今戻りました。——今日はお城にも何事もなく、御主君にも終日、ごきげんよくわ

たらせられました」

といった。

実は舅しゅうとの又右衛門、夜来から苦りきつていたところなのだ。縁者えんしやのてまえ、また、寧子の身にもなつて見よ、と云い放ちたいくらいな心中だった。のめのめと戻つて来たら、客には不体裁ふていさいでも、頭から一喝かつは怵こらえきれまいと、自分でも覚悟していた程だったが、帰つて来た顔を見ると、何の屈託もない明るさで、しかも自分までを玄關へ出迎えさせた。

(腹も立たない)

と、呆れ顔から吐息をもらしていると、まず第一の挨拶が、きよう一日のお城の無事と、主君の消息を告げることであつたので、律儀りちぎな又右衛門は、それに対して、

「おお」

と、思わず坐り直し、

「今、お退城さがりか。お勤め大儀でおぎつた」

と、肚の虫がいたいこととはあべこべに、そういつて、彼を犒ねぎらいなどしてしまった。

その夜もおそくまで聶殿は酒の席をとりもつていた。一通りの祝い客は帰つても、縁者の中には住居が遠いために泊りとなる幾組もできる。

新妻の寧子も、召使のつかれ顔に、奥や台所の用事から離れることも出来ず、藤吉郎はやつと家に戻つても、ふたりきりでいる間はおろか、笑顔を交わすひまもなかった。

夜もようよう更け沈み、酒席の物も勝手に下げて、あしたの炊ぎを指図したり、酔いしれて眠った客の縁者たちの枕辺をも細かに気配りして、ほつと、襷をはずしてわが身にかえ回ると、

「どう遊ばしたであろ？」

と、初めて自身の良人となつた人をそつと探した。

ふたりのために語らうべくあつた一室に、縁者の白髪頭しらがだの、連れ子などが三組も寝ていた。酒もりしていた部屋にはまだ彼女の父母と近親の者が、囁きを洩らしている。

「……何処に？」

濡縁をさまよっていると、傍らの明りもない小者部屋の中から、

「寧子か」

と、呼ぶ。

良人の声である。寧子は声がつまってしまつたが返辞はしたつもりである。胸が動悸するのだった。婚礼の杯をするまでは、そんな心地は覚えなない人であつたのに、ゆうべから

は藤吉郎の顔へ眸も向けられなかつた。

「……おはいり」

藤吉郎はいう。

寧子の耳には、まだ起きて話している両親の音が聞える。立ち迷うている間にふと縁先の蚊遣りの燃え残っているのが眼についた。彼女は蚊遣りの器うつわを持って、

「そんな所にお休みでございましたか。蚊がおりましように」

と、恟々こわこわはいつた。

床ゆかむしろ 筵へじかに寝ていたのであつた。藤吉郎はむっくり起きて、

「アア蚊か。なるほどいる」

「おつかれになりましたらう」

「そなたこそ」

宥いたわつて――

「縁者どもはしきりと辞退しぬいていたが、まさか、眼上の年老としとつたお方達を下部屋しもべやへ寝かせて、そなたとわしが金屏きんびょうのうちにもやすめまい。無理に子連れの小母おぼや御老人などをあれへお寝かし申したのだ」

「……でも、夜の具も召さずに、そんな所でお横になつていらつしやると」

「大丈夫」

立ちかける寧子を止めて、

「わしの体は地へも寝たし、板床にも、貧しいには鍛えられている——」
と、すこし膝を正して坐り直した。

「寧子、もすこし前へ」

「……は。……はい」

「いうておこう。まだふたりはこうして、嚴肅だ。この嚴かなきれいな気もちも、夫婦の
礼儀も、時経つと、失くなつてしまふ」

「どうぞ、ふつつかな所、何なりとお叱りくださいませ」

「女房は新しい飯櫃めしびつのような物——と誰やらいった。使いこまぬうちは木臭きぐそうて役には
立たぬし、古くなればタガが外はずれたがる。だが良人も良人だ。時折、反省いたそう」

「……………」

「長い生涯、お互いが人間、お互いが短所だらけで、友白髪ともしらがまでも添いとげようという
のだから、これは容易な業わざではない。そこで、今のような気もちのうちに、誓いおうてお

きたいと思うが、そなたの胸はどうかな？」

「はい。どのような誓いでありましようとも、必ず守って参りまする」

明晰めいせきに、寧子ねねは答えた。

坐り直した藤吉郎も真面目そのものであった。少し怖い顔ですらあった。だが寧子は、こういう謹厳な顔を初めて見たことが、かえって欣しかった。

「まず良人として、妻へ望んでおくことからいおう」

「はい」

「わしの母だ。——祝言の席にはお迎え申さなかったが、わしが妻を娶めとったことを、天地の間で、誰よりも、誰よりも、蔭ながら欣よろこんでいて下さっているに違いない中村の母者ははじゃ人ひとだ……」

「はい」

「やがては、ひとつ家庭に、其女そなたも共に住むことになるが——良人の世話は第二でよろしい。母上の孝養を、母上のおよろこびを、第一として侍かしずいてもらいたい」

「……はい」

「わしの母は、侍の家には生れたものの、わしの生れる前からずっと中村の水呑み百姓。

わしを頭かしらにたくさんの子を貧窮の中にお育てなされ、子を育てることと、貧苦を切り抜けることのほかには、冬の綿子ぬのこ、夏の小袖一枚、自分の身にする楽しみやお生活くらしは、何一つなく過して来られたお人じや。……だから世間の知識にもおうとく、言葉も鄙ひなび、礼儀作法とか交際事つきあいごとにもとんとお晦くらいが——そうした母にも、そなたは嫁女として、心から侍かしずいてくれるか。いや、敬うやうてお添まいでできるか」

「できます。お母あ様のおよろこびは、あなた様のおよろこび。自然でできることとぞんじます」

「——が、其女そなたにも、健在な両親がある。わしにとつても、同様に、大事なお舅しゅうと姑がた方だ。わしはおまえに負けないで孝行を尽してあげる」

「うれしゅうございます」

「総じて、一家を持つたらば、良人の気を歓ばせようために、良人の身まわりばかりに気を取られるな。軽くしておくくらいでも愛情は自然に通う。人目にはそれで程よいもの。

——良人の母とか、姉とか、召使とかには、努めてもなお足らぬものだ。——殊にわしは、家に母上の笑顔えがおがあり、家族どもがみな嬉々ききとして生活くらししていてくれれば、何よりも自分も楽しいことと思う」

「至りませぬが、精出して、そういう家庭を創りまする」

「それから……もひとつ、わしへのことだが」

「はい」

「さだめし其女は嫁ぐ日までの教養として、貞婦の鑑となるよう、お舅どのからも、厳しい庭訓を数々訓えこまれておろうが、この良人は、そう気難しゆうはない。——其女に頼んでおくことはただ一つだ」

「……それは」

「それはだな……良人の御奉公、良人の仕事、すべて日常のわしの働きを、妻たるおまえも共々よろこんでくれればいい。それだけだ」

「……？」

「やさしいことだろう。しかし、やさしくない。年月長く狎れ過ぎた夫婦を見い。良人が何を働いているか知らぬ妻。良人がいかに欣ばせようと苦しんでも欣べない女房どもが、軽輩にはないが、大身方の奥ほど多い。そうなると良人は、ひとつの張合いを失う。天下国家のために働こうという男も、家にあつては、小さい者、あわれな者、弱い者。わけわが妻によろこばれるのが張合いだ。欣んでさえくれれば、男はまた、あしたの戦場へ、

勇気づいて出て行こう。まあ、内助ないじよとでもいうことかな」

「かしこまりました」

「ところで、今度は、其女そなたからわしへの希望のぞみを聞こう。いうてみい。わしも誓う」

そう訊かれても、寧子ねねは何もいえなかつた。黙っていた。

「妻が良人に欲するもの。そなたに望みがいえぬなら、わしが代っていつてやろうか」

藤吉郎のことばに、寧子はにこと領うなずいてみせた。そしてすぐまた、さし俯うつむ向いてしまう。

「良人の愛ではないか」

「……………」

「ちがうか」

「……………いいえ」

「変らぬ愛だろう」

「ええ」

「よい子を生んでくれ」

寧子は、おののいていた。燭しよくがあつたら、その顔は丹たんのように燃えていたろう。

三日の内祝がすんだ次の日である。縁者廻りの第一に彼と新妻は正装して、この度の婚

儀に、媒人の声がかりを賜わった主君のお従兄弟、名古屋因幡守を堀川の邸に訪ねて、「これがその妻の寧子で、お眼にかけに参りました」

と、挨拶をのべた。

見くらべて、

「似合い者じゃ」

と、因幡守は世辞をいった。若木の新しい世立ちをながめるのはよいものであった。因幡守も大いに満足して、酒など与えてもてなしながら、

「恋女房ぞ。喧嘩すな」

などといった。

すこし酔うて、

「また、参りまする」

藤吉郎夫婦は退った。

それから二、三軒廻った。きょうの清洲の町は、自分たち夫婦に眼をあつめている気がした。寧子の麗しい姿に振り向く往来人に、若い良人はむしろ好意を持った。

「そうだ、叔父さんの家へもちよつと立ち寄ってゆこう」

足軽町の横へはいった。足軽の子は足軽の子らしく、この辺わいわいと童戯どうぎや、童歌に満ちて道を邪さまたげている。

「叔父さんいますか」

破やれ木戸きどを押すと、非番とみえて、糸瓜棚へちまだなの下で手造りの竹笠うるしに漆を塗っていた乙若

が、

「おう、猿……」

云いかけたが、あわてて自分の口をたしなめ、

「藤吉郎か」

「妻をつれて来ました。眼をかけていただきませう」

「何をいう。こちこそじや。弓之衆の浅野様の御息女。これ、藤吉郎、われは果報者だぞ。お舅様しゅうとがたにも、飽かれぬようにせねばならぬぞ」

乙若は真実そう思つて云いきかせているのである。わずか七年前だ。ここの縁側へよろしい寄つて、針売りすがたの木綿布子もめんぬのこ一枚、それも旅垢たびあかに臭いほど汚れたのを着て幾日も飯を喰べないような空腹すきばらをかかえ、飯を与えるとががつと箸はしを鳴らして喰べながら、何か夢みたいなことを訴えていた。

どこへ奉公にやられても腰の落着かない困り者と、聞いていたので素気なく追り返したが——その甥が、この猿が、どうしてまあ今日のような身になったか。

乙若は、眼のまえに置いて見ている、信じられない気がする程であった。だから今度の婚礼でも、

「果報のほどが怖ろしい」

とさえ、真実、親身なればこそ、藤吉郎のために、口を酔くしていうのだった。

「まあ、ともあれ、穢い家じやが、上がってくれい」

あわてて奥の女房にも告げ、自身、案内に立ちかけた時であった。

垣の外で、誰か、

「陣触れ。陣触れでござるぞ。御用意あつて、すぐお駈けつけあれ」

と、呶鳴つて、その声は、隣から隣へと駈け伝えて行つた。

「あ……？ 召集のお布令じや。出布令の貝が、寄場のほうで鳴っている」

甥の新郎と新婦を導いて、家の内へはいりかけた主の乙若は、そのまま土間口に立ちすくんでしまっている。

その後、藤吉郎も佇んだまま、遠くで鳴り出した貝の音や、近所の物声に、しばし、

耳をすましたが、

「叔父御」

と、急に呼んで、

「召集布令めしづれでしよう。すぐお支度して、寄場へ駈けつければなりませんまい」

「む！ また遽にわかに、戦いくさへ狩り出されるらしい」

「らしいなどと、悠長なお布令ではありません。すぐお出かけなさい。てまえもこれで失礼いたします」

「折角、新妻を携たずさえて見えられたものをな」

「なんの、御斟酌ごしんしゃくには」

「すまんが、それではまた」

「こうした世の中。いづれ戦いくさからお歸りにでもなったら、日を改めて伺います」
「生きて会えるかどうか」

「はははは、縁起でもない……門出にそんな気の弱いことを仰っしゃるから、叔母御がうしろで泣いているではありませんか。それより大将首でも取っておいでなさい」

「一度でもよいから、そんな軍功をわしが立てさえすれば、嘸かかあや子にも、もすこし人並な

暮しもさせてやれようものを。万年足輕の万年貧乏。それに、わしももう年齢としが年じゃし」
 破れ垣やがきの外でまた、

「乙若どの。聞いたか。急な出布令だぞ。早支度して寄場へござれよ」

同じ足輕組の近所の人々である。陣笠、槍の先など、垣越しに見せて誘い合わせながら、もうわらわらと駈けて行くのだった。

「寧子ねね」

「はい」

「持ち合わせがあるか」

「あるかとは」

「金かねじや。何分なと」

「ゆうべあなたの」

「おお、あの革かわ巾着ぎんちやくにあつたか」

と、腰をさぐつて寧子の手にあづけ、

「これをな、ここの叔母御にやるがよい。叔母御がうろうろ泣くので、子ども達までベソを掻いている。いずれは貧乏、それにこんな滅め入りいこんだ家族どもを置いて出ては、乙若

どのも、よい働きのできよう理はない。——其女は後に残って、皆を励まし、賑わしてな、元気に出してやってくれ、叔父どのを」

「畏まりました。……そして、あなたさまには」

「わしか。わしへも、お召集が来ておろうと思う。ひと足先に、急いで戻る」

「桐畑のお邸のほうへ」

「いいや、聲入りと共に、わしの鎧櫃も、お許の部屋に納められてある。鎧櫃のすえである所がいつでも帰り場所じや。……では、後から来い」

藤吉郎は云い残すと、もう足軽町の裏から駈け出していた。

今朝までは何の気はいもなかったし、因幡守と会った時も、至極無事な容子であったのに、いったい何処へ出陣するのか。

藤吉郎にも、常の勤が働かなかった。いつも合戦といえ、どの方面へと、たいがい彼の直感的中していたが、やはりここ数日は花賀の頭は幾分時局から遠のいていたものとみえる。

物の具ひつ担いで、侍屋敷の横から駈けて出て来るのに、何人かぶつかった。凡ならぬ迅さで五騎、七騎、お城のほうから駈けて来るのにも出会う。何かしらぬが戦場は遠くだ

なという予感だけがした。

「木下。木下ッ」

弓長屋の近くまで来ると、誰か、呼ぶ者があつた。

振り向いて見ると前田犬千代。

馬上だった。物の具に身をかため、桶狭間おけはざまの日にも見た梅鉢紋うめばちもんの旗さし物を背から

覗かせていた。

「今、立ち寄つて、又右衛門どのへ声をかけて来たところじゃ。身支度して、馬揃いの馬場まですぐ集まれ」

「出陣か」

藤吉郎が、足を戻して、鞍わきまで寄ると、犬千代はとび降りて、

「どうだ、その後は」

会釈の代りに、にやと笑う。

「どうだとは」

「いわずもがな。琴瑟相和きんしつあいわしておるかどうかと問うのじゃ」

「お訊ねまでもないことを」

「これはかなわぬ。アハハハハ。しかしよい気味、出陣だぞ。出足が遅いと、折も折ゆえ、馬揃いで、大笑いに笑わるるぞ」

「笑われても大事ない。さだめし寧子が辛かろうで」

「もうよせ」

「失礼」

「軽騎二千ほどで木曾川まで急に攻め寄せのじや。黄昏立ちと布令には見ゆる。まだ少々間はあるが」

「では、美濃入りか」

「稲葉山の齋藤義龍どの、にわかになんで死んだという密報がはいったのだ。そこで嘘か実か、小当りに一当て襲せてみよといので、にわかな出陣なのだ」

「はてな？ この五月の中旬頃には、義龍どの御病死と聞えて、動揺めいたことがあつたが」

「こんどは、どうやら真実らしい。いずれにいたせ、御当家にとつては、君公の舅君にあたる道三山城守様をば、前に討ち殺した義龍どのだ。人倫の上からも、俱に天を戴かざる舅君の仇ではあるし、中原へ展びんとするには、どうしても足場とせねばならぬ」

美濃だ。展のびまいとしてもそこへ展のびずいない尾張との宿命だ」

「近いなあ、その日も」

「近いどころか、はやくも今宵からは、木曾川へ向つて発たつのだ」

「いや、まだまだ。君公には御出陣なさるまい」

「柴田どのの監かんぐん軍、佐久間どの御指揮の下とあれば、信長様には御出馬ないとみえる」

「たとえ義龍どの亡なく、その嫡子龍興たつおきどのも暗愚とはいえ、美濃の三人衆といわるる安

藤伊賀守、稲葉伊予守、氏家常陸うじいえひたちのすけ介すけらがあり、また、主家を去つて今は栗原山の閑居

に隠れおるとは申せ、竹中半兵衛重治はんべえしげはるのごとき人物もおるうちは、そう易やす々やすと参るま

い」

「半兵衛重治？」

犬千代は、小首かしげた。

「三人衆の名は疾とく隣国へもひびいているが、竹中半兵衛とやら、そんなに人物か」

「いや、人は知らず、わしだけは密かに心服しておるのだ」

「どうしておぬしはそのようなことまで存じておるのか」

「美濃には長くいたことがござるゆえ——」

藤吉郎はただそういうだけに止めていた。針売りの行商をして彷徨い歩いていたことや、蜂須賀村の小六たちの徒党に飼われて、稲葉山の隙を窺っていたりしていた少年の日のことなどは、おくびにも口に出さなかった。

「才。思わず余談を」

犬千代は、鞍上にもどつて、

「では、馬揃いで」

「おう、後刻」

ふたりは、その町辻を、裏と表へ駈けわかれた。どっちも若い青雲の夢を抱いて。

「今、戻ったッ」

玄関声とでもいうのか、いつ帰つても上がりしなに先ず大声をとどろかせる。そら智様のお帰りと、納屋働きの下男しもべから勝手の隅にまで分るのであった。

藤吉郎は今日に限つて出迎えも待たず、もう奥へ通つたが、出会いがしらに寧子ねねが姿を現わしたので、

「おやッ？」

びつくりした顔をした。

「お帰りあそばしませ」

寧子はいつもと変りなく、すぐ彼の棒立ちになった足もとへ手をつかえる。

さすがに藤吉郎も、すこし胆きもを挫ひしがれた。どうして自分より先に寧子が家に帰っていたろうか。後に残つて乙若の家内を励ましたり、子供らへ志の物を与えて後刻に帰れ、といいつけて自分が一足先に出たのにな？

「……寧子。いつ戻った」

「先ほど戻りました」

「先ほど？」

「はい。後に残つて、おいつけの事もいたしまして」

「ふうむ……」

「あなた様のお志の物をさしあげたところ、叔母さまにも叔父御さまにも、涙をうかべておよろこびなさいました。足軽風情ふせいは戦いくさに立つ身より、後に残す大勢の子や老人としよりの生活くらしが気がかり。これで安心して立たれると仰つしやつて」

「そして其女そなたは、どうしてわしより先に、家に帰り着いておるのか」

「あなた様にも御出陣、お門立かどたちに遅れてはならじと思えますゆえ、叔母さまにお願いして、御近所の駒を拝借し、近道を急いで帰っております」

「何、馬でか」

なるほど、それでは早かったはずと合点はついたが、さらに、部屋へはいつて見てから、藤吉郎はもう一度、感に打たれた。

床ゆかに清浄な筵むしろが展べてあつた。具足櫃ぐそくびつがそこに出されてある。籠手こて、脛当すねあて、胴、腹巻などの物具はいうもおろか、金創薬きんそうやく、燧打ひうち、弾薬入れ、すべて身に纏まとうばかりに揃えてあるのだった。

「お支度を」

「うむ。よくぞ、よくぞ！」

思わず賞ほめそやした。けれど賞めながらふと彼の思うらく。——この女房ばかりは、おれも少し目鑑めきき違ちがひしたらしい。娶もらう前に観みていた以上どうしても人間が出来ている。浅野家の庭訓ていきんや環境のよさにもよろうが、当人の素質そのものが、もとより恋の対象だけにしかないお人形ではなかつたのだ。へたをするとこの女房に慥あわれまれる良人になり終る惧おそれすらある。いや宜しい。こういう女房が後詰ごづめにあれば、良人は前面に全力を出すこ

とができる。大いに生涯可愛がつてやろう。

具足を着け終ると、

「では、お心おきなく」

寧子ねねは、神酒みきの土杯かわらけと、勝栗勝こんぶとを乗せた三宝をそろえて出した。

「留守、たのむぞ」

「はい」

「舅しゅうと御ごにも、ご挨拶ひまの暇ひまもない、よしなに其女そのなから」

「母はおや屋を連れて津島つしまへ詣もつで、まだ戻りませぬ。父はお城の留守詰を仰せつかり、こ

よいから夜も帰宅せぬと先刻言伝ことづてがござりました」

「さびしゅうないか」

「い……い、いえ」

さし俯向うつむいた。——しかも泣いてはいない。良人の兜かぶとを膝ひざに持って、ただ重ねな花のす

こし風を耐えるに似ていた。

「よこせ」

兜かぶとを取つて、無造作に藤吉郎かしろは頭かしらにいただいて緒おを結んだが、その時、馥郁ふくいくたる伽羅きやら

だ。のにおいが全身に沁^しみとおつた。彼はニコと寧子の顔を見ながら、伽羅の香をかたく結ん

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年5月11日第1刷発行

2004（平成16）年1月9日第18刷発行

初出：太閤記「読売新聞」

1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日

続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙

1949（昭和24）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2014年11月14日作成

2015年11月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第二分冊

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>